



Title	日本語とカザフ語のオノマトペ語彙の対照研究
Author(s)	サディグル, エルドス ラキムジャン; Sadygul, Yeldos Rakhimzhan
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第9323号
Issue Date	2010-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k9323
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44818
Type	doctoral thesis
File Information	sadygul.pdf



博士学位論文

日本語とカザフ語のオノマトペ語彙の対照研究

北海道大学大学院文学研究科

言語文学専攻 サディグル エルドス ラキムジャン

[本文編]

目次

第 1 章 序論	1
1. はじめに	1
2. 本研究の目的	1
3. 研究の範囲及び方法	2
4. 論文構成	2
<hr/> 第 1 部 オノマトペの分類と分析 <hr/>	
第 2 章 オノマトペとは何か	5
1. はじめに	5
2. オノマトペは何を指すか	5
3. オノマトペと音象徴 ‘Sound Symbolism’	6
3.1 音象徴類型論 ‘A Typology of Sound Symbolism’	8
4. オノマトペの名称と定義	9
5. オノマトペの分類	10
5.1 先行研究	10
5.2 本稿の分類	13
5.2.1 広義レベルの分類	14
5.2.2 狭義レベルの分類	15
第 3 章 オノマトペの分析	19
1. はじめに	19
2. データベースの作成	19
2.1 日本語オノマトペデータベース	19
2.2 カザフ語オノマトペデータベース	22
3. 分析	23
3.1 単義語・単一多義語・多義混成語	23
3.2 多義語と同音異義語	25
3.3 方法論	26
3.4 分析結果	27

第 2 部 形態・意味・統語的考察-----**30****第 4 章 オノマトペの語基**-----**31**

1. はじめに-----	31
2. 日本語オノマトペの語基-----	31
2.1 先行研究-----	31
2.1.1 天沼 (1974) -----	31
2.1.2 金田一 (1976) -----	33
2.1.3 田守・スコウラップ (1999) -----	34
2.2 語基-----	35
2.3 語基に関する諸問題-----	36
2.3.1 /i/について-----	36
2.3.2 /ri/について-----	38
2.3.3 /Q/について-----	39
2.4 1 モーラと 2 モーラの語基の割合-----	41
3. カザフ語オノマトペの語基-----	42
3.1 先行研究-----	42
3.1.1 Сарыбаев (1970) -----	42
3.1.2 Катембаева (1974) -----	42
3.1.3 Кайдаров (1986) -----	43
3.2 語基-----	43
3.3 語基に関する諸問題-----	44
3.3.1 бүк /bük/及び бүкш /büksh/について-----	44
3.3.2 「CVC+V」「CVCC+V」について-----	48
3.4 語基の割合-----	49

第 5 章 オノマトペの構成要素-----**50**

1. はじめに-----	50
2. オノマトペの構成要素-----	50
2.1 日本語オノマトペの構成要素-----	51
2.2 カザフ語オノマトペの構成要素-----	53
3. 派生過程-----	54
3.1 日本語オノマトペの派生過程-----	54
3.2 カザフ語オノマトペの派生過程-----	58

4.	反復	59
4.1	日本語オノマトペの反復	59
4.2	カザフ語オノマトペの反復	61
5.	語頭要素	63
6.	語中構成要素	64
6.1	語中構成要素に関する擬音・擬態オノマトペの形態的相違	65
7.	語末構成要素	66
7.1	日本語オノマトペの語末構成要素	66
7.1.1	語末に起こる促音/Q/・撥音/N/・/ri/	66
7.1.2	長音/R/	69
7.2	カザフ語オノマトペの語末構成要素	70
7.2.1	接尾辞	71
7.2.2	「ふるえ音」-/r/	72
7.2.3	「閉鎖音」-/q/・/k/と「鼻音」-/ng/	73
7.2.4	「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/と「鼻音」-/l+ng/	75
8.	まとめ	76
第 6 章 意味的考察		78
1.	はじめに	78
2.	先行研究	78
2.1	角岡 (2007)	78
3.	両言語オノマトペの多義語の割合	79
4.	両言語オノマトペの語義	81
4.1	日本語オノマトペ	81
4.2	カザフ語オノマトペ	83
5.	意味の関連性から見たオノマトペ	83
5.1	擬音オノマトペについて	83
5.2	擬態オノマトペについて	84
6.	多義混成語	87
6.1	日本語オノマトペの多義混成語	87
6.2	カザフ語オノマトペの多義混成語	89
7.	オノマトペにおける意味拡張	91
7.1	多義混成語と意味拡張	91
7.2	構成要素における意味拡張	98
7.2.1	先行研究と問題点	98
7.2.2	撥音/N/の意味	98

7.2.3 撥音/N/の意味拡張	101
8. まとめ	102
第7章 統語的考察	104
1. はじめに	104
2. 動詞用法	104
2.1 日本語オノマトペの動詞用法	104
2.1.1 「する」動詞	104
2.1.1.1 「オノマトペ+する」構造	105
2.1.1.2 「する」動詞と共起できるオノマトペのタイプ	107
2.1.1.3 下位類オノマトペの「する」動詞との共起	108
2.1.1.4 「オノマトペ+する」動詞の分類	109
2.1.1.4.1 「擬音語+する」について	110
2.1.1.4.2 ①「行為・行動的なもの」	111
2.1.1.4.3 ②「動作・状態的なもの」	113
2.1.1.4.4 ③「状態的なもの」	114
2.1.1.4.5 ④「心理・感情的なもの」	117
2.1.1.4.6 ⑤「生理・感覚的なもの」	118
2.1.1.5 テンスから見た相違点	119
2.1.1.6 形容詞・アスペクト的な用法から見た相違点	122
2.1.2 「-つく」動詞	126
2.1.3 その他の派生動詞	129
2.2. カザフ語オノマトペの動詞用法	131
2.2.1 「オノマトペ+助動詞」構造	131
2.2.2 下位類オノマトペの助動詞との共起	131
2.2.3 助動詞 ету /etu/ (「する」)	132
2.2.4 動詞 қағу /qaghu/ (「うつ」)	135
2.2.5 助動詞 болу /bolu/ (「なる」)	137
2.2.6 助動詞 беру /beru/ (「あげる」)	139
2.2.7 その他の助動詞	140
2.2.8 派生動詞	141
2.2.8.1 接尾辞-та /ta/ /-те /te/, -да /da/ /-де /de/, -ла /la/ /-ле /le/	141
2.2.8.2 接尾辞-ыл /yl/ /-іл /il/ + -да /da/ /-де /de/	143
2.2.8.3 その他の派生動詞	144
3. 副詞用法	145
3.1 日本語オノマトペの副詞用法	145

3.1.1	副詞の定義	145
3.1.2	副詞的用法と助詞「と」の共起	146
3.1.2.1	先行研究	146
3.1.2.1.1	田守・スコウラップ (1999)	146
3.1.2.1.2	丹野 (2007)	147
3.1.2.2	様態副詞	147
3.1.2.3	結果副詞	149
3.1.2.4	程度副詞	151
3.1.2.5	頻度副詞	153
3.1.2.6	助詞「と」の共起の相違	153
3.1.2.7	下位類のオノマトペの助詞「と」の共起	154
3.1.3	助詞「と」と共起するオノマトペの音韻形態的特徴	156
3.1.3.1	助詞「と」を義務的に伴うもの	156
3.1.3.2	助詞「と」を随意的に伴うもの	157
3.1.3.3	助詞「と」を伴わないもの	159
3.1.3.4	反復形・非反復形の助詞「と」との共起	160
3.1.4	オノマトペの文外用法	161
3.1.4.1	助詞「と」の役割	163
3.2	カザフ語オノマトペの副詞用法	164
3.2.1	カザフ語オノマトペの副詞	164
3.2.2	反復形の副詞的用法	165
3.2.3	非反復形の副詞的用法	169
3.2.4	助動詞 <i>ery /etu/</i> と引用用法	170
3.2.4.1	助詞「と」・助動詞 <i>ery /etu/</i> と両言語の非反復形	170
3.2.4.2	カザフ語オノマトペにおける引用用法	171
4.	名詞用法	173
4.1	日本語オノマトペの名詞用法	173
4.2	カザフ語オノマトペの名詞用法	174
5.	形容詞用法	178
6.	両言語オノマトペの相違点	178

第3部 結論 180

第8章 オノマトペにおける語彙化の程度 181

1.	はじめに	181
----	------	-----

2. 語彙化の定義-----	181
3. 語彙度の段階-----	182
3.1 先行研究-----	182
3.1.1 飛田・浅田 (2002) -----	182
3.1.2 筧 (1993) -----	183
3.2 先行研究の問題点-----	184
3.3 本稿の語彙度の段階-----	185
4. 語彙度の段階と両言語のオノマトペ-----	187
4.1 擬声語・擬音語-----	187
4.2 擬態語・擬情語-----	189
5. まとめ-----	191
第9章 結語-----	192
1. 範疇化の問題-----	192
1.1 日本語オノマトペ-----	192
1.2 カザフ語オノマトペ-----	193
2. まとめ-----	194
参考文献-----	197

第1章 序論

1. はじめに

オノマトペ (onomatopoeia) は、多い少ないの差はともかくとして、世界中の言語において観察されている。日本語は、西洋諸言語と比べると、オノマトペを豊富に持つ言語の一つと言われている。これらのオノマトペは厳密な体系をなし、様々な音韻・形態的などの特徴によって、一般語彙から区別され、固有の語彙層を形成している。筆者の母語であるカザフ語¹にもオノマトペは多数存在し、文学作品、新聞、雑誌などに幅広く用いられている。こうしたオノマトペは、日本語とカザフ語それぞれにおいて、かなりの数にのぼり、3000語以上にも達すると言われている。この語数だけからも両言語にはオノマトペが不可欠な言語要素であり、豊かな生命力を持つといえる。にもかかわらず、オノマトペが言語研究の対象として注目されることは比較的少なく、もっとも遅れている研究分野の一つであると思われる。

オノマトペは音象徴 (sound symbolism) の面から言語の非恣意性を明らかにしてくれる代表的な言語現象である。音の象徴印象と、その音を出すもののイメージとが直結する点で両者は有縁的な関係を構成する。このような音そのものがある一定のイメージを喚起するという音象徴説をサポートしたのは Jespersen (1922), Sapir (1929), Newman (1933), Whorf (1941), Левицкий (1973), Tarte (1974) などである。彼らは、音とそれが表す意味関係の例を示し、音のイメージはすべての語ではないかもしれないが意味と関連性がある程度みうけられると主張している。一方、オノマトペは全ての言語に体系的に存在するわけではないし、子供っぽい幼稚なことばであるとされたり、オノマトペ自体が論理的なことばではなく感覚的なことばの故に捉えるところが少ないと考えられたりしたため、多くの学者に注目されてこなかったようである。しかし、日本語オノマトペに関しては最近、様々な研究がなされ、その成果として論文や専門書が発表されるようになってきた。またオノマトペが感覚的なことばであることに注目して、認知言語学の立場からオノマトペを考察しようとする研究も見られるようになった。

本論文は、日本語とカザフ語のオノマトペを対象とし、形態・統語・意味的な面を考察し、両言語のオノマトペの全体像を明らかにするものである。

2. 本研究の目的

日本語とカザフ語のオノマトペは、それぞれの言語において頻繁に用いられ、それ故に

¹ カザフ語はアルタイ語族のチュルク語派の言葉である (『言語学百科事典』より)。

様々な観点から研究がなされてきた。しかしながら、両言語のオノマトペの対照という観点からの研究がまだ行われていないようである。本研究の目的は、日本語とカザフ語のオノマトペの諸特徴を明らかにし、両者の類似点と相違点を明らかにすることである。

本稿では、以下に述べるように、オノマトペを擬声語・擬音語・擬態語・擬情語という下位類に分類し、それぞれの表す対象が異なっているために、語彙化の程度も異なってくるということを形態・意味・統語の面から考察して、明確な形で示す。

3. 研究の範囲及び方法

オノマトペは、一般的にはその音の響きから得られる意味を表すので、感覚的な言葉であり、一般語彙よりも生き生きとして臨場感のある微妙な描写を実現するものである。オノマトペの中には、人による個人差がかなり強いので、同じ形態であってもまったく違った意味で用いられたりするものが多い。また、漫画や小説の中でも臨時形²がしばしば使用されたり、方言の世界でも豊富に存在したりする。こうした中では、全てのオノマトペを考察することが不可能であるため、本稿では考察範囲を専門辞書のオノマトペにしばることとする。それは、日本語オノマトペの場合は(1)の専門辞書である。

- (1) a. 阿刀田・星野(1995)『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社
- b. Kakehi, Tamori, Schourup(1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

カザフ語の場合は(2)のものである。これらの辞書を選択した理由を第3章で詳細に説明する。

- (2) Болғанбаев, Дәулетқұлов(1999) *Қазақ тілінің сөздігі*. «Дайк-пресс». Алматы.

本稿では、(1)と(2)に示したのものや、飛田良文・浅田秀子(2002)、山口仲美(2003)、Кенесбаев(1977)のオノマトペの専門辞書、文学作品や新聞などから用例を収集して詳細に分析する。また、インターネットから取った実例や筆者による作例などの分析も並行して扱うことにする。

4. 論文構成

本論文の構成について述べる。第1章を序論とし、研究の前提となる事項について述べる。第2章では、音象徴(sound symbolism)に関する先行研究とオノマトペの定義につ

² 臨時形の定義について第7章で詳細に論ずる。

いて論ずる。第 3 章では、オノマトペの分析、両言語のデータベースの作成と分析結果を報告する。第 4 章では、日本語とカザフ語のオノマトペにおける語基とそれに関する諸問題について検討する。第 5 章では、両言語のオノマトペの派生過程における構成要素を考察し、それが両言語下位類のオノマトペにどのように出現しているのかを明らかにする。第 6 章では、オノマトペにおける多義性という現象について調査し、擬音語から擬態語への意味拡張が生じたという仮説を認知言語学の立場から解明する。第 7 章では、統語的な側面から考察を行い、両言語のオノマトペの統語的な属性を明らかにする。第 8 章では、オノマトペにおける語彙化の段階を設定した上で、両言語オノマトペはどの段階に属するについて解明する。第 9 章は研究のまとめを述べる。

第 1 部 オノマトペの分類と分析

第2章 オノマトペとは何か

1. はじめに

オノマトペは様々に定義されており、その定義は実に多様である。以下では、オノマトペが何かという問いに答える第一歩として、オノマトペの定義と分類について議論する。また、音象徴の問題に触れて、それに関する先行研究を概観する。最後に、オノマトペの分類については、両言語のオノマトペを「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬情語」という下位類に分類する理由を詳細に説明する。

2. オノマトペは何を指すか

オノマトペは、通常には擬音語・擬態語を指す言葉の総称である。「オノマトペ」というカタカナ言葉（外来語）そのものはフランス語の *onomatopée* に由来している。英語では *onomatopoeia* で、カタカナで「オノマトペア」「オノマトピーア」のように表記される（『日本国語大辞典 第2版』より）。また、フランス語 *onomatopée* の語源は旧ギリシア語 *ὀνοματοποιία* にさかのぼり、造語すること、名前を作ることという意味があったとされている（『小学館ランダムハウス英和辞典』より）。

オノマトペの定義には様々なものがあるが、次の定義は『現代言語学辞典』から引いたものである。オノマトペとは「動物の鳴き声や水の流れる様子など、自然界の音を模倣したり、それを象徴的に再現すること、またそのような語を指す」ということである。

学者によってオノマトペの定義は若干異なっているが、それに共通している考え方は、オノマトペと考えられている語の形態（音、呼び方）「指すもの」と意味（イメージ、概念）「指されるもの」が何らかの形で結びついているということである。例えば、動物の鳴き声を例にすると、日本語においては「ワンワン」「ニャーニャー」「ブーブー」「ヒヒーン」という擬声語がある。これらは実際の動物の鳴き声を模倣して用いられていることに対して異論を唱える人はないであろう。このような擬声語の場合は、耳に聞こえてくる音をそのまま日本語にある音素に対応させているため、形態と意味の関係はどちらかと言えば有契的なもののように感じられる。このような考え方は言語学の基本的な原則とされる「記号の恣意性」に反している。「音と意味の関係」について「記号学の祖」と呼ばれるソシュール (Ferdinand de Saussure) が言語記号は恣意的 (*arbitrary*) であり、能記「指すもの」と所記「指されるもの」³との関係は自然的あるいは必然的なものでなく社会的な約束

³ あるいはもとのフランス語をカタカナで表記して能記は「シニフィアン」(*signifiant*)、所記は「シニフィエ」(*signifié*) と呼ばれる。

によって成り立っていると議論している。それは、例えば、日本語で「ホン」(本)と呼ばれている物体の場合は、そのものの呼び方「指すもの」とそのものの概念「指されるもの」との間に必然的な関係が存在しないということを示している考え方である。呼び方と概念との間の関係が必然的なものではない故に、本という物は英語では‘book’、ロシア語では‘книга’ /kni:ga/, カザフ語では‘кітап’ /kitap/などの各言語それぞれに異なる呼び方になっていることは承知の通りである。しかしながら、一般語彙と異なってオノマトペの場合は、呼び方と概念が何らかの形で関連しているため、言語の違いを超えた、様々な言語において普遍的に存在する例が観察される。例えば、銃弾が発射される音を日本語では「バン／パン」、英語では‘bang’、ドイツ語では‘peng’、フランス語では‘pan’、スペイン語では‘pum’、バスク語では‘dzast’という擬音語で表す(上記の例は吉村(2004)からの引用)。これらの語の多くは、両唇閉鎖音(p, b)と鼻音(n, ng)を用いている。若干異なっているが、言語を超えた普遍性が見られる。

このように、一般語彙と異なってオノマトペは、形態と意味の間には関連性が観察されるものであり、「記号の恣意性」に反する例外的な存在であると言えよう。しかしながら、オノマトペは「記号の恣意性」に反するという考え方に対しては、一般語彙と異なってオノマトペが元々「音」であるものを言語音で表し、通常の意味を表すのではないため、音と意味の間に恣意性があるということの反証としてオノマトペを持ち出すことが、そもそも適切ではないという人も少なくない。

3. オノマトペと音象徴‘Sound Symbolism’

前節では、オノマトペについて検討した。オノマトペは、現実の音を真似ている語であるため、形態と意味の間の何らかの関連性を前提とする代表的な例である。このような形態(音)と意味(イメージ)とが結びついている、「記号の恣意性」に反する考え方は音象徴(sound symbolism)⁴と呼ばれている。つまり、オノマトペは音象徴を支持することばの現象であると言い換えることもできる。一般的には、音象徴は音そのものがある特定のイメージを喚起する事象を指す。例えば、日本語では、サ行やカ行の音はきつい印象を与えるし、マ行やナ行の音は柔らかい印象になるという見方がある(田守・スコウラップ 1999 : 7)。

音象徴の考え方をサポートした学者の一人は Jespersen (1922) であり、「記号の恣意性」という概念に対して十分議論し、音のイメージはすべての語ではないが意味と関連している場合があることを強調している。以下の引用から分かるように、Jespersen は/i/は明るさ、/u/は暗さと関連があると述べている。

⁴ 音象徴 (sound symbolism) の定義については、『現代言語学辞典』の定義に参照されたい。『現代言語学辞典』による定義は次の通りである。「語 (WORD) の音が意味と自然的関係があり、意味を象徴的に表現していると考えられる事態のこと」である。

- (1) Yes, of course it would be absurd to maintain that all words at all times in all languages had a signification corresponding exactly to their sounds, each sound having a definite meaning once for all. (略)

There is also a natural association between high tones (sounds with very rapid vibrations) and light, and inversely between low tones and darkness, as is seen in the frequent use of adjectives like 'light' and 'dark' in speaking of notes. Hence the vowel [i] is felt to be more appropriate for light, and [u] for dark...

(Jespersen 1922. pp.397-401)

Sapir (1929) も同じ見方をし、音と大きさのイメージの関係に関する議論をしている。同様に恣意性という Saussure の概念に対して数多くの形態的・音韻的・文法的反論を挙げている Newman (1933), Whorf (1941), Brown (1970), Tarte & Barritt (1971), Tarte (1974), Jakobson & Waugh (1979) 等の論文が有名である。

旧ソ連では、Левицкий (1973), Воронин (1982) はこの問題について議論し、一般語彙においてさえ、系統的に無関係な言語によって共有する音象徴の存在を主張している。Левицкий (1973) がロシア語、ポーランド語、ドイツ語、スペイン語、英語、フランス語、日本語、カザフ語など 26 言語の「大きさ」を表すあらゆる語を集めて実験を行い、「小ささ」は /i/, /e/, /y/, /oe/, /m/, /p/, /l/, /s/, /k/, /n/ を含む語で表され、「大きさ」は /a/, /o/, /u/, /b/, /d/, /r/, /g/ を含む語で表されることが多いことを報告した。

アルタイ語族、チュルク語派に属する様々な言語においてはオノマトペが豊富に存在しており、音象徴という観点から多くの学者の注目を浴びてきた。チュルク語派に属する言語(チュヴァシ語)のオノマトペについてはじめて議論したのは Ашмарин (1925, 1928) である。その他に、ヤクート語を中心に研究を行った Харитонов (1943), ウズベック語のオノマトペについて観察した Кононов (1960) などの論文(Баскаков 1952 (カラカルパック語); Кудайбергенов 1957 (キルギス語))がある。カザフ語のオノマトペについても複数の論文(Баскаков 1948; Сарыбаев 1960, 1970; Катембаева 1965, 1974; Кайдаров 1986)が出されているが、その中では Хусаинов (1987, 1988) が最も有名であろう。Хусаинов (1988) はカザフ語オノマトペを考察すると共に、様々なチュルク語派に分類されるウズベック語やキルギス語、トルクメン語、ヤクート語などの言語のオノマトペを対照している。彼は、オノマトペには語彙的な意味以外に音象徴的な意味が存在すると述べ、語末の無声閉鎖音は「急な終わり方」、鼻音は「共鳴」を表す傾向があると示している。

日本語においては、オノマトペを通して音象徴の問題に関する数多くの論文が出されている。鈴木 (1962) は有声音/無声音のペアを例にとり、前者の「ぎらぎら」をあまり好ましくないもの、後者の「きらきら」を好ましいものとする傾向があることを述べている。Herlofsky (1990) は、日本語と英語のオノマトペを対照して音象徴の面から見ると類似点

がみられると述べている。/s/, /ʃ/, /č/, /j/を含む日本語と英語の音象徴語は ‘wetness’ という概念に示唆されることが多いと強調している。Hamano (1994) は、日本語オノマトペの「ぱちやぱちや」「ぺちやぺちや」等の口蓋化 (palatalization) は ‘childishness’, ‘immaturity’, ‘instability’, ‘unreliability’, ‘uncoordinated movement’, ‘diversity’, ‘excessive energy’, ‘noisiness’, ‘lack of elegance’, ‘cheapness’ という音象徴的な意味を表すと主張している。Kadooka (1995) は、日本語の促音/Q/と英語の ‘-p/-t/-k’ を対照し、これらは動作の急な終わり方 ‘action’s/state’s instantaneity’ を示すと述べている。田守 (2002) は有声音と無声音のオノマトペの意味を考察し、有声音を含む語は無声音を含む語より大きくて分量や数量が多い、また関わっている動作が活発であると述べている。また、日本語の母音「あ」は「広がり」「全体」を表し、母音「お」は「内包」「部分」といった音象徴的な意味を表すと強調している。

3.1 音象徴類型論 ‘A Typology of Sound Symbolism’

本節では、音象徴類型論 (a typology of sound symbolism) について述べる。前節では、音象徴は音そのものがある特定のイメージを喚起する事象であると言及した。このような音象徴には音とイメージの関係がある場合は直接的なもの、ある場合は間接的なものとされている (『現代言語学辞典』より)。これをもとに、音象徴は 4 つの類型に分類されることがある。その類型によって、Ohala, Hinton, Nichols (1990) は、音象徴に、音とイメージに完全な関係があるものから、音とイメージの関係がまったく恣意的である語まで、以下のように段階的な 4 つの範疇があると主張している。それは以下のものである。

①物理的音象徴 (Corporeal sound symbolism)

- (2) This is the use of certain sounds or intonation patterns to express the internal state of the speaker, emotional or physical. This category includes involuntary, “symptomatic” sounds such as coughing or hiccupping, and ranges through expressive intonation, expressive voice quality, and interjections.

(Ohala, Hinton, Nichols 1990. p.2)

この引用から分かるように、①物理的音象徴とは、話者の肉体的・感情的な内面の状態を表出するために発せられる、ある音またはイントネーションの型のことである。咳やしやつくりのような無意識に発せられる音から、表現性を含んだイントネーションや声色、感嘆詞などもこれに入るとされている。

②模写的音象徴 (Imitative sound symbolism)

- (3) This relates to onomatopoeic words and phrases representing environmental sounds (e.g., *bang*, *bow-wow*, *swish*, *knock*, and *rap*).

(Ohala, Hinton, Nichols 1990. p.3)

この範疇には自然界の音や動物の鳴き声、人間の声など、つまり物音を模倣したオノマトペが入る。

③音感的音象徴 (Synesthetic sound symbolism)

- (4) Synesthetic sound symbolism is the process whereby certain vowels, consonants, and suprasegmentals are chosen to consistently represent visual, tactile, or proprioceptive properties of objects, such as size or shape.

(Ohala, Hinton, Nichols 1990. p.4)

③音感的音象徴は、本来音を発しない現象を音で象徴的に表すという、共感覚の領域に属するものである。ある母音や子音、分節が物体のサイズや形などの視覚的・触覚的・固有感覚の特性を象徴するものがこの範疇に入ると示されている。

④固定的音象徴 (Conventional sound symbolism)

- (5) This is the analogical association of certain phonemes and clusters with certain meanings: e.g. the “gl” of glitter, glisten, glow, glimmer, etc.

(Ohala, Hinton, Nichols 1990. p.5)

Ohala, Hinton, Nichols (1990) は、最後の範疇を、ある音素や音素群が、ある意味と結びつくという類推から成り立つ音象徴としている。

4. オノマトペの名称と定義

オノマトペは、この分野を研究している研究者によって様々に定義されており、その名称の取り扱いに関しては、現在のところはまだ統一化はされていないようである。例えば、「オノマトペ」を ‘onomatopoeic words’ と呼ぶ研究者 (Brocholos 1990 ; Reinelt 1990 ; Ohala, Hinton, Nichols 1990 ; Murata 1990 など) がいれば、‘imitative words’ と呼ぶ研究者 (Herlofsky 1990 ; Oswalt 1994) もいる。また, Hamano (1998), Tsujima (2001) がこの語彙群を ‘mimetic words’, Kakehi, Tamori, Schourup (1996) が ‘iconic words’ と呼んでいる。

日本語オノマトペを研究している学者においては、音や声を表す語を擬音語・擬声語、ある物などの様子や状態を表す語を擬態語にし、全体を「擬音語・擬態語」と総称する研究者が多い (天沼 1974 ; 宮地 1978 ; 阿刀田・星野 1995 ; 苧阪 2001 ; 飛田・浅田 2002)。また、表す意味によって「擬音語・擬態語」に分け、全体を「オノマトペ」と呼ぶ学者 (日

向 1998 ; 田守・スコウラップ 1999 ; 小野 2007 ; 角岡 2007) がいるし、擬音語の部分を擬声語にし、「擬声語・擬態語」に分ける学者もいる(石黒 1993 ; スコウラップ 1993)。Chang (2000) がこの語彙群を意味によって「擬情語」「擬態語／擬容語」「擬声語」「擬音語」に分け、全体を「オノマトペ」と総称している。

このように、「擬音語」「擬態語」などを「オノマトペ」で総称する、日本語オノマトペを研究している学者が少なくない。しかし、西洋諸国からすると、「オノマトペ」という語は伝統的には「擬声語・擬音語」(ある声や音を表す語)を指している。西洋諸言語には「擬態語・擬情語」(ある物の状態・様子、人間の心の状態を表す語)とされる音象徴語は少ないことから、音象徴語全体「擬態語・擬情語」を含めて「オノマトペ」とするには違和感があるという人がいるかもしれない。オノマトペはそもそも形態と意味が相関しているものであって、擬声語・擬音語は「音」であるものを言語音で表そうとしているため、形態と意味の関係が直接的であると考えられる。しかし、擬態語・擬情語は「様子」や「状態」を言語音で表そうとしているため、その形態と意味が直結していると言い難い。本稿では具体的に示すように、多くの場合、擬態語・擬情語はある比喻に基づいて擬声語・擬音語から拡張している。そうすると、擬態語・擬情語の場合は形態と意味の関係が間接的なものであると言えるかもしれない。その意味では「擬態語・擬情語」を「オノマトペ」にするには誤りがないと思われる。

本稿では、音象徴の語彙群を「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬情語」に分類し、全体をまとめる言葉として「オノマトペ」と呼ぶことにする。これらをオノマトペ専門辞書の範囲にしぼって以下のように定義付ける。

- ・ 「オノマトペ」又は「オノマトペ語彙」とも呼び、形態と意味の間に直接的・間接的な関連性を前提とした語彙群のことである。以下の下位類を含んだ語である。
- ・ 「擬声語」動物の鳴き声と人間の声を模倣した語のことである。
- ・ 「擬音語」自然界の音を模倣した語のことである。
- ・ 「擬態語」音のない自然界の物や人間と動物の動作や様子・状態などを音に表した語のことである。
- ・ 「擬情語」音のない人間の心の状態と感覚を音に表した語のことである。

オノマトペを以上の下位類に分類した理由を次節で詳しく説明する。

5. オノマトペの分類

5.1 先行研究

日本語オノマトペにおいては、特に英語などの西洋諸言語と比べると、擬音語の多さが

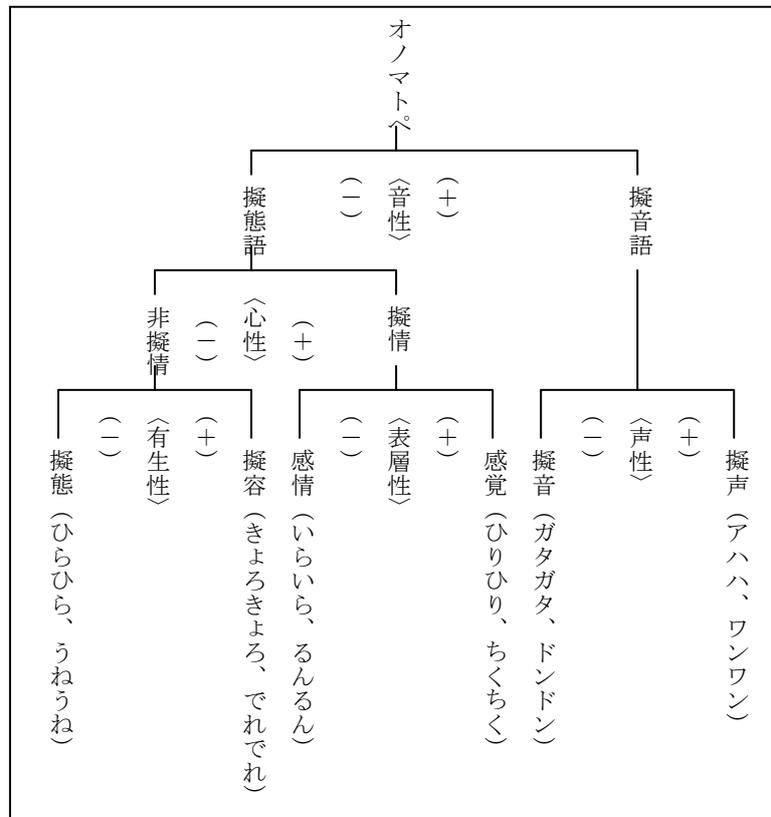
指摘されることながら、並びに擬態語も非常に多数存在するということが注目される。前節で見たように、日本語オノマトペを研究する学者の大半がオノマトペを大きく「擬音語（擬声語）・擬態語」のように2つの区分に分類している。さらに、日本語オノマトペのもう一つの特徴としては、人間の心の状態や感覚を描写する擬情語がしばしば指摘されている。オノマトペの中から感情を表す語彙群を区分して「擬情語」と初めて名づけたのは金田一（1978）であろう。彼は、浅野（1978）『擬音語・擬態語辞典』において解説の部分では、オノマトペを大きく擬音語・擬態語・擬容語の3つの区分に分類し、更に、擬音語には擬音語と擬声語があることを示し、擬態語は無生物を表すが、擬容語は生物を表すことを示している。また、擬容語には人間の心の状態を表す擬情語もあると主張している。金田一による分類を以下のように示すことができる。

(6) 金田一（1978）によるオノマトペの分類

- ・ 擬音語は世界の音を写した言葉
 - 擬音語 無生物の音を表すもの
 - 擬声語 生物の音を表すもの
- ・ 擬態語は音を立てないものを、音によって象徴的に表す言葉
 - 擬態語 無生物の状態を表すもの
- ・ 擬容語は生物の状態（動作様態）を表すもの
 - 擬情語 人間の心の状態を表すもの

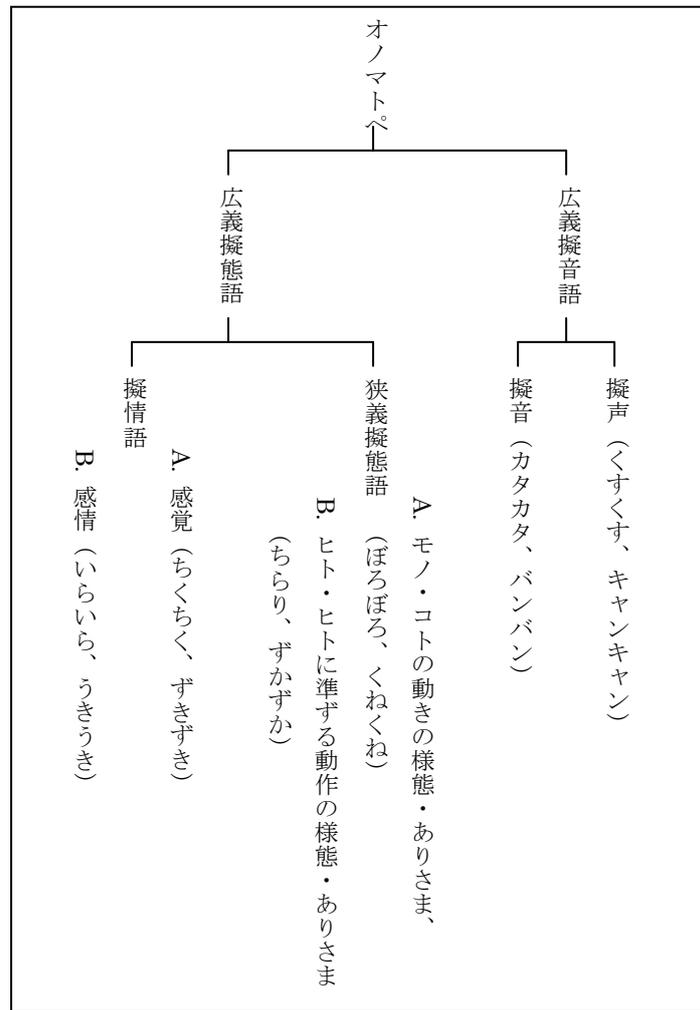
次に、田守（1993）による分類を紹介する。田守（1993）は、オノマトペを図1のように分類している。図1から窺えるように、田守（1993）はオノマトペを擬態語／擬音語に分け、さらに擬態語を擬情／非擬情に分けている。そこから、擬態／擬容、擬情／感覚、擬音／擬声を取り出して同じレベルにおいている。

図 1 田守(1993)によるオノマトペの分類



次に、伊藤 (2002) による分類が挙げられる。伊藤 (2002) による分類は、図 2 の通りである。

図 2 伊藤(2002)によるオノマトペの分類

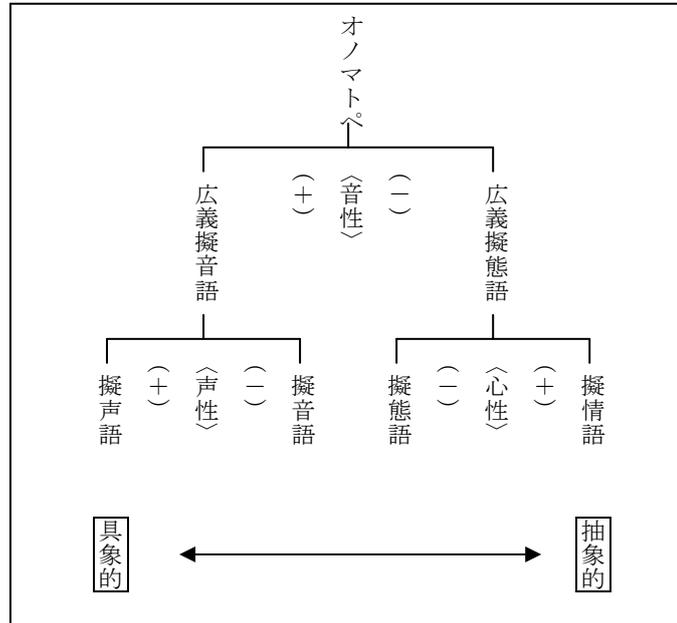


伊藤 (2002) は、擬態語の下位類を狭義擬態語と擬情語とに分けている。狭義擬態語と擬情語は、更にそれぞれの下位類として A, B に分類されている。伊藤 (2002) は、田守 (1993) と同様に「擬情語」に対して「非擬情語」という呼び名を避けており、その理由を「呼び名によって誤った有標、無標の解釈がなされることを避けるため」と説明している。更に、「狭義擬態語」という用語を用いた理由として「擬情語」にあてはまる語彙は、残りの擬態語よりもより限定されており、特殊な性格を持っている。そのため、擬態語の中で擬情語を捉えるという全体的な立場から、擬情語とみなさない擬態語はそのまま狭義擬態語と呼ぶ」と主張している。

5.2 本稿の分類

本稿では、オノマトペの分類を設定する際、田守 (1993) と伊藤 (2002) を参考にし、その分類を以下の図 3 のようにする。

図3 本稿のオノマトペの分類



まず広義レベルの「広義擬音語」と「広義擬態語」を設定し、さらにそれぞれを狭義レベルの「擬声語」／「擬音語」と「擬態語」／「擬情語」に分類した。最初、広義レベルについて検討しよう。

5.2.1 広義レベルの分類

上述したように、擬声語・擬音語は音であるものを言語音で表そうとしているものに対し、擬態語・擬情語は音のない様子や状態を言語音で表そうとしているものである。両者を分けるとなれば、〈音性的〉つまり、音を表すか否かという弁別特徴で分類するのが妥当的であろう。この弁別特徴をもとに、前者は実際の声・音を音で表そうとしているため、形態（音）と意味（イメージ）の間の関連性が直接であるのに対し、後者は音のない様子・状態を音で表そうとしているため、形態と意味の関連性が間接的であると言われている（日向 1998；伊藤 2002 など）。本稿では、擬声語・擬音語をまとめて「広義擬音語」、擬態語・擬情語を「広義擬態語」と呼ぶことにする。

しかしながら、実際には、あるオノマトペが音を表しているのか様子を表しているのかはつきり判断できない場合がある。以下の例を見よう。

- (7) 子犬を抱き上げると、どきどきと心臓の鼓動が伝わってきた。⁵

⁵ 本稿で出典を示さない例文は全て筆者の作例である。

この「どきどき」は擬音語であるか擬態語であるかということがそう簡単に区別できないであろう。つまり、(7)の「どきどき」は、心臓の音を表しているという解釈が可能であると共に、心臓の動きを表しているという解釈も可能なわけである。または、同時に音と様子を表しているということも十分に考えられる。実際に心臓が激しく動く時は、その連続して鼓動する音も、動く様子も同時に感じられる場合が多いので、「どきどき」は擬音語でもあり、擬態語でもある存在であろう。言い換えて、擬音語と擬態語の間にある、中間的な語であるとも言える。このように、多くの場合「どきどき」は音を表しているか、様子を表しているか区別しにくいいため、オノマトペ専門辞書においては通常「心臓が連続して鼓動する音・様子」のように記述されている(阿刀田稔子・星野和子 1995; 飛田良文・浅田秀子 2002)。そういう意味で、広義レベルで「広義擬音語」と「広義擬態語」を2つに分類するときは、必ずしも擬音語である、或いは、擬態語であると言えない、中間的な語彙群の存在を論理的に認めなければならない。筆者はこうした中間的な語彙群の存在を認めているが、オノマトペを分析する際、確実的な結果を得るために、Kakehi, Tamori, Schourup (1996)による分析方法を参考にし、「どきどき」が「心臓がどきどきと鳴った」のように擬音語としても、「心臓がどきどきする」のように擬態語としても用いられるため、それを擬音語でもあり、擬態語でもあるという立場をとることにする。つまり、用法上では擬音用法と擬態用法のように2つに分けられるため、「どきどき」全体が1つの語であり、擬音の意味も擬態の意味もある多義と見なすこととする。オノマトペの多義についての分析は次章で詳細に説明する。

5.2.2 狭義レベルの分類

本節では、狭義レベルについて検討する。図3では、「広義擬音語」をさらに「擬声語」／「擬音語」、又は「広義擬態語」を「擬態語」／「擬情語」に分類した。前者は〈声性的〉であるかないか、後者は〈心性的〉であるかないかという弁別特徴で分類されている。最初は、「擬声語」／「擬音語」について議論する。

「擬声語」が〈声性的〉になっているのは、「擬声語」が生物、つまり、人間の声と動物の鳴き声を表すからである。多くの研究者が声・音であるものを表すオノマトペを「擬声語」と「擬音語」に分類せず、この語彙群全体を「擬音語」にしたり(天沼 1974; 宮地 1978; 阿刀田・浅野 1993; 苧阪 2001; 飛田・浅田 2002)、逆に「擬声語」にしたりする(石黒 1993; スコウラップ 1993; 大坪 2006⁶)。しかしながら、本稿は両者を区別すべきだという立場である。繰り返しになるが、擬声語は人間の声・動物の鳴き声を表すのに対し、擬音語は自然界の音を表す、のように両者は対象にするものが異なっている。描写される対象が異なっている故に、「擬声語」と「擬音語」の間に複数の相違点があるはずであろう。下位類のオノマトペの相違点を明らかにすることは本稿の目的の一つであるが、結論から述べると、「擬声語」と「擬音語」の間には次の相違が見られる。それは、意味上では「擬

⁶ 大坪(2006)はオノマトペ全体を現すのに「擬声語」という名称を扱っている。

音語」より「擬声語」の方がより特定化されているということである。例えば、擬音語の「かたかた」は「硬くて軽い物が連続的に衝突する音」を表すが、具体的に何の音を表現しているのか、特定することは困難である。以下の例から分かるように、様々な物体が衝突することによって出る音を「かたかた」の形式で表現することが可能である。

- (8) a. 息子はお弁当箱をかたかた鳴らして帰ってきた。
 b. 春一番が窓をかたかたといわせた。
 c. 彼は一日中かたかたとワープロを打っている。
 d. 部長はじれると万年筆で机をかたかた叩く。

(飛田・浅田 2002. p.39)

この例から、「かたかた」は性質の異なる音を描写することができ、特定されていないということが分かる。また、「かたかたという音がした」のように、ある特定の文脈がないと、何の音がするかと比較的解かりにくい。このような語は1つの意味を表すと解釈されるのは一般的である。これと比べて擬声語は、例えば笑い声を表す「げらげら」を例にして見ると、大きな笑い声を表すということが、文脈がなくても理解できる。さらに、「かたかた」については硬くて軽い物が連続的に衝突する音を表すということしか言えないが、それに対して「げらげら」は意味上ではもっと豊富であると言える。それは、以下の表に示されている通り「げらげら」は声の大きさのみではなく、性別なども表せるからである。

表1 「かたかた」「げらげら」の意味上の相違

	大きさ	イメージ	性別
「かたかた」	○ (小さい音)	×	×
「げらげら」	○ (大きい音)	○ (マイナスイメージの語)	○ (通常男性)

擬声語が擬音語より意味上ではより特定化されているということは、次のことから分かる。第6章で詳しく考察するが、本稿では、複数の意味を持つ多義性の場合には、擬態・擬情の意味が擬音の意味から何らかの比喻によって拡張するという立場をとることにする。例えば、「がたがた」には以下のような意味がある。

- (9) 「がたがた」(阿刀田稔子・星野和子(1995)『擬音語・擬態語使い方辞典』)
 【意味①】: 堅い物体が揺れ動いて周辺の堅い部分にぶつかってたてる連続音。【略】
 【用法】音
 【用例】前の通りをバスやトラックが通るたびにがたがたと家なりする。
 【意味②】: 寒さや恐怖、驚がく、興奮、不安などの緊張で体が震える様子。

【用法】態

【用例】暗闇でその気味の悪いなり声を聞いたときにはこわくてがたがたと震えがとまらなかつた。

【意味③】：不安，不平があつて落ち着きをなくし，言い騒ぐ様子。

【用法】態

【用例】こんな店ぐらいちゃんとやっていけるよ。がたがた言わずに見ておれ。

【意味④】：強固に組み合っているものが解体して不安定になったり崩れたりする様子。

【用法】態

【用例】婚約者の突然の死で将来の夢も希望もがたがたと崩れてしまった。

【意味⑤】：力量，勢力が急激に下がる様子。

【用法】程度

【用例】1位で快調にとばしていたのに，折り返し点を過ぎてから速力ががたがたと落ちた。

この辞書記述から、「がたがた」の意味①は擬音の用法，意味②，③，④，⑤は擬態の用法であるということが分かる。意味①は「がたがた家鳴りする」のように何か振動する音を表す。意味②は「がたがたと震えがとまらなかつた」のように物理振動を直接的に表現したものである。ここでは，擬態の意味②は，擬音の意味①からある比喩に基づき拡張していると考えられる。さらに意味②から意味③が拡張するなどが推測できる。このように，擬音語の場合は，擬音の意味から擬態の意味が拡張する例が実際に多く観察されるが，擬声語の場合はこのような例が極めて少ない。つまり，笑い声を表す「ははは」「げらげら」や，動物の鳴き声を表す「わんわん」「こけこっこー」という擬声語から，何らかの比喩に基づき擬態語・擬情の意味が拡張するということがまず考えられない。

更に，様々な言語における動物の鳴き声の間には類似したものが観察されるということも，擬声語の方が意味上では極めて狭く特定化されているということによって説明されるであろう。例えば，鶏の鳴き声は英語では *cock-a-doodle-do*，フランス語では *coquelico*，ドイツ語では *kikeriki*，ロシア語では *kukareku*，朝鮮語では *コッキョウ*，日本では *コケッコウ* という。

次に，「擬態語」／「擬情語」について検討する。図 3 では，「擬態語」と「擬情語」は〈心性的〉であるかないかで異なっている。「擬情語」は人間の内面心理を表すものであり，「擬態語」はそれと異なって人間や物体の外見をとらえているものである。

図 1 から窺えるように，田守（1993）が擬態語を擬情／非擬情に分類し，また擬情を感情／感覚，非擬情を擬態／擬容にわけている。本稿は，前者の擬情のものには感情／感覚を表すものが存在し，それらを区別すべきであると賛成している。しかし，後者の非擬情の場合は，擬態／擬容に分類する妥当性は低いと思われる。田守は擬態／擬容が〈有生性〉という特徴で異なっていると示している。伊藤（2002）も同様に，モノ・コトの動作と様

態か、或いはヒトに準ずる動作か、という点で狭義擬態語を分類している。擬態語においてはこのような生物と無生物を表すオノマトペがあり、形式上ではそれを 2 つに分類してもよいのかもしれないが、厳密に言えば、生物か無生物かという特徴で必ずしもはっきりと分けられない擬態語が多数存在するため、本稿ではこのような分類を扱わないことにする。例えば、田守（1993）が指摘した「きよろきよろ」という語はどうであろうか。「目がきよろきよろしている」の「きよろきよろ」は人の目の動きを表すことから、有生性的（擬容）であると言えるのかもしれないが、以下（10）、（11）、（12）のものは必ずしも有生性的であるとはいえない。

- (10) a. 子供は期待できらきらする目でいっせいに私を見つめた。
b. 高原の夜空には宝石をちりばめたようにきらきら星が光っている。
(阿刀田・星野 1995. p.101)
- (11) a. お尻がぷるんぷるんと揺れた。
b. スプーンでゼリーをすくおうとしてもぷるんぷるん逃げてなかなかすくえない。
(阿刀田・星野 1995. p.463)
- (12) a. きちんとした青年だ。
b. きちんとした服装だ。

(10) ~ (12) では、(a) のものは人間に対して用いられているが、(b) のものは無性物に対して用いられている。このような人の様子・状態や人体のある部分の動きなどを表せる語が実に多く存在する。これらを全て生物か無性物かに分けることは無理がある。擬態語の生物と無性物のような分類には、もう一つの問題がある。それは、動物の動作を表すオノマトペをどのように分類するべきかということである。田守（1993）は、擬容という用語を用い、それが生物の動作などを表したものであると述べているが、伊藤（2002）は、はっきりと「モノ・コト」と「ヒト」のように 2 つに分け、動物に関するオノマトペについては何も述べていない。擬態語は生物であれ、無生物であれ、視覚を通してある対象の動きや状態を表しているものである。そのため、形式上では生物・無生物に分けてもよいが、両者の間にはっきりとした境界線は存在せず、形態・統語的な面から見ても根本的な相違点がないように思われる。

狭義レベルではオノマトペを「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬情語」という順番で並べた。このような並べ方は、擬声語がもっとも具象的なものであるのに対し、逆に「擬情語」はもっとも抽象的なものであるということを意味している。本稿ではオノマトペを広義レベルと狭義レベルにわけ、「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬情語」を同じ狭義レベルにおく。そして、それぞれが異なる性質のものであるため形態的・意味的・統語的な側面からの様々な相違点が存在するであろうという見通しで研究を進める。

第3章 オノマトペの分析

1. はじめに

前章で見たように、本稿は日本語とカザフ語のオノマトペを「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬情語」という下位類に分類するものである。これらの諸特徴を明らかにするために、それぞれの下位類の正確な語数を知る必要がある。しかし、オノマトペを形式上「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬情語」などの下位類にも簡単に分類することはできるが、これらの正確な語数を知ることはなかなか困難であろう。なぜならば、オノマトペにおいては、1つだけの意味を持つものと、擬音・擬態・擬情の意味が混成したものが複数に存在するからである。こうした中、どのようにして下位類の正確な語数が分かるであろうか。本章では、オノマトペの分析方法とその結果について詳細に述べる。

2. データベースの作成

日本語とカザフ語のオノマトペのデータベースを作成するのに、日本語の場合は Kakehi, Tamori, Schourup (1996) (*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*) と阿刀田・星野 (1995) (『擬音語・擬態語使い方辞典』), カザフ語の場合は Болғанбаев, Дәулетқұлов (1999) (*Қазақ тілінің сөздігі*) という辞書を使用した。最初は日本語オノマトペのデータベースについて述べる。

2.1 日本語オノマトペデータベース

日本語オノマトペのデータベースを作成するために Kakehi, Tamori, Schourup (1996) と阿刀田・星野 (1995) を選んだ理由は、両者とも日本語におけるごく自然に使われている語を対象にするからである。また、そののべ語数はほぼ同じであり、前者は 1,600 語程度、後者は 1,700 語程度を収録している。しかしながら、Kakehi, Tamori, Schourup (1996) では、1,600 語全てが見出し語として解釈されているが、阿刀田・星野 (1995) では 738 語だけが見出し語になっているという違いがある。こうした中では、日本語オノマトペのデータベースを作成するのに、Kakehi, Tamori, Schourup (1996) を選び、見出し語の全て (1,591 語) を対象にして分析した。

より正確なデータベースを作成するのに、Kakehi, Tamori, Schourup (1996) から見出した 1,591 語を阿刀田・星野 (1995) に挙げられているデータベースと対照した。その結果、Kakehi, Tamori, Schourup (1996) と阿刀田・星野 (1995) それぞれが挙げているオノマトペの解釈や意味はほとんど一致しているが、次の 2 つの点で異なっていること

が明らかになった。その1つは、下位分類の表記の仕方である。阿刀田・星野（1995）は、オノマトペを用法によって【音】（おと）ないし【態】（ようす）のように、擬音と擬態の意味を区別しているが、いくつかはその意味を区別せずに【音・態】（おと・ようす）のように表示している。Takehi, Tamori, Schourup（1996）も同様に、用法によって擬音の意味をS（sound）、擬態の意味をM（manner）のように表示して区別しているが、その区別ははっきりしたもので、中間的なS/Mのようなものが観察されていない。例えば、両者は「ごくごく」について以下のように解釈している。

(1) 「ごくごく」

a. Takehi, Tamori, Schourup（1996）‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味】S：The sound made in the throat when repeatedly gulping down large quantities of liquid.

【用法】S（sound）

b. 阿刀田・星野（1995）『擬音語・擬態語使い方辞典』

【意味】かなりの量の液体を続けて飲むときの音。また、のどを鳴らして飲むようす。

【用法】音・態

(1) に見られるように、阿刀田・星野（1995）は「ごくごく」の表している意味が【音・態】であると示しているのに対し、Takehi, Tamori, Schourup（1996）は、その意味がS（sound）であると示している。しかしながら、Takehi, Tamori, Schourup（1996）は、「日本語オノマトペを用法によって擬音（S）と擬態（M）の意味に分類したが、その境界線は絶対的なものでない」と認定している。

(2) The classification of definitions into two general groups, sound and manner, is not intended to be strict. (略) Sound forms frequently have manner associations as well, and, though this happens less often, manner forms may also have sound associations.

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. pp.xiv-xv)

筆者も、オノマトペにおいては擬音と擬態の意味を区別しにくいものの存在を認めているが、分析しやすい（下位類の語数を正確的に見せやすい）という理由のもとで Takehi, Tamori, Schourup（1996）のデータベースを扱うことにした。

2つ目としては、比喩の意味に関する相違点が挙げられる。それは次のようなものである。例えば、「げっそり」という語を例にすると、両者の解釈の相違が以下ようになる。

(3) 「げっそり」

- a. Kakehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’
 【意味①】 M : The manner of losing much weight suddenly, owing to illness, fatigue, worry, etc.
 【用法】 M (manner)
 ②Fig : The state of being very disappointed.
- b. 阿刀田・星野 (1995) 『擬音語・擬態語使い方辞典』
 【意味①】 : 体が急激に衰えて、体がそがれたようにやせているようす。
 【用法】 態
 【意味②】 : 急激に気落ちして、意気消沈するようす。
 【用法】 態

(3a) の ‘Fig’ とは (figurative definition) 比喩用法を指しているものである。(3a) から窺えるように、Kakehi, Tamori, Schourup (1996) は「げっそり」が基本的には1つの意味を表し、その意味が比喩の用法にも使用されるように解釈している。これと異なって、阿刀田・星野 (1995) は「げっそり」が2つの意味を表すと示し、Kakehi, Tamori, Schourup (1996) が挙げている② ‘Fig’ の比喩の意味を別の意味として区別している。同じように、「しゃきしゃき」「ねちねち」の比喩用法についても解釈が異なっている。

(4) 「しゃきしゃき」

- a. Kakehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’
 【意味①】 M : The state of food, especially fruit and vegetables, being crisp.
 【用法】 M (manner)
 ②Fig : [of persons] The manner of speaking articulately and without hesitation, or acting with alacrity; the state of being decisive or firm.
- b. 阿刀田・星野 (1995) 『擬音語・擬態語使い方辞典』
 【意味①】 : 歯切れよい音の連続・感触。
 【用法】 音・態<野菜・果物>
 【意味②】 : 動作が活発で、切れ味のよい感じでさわやかであるようす。
 【用法】 態<人>

(5) 「ねちねち」

- a. Kakehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’
 【意味①】 M : The state of being sticky and unpleasant.
 【用法】 M (manner)

②Fig : The manner of speaking or behaving pertinaciously; the state of being persistent or pertinacious.

b. 阿刀田・星野 (1995) 『擬音語・擬態語使い方辞典』

【意味①】：物がしつこく粘りつくようす。

【用法】態<もち・あめ>

【意味②】：言動，性質がくどくしつこいようす。

【用法】態<人>

このように，阿刀田・星野 (1995) は Kakehi, Tamori, Schourup (1996) が挙げている② ‘Fig’ の比喩の意味を別の意味として区別している。このような解釈の異なるオノマトペは 35 語が観察された。これらを以下にまとめる。

(6) げっそり，ぐにやぐにや，しゃきしゃき，しっぽり，じたばた，すっぱり，ねちねち，ふにやふにや，ふらふら，ふつつり，べたべた，ほやほや，がらがら，からから，きーん，きりきり，こちこち，ちょん，ちりちり，どん，どかどか，どかん，どさっ，びりびり，ぷつり，ふーふー，しゃきっ，しゃつきり，ずたずた，むくむく，もやもや，もやっ，もやっ，ふわふわ，ふんぷん

Kakehi, Tamori, Schourup (1996) と阿刀田・星野 (1995) とでは比喩的用法に関する解釈が異なっているが，本稿では阿刀田・星野 (1995) の意味分析に従い，(6) の 35 語の比喩用法を区別してもう 1 つの意味と見なすことにする。

以上のことをまとめると次のようになる。日本語オノマトペのデータベースを作成するのに Болғанбаев, Дәулетқұлов (1999) を扱い，1,591 語を見出して分析した。1,591 語中の 35 語の比喩用法に関しては，阿刀田・星野 (1995) の意味分析に従い，その比喩用法を区別して独自の意味と見なした。

2.2 カザフ語オノマトペデータベース

次に，カザフ語オノマトペのデータベースについて述べる。カザフ語オノマトペのデータベースを作成するのに Болғанбаев, Дәулетқұлов (1999) を使用した。この辞書から見出し語のオノマトペ全て (1,242 語) を対象にして分析した。以下の (7) と (8) は Болғанбаев, Дәулетқұлов (1999) によるオノマトペの解釈の典型的な例である。

(7) бақ /baq/

Болғанбаев, Дәулетқұлов (1999) ‘Қазақ тілінің сөздігі’

【意味】：бақ етті. *Тосыннан қатты дыбыс шығарды.* 「急に大きく一回鳴る音」

【用例】：Үлкен ешкілердің бірі сүзіп жіберсе керек, бір лақ текенің бақ еткен даусы шықты. (М. Мағауин, “Ақша қар.”)

(8) жарқ /zharq/

Болғанбаев, Дәулетқұлов (1999) ‘Қазақ тілінің сөздігі’

【意味①】：Көзден жалт етті, ұшқын атты. 「光体が急に光り輝く様子」

【用例】：Электр лампочкасы жарқ етіп жана кеткенде, Жиенбай қонақтың үсті-басына бір көз жүгіртіп өтті. (Д. Дүйсенов, “Мейман”)

【意味②】：Ыстық көрінді, оттай басылды. 「懐かしく感じる様子」

【用例】：Көптен қолға ұсталмаған көне қуыршақ алғаш көргенде ескі досындай көзіне жарқ етті. (Т. Ахтанов, “Дала сыры”)

【意味③】：Көзге түсті, танылды, шалынды. 「目に見えたり, 急に気付いたりする様子」

【用例】：Тау тағысының тұқымын қолдан өсіріп, ерекше мал етіп шығаруға бұл тіпті қолайлы болар деген ой жарқ еткендей, ол күлімдей өзгерді. (С. Бегалин, “Уақыт”)

【意味④】：Ойламаған жерден көрінетін болды, сап етті. 「急に出たり, 現れたりする様子」

【用例】：Телевизордан жарқ ететін болдық, арғысын көре жатырмыз.

上の (7) の бақ /baq/は擬音語で, (8) の жарқ /zharq/は擬態語である。бақ /baq/は1つの意味を持つ語で, жарқ /zharq/は4つの意味を持つ多義語である。

以下では, 両言語オノマトペの分析について述べる。

3. 分析

3.1 単義語・単一多義語・多義混成語

オノマトペにおいては, 「ばしゃばしゃ」や「よちよち」のようなただ1つの語義を持つものがある。前者は「水が物に当たったり揺れ動いたりしてはねる音」を表す擬音語で, 後者は「足取りがたどたどしく小さい歩幅で歩く様子」を表す擬態語である。

(9) この公園では, 夏が近づくと, 子供達が池でボートに乗って, オールでばしゃばしゃ水をかけ合う光景をよく見かける。

(10) 孫がこのごろよちよち歩きはじめて目が離せない。

(阿刀田・星野 1995. p.553)

「ばしゃばしゃ」「よちよち」のような1つのみの語義を持つと考えられているオノマトペ

を「単義語」と呼ぶことにする。

オノマトペ語彙においては、同一の語が 1 つ以上の意味を表すものも存在する。例えば「ぐにゃぐにゃ」「いらいら」はそれである。前者（「ぐにゃぐにゃ」）は「柔らかくて弾力の弱い物体が、力を加えられるままにゆがんだり折れ曲がったりねじれたりする様子」という意味（11a）と、「性格、態度、また決定事項が堅実堅固でない様子」という意味（11b）があり、両者とも擬態語として用いられる。後者（「いらいら」）は、「思いどおりにいかず腹立たしくなり、落ち着かない様子」という意味（12a）と、「とげ状の微小物が繰り返し肌をさす感触を表す様子」という意味（12b）があり、両者とも擬情語として用いられる（意味解釈は『擬音語・擬態語使い方辞典』より）。

(11) a. おばあさんはぐにゃぐにゃの水あめに割りばしをさしこんで、先のほうにまるく巻きつけて僕にくれた。

b. あいつのぐにゃぐにゃして煮えきれぬ態度、なんとかならないものかね。

(阿刀田・星野 1995. p.130)

(12) a. 救急車の前に不法駐車、まったくいらいらする。

b. のどがいらいらするので、あめでもなめよう。

(阿刀田・星野 1995. p.7)

「ぐにゃぐにゃ」「いらいら」それぞれは 2 つの意味を持っているが、前者（「ぐにゃぐにゃ」）は擬態語として、後者（「いらいら」）は擬情語⁷としてのみ用いられ、それぞれの意味は同一の下位類に属する。このような 1 つの形式が 2 つないしそれ以上の擬態語のみ、或いは、擬情語のみの意味を持つオノマトペを「単一多義語」と呼ぶことにする。

以上の例と異なって、「ばたばた」のような 1 つの語が擬音語としても擬態語としても使用される場合がある。

(13) a. 帆が風でばたばたと大きな音を立てた。

b. 仕事をばたばたと片付けて飲みに行く。

このようなオノマトペを、擬音語としての意味と擬態語としての意味が混じっていることから「多義混成語」と呼ぶことにする。また、この類のオノマトペにおいては「擬音語＋擬態語」のみではなく、「擬声語＋擬態語」「擬音語＋擬態語＋擬情語」などの組み合わせの語も観察される。

このように、意味的な面から考察すると、オノマトペには「単義語」「単一多義語」「多

⁷ 「いらいら」は、意味①「思いどおりにいかず腹立たしくなり、落ち着かない様子」、意味②「とげ状の微小物が繰り返し肌をさす感触を現す様子」という意味を持っている擬情語である。ここでは、意味①は感情を表すもので、意味②は感覚を表すものである。

義混成語」が存在する。これらを次のように定義付ける。

「単義語」－1つの形式が1つのみの語義を持つ語のこと。

「単一多義語」－1つの形式が1つ以上の語義を持つが、それは同一の下位類に属する語のこと。

「多義混成語」－1つの形式が1つ以上の語義を持つが、それは複数の下位類に属する語のこと。

3.2 多義語と同音異義語

前節では、「単義語」「単一多義語」「多義混成語」について述べ、ある形式が1つ以上の同一の下位類に属する語義を持つ語を「単一多義語」と呼び、その語義が複数の下位類に属すると「多義混成語」と呼んだ。ここでは、「多義」という用語を使用しているが、実際のところは必ずしも多義ではなく、「同音異義」になる場合もある。以下では、オノマトペに見られる多義語と同音異義語について議論する。

原則としては「同音異義語」は、例えば「いる」という音形に対応する<居る>と<要る>という関連性がない別の2つの語が偶然同じ音形を有していることを言う。これに対して「多義語」は、1つの音形に対応する2つの意味の間には共通点が見られること、つまり2つの意味が何らかの形で関連していることを言う。このような「同音異義語」も「多義語」も一般語彙において通常に見られるものであるが、オノマトペの場合はどうであろうか。

泉(1976)は、「太鼓がドンドン鳴る」と「仕事がどんどんはかどる」という例を挙げ、両者の「ドンドン」には意味上では類似性が見られないことから、それを「同音異義語」として見なすのが妥当だと述べている。これとは反対に、オノマトペにおいては1つの形式が複数の語義を持ち、その語義は何らかの形で関連していることから、この現象を「多義性」と見なす見解もある(筧1999など)。本稿では、泉(1976)が挙げた「太鼓がドンドン鳴る」と「仕事がどんどんはかどる」の「ドンドン」は、意味の間には関連性があり、そのためこのような場合の語彙を多義語として見なすべきであるという立場をとることにする。「ドンドン」の意味の間の関連性を次のように示すことができる。「太鼓がドンドン鳴る」の「ドンドン」は「かなりの重さや堅さのあるものが、勢いよく連続して打ち当たる音」という意味を表す擬音であるのに対し、「仕事がどんどんはかどる」の「どんどん」は「物事が滞らず、勢いよく連続して行なわれたり、進めたりする様子」という意味を表す擬態である。ここの擬態の意味がメタファーという比喻によって擬音の意味から拡張したということが考えられる。この意味拡張を以下のように表示する。

(14) メタファー：

<ある音が勢いよく連続して起こる>→<あるものが勢いよく連続して行なわれる>

つまり、「太鼓がドンドン鳴る」と「仕事がどんどんはかどる」では、「物事が行なわれる」という難しい概念はよりやさしい（音の）概念で例えられる。これらの共通する意味として<勢いよくおこる>というローカルスキーマを抽出することができる。このように、「ドンドン」の擬音と擬態の意味の間に共通点が存在し、両者が関連していることから「ドンドン」は2つの意味を持つ多義語であると言える。

しかしながら、オノマトペにおいては1つの形式は関連性が見られない2つまたそれ以上の意味を持つ場合もある。日本語の「どーどー」とカザフ語の *сылдыр-сылдыр* /*sıldır-sıldır*/はそれである。日本語の「どーどー」は、「大量の液体が連続して落下したり打ち寄せたりする音」を表す擬音の意味（15a）と、「馬をとめたり静めたりするためのかけ声」を表す擬声の意味もある。

- (15) a. 何百メートルの高さをどーどーと落下する滝の音は、何キロも離れた村落にも響いてくる。
b. 馬車のおじさんはたづなを引いてどーどーと馬をとめる。

(阿刀田・星野 1995. p.308 - 309)

また、カザフ語のオノマトペの *сылдыр-сылдыр* /*sıldır-sıldır*/を例にしてみると、*сылдыр-сылдыр* /*sıldır-sıldır*/には「川が流れる音や、水がものに打ち当たって続けてはね飛んだりする音」という擬音の意味と、「女性の笑い声」を表す擬声の意味がある。日本語の「どーどー」とカザフ語の *сылдыр-сылдыр* /*sıldır-sıldır*/それぞれは擬音と擬声の意味を持っているが、両者の意味の間には関連性があるとはまず考えられないだろう。このことから、「どーどー」、*сылдыр-сылдыр* /*sıldır-sıldır*/の擬音と擬声の意味の間に関連性を見出すことが難しい故に、これらを同音異義語として見なすことにする。このように、オノマトペにおいては「同音異義語」が見られるのは、音・声であるものを表すものの場合が多い。それは、同一の形式が複数の擬音・擬声の意味を表しているということは、言語音には限りがあり、オノマトペに形態上の制限があるため、自然界や動物などの音・声を同じような言語音の形式で表さざるをえないからだろう。

本稿では、同一の下位類に属する「擬音語+擬音語」「擬声語+擬声語」の組み合わせの語、及び「擬音語+擬声語」の組み合わせの語を「単一多義語」と「多義混成語」のように1つの語と見なせず、それぞれを区別して2つの異なる語として見なすことにする。

3.3 方法論

本節では、オノマトペの分析方法について説明する。前節で述べたように、日本語オノマトペの場合は1,591語、カザフ語オノマトペの場合は1,242語を収録した。しかし、両言語の場合も、辞書においては擬音と擬態の意味のみが表示されている。例えば、Kakehi, Tamori, Schourup (1996) では、擬音語の意味をS (sound)、擬態の意味をM (manner)

と表示し、それぞれに複数の用法がある場合には S1, S2, M1, M2, などのように区別している。本研究では、この 2 大区分それぞれをさらに 2 つに分類した。まず、S (sound) で表示されているものを表す意味によって擬声 (V (voice))・擬音 (S (sound)) の意味に分けた。前者は人間・動物の声と鳴き声、後者は自然界の音を表すものである。また M (manner) で表示されているものを擬態 (M (manner))・擬情語 (P (psychomimes)) に分けた。前者は人間などの動作や状態の様子、後者は人間の感情及び感覚を表すものである。

上述したように、オノマトペを、どのような意味を表しているかによって「単義語」「単一多義語」「多義混成語」のように分けることができる。両言語の各下位類の正確な語数を知るために、下位類のオノマトペそれぞれには「単義語」「単一多義語」「多義混成語」がどの程度観察されるかを明らかにする必要がある。ここでは、「単義語」と「単一多義語」が、前者は 1 つの形式が 1 つのみの意味を持つもの（「ばしゃばしゃ」(S), 「よちよち」(M)）で、後者は 1 つの形式が同一の下位類に属する複数の意味を持つもの（「ぐにやぐにや」(MM), 「いらいら」(PP)）であるため、各下位類の「単義語」と「単一多義語」を計算すると、正確な語数が分かる。しかしながら、「多義混成語」は例えば「擬音 (S) + 擬態 (M)」の意味上での組み合わせの語であるため、それを擬音語として分析して数えるか、擬態語として数えるかという問題がある。本稿では、例えば「多義混成語」である (27) の「ばたばた」の場合は、擬音 (S) と擬態 (M) の意味をもち、擬音語と擬態語としても使用することができることから、それを擬音語としても擬態語としても数えることにする。

3.4 分析結果

両言語のオノマトペ語彙を「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬情語」に分類し、それぞれにどの程度の「単義語」「単一多義語」「多義混成語」が観察するかを考察した結果、表 2（日本語オノマトペ）と表 3（カザフ語オノマトペ）のような結果が得られた。この表では、() 内に表示されている数字は、全項目数に対する百分比である。例えば、表 2 日本語の擬声語を見ると、「単義語」は 105 語 (73%), 「単一多義語」は 4 語 (3%), 「多義混成語」は 35 語 (24%) であるということが分かる。これらの語を合わせると、擬声語の総語数が 114 語 (100%) になる。

表 2 日本語オノマトペ

	単義語	単一多義語	多義混成語
擬声語	105 (73%)	4 (3%)	35 (24%)
擬音語	343 (52%)	33 (5%)	283 (43%)
擬態語	509 (49%)	198 (19%)	333 (32%)
擬情語	33 (26%)	7 (5%)	89 (69%)

表 3 カザフ語オノマトペ

	単義語	単一多義語	多義混成語
擬声語	80 (75%)	7 (7%)	19 (18%)
擬音語	292 (79%)	7 (2%)	70 (19%)
擬態語	622 (75%)	153 (18%)	54 (7%)
擬情語	7 (70%)		3 (30%)

このように、両言語の各下位類の「単義語」「単一多義語」「多義混成語」の結果を合わせると、両言語の下位類それぞれの正確な語数と割合が明らかになる。得た語数と割合を表 4 にまとめる。

表 4 両言語オノマトペの語数と割合

	日本語	カザフ語
擬声語	144 (7%)	106 (8%)
擬音語	659 (33%)	369 (28%)
擬態語	1,040 (53%)	829 (63%)
擬情語	129 (7%)	10 (1%)

表 4 の両言語オノマトペの割合をグラフで表示すると、その相違点がより分かりやすくなる。

図 4 日本語オノマトペの割合

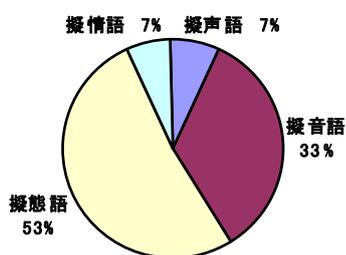
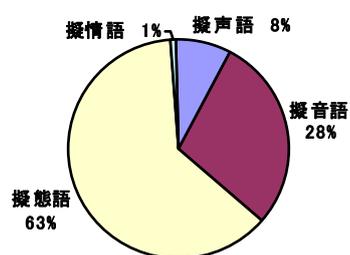


図 5 カザフ語オノマトペの割合



■ 擬声語 7% ■ 擬音語 33% □ 擬態語 53% □ 擬情語 7%

■ 擬声語 8% ■ 擬音語 28% □ 擬態語 63% □ 擬情語 1%

辞書を基に作成したデータベースを分析した結果、両言語の下位類は殆ど同様な割合になっているということが以上の図から明らかである。まず、広義レベルで見ると、両言語

の広義擬音語と広義擬態語がほぼ同様な割合になっていることが興味深い。狭義レベルで観察すると、擬声語・擬音語の割合が近似しているが、擬態語・擬情語の割合が大きく異なっている。カザフ語の擬情語が極めて少数であり、1%にしか至っていないのに対し、日本語の擬情語は7%を占めているという違いがある。

以下では、得た分析結果を基に両言語オノマトペを形態的、意味的、統語的な面から考察し、下位類それぞれの諸特徴を明らかにすることを試みる。

第2部 形態・意味・統語の考察

第4章 オノマトペの語基

1. はじめに

我々が日常会話ではしばしば扱うオノマトペ語彙は単なる音声模写ではなく、言語の一つの単位となっている。先行研究でも指摘されているように、このようなオノマトペは、いくつかの「語基」とそれに付加する「オノマトペ標識」⁸（接辞、反復など）から成っている。（以下では、「オノマトペ標識」を「構成要素」と呼ぶことにする。）本稿では、日本語とカザフ語のオノマトペに見られる「語基」と「構成要素」を分離して考察する。そうすることによって両言語オノマトペの体系性をより明確な形で示すことができる。本章では日本語とカザフ語のオノマトペにおけるいくつかの語基とそれに関する諸問題について検討する。次章ではオノマトペにおける構成要素について論じる。

2. 日本語オノマトペの語基

2.1 先行研究

現在までに出されているオノマトペのパターン分類についての研究には、小林（1942）、天沼（1974）、金田一（1976）、Hamano（1998）、田守・スコウラップ（1999）などがある。以下では、これらについて述べる。

2.1.1 天沼（1974）

天沼（1974）はオノマトペの分類に当たって拍の数によって型を分けている。また、類型を示すことを目的に、一拍の特定の音を表す仮名の代わりに「X」、「Y」、「Z」、「W」と表記している。構成要素は、それぞれ長音を「:」、促音を「t」、「り」を「r」、撥音を「n」のように示している。

表 5 天沼（1974）によるオノマトペの型の分類

一拍	1	X型	つ
二拍	2	XY型	すい、ふい、びた、しゃん、わん
	3	Xt型	かつ、ぎゅつ、さつ
	4	X:型	つー、ふー

⁸ あるオノマトペの語基に付加する接辞（/ri/）や促音/Q/、撥音/N/、反復などを「オノマトペ標識」（onomatopoeic marker）として見なす学者がいる（Waida 1984；Hamano 1986；田守・スコウラップ 1999；角岡 2007）。本稿ではこれらを「構成要素」（constituent）と呼ぶことにする。「オノマトペ標識」と「構成要素」の定義については次章で詳しく議論する。

三拍	5	XYt 型	がりっ, さらっ
	6	XYr 型	けろり, さらり
	7	XYn 型	がたん, すてん
	8	XtX 型	かっか, きゃっきゃ, せっせ
	9	XY:型	すいー, ふらー
	10	X:Y 型	すーい, こーん, ぼーん
	11	X:t 型	かーっ, さーっ, ぼーっ
四拍	12	XYXY 型	がらがら, こんこん, さらさら
	13	XYZY 型	あたふた, じたばた, どたばた
	14	XYXZ 型	きんきら, ぼっばか
	15	XYZW-1 型	かきこそ, がたごと
	16	XYZW-2 型	ちょこまか
	17	XYZW-3 型	がたびし
	18	XYZW-4 型	すたこら
	19	XYZW-5 型	ごたくさ, のろくさ
	20	XYZW-6 型	ほんわか, わんさか
	21	XYrt 型	からりっ, ごろりっ, ぴかりっ
	22	XYrn 型	からりん, ころりん, ぴかりん
	23	XtYZ 型	うっすら, ふっくら
	24	XtYr 型	こってり, すっかり, ぱったり
	25	XtYn 型	ごっとん, すっとん, ぱっちん
	26	XnYr 型	あんぐり, げんなり
	27	XY:r 型	すらーり, とろーり
	28	XY:t 型	じろーっ, すらーっ
	29	XY:n 型	がらーん, すとーん
	30	X:Yr 型	ふーわり, ゆーらり
	31	X:X:型	がーがー, きーきー, ぎーぎー
五拍	32	XYXY 型+「っ」「ん」	からからっ, ころころん
	33	XYXY 型, 第一拍と第二拍の間に「っ」が割り込んだもの, または第一拍の音が長音となったもの	がったがた, がっりがり, にーやにや, ゆーらゆら
	34	XYn 型の X の後に「っ」, Y を長音したもの	どっかーん, ぼったーん
	35	その他	こてんぱん, どんぴしゃり
六拍	36	三拍のものが重なったもの	うつらうつら, ふわりふわり, べろんべろん

	37	三拍の異なった形のものを二つ ないだ形のもの	ちらりほらり, どたんばたん, どかんぼこん
	38	二拍のものを三つ重ねた形のもの	ずるずるずる, かんかんかん, ぱっぱっぱっ
	39	四拍+二拍の形のもの	がらがらぼん, ちんちんごー
	40	その他	あつけらかん, ずってんどー
七拍	41	末尾に「っ」を伴っているもの	きらきらきらっ, ごろごろごろっ
	42	末尾に「り」を伴っているもの	くるくるくり, ちらちらちらり
	43	末尾に「ん」を伴っているもの	からからからん, ごろごろごろん
	44	末尾の一つ前に長音が割り込んで いるもの	かんかんかーん, ぼんぼんぼーん
	45	その他	がらがらびしん, がらがらどすん
八拍	46	異なった四拍のものを二つ結合さ せたもの	かたかたことこと, ごろごろびかびか, どんどん がんがん
	47	四拍のものが重なった形のもの	かたことかたこと, かっちんかっちん, こっくり こっくり, のっそりのっそり

天沼（1974）は、日本語オノマトペを拍に分類し、オノマトペの 47 型を示している。

2.1.2 金田一(1976)

金田一（1976）もオノマトペを拍の数によって分類している。金田一（1976）による分類は次の表の通りである。

表 6 金田一(1976)によるオノマトペの型の分類

一拍	1	一拍のもの	ふ（と）、つ（と）
	2	一拍の語根+「い」「ん」「っ」	つい（と）、ぼん（と）、きっ（と）
	3	一拍の語根に+「い」「う」「ん」「っ」のうち のものが二箇	ごうん、ぼいん、ぼうっ
二拍	4	二拍の語根のもの	がば（と）、びた（と）、にやお
	5	二拍の語根+「っ」	ごろっ（と）、ばさっ（と）
	6	二拍の語根+「ん」	かちん（と）、こつん（と）
	7	二拍の語根+「り」	ぐるり（と）、ごろり（と）
	8	7の一種「り」でないもの。古風な語	うらら、しとど、そよる
	9	二拍の語根の中間に、「ん」「っ」が入ったもの	ざんぷ（と）、むんず（と）、さっさ（と）、 せっせ（と）、はっし（と）

	10	7の形の第一拍と第二拍の間に、「ん」「っ」が入ったもの	あんぐり, ぐんにやり, あっさり, がっかり
	11	二拍の語の繰り返し	からから, くるくる, かたかた
	12	前項に似て類音のものを重ねるもの	あたふた, かさこそ
	13	まったく似ていない二拍を重ねたもの	がたびし, そそくさ
	14	二拍+「りん」「りっ」の形	くるりっ(と), ころりん
五拍	15	五拍のもの	ごろりんこ(と), けろりかん(と)
六拍	16	7, 8, 9, 10の繰り返し	ぐでんぐでん, ころりころり, ぱっかぱっか
	17	16に似てあとのものは, 多少形の違うもの	しどろもどろ, てんやわんや, のらりくらし, やっさもっさ
	18	その他	こけっこう, すってんてん, すっからかん, つんつるてん

天沼(1974)と同様に金田一(1976)がオノマトペを拍に分類し, 18型を示している。

2.1.3 田守・スコウラップ(1999)

田守・スコウラップ(1999)は, 日本語オノマトペを1モーラ(mora)ないし2モーラの基本形を基に分類している。これら2種類の基本音韻形に属するものを以下の表7のように示している。ここでは、「C」と「V」は, それぞれ子音と母音を表している。また, 「Q」は促音, 「N」は撥音, 「ri」は「り」を表している。

表7 田守・スコウラップ(1999)によるオノマトペの型の分類

1モーラ	1	CV	ふ, つ
	2	a. CVQ	ちゅっ, ふっ, はっ
		b. CVN	ばん, ぼん, ちょん
	3	CVV	がー, ぐー, ぎゃー, ぎゅー
	4	a. CVVQ	かーっ, ばーっ, ふう
b. CVVN		ばーん, がーん, ごーん	
5	a. CVQ-CVQ	くっくっ, きゃっきゃっ, きゅっきゅっ	
	b. CVN-CVN	ばんばん, ぼんぼん, かんかん	
	c. CVV-CVV	がーがー, ぎゃーぎゃー, かーかー	
2モーラ	6	CVCV	がば, ぐい, はた, ひし, ひた, ぶい
	7	a. CVCVQ	ぐさっ, ばたっ, ばさっ
		b. CVCVri	ぐさり, ころり, ばたり
c. CVCVN		ごろん, ばたん, ぼとん	

	8	a. CVQCV b. CVNCV	どっか, はっし, すっく むんず, ざんぶ
	9	a. CVQCVri b. CVNCVri	ばっさり, ばったり, がっくり ぼんやり, ふんわり, げんなり
	10	2モーラの反復した形態	ばさばさ, ばたばた, ころころ
	11	2モーラの語基が組み合わさった形態。a.は子音が同じであるが, 母音が異なっている。b.は語基それぞれの第2モーラは同じであるが, 第1モーラは異なっている。	a. がさごそ, がたごと, からころ b. どたばた, むしゃくしゃ, ぺちやくちや
	12	最初の2モーラのうちの第1モーラだけが変化した反復形	ちらほら, ちやほや, どぎまぎ
	13	まったく異なる2モーラの同士が組み合わさった形態	ぶつくさ, ちょこまか, がたびし, そそくさ
	14	7bと7cのCVCVri及びCVCVNの反復形	ばたりばたり, ぼとりぼとり, どきりどきり ばたんばたん, ぼとんぼとん, どきんどきん
	15	11, 12の変種	a. がたんごとん, からんころん, かたんことん b. がたりごとり, かたりことり, ちらりほらり
16	特殊な形態	ほうほけきょう, こけこっこう, すっからかん	

2.2 語基

本節では、日本語オノマトペにおける「語基」について議論する。ここでいうオノマトペの「語基」とは、ある様態を表すオノマトペに共通の形態素のことである。

以上の先行研究で見たように、オノマトペの分類の仕方には、いろいろな面からの分類が可能であろう。天沼(1974)、金田一(1976)はオノマトペの分類に当たって、拍の数で分けている。これらと異なって日本語オノマトペを/CV/と/CVCV/という2種類の語基に分ける研究者もいる(Hamano 1998; 田守・スコウラップ 1999; 角岡 2007など)。Hamano(1998)は、これらを‘CV roots’(piQ, piN, gui (based on CV roots))及び‘CVCV roots’(pakaQ, dokaN, gatari (based on CVCV roots))としている。田守・スコウラップ(1999)は、これらの語基を1モーラ及び2モーラとしている。角岡(2007)は、これらを音節とし、/CV/を1音節語基、/CVCV/を2音節語基と呼んでいる。いずれにしても、日本語オノマトペは2種類の語基に分類され、/CV/及び/CVCV/を抽出することは言わば伝統的な分類である。本稿でも日本語オノマトペを考察する際、/CV/及び/CVCV/という語基に分類することにする。そうすることによって、日本語オノマトペの体系性をより明確に浮き彫りすることができるからである。

本稿では、/CV/ないし/CVCV/それぞれを1モーラの語基と2モーラの語基というように

呼ぶことにする。これらの語基を「音節」とも呼ぶことができるが、ここで「モーラ」という用語を用いるには、次の理由がある。「ぱっ」/paQ/を例にして説明すると、この語は1音節になっているが、これをモーラで数えると2モーラになる。一般的には、モーラは音節より小さい単位であるため、従って、「ぱっ」という語の語基と考えられている部分「ぱ」/pa/を1モーラにすることは妥当であろう。

また、本稿では、1モーラの語基と2モーラの語基に付加する促音を/Q/, 撥音を/N/, 「り」を/ri/, 語末の「い」（「ぐい」「ふい」）を/i/, 長音を/R/のように標記する。

2.3 語基に関する諸問題

2.3.1 /i/について

本節では、日本語オノマトペを1モーラと2モーラの語基に区分するとき生じる諸問題について検討する。

最初は、2モーラの語（「ぐい」「ふい」）の第2モーラの「い」について議論する。日本語オノマトペのデータベース（1,591語）の中では、2モーラで第2モーラに「い」を持つものが以下の10語観察される。

- (1) ぐい, ずい, ちょい, つい, ひょい, ぴょい, ふい, ぷい, ぼい, わい

日本語オノマトペにおいては(1)のような語が多少見られ、これらは1モーラ/CV/という語基に「い」が付加した形態なのか、或いは2モーラなのかという問題がある。この点に関しては、先行研究における意見はわかれている。表7から窺えるように、田守・スコウラップ(1999)は「ぐい」「ふい」という語を2モーラの語基に入れているのに対し、Hamano(1989)は/gui/, /poi/, /pii/は1モーラの語基に属していると主張している。角岡(2007)もHamanoの見方であり、「い」を語基から独立したモーラであると述べている。更に、角岡(2007)は「い」を1モーラの語基に後続する時の接辞形であり、2モーラの語基に続くときには「り」という形になると主張している。つまり、「い」と「り」が相補分布をなすと指摘し、その事情を以下のように説明している。

- (2) 1音節語基に「い」が接辞されても、語基の母音が/a, e, o, u/であれば、接辞された形態も1音節を保つ。他方で語基が2音節であれば、接辞によって音節数が増えても構わない—言い換えれば、「い」ではなく「り」の方がオノマトペ標識として目立ちやすい、というような作用が働いているものと推測される。

(角岡 2007 : 85)

「ぐい」「ふい」の「い」は語基の部分であるか、それとも語基に付加した要素であるかと

いうことを確かめる方法がある。それは、「い」が語基に付加した要素であれば、他の要素（促音、撥音など）に置き換えても、同じ語基から派生形として表現している基本的な意味が保たれるというものである。例えば、「がたっ」という語の場合は、「がた」という部分が 2 モーラの語基であるということが、語末の「っ」を撥音「ん」や「り」などに置き換えることができるということから分かる。「がたん」「がたり」のように、後ろの要素が変わることによって音象徴的な意味が微妙に異なるが、基本的な「堅い物体がぶつかった結果おこる音」という意味が変わらないと言える。このように、同じく「い」の場合も確かめることができる。最初は「びょい」を考察しよう。日本語オノマトペには「びょい」という形態と「びょいびょい」という反復形がある。これらの語は「跳びあがる様子」という意味を表す。

(3) 「びょい」

Takehi, Tamori, Schourup (1996) '*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*'

【意味】 M : The manner of jumping nimbly once.

【用例】 ハイキングに行って小川を渡るのに四苦八苦していたところ、たまたま後から来た村の子供がびょいと跳び越えて行ってしまった。

この「びょい」という語の第 2 モーラの「い」が語基に付加した独立した要素であるとする、他のオノマトペの促音や撥音などに置き換えても、「びょ」という語基の意味が保たれるはずである。第 2 モーラ目を「ん」にすると、「びょん」という形態になる。「びょい」と「びょん」は微妙なニュアンスで異なっているが、基本的に「跳びあがる様子」という同じ意味を表す。

(4) 子供が {びょい／びょん} と跳び越えて行ってしまった。

(5) a. [...] 屋根から屋根へとびょいびょい (と) 跳んで、暗闇に姿を隠してしまう。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.1048)

b. [...] 屋根から屋根へとびょんびょん (と) 跳んで、暗闇に姿を隠してしまう。

この例から、「い」が撥音「ん」と同じく「びょ」という 1 モーラの語基に付加した要素であるということが言える。

次に、「つい」の場合を見る。一般的に「つい」は「一瞬のうちに行動する様子」を表す。

(6) 「つい」

Takehi, Tamori, Schourup (1996) '*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*'

【意味】 M : The manner of moving quickly or suddenly.

【用例】 ついと寄ってきて、間崎の肩に両手でつかまって顔を胸にくっつけた。

この「つい」の「い」を促音「っ」と置き換えることもできるし（「つっ」）、除外することもできる（「つ」）。

- (7) a. 彼はついと席を立てて部屋を出ていった。（飛田・浅田 2002. p.302）
- b. 彼はつっと席を立てて部屋を出ていった。
- c. 彼はつと席を立てて部屋を出ていった。

同じように、「ぐい」の「い」を促音と撥音（8）、「わいわい」の「い」を長音（9）に置き換えることが可能である。

- (8) {ぐい／ぐっ／ぐん} とドアを引く。
- (9) {わいわい／わーわー} と騒ぐ。

以上のことから、2モーラ語の第2モーラ目が「い」である場合は、その語を2モーラの語基と見なさず、第1モーラの語基に要素「い」が付加した形態と見なした方がよいと判断できる。

2.3.2 /ri/について

次に、「り」について検討する。日本語オノマトペにおいては「ぴりぴり」「きりきり」のような第2モーラ目が「り」になっている語が数多く存在する。これらの語は、2モーラの語基の反復形であるか、或いは接辞「り」が付加した1モーラ語基の反復形であるかという疑問を持つ人が少なくないと思われる。一般的には、「り」は「がちり」「ぼたり」のように2モーラの語基には付加するが、1モーラの語基には付加しないと考えられている（田守・スコウラップ 1999；角岡 2007）。つまり、「ぴりぴり」「きりきり」のような語は2モーラ語基の反復形で、その「り」を語基の一部と見なした方が自然である。このことを簡単に確かめることができる。「ぴりぴり」「きりきり」は1モーラ語基の語であれば、非反復形の場合は「ぴり」及び「きり」になるはずであろう。しかしながら、これらは非反復形で用いられる場合は「ぴりっ」「きりっ」のように促音が必要になり、「*ぴり」「*きり」だけで用いられないのである。更に、「ぴりり」「きりり」のように接辞「り」を伴うことが可能である。本稿では接辞「り」は2モーラの語基のみに付加するものであるという立場をとることにする。

以上では、1モーラ語基に「い」が付加した場合と、2モーラ語基に「り」が付加した場合を考察した。次に、これらの要素の関係について簡単に述べる。前述したように（2）では角岡（2007）が、「い」を1モーラの語基に後続する際の接辞形であり、2モーラの語基に続くときには「り」という形になり、語基のモーラ数によって相補分布していると指摘

している。しかしながら、「い」と「り」の表す意味が根本的に異なっているため、相補分布しているとは考えない方がいいと思われる。語末に付加する「り」は動作の「完了」ないし「ゆったりした感じ」という意味を表すと考えられている（田守・スコウラップ 1999；飛田良文・浅田秀子 2002 など）⁹。これと比べて「い」は「びよいと跳ぶ」「ぐいと引く」の「びよい」「ぐい」などの語の語末に付加するが、「完了」や「ゆったりした感じ」という意味を表すとはまず考えられない。このことから、「い」と「り」は相補分布しているとは見なさない方がよいと思われる。

2.3.3 /Q/について

次に、「けっけ」「しっし」のような第 1 モーラの後ろに促音「っ」が後続する形態について検討する。これらの語については、1 モーラの語基の反復形なのか、或いは 2 モーラの語基の中間に促音「っ」が挿入した形態なのかという問題がある。データベースにおいては次の語が観察された。

- (10) a. かっか, けっけ, さっさ, しっし, せっせ, とっと
b. どっか, はった, ばったばった, のっしのっし, のっそのっそ

上の (10a) は第 1 モーラと第 2 モーラが同じものであるが、(10b) は第 1 モーラと第 2 モーラが異なっているものである。最初は (10b) について述べる。例えば、「どっか」を例にして見よう。「どっか」は以下の辞書の記述から分かるように「重量のあるものが、位置を占めている様子」を表す。

(11) 「どっか」

Takehi, Tamori, Schourup (1996) '*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*'

【意味】 M : The manner of sitting heavily and occupying a large area.

【用例】 彼女は、そういうと、これまた充分すぎるほど重みの備わったおしりを、本来なら患者さんのかける椅子に、どっかとおろしたのだった。

しかし、ほぼ同じ意味を表す促音「っ」を語末に伴う「どかつ」と、「り」を伴う「どかり」という形態も見られる。「どかつ」と「どっか」は促音が第 1 モーラの後ろか、語末に続くか、また「どかり」のように「り」を伴うかということによって表す様態の印象が若干異なるが、基本的な意味は同じである。

⁹ 語末に付加する「り」は「完了」という意味を表すということについて議論したのは飛田良文・浅田秀子 (2002) である。田守・スコウラップ (1999) が、「り」は「完了」という意味と共に「ゆったりした感じ」という意味も表すと主張している。

(12) ソファに {どっか／どかり／どっか} と腰を下ろした。

(12) に示されているもの以外に「どっかり」という形態も見られる。以上のことから、「どっか」は 2 モーラの語基からなるもので、間に促音が挿入された形態であると考えerのは自然であろう。同じように (10a) の場合も解釈してもよいのであろうか。まず、「しっし」という語を観察してみよう。

(13) 「しっし」

Takehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味】 S : A hissing sound used to drive an animal away.

【用例】「女、ここはお前みたいなモンが、くるとことちやう。さっさと去ね」汚いものを追い払うように、手でしっしと追いやろうとする。

この辞書の記述から「しっし」は「小さな動物を追い払う声」という意味を表すということが分かる。「しっし」は 2 モーラ語基のものであれば、後ろに「り」がついた「*しっしり」や、「*ししり」「*ししん」のような形態があるはずであろう。しかしながら、実際にこのような形態が存在しない。そのかわりに、「しっし」が表している意味と同様な意味を表している「しっしっ」がある。

(14) 「しっしっ」

Takehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味】 S : A hissing sound used to drive an animal away.

【用例】サブがかけだして行かないのです。[...] とうとうそこにあつたぼうをひろってふりあげました。八郎君もしっしっと後をおい立てました。

「しっし」と「しっしっ」という語の間に意味的な関連性が見られる故に、これらは「し」という同じ 1 モーラの語基から派生している語であると考えられる。これらは 1 モーラの語基から成っているということは、以下の「しっ」という形態もあることから分かる。

(15) 父は虫の居所が悪い時お客さんが来ると、居間で遊んでいる僕達を、野良猫を追い払うかのように、しっと言って出て行かせることがある。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.1092)

以上のことから、「しっし」は 1 モーラ語基の不規則的な反復形であると推測する。

同じように、「けっけ」についても解説することが可能である。「けっけ」は「けっけと笑う」のように笑い声を表す。この「けっけ」は 1 モーラの語基の不規則的な反復形であ

ると分かるのは、「けっけっけっ」という形態が存在するからである。

- (16) 生体不明の生物はけっけっけっと笑って、「ご心配なく、私も、地球から来たんですから」...
(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.647)

このように本稿では、(10a) の第 1 モーラと第 2 モーラが同じであり、間に促音がある場合のものを 1 モーラ語基と見なし、(10b) の第 1 モーラと第 2 モーラが異なっていて間に促音が挿入している場合のものを 2 モーラ語基であると見なすことにする。

最後に、1 モーラ語基と 2 モーラ語基に区分できない例外的なものについて述べよう。日本語オノマトペにおいては、1 モーラ語基及び 2 モーラ語基に属しない形態が見られる。これらを (17) にまとめる。

- (17) あっけらかん、こけこっこー、ぐーすか、ちんちろりん、ぴーちく、ぴーちくぴーちく、ぴーちくばーちく

本稿では、(17) のオノマトペを例外的なものとして見なすことにする。これらのオノマトペの場合は、語基を抽出することが困難であるからである。

2.4 1 モーラと 2 モーラの語基の割合

以上では、日本語オノマトペにおける 1 モーラ/CV/ないし 2 モーラ/CVCV/語基に関する諸問題について検討した。本節では、これらの語基は下位類の中ではどのように出現するかを見る。

日本語オノマトペのデータベース (1,591 語) を 1 モーラ/CV/ないし 2 モーラ/CVCV/の語基に分類して考察した結果、表 8 のような結果が得られた。この調査は表 4 に示されている結果をもとに行ったものである。つまり、下位類それぞれの合計の数字は「単義語」「単一多義語」「多義混成語」からなっているということである。

表 8 日本語オノマトペの 1 モーラと 2 モーラの語基の割合

		擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
語 基	1 モーラ	115 (80%)	158 (24%)	149 (14%)	32 (25%)
	2 モーラ	26 (18%)	488 (74%)	871 (84%)	93 (72%)
	例外	3 (2%)	13 (2%)	20 (2%)	4 (3%)
合計		144	659	1,040	129

この結果から、次のことが分かる。まず、日本語オノマトペにおいては、2 モーラ/CVCV/語基のほうが 1 モーラ/CV/よりはるかに多いということである。もう一つは、下位類の中

では「擬音語」「擬態語」「擬情語」は2モーラ語基の語数が7割以上にのぼって高い割合を占めているのに対し、「擬声語」は逆に1モーラの語基の語数は8割、2モーラはおよそ2割であるということである。このことから、「擬声語」は「あーん」「かー」「きゃー」「ふっ」「ははは」のように、比較的単純な構造を持っているということが分かる。それは、擬声語が人間と動物の原始的な発声をうつしていることの反映からであろう。

3. カザフ語オノマトペの語基

3.1 先行研究

以下では、カザフ語オノマトペの語基の型についていくつかの先行研究を紹介する。

3.1.1 Сарыбаев (1970)

カザフ語オノマトペを形態的に分析した研究者の一人は Сарыбаев (1970) である。彼は、カザフ語オノマトペを1音節のものと2音節のものというように2区分している。Сарыбаев (1970) によるオノマトペの分類は表9のようなもので、7つの型である。ここでは、/C/は子音(破裂音・摩擦音)、/V/は母音、/L/は共鳴音を標示している。

表9 Сарыбаев (1970)によるオノマトペの型の分類

1音節	1	CVLC, 4つの音素からなるもので, 3つ目は共鳴音 p /r/, л /l/, м /m/, ң /ng/ である	Қарқ-қарқ /qarq-qarq/ Былш-былш /bilsh-bilsh/ Дүңк-дүңк /düngk-düngk/
	2	CVL, 3つの音素からなるもので, 語尾子音は共鳴音である	Сар-сар /sar-sar/ Зың-зың /zing-zing/
	3	CVC	Топ-топ /top-top/ Пыс-пыс /pis-pis/
2音節	4	CVLCVL, 6つの音素からなり, 各音節の語尾子音は共鳴音である	Салдыр-салдыр /saldır-saldır/ Бүрсен-бүрсен /bürseng-bürseng/
	5	CVLVL, 5つの音素からなり, 各音節の語尾子音は共鳴音である	Бұлаң-бұлаң /bulang-bulang/ Шымыр-шымыр /shımır-shımır/
	6	CVCVL, 5つの音素からなり, 第2音節の語尾子音は共鳴音である	Сыбыр-сыбыр /sibir-sibir/ Қақаң-қақаң /qaqang-qaqang/
	7	CVCCVL, 6つの音素からなり, 第2音節の語尾子音は共鳴音である	Сыбдыр-сыбдыр /sıbir-sıbir/ Мықшың-мықшың /mıqshing-mıqshing/

3.1.2 Катембаева (1974)

Катембаева (1974) はオノマトペの型を分類に当たって語基によって分けている。彼女

は、カザフ語オノマトペから次の9つの語基を抽出している。表10では、/C/は子音（破裂音・摩擦音）、/V/は母音、/L/は共鳴音を表している。

表10 Катембаева(1974)によるオノマトペの型の分類

1	VL	Бір /ɪr/, ар /ar/, ың /ɪŋg/
2	VC	Біз /ɪz/, ыс /ɪs/, ық /ɪq/
3	LVL	Маң /mang/, лай /lau/
4	LVC	Мыж-мыж /mɪzh-mɪzh/, лүп /lüp/
5	CVL	Сың /sing/, дың /dɪŋg/, быр /bɪr/
6	CVC	Бат /bat/, тыж /tɪzh/, пыш /pɪsh/
7	VLC	Ілп /ɪlp/, үлп /ülp/, арс /ars/
8	LVLC	Маңқ /mangq/, мөлт /mölt/
9	CVLC	Тарс /tars/, жалп /zhalp/, зырк /zɪrɔq/

3.1.3 Кайдаров(1986)

Кайдаров(1986)は、主にカザフ語一般の語基について研究をしているが、カザフ語オノマトペの語基にも触れている。彼は、カザフ語オノマトペを次の6つの語基にまとめている。表11では、/Г/は母音、/C/は子音を表示している。

表11 Кайдаров(1986)によるオノマトペの型の分類

1	Г	У /u/
2	ГC	Бір /ɪr/, ыс /ɪs/, ың /ɪŋg/, ық /ɪq/
3	CG	Ду /du/, зу /zu/, ту /tu/, су /su/
4	ГCC	Арп /arp/, әүп /äüp/, елп /elp/, еңк /engk/, ылп /ɪlp/
5	CGC	Бар /bar/, быр /bɪr/, дыз /dɪz/, пар /par/, тыр /tɪr/
6	CGCC	Гүрс /gürs/, далп /dalp/, дөңк /döŋk/, тыңк /tɪŋq/, күмп /kümp/

3.2 語基

以上の先行研究で見たように、Сарыбаев(1970)はカザフ語オノマトペを1音節と2音節のものに分類し、語基そのものを抽出していない。これと異なってКатембаева(1974)、Кайдаров(1986)は、カザフ語オノマトペ語彙から語基を抽出している。

Катембаева(1974)はカザフ語オノマトペの語基を9つの型に分類している。そしてこれらの型は子音の方が/C/（破裂音・摩擦音）と/L/（共鳴音）に分けられているが、これら

を分けずに1つの子音として観察すると、次の4つの型ができる。*/VC/* (*/VL/*, */VC/*) ; */VCC/* (*/VLC/*) ; */CVC/* (*/LVL/*, */LVC/*, */CVL/*, */CVC/*) ; */CVCC/* (*/LVLC/*, */CVLC/*) である。Кайдаров (1986) も、この4つの型を認めて、更に*/V/*及び*/CV/*という型を挙げている。このように、Катембаева (1974) と Кайдаров (1986) が挙げている語基の型を合わせると、*/V/*, */CV/*, */VC/*, */VCC/*, */CVC/*, */CVCC/*という6つの型が得られる。しかしながら、本研究で扱っているデータベース (1,242語) を考察した結果、カザフ語オノマトペにおいては*/CVC/*と*/CVCC/*型のものが圧倒的に多く存在するということが明らかになった。*/CVC/*は444語 (34%)、*/CVCC/*は694語 (53%) になっている。これらの比率を合わせると87%になる。他は次の通りである。*/VCC/*は56語 (4%)、*/VC/*は31語 (2%)、*/CV/*は11語 (0.8%)、*/V/*は1語 (0.1%) である¹⁰。カザフ語オノマトペにおいては*/CVC/*及び*/CVCC/*語基が大半をなしているため、これらに焦点を当てて考察をする。

3.3 語基に関する諸問題

3.3.1 бүк /bük/及び бүкш /büksh/について

本節では、カザフ語オノマトペから語基を抽出する際起こる諸問題について論じる。前節で述べたように、カザフ語オノマトペにおいては*/CVC/*及び*/CVCC/*型の語基は大半を成している。これらの語基をオノマトペから抽出することは比較的簡単である。例えば、カザフ語オノマトペにおいては、語基そのものからなるものがあれば、語末に接尾辞が付加したものもある。*/CVC/*型の語基からなっている *быр* /bır/ 及び *дыз* /dız/, または*/CVCC/*型の語基からなっている *дөңк* /döngk/ 及び *тыңк* /tɪngq/ は前者で、*/CVC/*語基に接尾辞 - *аң* /aŋ/ が付いたと考えられる *бұлаң* /bulang/ 及び*/CVCC/*語基に接尾辞 - *ыр* /ır/ が付いたと考えられる *салдыр* /saldır/ という語は後者である。語基そのまま使用されても、或いは、接尾辞が付加して使用されても、これらの*/CVC/*と*/CVCC/*語基は極めて体系的である。例えば、*/CVC/*語基の場合は、Хусаинов (1988) なども指摘しているように、語頭子音 (*/CVC/*) では閉鎖音と摩擦音しか起こらず、語尾子音 (*/CVC/*) では閉鎖音と共鳴音が多い。また、*/CVCC/*語基の場合は、語頭子音及び語尾子音では閉鎖音と摩擦音だけが起こり、語中子音 (*/CVCC/*) では共鳴音しか起こらないということである。*/CVCC/*の *дөңк* /döngk/ 及び *далп* /dalp/ の語中子音の位置には *ң* /ŋ/ と *л* /l/ という共鳴音が現れているのはそれである。しかしながら、カザフ語オノマトペにおいては *бүкшең* /büksheng/, *бақшаң* /baqshang/ のような形態も見られ、これらの場合は、語基と考えられる *бүкш* /büksh/, *бақш* /baqsh/ の部分の語中子音では *к* /k/ (*бүкш* /büksh/) と *қ* /q/ (*бақш* /baqsh/) という閉鎖音が起こっている。*/CVCC/*語基の語中子音では通常に共鳴音が起こるということを基準にして考えれば、*бүкш* /büksh/ と *бақш* /baqsh/ の語基は例外的なものであるという解釈をしなければいけな

¹⁰ これらの語の比率を合わせると100%にならないのは、6つの型の語基に属しない例外的な語も存在するからである。例外的な語の数は77語で、6%である。

くなる。しかし、この解釈でよいのか。つまり、ここでは問題になっているのは、бүкшең /büksheng/, бақшаң /baqshang/を、/CVCC/型の語基 (бүкш /büksh/, бақш /baqsh/) に接尾辞 - ең /eng/, - аң /ang/が付加した形態であるか、或いは、/CVC/語基 (бүк /bük/, бақ /baq/) に接尾辞 - шең /sheng/及び - шаң /shang/が付加したかという点である。同じような現象が見られる語を以下の (18) にまとめる。

- (18) бақжаң /baqzhang/, бақшаң /baqshang/, бадраң /badrang/, бағжаң /baghzhang/, бажраң /bazhrang/, бүкшең /büksheng/, кекжең /kekzheng/, қақшаң /qaqshang/, мықшың /mıqshing/, мықшаң /mıqshang/, қаздаң /qazdang/, сатпақ /satpaq/, сустаң /sustang/, сыбдыр /sıbdır/, сыпсың /sıpsıng/, тосраң /torsang/, тұштаң /tushtang/, тұшталақ /tushtalaq/, тұштақ /tushtaq/, шоштақ /shoshtaq/, шоштаң /shoshtang/, шөпшең /shöpsheng/, шөпшің /shöpshing/, шыбжаң /shıbzhang/, шыбжың /shıbzhing/

まず、бүкшең /büksheng/という語を見よう。以下の辞書の記述から分かるように、この語は「背を曲げて歩く様子」という意味と、「人の前でお辞儀をして、頭を下げる様子」という意味を表す。

- (19) бүкшең /büksheng/

Сыздыкова, Хусаин (2001) ‘*Казахско – русский словарь*’

【意味①】Горбиться; делать что-л. Или двигаться согнувшимся. 「背を曲げて歩く様子」

【意味②】перен. Угодничать, подобострастничать. 「比喩的に、人の前でお辞儀をして、頭を下げる様子」

бүкшең /büksheng/は/CVC/の бүк /bük/という語基からなっているか、それとも/CVCC/の бүкш /büksh/という語基からなっているかということを確認するいくつかの方法がある。第一に、カザフ語の語基を研究した Кайдаров (1986) が ‘*Словарь односложных корней - основ в казахском языке*’ では、бүк /bük/という語基を挙げて以下のように解釈している。

- (20) бүк /bük/

Кайдаров (1986) ‘*Словарь односложных корней - основ в казахском языке*’

【意味】синкр. Положение альчика (выпуклой стороной вверх)// сгибать, подгибать, загибать, подвернуть; 「骨の盛り上がる部分をいう//曲げる、曲がる」

この辞書記述から窺えるように、カザフ語においては бүк /bük/ という語基が存在し、基本的には「曲げる」という意味を表すということである。бүкш /büksh/ という語基は観察されない。

第二に、бүкшең /büksheng/ に近似している бүгежең /bügezhenг/ 及び бүгежек /bügezhek/ という異形のオノマトペが存在している。これらの語は微妙なニュアンスで異なっているが、「背を曲げる様子」という意味を表すことで共通している。従って、3 つの語とも同じ語基から派生していると推測できる。

(21) бүгежең /bügezhenг/

Сыздыкова, Хусаин (2001) ‘*Казахско – русский словарь*’

【意味】 то же, что и бүгежек; ~қақ- то же, что бүгежек қақ- 「бүгежек /bügezhek/ と同じ意味を表す語」

(22) бүгежек /bügezhek/

Сыздыкова, Хусаин (2001) ‘*Казахско – русский словарь*’

【意味】 трусливый; нерешительный; ~қақ – а) съежиться от холода. б) дрожать от страха. 「寒さや恐怖などで背を曲げて、体を小さくすること」

(21), (22) の бүгежең /bügezhenг/ と бүгежек /bügezhek/ の場合は、語基が明らかであり、CVC 型の бүг /büg/ になっている。この бүг /büg/ は (19) の бүкшең /büksheng/ の бүк /bük/ と同じ語基であると推測する。бүг /büg/ と бүк /bük/ という語基は音節末の子音が有声音の г /g/ か、無声音 к /k/ かで異なっているが、同じ語基であると考えられる。カザフ語においては、母音（子音）調和現象があり、бүгежең /bügzhenг/, бүгежек /bügzhek/ の場合は、бүк /bük/ の無声閉鎖音 к /k/ が後続する有聲摩擦音的 ж /zh/ に同化され、бүг /büg/ という語基になったと推測する。

第三に、カザフ語においては、オノマトペの語基に多様な接尾辞が付加することによって、一般語彙となった派生語が複数存在する。この派生語の語基と考えられる部分は例えば/CVC/の бүк /bük/ である場合は、бүкшең /büksheng/ の語基は、бүкш /büksh/ という部分ではなくて бүк /bük/ という部分であると考えられる。実際に、カザフ語には бүкір /bükir/ < бүк /bük/ + ір /ir/ 「せむし」 や бүкте /bükte/ < бүк /bük/ + те /te/ 「曲げる」 などの語が見られ、これらは бүк /bük/ という語基から派生した語であると分かる。このことから、бүкшең /büksheng/ の語基は/CVC/型の бүк /bük/ という部分であると判断する。

бүкшең /büksheng/ または бүгежең /bügzhenг/, бүгежек /bügzhek/ の派生過程を以下のように示すことができる。

(23) а. бүкшең /büksheng/ < бүк + ш + ең /bük + sh + eng/

b. бүгежең /bügzheng/ <бүг+еж+ең /büg+ezh+eng/

c. бүгежек /bügzhkek/ <бүг+еж+ек /büg+ezh+ek/

上の (23a) では, шең /sheng/ という部分は +ш+ең /+sh+eng/ のように二つの要素に分けられている。шең /sheng/ などを二つに分けた理由は, カザフ語においては шең /sheng/ 及び ежең /ezheng/ という接尾辞が存在しないからである。

次に, бақшаң /baqshang/, бағжаң /baghzhang/ という語について論じる。これらの語それぞれは, 語中に қш /qsh/ か ғж /ghzh/ か という子音を持つことで異なっているが, 近似した意味を表す。

(24) бақшаң /baqshang/

Сыздыкова, Хусаин (2001) ‘*Казахско – русский словарь*’

【意味】 уставляться, таращить глаза; вытаращив глаза, таращиться уставиться на кого-что-л. 「目を大きくして (丸めて), じーっと見つめる様子」

(25) бағжаң /baghzhang/

Сыздыкова, Хусаин (2001) ‘*Казахско – русский словарь*’

【意味】 смотреть с испугом, удивлением, недоумением. 「恐怖感を持って, 驚いたように見つめる様子」

この辞書の記述から бақшаң /baqshang/, бағжаң /baghzhang/ は「驚いたようにじーっと見つめる様子」を表すことが分かる。これについては Кайдаров (1986) では, 「見つめる」という意味を持つ бақ /baq/ という語基が観察される。

(26) бақ /baq/

Кайдаров (1986) ‘*Словарь односложных корней - основ в казахском языке*’

【意味①】 смотреть, глядеть, наблюдать; 「見つめる, 眺める」

【意味②】 пасти, присматривать, ухаживать (за скотом); перен. Воспитывать, вырачивать и др. 「養う, 飼う」

ここでは, 意味的な関連性が強いことから бақшаң /baqshang/ と бағжаң /baghzhang/ は бақ /baq/ という /CVC/ 語基からなっていると推測する。бағжаң /baghzhang/ の場合は, бақ /baq/ という音節末の無声閉鎖音の қ /q/ は後続する有声摩擦音の ж /zh/ に同化され, бағ /bagh/ となったと考えられる。бақшаң /baqshang/ と бағжаң /baghzhang/ の派生過程を以下のよう示すことができる。

- (27) a. бақшаң /baqshang/ < бақ+ш+аң /baq+sh+ang/
 b. бағжаң /baghzhang/ < бағ+ж+аң /bagh+zh+ang/

以上のことから、(18) のオノマトペを/CVCC/語基ではなく、/CVC/の語基から派生した語であるとする。

3.3.2 「CVC+V」「CVCC+V」について

次に、「CVC+V」「CVCC+V」という形態について述べる。カザフ語オノマトペにおいては дода-дода /doda-doda/, пара-пара /para-para/のような反復形だけで用いられるオノマトペがある。これらのものは通常の形態と異なって/CVC/及び/CVCC/語基に-a /a/などの母音からなる要素が付加した形態をしている。

- (28) a. 「CVC+V」
 дала-дала /dala-dala/, дода-дода /doda-doda/, пара-пара /para-para/,
 пәре-пәре /päre-päre/, сүме-сүме /süme-süme/, қиқы-жиқы /qi:qi-zhi:qi/,
 қиқы-сиқы /qi:qi-si:qi/
 b. 「CVCC+V」
 далба-далба /dalba-dalba/, жұлма-жұлма /zhulma-zhulma/, мылжа-мылжа
 /milzha-milzha/

上の(28a)は/CVC/, (28b)は/CVCC/という語基から成ると考えられるものである。このようなオノマトペを/CVCV/ないし/CVCCV/と見なさず、/CVC/及び/CVCC/語基に母音からなる要素が付加した形態と見るのが妥当である。なぜならば、例えば(28b)の далба-далба /dalba-dalba/の語基と考えられる далб /dalb/から-аң /ang/という接尾辞によって派生した далбаң-далбаң /dalbang-dalbang/という語が存在するからである。ここの далба-далба /dalba-dalba/は「きちんとしていない、めちゃくちゃの状態」を表すが、далбаң-далбаң /dalbang-dalbang/は「きちんとしていない、おかしように動く様子」を表す。

最後に、不規則的な反復形について述べる。カザフ語オノマトペにおいては、(29)に示したようなオノマトペが多少観察される。

- (29) a. апыр-топыр /apır-topır/, апыр-тапыр /apır-tapır/, апыр-тұпыр /apır-tupır/,
 опыр-топыр /opır-topır/, апыл-тапыл /apıl-tapıl/, апыл-құпыл /apıl-қupıl/,
 апыраң-тапыраң /apırang-tapırang/, апырақ-тапырақ /apıraq-tapıraq/,
 опай-топай /opaj-topaj/, ығы-жығы /ıghı-zhıghı/, әлем-жәлем /älem-zhälem/,
 ұмар-жұмар /umar-zhumar/

- b. алқам-салқам /alqam-salqam/, ойпаң-тойпаң /ojrang-tojrang/, олпы-солпы /olpı-solpı/, олбыр-солбыр /olbır-solbır/, ұйқы-тұйқы /ujqı-tujqı/, ұйпа-тұйпа /ujpa-tujpa/, ұйпа-жұйпа /ujpa-zhujpa/, үйме-жүйме /üjme-zhüjme/

(29a) の語は、前半部は語基/VC/, 後半部は語基/CVC/からなっているのに対し、(29b) の語は、前半部は語基/VCC/, 後半部は語基/CVCC/からなっている。これらは、前半部の語基の語頭子音が脱落している形態であると推測する。なぜならば、апыр-топыр /apır-topır/や ойпаң-тойпаң /ojrang-tojrang/の場合は、それぞれの後半部の語基 (/CVC/, /CVCC/) からなる топыр-топыр /topır-topır/ないし тойпаң-тойпаң /tojrang-tojrang/という語が存在するのに対し、前半部の語基 (/VC/, /VCC/) からなる *апыр-апыр /apır-apır/ 及び *ойпаң-ойпаң /ojrang-ojrang/という形態が存在しないからである。

3.4 語基の割合

以上で述べたように、カザフ語オノマトペには 6 つの型の語基が見られる。本節では、これらの語基が下位類の中ではどのように出現するかを見る。

カザフ語オノマトペのデータベース (1,242) を考察した結果、表 12 のような結果が得られた。この考察は表 4 に示されている結果をもとに行ったものである。つまり、下位類それぞれの合計の数字は「単義語」「単一多義語」「多義混成語」からなっているということである。

表 12 カザフ語オノマトペの語基の割合

		擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
語 基	V			1 (0.1%)	
	CV	2 (2%)	5 (1%)	4 (0.5%)	
	VC	3 (3%)	9 (2%)	19 (2%)	
	VCC	5 (5%)		51 (6%)	
	CVC	35 (33%)	158 (44%)	257 (31%)	6 (60%)
	CVCC	59 (55%)	193 (52%)	450 (54%)	4 (40%)
	例外	2 (2%)	4 (1%)	47 (6%)	
合計		106	369	829	10

この結果から次のことが言える。カザフ語オノマトペにおける 6 つの語基の中では、/CVC/ と /CVCC/ が圧倒的に多い。また、擬情語以外に、下位類の中では /CVC/ と /CVCC/ 語基の比率が比較的同様である。

第5章 オノマトペの構成要素

1. はじめに

前章では、日本語とカザフ語のオノマトペにおける語基について述べた。本章では、オノマトペにおける構成要素 (constituent) について検討する。ここでいうオノマトペの「構成要素」とは、オノマトペの特徴とされている促音/Q/, 撥音/N/, /ri/, 長音化/R/などのことである。以下では、両言語のオノマトペの派生過程における構成要素を考察し、それが両言語下位類のオノマトペにどのように出現しているのかを明らかにする。最後に、両言語の広義擬音語と広義擬態語は形態的な面から見て大きく異なっているということを示す。

2. オノマトペの構成要素

本節では、オノマトペの派生過程における構成要素について述べる。ここでは、「派生の過程」とは、促音/Q/, 撥音/N/などの「構成要素」を語基に付け加えたり語基を繰り返したりすることなどを指している。また、「構成要素」とはオノマトペ語彙に規則的に見られる促音/Q/, 撥音/N/, /ri/, 長音/R/などの形態素的特徴を示すものとする。

前章で見たように、日本語オノマトペは1モーラ/CV/と2モーラ/CVCV/の語基から成っている。しかしながら、特に日本語オノマトペの場合は、語基そのものからなるオノマトペは非常に稀である¹¹。次の(1)にも示されているように、日本語オノマトペの語基は通常に促音/Q/, 撥音/N/, /ri/, (長音/R/), 反復を伴う。

- (1) a. 「ころ」: ころっ, ころん, ころり, ころころ
- b. 「かた」: かたっ, かたん, かたり, かたかた
- c. 「ばた」: ばたっ, ばたん, ばたり, ばたばた

これらの要素が、オノマトペ語彙の特有の特徴とされることから「オノマトペ標識」とよく呼ばれる (Waida 1984 ; Hamano 1986 ; 田守・スコウラップ 1999 ; 角岡 2007 など)。この「オノマトペ標識」(onomatopoeic marker) という用語は、Waida (1984) が最初に用いたものと考えられる。Waida (1984) の定義では、促音/Q/・撥音/N/・/ri/・母音の長音化/R/・反復がオノマトペ標識に含まれている。Waida (1984) 以来、このオノマトペ標識という用語は多くの研究者に扱われてきた (Hamano 1986 ; 田守・スコウラップ 1999 ;

¹¹ 日本語オノマトペにおいては、語基そのまま用いられるオノマトペは極めて少ない。通常に、「つと立った」「ふと思出す」の「つ」と「ふ」のみが指摘される (田守・スコウラップ 1999 など)。

角岡 2007 など)。角岡 (2007) は、日本語オノマトペに見られる有声化・硬口蓋音化・摩擦音／破裂音交替という弁別素性レベルでの過程もオノマトペ標識として見なしている。

しかしながら、筆者は促音/Q/・撥音/N/・/ri/・母音の長音化/R/・反復が日本語オノマトペの特徴であるということを確認しているが、これらを「オノマトペ標識」(onomatopoeic marker) という用語で呼ぶことと賛成ではない。一般的には、「標識」(marker) という用語は、生成文法などでも使われ、語や文に付いたりそれを変更したりすることによって文法的機能を示すものをいう。形態論ではあまり扱わない用語でもある。本稿では、日本語オノマトペの語基は、それに促音/Q/・撥音/N/・/ri/・長音/R/・反復という要素が付加することによって、ある一定の派生過程を経てから語として使用できるようになる故に、促音/Q/・撥音/N/・/ri/・長音/R/・反復を「構成要素」¹²と呼ぶことにする。つまり、促音/Q/・撥音/N/・/ri/・長音/R/・反復は、「語」という構造体に属し、その語を構成する要素でもあるというふうに考えると、「標識」という用語よりは「構成要素」という用語の方がより適切になる。

2.1 日本語オノマトペの構成要素

日本語オノマトペにおいては、構成要素と考えられる要素には促音/Q/・撥音/N/・/ri/・/i/・長音/R/・反復があるが、これらを日本語オノマトペの特徴として見なしてもよいのかについて以下で簡単に述べる。

まず、促音/Q/と撥音/N/について検討する。促音と撥音は「ころっ」「かたん」のように語末に起こることができるし、「ぼったり」「ぼんやり」のように語中にも起こることもできる。ここでは、これらの語末と語中に起こる促音と撥音を同じくオノマトペの特徴として見なしてもいいのかという問題が生じる。最初は、促音を見よう。

オノマトペ語彙においては、語末に起こる促音は通常の現象であり、「瞬間性」「スピード感」「急な終わり方」といった意味を表すと考えられている (Kadooka 1995 ; Hamano 1998 ; 田守・スコウラップ 1999 など)。しかしながら、一般語彙の場合は、促音は「*人っ」「*赤いっ」「*食べるっ」から分かるように語末に起こらない。そういう意味でオノマトペの語末に起こる促音をオノマトペだけの特徴と見なしてもよい。しかし、語中に起こる促音は必ずしもオノマトペの特徴であるとは言えない。なぜならば、それは一般語彙にも見られるからである。日本語オノマトペの語中に挿入される促音は、「強調」を表すと考えられている。例えば、Hamano (1998 : 34) は/piQtari/, /giQsiri/などの例を挙げ、語中に現われる促音を“intensifying infix”と名付けている。この種の促音は「ばっかみたい」「とっつも素直」「すっごーい」のようにオノマトペ以外の一般語彙にも「強調」として現われることから、必ずしもオノマトペ独特の特徴ではないと考えられている (田守・スコ

12 「構成要素」の定義については、『現代言語学辞典』に参照されたい。『現代言語学辞典』による定義は次のようなものである。「構造体 (CONSTRUCTION) を構成する要素。構成要素の最も小さいものは、語 (WORD) または形態素 (MORPHEME) といってよい。」

ウラップ 1999)。

次に、撥音を見よう。促音と同じく撥音にもオノマトペの語末に起こるものと語中に挿入されるものがある。オノマトペの語末に起こる撥音は「共鳴」¹³といった意味を表すとよく指摘されている(田守・スコウラップ 1999)。しかしながら、一般語彙においては、「共鳴」などの音象徴的な意味を表す撥音は起こらないため(「*人ん」「*赤いん」「*食べるん」)、語末の撥音はオノマトペの独特な特徴にしてもよいだろう。ここでは、語中に起こる撥音については同じく言えるであろうか。これについては、田守・スコウラップ(1999: 29)は、撥音がオノマトペの以外の語彙では、漢語(「銀行」「反対」「困難」など)に現われ、また、和語では「遊びて」→「遊んで」、「飲みて」→「飲んで」などの、いわゆる撥音便に見られ、従って、撥音自体を日本語のオノマトペの特徴として見なすことができると述べている。また、促音と同じように撥音は、「ま+まる」→「まんまる」、「とがり」→「とんがり」、「ぶんなげる」のようにオノマトペ以外の一般語彙にも「強調」として現われることから、オノマトペ独特の特徴ではないと考えられる。

次に、日本語オノマトペにおける/ri/と/i/について述べる。上記したように、これらはある音象徴的な意味を表し、/ri/は「ころり」「ばたり」のように 2 モーラ語基、/i/は「つい」「びょい」のように 1 モーラ語基のみに付加する。これらは語基の語末に現れる用法しかない。このような/ri/と/i/は一般語彙には見られないため、これらをオノマトペだけの特徴であると認定しても誤りが無い。

次は母音の長音化/R/である。長音化は、「かーかー」「きやーつ」のようにオノマトペ語彙に見られるが、「コンピュータ」「すっごーい」のように一般語彙にも通常に見られる現象である。しかしながら、オノマトペと一般語彙との長音化の間には意味の面から見て大きな違いがある。オノマトペ語彙における長音化は、「重いドアが {ぎっ/ぎーっ} と音を立てて開いた」から見られるように、物理的に長い音や声・様子を描写するのに用いられる。このようなオノマトペの長音化は一般語彙に見られる長音化とは意味的に異なっているため、オノマトペの特徴と見なすことができる。

最後は反復である。オノマトペにおける反復はよく一般語彙と区別されているオノマトペの特徴の一つとして指摘されている(田守・スコウラップ 1999, 角岡 2007 など)。一方、反復は「国々」「人々」「黒々」「赤々」のように一般語彙にも見られることから、反復自体はオノマトペの特有のパターンではないという人がいるかもしれない。一般語彙とオノマトペの反復は次のように異なっている。例えば「ゴルフの球がころころと転がった」の「ころころ」は反復の例であり、「ころ」という 2 モーラ語基の反復形である。ここでは、「ころころ」はゴルフの球が転がる様子を表し、その動作が一回の動作ではなく、少なくとも二回の繰り返しが前提とされる。このように、あるオノマトペの語基の反復によって、音

¹³ Hamano (1998) は、語末の撥音が「共鳴」を表すと述べ、また、「Namida-no tubu-ga potaN-to tukue-no ue-ni otita.」という例を挙げながら撥音が柔軟性 (flexibility) ないし弾力性 (elasticity) を表すこともあると強調している。

や動作の「繰り返し」ないし「連続」という意味が表されると考えられている（田守・スコウラップ 1999）。しかし、一般語彙では、名詞の「国」や「人」が反復されると「くにぐに」と「ひとびと」、形容詞の「くろい」の語幹「くろ」が反復されると「くろぐろ」となる。ここでは、名詞の反復は「複数」、形容詞の反復は「黒い」という様態の「強調」を表すとされている（田守・スコウラップ 1999 : 30）。このように、一般語彙の反復の意味は「複数」ないし「強調」であるのに対し、オノマトペの反復は、音や動作の「繰り返し」ないし「連続」を表す点で両者が異なっている。

更に、田守・スコウラップ（1999）が指摘しているように、一般語彙では、反復形は /kuni-guni/, /hito-bito/, /kuro-guro/ のように、連濁を受けるが、オノマトペの場合は /ha-ha-ha/, /koro-koro/ のように濁音を受けない¹⁴。

もう一つの大きな違いとして繰り返しの回数の相違点が挙げられる。一般語彙は、「人々」「山々」などのように、一回のみの反復が可能であるのに対し、オノマトペ語彙はそれ以上の反復した形態が可能である。例えば「ころころころっと転がった」「だだだだだっという音がした」などがそれである。

2.2 カザフ語オノマトペの構成要素

本節では、カザフ語オノマトペの構成要素と考えられる接辞「閉鎖音」-/q/・/k/¹⁵、「鼻音」-/ŋg/, 「ふるえ音」-/r/, 「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/, 「鼻音」-/l+ŋg/, 反復を、オノマトペの特徴として見なしてもよいのかについて述べる¹⁶。

最初は、接辞「閉鎖音」-/q/・/k/, 「鼻音」-/ŋg/, 「ふるえ音」-/r/ について検討する。これらの接辞は、жалтақ /zhaltaq/, бортаң /bortang/, дабыр /dabır/ のように、オノマトペの語基の後ろに付いて接尾辞としてのみ扱われる。しかしながら、接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/ の場合は、同じような接尾辞は、一般語彙にも見られる。例えば、接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/ は, ұшақ /ushaq/ 「飛行機」（ұш /ush/ 「飛ぶ」+ ақ /aq/）, жабық /zhabıq/ 「ゲルの上の部分」（жаб /zhab/ 「閉める」+ ық /ıq/）のように名詞に観察される。しかしながら、オノマトペ語彙に見られる接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/ と一般語彙に見られる接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/ の間には意味の面から見て大きな違いがある。オノマトペ語彙に見られる接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/ は、「急な終わり方」や「スピード感」などの音象徴的な意味を表すのに対し、一般語彙に見られる接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/ は動詞から名詞を作る働きだけを持つ。このように両者は異

¹⁴ 角岡（2003）は、濁音を受ける反復形として「さめざめ」と「ちりぢり」を挙げ、これらはオノマトペ的なものであるが、語源を探ると、前者の「さめ」という語基は名詞の「雨」、または、後者の「ちり」という語基は動詞の「散る」と強く関連させている説を取り上げている。

¹⁵ 接尾辞の「閉鎖音」-q/・k/ は、母音調和で二つに分けられているが、本稿ではそれを一つの接尾辞としてみなす。

¹⁶ カザフ語のオノマトペに付く接尾辞は -q/・k/ （-aq /aq/, -ek /ek/, -ық /ıq/, -ік /ik/）, -ŋg/ （-ың /ıŋg/, -ің /iŋg/, -аң /aŋg/, -ең /eŋg/）, -p/r/ （-ыр /ır/, -ір /ir/）それぞれは母音調和によっていくつかの異形を持っているが、以下それを簡単に「閉鎖音」-q/・k/, 「鼻音」-ŋg/, 「ふるえ音」-p/r/ と呼ぶことにする。

なっている故に、オノマトペに用いられる接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/を、オノマトペの特徴と見なすことができる。接尾辞「鼻音」-/ng/, 「ふるえ音」-/r/の場合は、両者ともオノマトペ語彙においてのみに用いられる接尾辞であり、一般語彙には観察されない。

次は接辞「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/及び「鼻音」-/l+ng/である。これらのものは、接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/, 「鼻音」-/ng/の複雑化された形態であると考えられる。接辞「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/及び「鼻音」-/l+ng/は、**ыржалақ** /ırzhalaq/, **далбалаң** /dalbalang/のように語基の後ろに付加する。これらは、一般語彙に見られない接尾辞であるため、カザフ語オノマトペの特有の特徴であると言ってよいだろう。

最後は反復である。前節で既に触れたように、オノマトペにおける反復はよく一般語彙と区別されてオノマトペの特徴の一つとして指摘される。カザフ語オノマトペの反復の場合も、一般語彙と異なる点としては、意味の相違点（オノマトペの反復は「繰り返し」「継続」を表すのに対して、一般語彙の反復は「複数」「強調」を表す）と、一回以上の反復した形態の許容（**қақ-қақ-қақ-қақ** /qaq-qaq-qaq-qaq/など）が挙げられる。

更に、カザフ語の反復形のオノマトペと反復形の一般語彙との大きな相違点としては、母音・子音交換の違いが挙げられる。オノマトペの反復の場合は、**салп-сүлп** /salp-sulp/で見られるように、第1語基の母音 a /a/が第2語基の母音 ʏ /u/に交換されることがある。また、**күлдір-гүлдір** /küldir-güldir/のように、第1語基の無声閉鎖音 к /k/が第2語基の有声閉鎖音 г /g/などと交換される場合も多い。一般語彙の反復の場合は、このような現象が観察されない。

もう一つの特徴としては次のことが紹介できる。オノマトペの反復形の場合は、**гу де гу** /gu de gu/と **дың да дың** /dıng da dıng/から分かるように、繰り返される語基の間に **де** /de/ないし **да** /da/という要素が挿入されることがある。これは一般語彙の反復には見られない現象である。

3. 派生過程

3.1 日本語オノマトペの派生過程

上記したように、日本語オノマトペは語基そのままを用いることがほとんどできず、ほぼ必ず促音・撥音などを伴う。例えば、オノマトペには1モーラの「堅い物体・金属質のものなどが打ち当たるときの音」を表す「か」という語基が存在し、それは語基のまま「*か」という音がした」のように用いられないのは通常である。「かつという音がした」のように語末に促音を持ったり、「かんという音がした」のように撥音を持ったりする。つまり、日本語オノマトペの語基は、語基のまま用いられず、促音や撥音などの構成要素を伴ったり、語基が反復したりする、という一定の派生過程を経てから語として用いられるようになる。ここで具体的に、1モーラの「か」と、2モーラの「ばた」を例にとって、語基からの派生過程を簡単に示す。

「か」という語基を持つオノマトペには様々な意味があるが、ここでは「堅い物体・金属質のものなどが打ち当たるときの音」という意味での語基「か」からの派生形を以下のように列挙する。

表 13 語基「か」からの派生形

No	オノマトペ	派生形	構成要素
1	かつ	CVQ	Q
2	かん	CVN	N
3	かー	CVR	R
4	かーっ	CVRQ	R, Q
5	かーん	CVRN	R, N
6	かつかつ	CVQCVQ	Q, 反復
7	かんかん	CVNCVN	N, 反復
8	かーかー	CVRCVR	R, 反復
9	かーんかーん	CVRNCVRN	R, N, 反復

この表から、1 モーラの語基を持つオノマトペの派生過程においては、/Q/・/N/・/R/・反復が使われることが分かる。次いで、2 モーラの「ばた」の語基をみる。

「ばた」という語基を持つオノマトペにも複数の意味があるが、ここでは「平らな板状のものが打ち当たったり、倒れたり、落ちたりする音・様子」という意味の語基からの派生形を示す。

表 14 語基「ばた」からの派生形

No	オノマトペ	派生形	構成要素
1	ばたっ	CVCVQ	Q
2	ばたん	CVCVN	N
3	ばたり	CVCVri	Ri
4	ばたーっ	CVCVRQ	R, Q
5	ばたーん	CVCVRN	R, N
6	ばったり	CVQCVri	Q, ri
7	ばったん	CVQCVN	Q, N
8	ばたばた	CVCVCVCV	反復
9	ばたばたっ	CVCVCVCVQ	反復, Q
10	ばたばたーっ	CVCVCVCVRQ	反復, R, Q
11	ばたんばたん	CVCVNCVCVN	N, 反復

12	ばたりばたり	CVCVriCVCVri	Ri, 反復
13	ばったりばったり	CVQCVriCVQCVri	Q, ri, 反復
14	ばったんばったん	CVQCVNVCVQCVN	Q, N, 反復

表 14 から窺えるように、2 モーラの語基を持つオノマトペの派生過程においては/Q/・/N/・/ri/・/R/・反復が用いられる。1 モーラと 2 モーラの語基に付加する構成要素とその出現方を比較すると、いくつかの違いがあることにきづく。

第一に、1 モーラと 2 モーラの語基の間に存在する大きな相違点としては/ri/と/i/が挙げられる。/ri/は 2 モーラの語基だけ (/CVCVri/, /CVQCVri/, /CVNVCVri/ないしこれらの反復形)、/i/は 1 モーラの語基だけ (CVi ないしその反復形) に付加する。

第二に、2 モーラ語基の場合は語中に構成要素が挿入されるということが挙げられる。2 モーラ語基の派生過程においては、語末の/ri/と共に第 1 モーラと第 2 モーラの間には/Q/と/N/が挿入される「CV {Q/N} CVri」という構造の形態が特徴的である。また、語中に/Q/が起こり、語末に/N/が付加する/CVQCVN/ないしその反復形/CVQCVNVCVQCVN/という形態も 2 モーラ語基に限る。

次に、日本語オノマトペの派生形における制約について述べる。最初は反復である。反復は語基の繰り返しを指すもので、例えば「ばたばた」「ばたんばたん」「ばたりばたり」それぞれは「ばた」「ばたん」「ばたり」の反復形になっている。同じように日本語オノマトペにおいてはほとんどの形態が反復することができるが、反復し難いという形態も存在する。それは、1 モーラ末に「R+Q」を持つ/CVRQ/と、2 モーラ末に/Q/を持つ/CVCVQ/ないし「R+Q」を持つ/CVCVRQ/という派生形は通常反復しない。

反復形になりにくい形態として/CVQCVri/, /CVNVCVri/も挙げられる。これらの形態は常に反復しない傾向があるが、語中に促音を持ち、語末に/ri/を持つ/CVQCVri/の反復形が多少観察される。

- (2) a. よく切れるノミがさっくりさっくりと入っていくのは気持ちのよいものだ。
(飛田・浅田 2002. p.172)
- b. 祖母が縁側でこっくりこっくり (と) 舟を漕いでいる。
(飛田・浅田 2002. p.147)

これと異なって/CVNVCVri/型は、本研究で扱っているデータベースを基にして考察すると、反復形が観察されない。/CVNVCVri/の反復形は完全に不可能ではないかもしれないが、違和感をおぼえるものが多い。

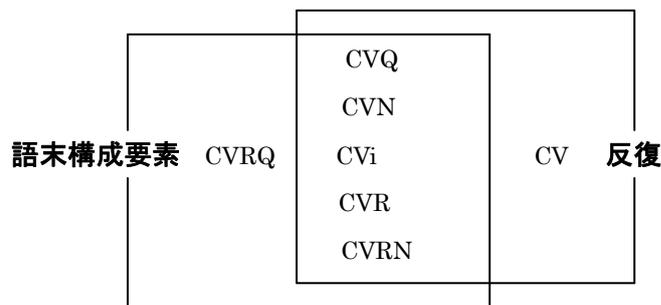
- (3) a. 返された答案の点がいいらしく、彼は {にんまり／？にんまりにんまり} 笑って眺めていた。

- b. 男の子が3人もいると {のんびり / ?のんびりのんびり} テレビも見えていません。

最後に、長音/R/に後続する構成要素の制約について述べる。日本語オノマトペにおいては、語末に長音が起こる際、更に促音と撥音が後続する場合がある。例えば、語末に「R+Q」・「R+N」を持つ/CVCVRQ/（「がちゃーっ」）ないし/CVCVRN/（「がちゃーん」）という形態がある。しかし、「R+ri」を持つ/*CVCVRri/（「*がちゃーり」）という形態が存在しない。つまり、日本語オノマトペには/ri/が長音/R/の後ろに起こらないということである。

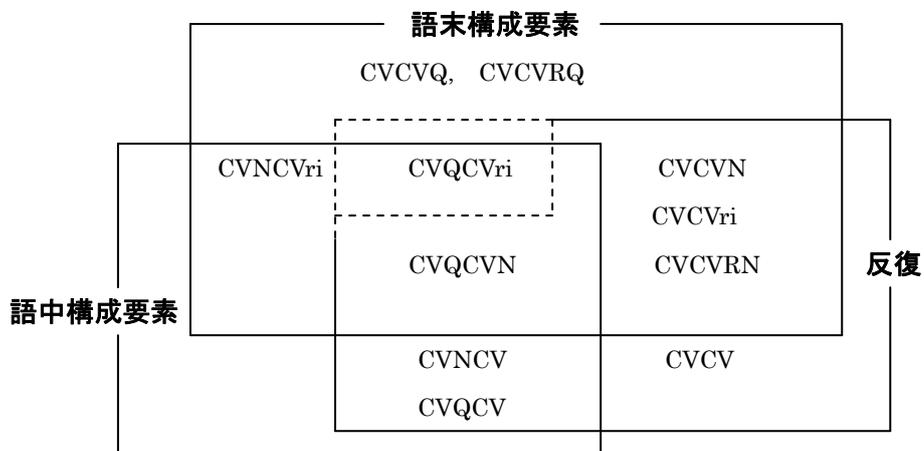
以上のことをまとめると、1モーラと2モーラの語基からの派生形を以下の図のように示すことができる。

図6 1モーラ語基の派生形



以上の図6から、1モーラ語基の派生過程においては、語末に付加する構成要素と反復からなる形態が多いということが分かる。

図7 2モーラ語基の派生形



2 モーラ語基の場合は、語基が語末構成要素・語中構成要素・反復を伴うということが図 7 から分かる。ここでは、/CVQCVri/が点線の四角に入っているのは、/CVQCVri/という形態をしているものには反復形が見られるが、大半が反復しない傾向にあるからである。

3.2 カザフ語オノマトペの派生過程

本節では、カザフ語オノマトペの派生過程について論じる。/CVC/及び/CVCC/語基がカザフ語オノマトペの大半を成すため、これらを対象にして考えることにする。

/CVC/、/CVCC/の語基は、そのまま出現することもあれば、接尾辞を伴ったり語基が反復されたりして一定の派生過程を経て出現することもある。

(4) /CVC/ : баж /bazzh/, бажаң /bazzhang/, баж-баж /bazzh-bazzh/

/CVCC/ : жалт /zhalt/, жалтаң /zhaltang/, жалт-жалт /zhalt-zhalt/

ここで具体的に、/CVCC/の шайқ /shajq/を例にとって、語基からの派生過程を簡単に示す。шайқ /shajq/という語は擬態の語基であり「あるものがぶら下がったり、ゆれたりする様子」という意味で用いられるのが一般的である。この語基 шайқ /shajq/からの派生形を以下に列挙する。

表 15 語基 ш а й қ /shajq/からの派生形

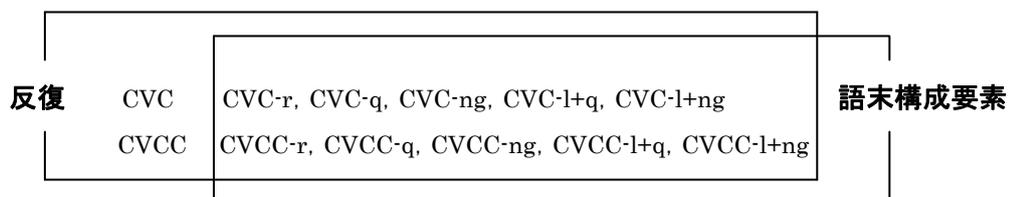
№	オノマトペ	派生形	構成要素
1	шайқак /shajqaq/	CVCC-q	-q
2	шайқаң /shajqang/	CVCC-ng	-ng
3	шайқалақ /shajqalaq/	CVCC-l+q	-l+q
4	шайқалаң /shajqalang/	CVCC-l+ng	-l+ng
5	шайқак-шайқак /shajqaq-shajqaq/	CVCC-qCVCC-q	-q, 反復
6	шайқаң-шайқаң /shajqang-shajqang/	CVCC-ngCVCC-ng	-ng, 反復
7	шайқалақ-шайқалақ /shajqalaq-shajqalaq/	CVCC-l+qCVCC-l+q	-l+q, 反復
8	шайқалаң-шайқалаң /shajqalang-shajqalang/	CVCC-l+ngCVCC-l+ng	-l+ng, 反復

この表では、例えば/CVCC-q/の-q は、шайқак /shajqaq/の下線部、つまり接尾辞-ак /aq/を簡単に示したものである。子音-q だけを使用する理由は、カザフ語には母音調和現象がみられ、それにより、語基の中の母音にあわせて接尾辞の母音が変わるからである。また同様に шайқалақ /shajqalaq/ 及び шайқалаң /shajqalang/の接尾-алақ /alaq/と-алаң /alang/を子音だけで示し、前者を-l+q, 後者を-l+ng とする。

ここで注意したいのは、/CVC/及び/CVCC/の語基は同様の構成要素を伴っており、同様

の派生過程を経るということである。また、表 15 で表示されていない接尾辞・r が/CVC/と/CVCC/語基に付加することもある。以上のことをまとめると、/CVC/と/CVCC/を以下の図のように示すことができる。

図 8 /CVC/及び/CVCC/語基の派生形



この図から窺えるように、カザフ語オノマトペの/CVC/と/CVCC/語基からの派生形の間には相違点が見られず、同じ構成要素を伴うということが分かる。

日本語とカザフ語オノマトペの派生過程に参加する構成要素について、次節にて「反復」、「語中構成要素」、「語末構成要素」という順番で詳しく述べる。また、これらの構成要素は両言語の下位類のそれぞれにどのように出現するかについて検討する。

4. 反復

4.1 日本語オノマトペの反復

本節では、日本語オノマトペにはどのような反復形が観察されるかということと、オノマトペの下位類の中でどれが最も多数の反復形を持つかということについて述べる。

日本語オノマトペを考察した結果、1,591 語の 46%に相当する 735 語が反復形であるということが明らかになった。この結果から、辞書に記述されている日本語オノマトペのほぼ半分は反復した形態であることが分かる。これらの 735 語においては、「がたがた」、「ぺこぺこ」などのような完全反復形のものがあれば、「あはは」、「かたこと」、「めちやくちや」のようないわゆる不規則反復形のものも観察される。本稿では、ある反復形の第 2 語基において異なる部分が観察される場合、このような反復形を不規則反復形と呼ぶことにする。このような不規則反復形は、反復形 735 語のうち 53 語 (7%) が得られた。(5) のものはそれである。

- (5) あはは, あっはっはっ, あっはっはっは, うふふ, えへへ, いひひ, けっけ, しっし, ふふっ, ふふん, わはは, わっはっはっ, からころ, からんころん, かさこそ, かたこと, かたんことん, かつたんこつとん, かたりことり, がさごそ, がたごと, がつたんごつとん, きんこんかん, ざざっ, ずずん, ちくたく, どたばた, どたんばたん, ぴーぽー, ぴんぽん, べちやくちや, べちやくちや, あくせく, あたふた, さめざめ,

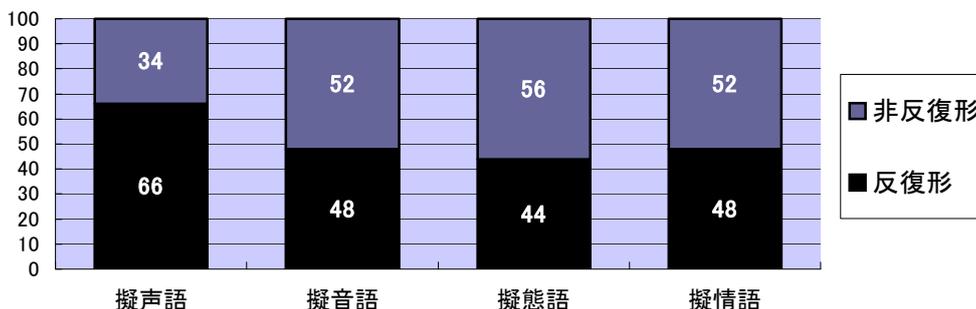
しどろもどろ, ちょこまか, ちゃらんぼらん, ちらほら, ちらりほらり, ちりじり, ちやほや, つべこべ, てきぱき, どぎまぎ, ぬりくりり, のらくら, へどもど, やきもき, えちらおちら, のりくりり, むしゃくしゃ

また, 日本語オノマトペにおいては (6) でみられるような, まったく異なる 1 モーラないし 2 モーラの語基同士が組み合わさって出来たと考えられるものもある。このようなオノマトペは 1 つ以上の語基から構成されているが, その語基や語基の部分が繰り返されているため, 反復形と見なさないことにする。

(6) どんちゃん, ちんどん, つーかー, しんねりむつつり, すてんころり, すってんころり, すってんころりん, すたこら, ちぐはぐ, がたびし, がたくり, ちょこまか

次に, 日本語オノマトペの下位類の中で, どれが最も多くの反復形を持つかをみよう。得た結果を以下の図にまとめる。

図 9 日本語オノマトペの反復形



この図から分かるように, 擬音語・擬態語・擬情語の反復形の割合がほぼ同様に, 5 割に到っていない。これらに比べて擬声語の反復形の割合が最も高くなっており, 6 割以上にのぼる。

擬声語を除いて日本語オノマトペの反復の割合は 5 割に到っていないということが注目に値する。反復はある音や動作の「繰り返し」ないし「連続」を表すと言われているが, このように考えると, どの語の形式も反復することが可能になる。例えば一度限りの「ころん」「ばたり」の語が反復すると「ころんころん」「ばたりばたり」のようになる。論理上, 反復形の割合は丁度 5 割になるはずであろう。日本語オノマトペの反復形の割合が 5 割に至っていない解釈の一つとしては, 語末に長音と促音を持つ/CVRRQ/・/CVCVRRQ/という型や/CVNCVri/型の語基が通常反復しないからだと考えられる。例えば, 「おぎゃーっ」「じわーっ」「ぼやーっ」等に対して反復形の「*おぎゃーっおぎゃーっ」「*じわーっじ

わーっ」「*ぼやーっぼやーっ」などは存在しない。また、/CVNVCVri/の「のんびり」は反復すると、「?のんびりのんびりとテレビを見る」のように、適格性の許容度が下がる。

擬声語に反復形が多いことは、擬声語は「ひひひ」「けけけ」「えんえん」のように人間の笑い声や泣き声などを表すことが多いからであろう。つまり、人間の笑い声や泣き声は連続する発声であるため、「*ひっと笑った」「*けっと笑った」「*えんと泣いた」という一度限りのものが成り立たないのである。

4.2 カザフ語オノマトペの反復

カザフ語オノマトペを考察した結果、1,242語の中で804語(65%)が反復形であるということが明らかになった。これは日本語の46%とよりも、大幅に多いことが分かる。カザフ語オノマトペにおいても不規則反復形が数多く観察される。反復形804語の160語は不規則反復形になっており、反復形全体の20%に相当する。不規則反復形には2つの種類がある。その一つは、第2語基の母音が第1語基の母音と異なるものである。この場合は通常、баж-бұж /bazzh-buzh/のように a /a/が ʏ /u/と交換する現象が見られるが、қатыр-қытыр /qatır-qıtır/のように a /a/ / ы /ı/の交換も多少ある。不規則反復形を以下(7)にまとめる。

- (7) арс-ұрс /ars-urs/, баж-бұж /bazzh-buzh/, бар-бұр /bar-bur/, барқ-бұрқ /barq-burq/, балп-бұлп /balp-bulp/, батыр-бұтыр /batır-butır/, балдыр-бұлдыр /baldır-buldır/, дардан-дұрдан /dardang-durdang/, далақ-дұлақ /dalaq-dulaq/, далдың-дұлдың /daldıng-duldıng/, жалаң-жұлаң /zhalang-zhulang/, жалт-жұлт /zhalt-zhult/, жалтақ-жұлтақ /zhaltaq-zhultaq/, жалтаң-жұлтаң /zhaltang-zhultang/, жалбаң-жұлбаң /zhalbang-zhulbang/, жалба-жұлба /zhalba-zhulba/, жампаң-жұмпаң /zhampang-zhumpang/, жарқ-жұрқ /zharq-zhurq/, қатыр-қытыр /qatır-qıtır/, қорқ-құрқ /qorq-qurq/, қалтаң-құлтаң /qaltang-qultang/, қалш-құлш /qalsh-qulsh/, қатыр-құтыр /qatır-qutır/, қараң-құраң /qarang-qurang/, қарш-құрш /qarsh-qursh/, патыр-пұтыр /patır-putır/, салпаң-сұлпаң /salpang-sulpang/, самбыр-сұмбыр /sambır-sumbır/, салбаң-сұлбаң /salbang-sulbang/, солп-сұлп /solp-sulp/, сақыр-сықыр /saqır-sıqır/, сақыр-сұқыр /saqır-suqır/, салп-сұлп /salp-sulp/, саңғыр-сұңғыр /sangghır-sungghır/, сар-сұр /sar-sur/, сарқ-сұрқ /sarq-surq/, сарт-сұрт /sart-surt/, сатыр-сұтыр /satır-sutır/, тақыр-тұқыр /taqır-tuqır/, таңқ-тұңқ /tangq-tungq/, тап-тұп /tap-tup/, тарбаң-тырбаң /tarbang-tırbang/, тапыр-тұпыр /tapır-tupır/, тарс-тұрс /tars-turs/, тарп-тұрп /tarp-turp/, тапыр-тұпыр /tapır-tupır/, тасыр-тұсыр /tasır-tusır/, тарқ-тұрқ /tarq-turq/, шаң-шұң /shang-shung/, шаңқ-шұңқ /shangq-shungq/, шар-шұр /shar-shur/, шақ-шұқ /shaq-shuq/, шақыр-шұқыр /shaqır-shuqır/, шалдыр-шұлдыр /shaldır-shuldır/, шалп-шұлп /shalp-shulp/, шап-шұп

/shap-shup/, шарт-шұрт /shart-shurt/, шатыр-шұтыр /shatır-shutır/

不規則反復形の 2 つ目の種類は, 第 2 語基の最初の子音が第 1 語基の子音と異なるものである。このような語は 77 語が得られた。

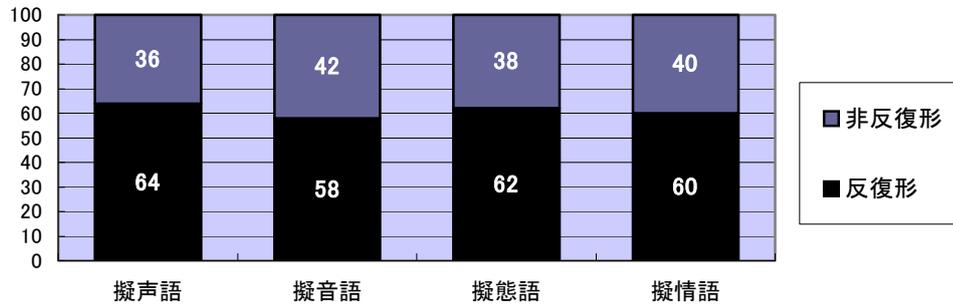
- (8) алақ-жалақ /alaq-zhalaq/, алақ-жұлақ /alaq-zhulac/, алаң-жұлаң /alang-zhulang/, алау-жалау /alau-zhalau/, алау-далау /alau-dalau/, албаң-далбаң /albang-dalbang/, албыр-салбыр /albir-salbir/, алба-жұлба /alba-zhulba/, алба-жалба /alba-zhalba/, апалақ-сапалақ /apalaq-sapalaq/, апыл-тапыл /apıl-tapıl/, апыраң-тапыраң /apıraq-tapıraq/, апырақ-тапырақ /apıraq-tapıraq/, апыр-тапыр /apır-tapır/, апыр-тұпыр /apır-tupır/, әлтек-тәлтек /ältek-tältek/, быт-шыт /bit-shıt/, былқ-сылқ /bilq-sılg/, қиқа-жиқа /qi:qa-zhi:qa/, қиқы-жикы /qi:qi-zhi:qi/, қиқаң-сиқаң /qi:qang-si:qang/, қиқа-сиқа /qi:qa-si:qa/, қипақ-сипақ /qi:paq-si:paq/, қыбыр-жыбыр /qıbir-zhıbir/, қыбыр-сыбыр /qıbir-sıbir/, қылт-сылт /qılt-sılt/, қылтың-сылтың /qılting-sılting/, мыж-тыж /mızh-tızh/, ойпаң-тойпаң /ojpaң-tojpaң/, олбыр-солбыр /olbir-solbir/, олпы-солпы /olpı-solpı/, опыр-топыр /opır-topır/, опай-топай /opaj-topaj/, у-ду /u-du/, у-шу /u-shu/, ұйқы-тұйқы /ujqı-tujqı/, ұйпа-тұйпа /ujpa-tujpa/, ұйпа-жұйпа /ujpa-zhujpa/, ұмар-жұмар /umar-zhumar/, үйме-жүйме /üjme-zhüjme/, үйдек-түйдек /üjdek-tüjdek/, ырбың-жырбың /ırbıng-zhırbıng/, ыржаң-тыржаң /ırzhaң-tırzhaң/, ырың-жырың /ırıng-zhıring/, ыбыр-сыбыр /ıbir-sıbir/, ыбыр-дыбыр /ıbir-dıbir/, ың-жың /ıng-zhıng/, ың-дың /ıng-dıng/

カザフ語オノマトペには, まったく異なる語基が組み合わさって出来たと考えられるオノマトペもある。これらを (9) にまとめ, 反復形と見なさないことにする。

- (9) сарқ-бұрtaқ /sarq-burq/, жым-жырт /zhım-zhırt/, тым-тырақай /tım-tıraqaj/, тып-типыл /tıp-ti:pıl/, тас-талқан /tas-talqan/

次に, 反復に関する下位類の相違点について述べる。この結果を図 10 にまとめる。

図 10 カザフ語オノマトペの反復形



日本語オノマトペと同様に、カザフ語オノマトペの場合も擬声語の割合が最も高い。しかしながら、その差は顕著とはいえず、他の下位類とはほぼ同様の割合になっている。

両言語の反復形の割合を対照すると、カザフ語の方が明らかに高い数値を示していることが分かる。その理由としては、日本語と異なってカザフ語オノマトペにおいては、不規則反復形が多数存在することがあげられる。つまり、たとえば *далбаң /dalbang/* という語基は反復すると *далбаң-далбаң /dalbang-dalbang/* になるが、それに対して前半部の語基の子音が脱落した *албаң-далбаң /albang-dalbang/* という形態と、後半部の語基の母音 *a/a/* が *ʏ/u/* に交換した *далбаң-дүлбаң /dalbang-dulbang/* という語も存在するからである。

5. 語頭要素

本節では、日本語オノマトペ語彙の「語頭要素」について論じる。日本語オノマトペにおいては、以上で示したオノマトペの派生過程における構成要素以外に、いわゆる語頭要素が観察される。この「語頭要素」という範疇は、先行研究では深く議論の対象となっていなかったものである。これについて最初に議論したのは角岡 (2003) である。角岡 (2003) は */u-huQ/*, */a-ha-ha/*, */aQ-haQ-ha/* などの語を取り上げ、語基の */hu/* と */ha/* の前で現れる */u/* と */a/* を接頭辞として扱っている。また、このような接頭辞が、笑い声や鳴き声、動物の鳴き声を表す擬声語に限定され、語頭要素となっている音節の母音と語基の母音が同一であるという点が特徴的であると述べている。

角岡 (2003) が指摘している語頭要素以外に、「うえーん」「うおーん」「おぎゃー」で見られる「う」「お」などがある。これらは語基の中の母音とは一致しない母音から成る。この「う」「お」は語基の一部ではなく、語基に付加する語頭要素であることは「うえーん」「うおーん」「おぎゃー」に語頭要素のない同じ意味の形態の「えーん」「おーん」「ぎゃー」、またはその反復形の「えーんえーん」「おーんおーん」「ぎゃーぎゃー」が存在することから分かる。

日本語オノマトペ 1,591 語を考察した結果、語頭要素がついた語彙は、擬声語のみにみ

られ、19 語しか得られなかった (例 (10))。日本語における語頭要素付のオノマトペは特定の範疇の語彙に限定される点が興味深い。

- (10) あはは、あはあは、あっはあっは、あっはっはー、あっはっはっはっ、うふ、うふふ、えへへ、いひひ、おほほほ、わはは、わっはっはっ、うえーん、うおーっ、うおーん、うおーうおー、うわーん、おぎゃー、おぎゃーおぎゃー

6. 語中構成要素

本節では、2 モーラの語基の中に起こる促音/Q/と撥音/N/について検討する。

日本語オノマトペ 1,591 語のうち、語中に促音か撥音を持つオノマトペは 187 語 (12%) である。これらは形態的に次の /CVQCV/, /CVNVCV/, /CVQCVN/, /CVQCVri/, /CVNVCVri/ のタイプに分類することができる。これらのタイプの割合を図 11 で示す。

図 11 語中に/Q/と/N/を持つオノマトペの百分比

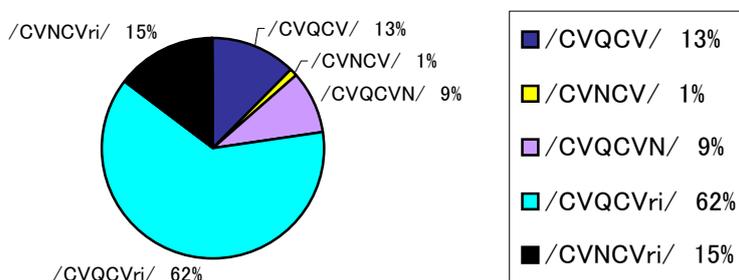


図 11 から明らかなように、語中に促音と撥音を持つオノマトペの中で、語中に/Q/、語末に/ri/を持つ/CVQCVri/タイプが最も多い。このようなタイプの語は 62%に相当する 110 語が得られた。その次に/CVNVCVri/で 26 語 (15%) がみられた。/CVQCV/・/CVQCVN/はそれぞれ 22 語 (13%) と 16 語 (9%) である。/CVNVCV/が最も少数で 2 語 (1%) しかない。

図 11 から、撥音より促音の方がオノマトペの語基の中に起こりやすいということが分かる。前者は 28 語 (16%) であるが、後者は 159 語 (84%) である。語中に起こる促音と撥音について黒田 (1967) は、4 モーラのオノマトペを例に取り、2 モーラ目に促音が挿入されるか撥音が挿入されるかは、2 音節語基の 2 音節目の子音が無声であるか有声であるかによって決定されると論じている。このようなオノマトペの語中に起こる促音と撥音は「強調」を表すとよく主張されている (田守・スコウラップ 1999 ; 角岡 2007) ¹⁷。例えば以下

¹⁷ 語中に起こる促音/Q/と撥音/N/については次のような見解もある。Hamano (1986) は語中に起こる促

の例から窺えるように、

- (11) {ざくざく／ざっくざっく} と枯れた落ち葉を踏む。
(12) {がたんご-ton／がったんご-ton} と鈍い回転の音がきこえてくる。

語中に促音を持つ形態と促音を持たない形態は意味的に同じものを指しているが、語中に促音を持つ「ざっくざっく」「がったんご-ton」のほうが促音を持たない「ざくざく」「がたんご-ton」よりもっと強調した言い方であると分かる。同じように、撥音についても言える。

- (13) 涙が {じわり／じんわり} とわいてくる。

(13) では、語中に撥音を持つ語と撥音を持たない語は同じ意味を表すが、語中に撥音を持つ語の方が強調した言い方になる。更に、Kakehi, Tamori, Schourup (1996) が「じわり」と「じんわり」について次のように解釈している。

- (14) Kakehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’
「じわり」 The manner in which something proceeds gradually.
「じんわり」 The manner of something occurring very gradually.

この「じわり」と「じんわり」の辞書記述を比較すると、「じんわり」はより強調した感じの語であることが分かる。

6.1 語中構成要素に関する擬音・擬態オノマトペの形態的相違

本節では、語中に起こる促音と撥音がどのように下位類に出現するかについて議論し、擬音と擬態のオノマトペの間には大きな形態的相違点が存在することを示す。

日本語オノマトペの下位類それぞれにおいて、促音と撥音を持つオノマトペがどの頻度で出現するかを調査し、その結果を表 16 にまとめた。

表 16 語中に/Q/・/N/を持つ語数と割合

	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
全語数	144	659	1,040	129
/Q/・/N/	2 (1%)	22 (3%)	152 (15%)	9 (7%)

音は「強調」を表すと認めているが、語中に起こる撥音については、「ぼんやり」「げんなり」を挙げながら、これらには「*ぼやり」「*げなり」といった、撥音を含まない対応形が存在しないので、この撥音は「強調」を表すと見なさない方がよさそうであると述べている。

この表から窺えるように、擬声語・擬音語は語中の促音及び撥音を伴わない傾向にある。その次に擬情語であり、7%を占める。一方、これに対して擬態語は最も多数であり、15%に相当する 152 語が観察される。ここでは、下位類においては/CVQCV/・/CVNVCV/・/CVQCVN/・/CVQCVri/・/CVNVCVri/それぞれがどのように出現するかをみる。

図 12 語中に/Q/・/N/を持つ下位類のオノマトペ

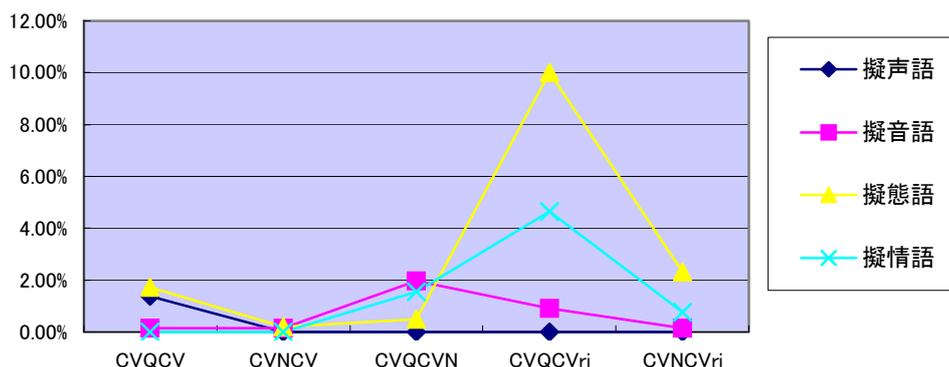


図 12 から、擬態語・擬情語においては、/CVQCVri/というタイプのものが最も多数であることが分かる。前者は 104 語 (10%)、後者は 6 語 (5%) である。その他に、擬態語には /CVNVCVri/といったタイプのもも多数みられ 24 語 (2%) が得られた。これと反対に、擬声語・擬音語は/CVQCVri/ないし/CVNVCVri/タイプのもが現れない傾向にある。

以上の結果から次のことが考えられる。図 11 から窺えるように、促音と撥音を持つオノマトペの中で/CVQCVri/と/CVNVCVri/がもっとも多数である。これらの 2 つのタイプは語末に/ri/を持つことで共通しているが、語基の中の/Q/と/N/で異なっている。両者の語数を合わせると 128 語 (77%) になる。このような/CVQCVri/・/CVNVCVri/タイプのものほとんどが擬態語に出現する傾向があるため、擬態語の形態的特徴をなすと推測できる。

7. 語末構成要素

7.1 日本語オノマトペの語末構成要素

日本語オノマトペの語末構成要素としては、促音/Q/・撥音/N/・/ri/・長音/R/が挙げられる。これらについて考察する際、促音/Q/・撥音/N/・/ri/と長音/R/を区別して述べる。

7.1.1 語末に起こる促音/Q/・撥音/N/・/ri/

本節では、オノマトペの語末に起こる促音/Q/・撥音/N/・/ri/について議論する¹⁸。オノマ

¹⁸ 日本語オノマトペにおいては、語末に起こる構成要素の中では 1 モーラ語基に付加する/i/がある。しかしながら、/i/を伴う語は極めて少数であるため (10 語しかない)、ここでは扱わないことにする。

トペの語末におこるこれらの構成要素は、よく日本語オノマトペ特有の特徴として指摘されている（田守・スコウラップ 1999；Hamano1986）。田守・スコウラップ（1999）が、オノマトペに用いられる促音/Q/は「急な終わり方」「スピード感」「瞬間性」を表し、一般語彙の「すごい」などで用いられる「強調」を表す促音と区別されていると述べている。また、オノマトペに用いられる撥音は、「ばん」「ぼん」「かん」などのオノマトペの語末に起こり、一般語彙にみられない「共鳴」といった意味を表すと示している。/ri/は「完了」「ゆったりした感じ」を表すと述べている（田守・スコウラップ 1999：28）。

このように、先行研究ではオノマトペの語末の/Q/・/N/・/ri/が一般語彙から区別され、日本語オノマトペの特徴と認定されている。しかしながら、これらの/Q/・/N/・/ri/がオノマトペ下位類においてはどのような頻度で用いられているかについては先行研究では議論されていない。

考察の対象としては1モーラ/CVQ/・/CVN/・/CVRQ/・/CVRN/のオノマトペと2モーラ/CVCVQ/・/CVCVN/・/CVCVri/・/CVQCVRi/・/CVNVCVRi/・/CVQCVRN/・/CVCVVRQ/・/CVCVVRN/のオノマトペについて考察を行なった。その結果、表 17 が表示しているような結果が得られた。

表 17 語末に起こる/Q/・/N/・/ri/の語数と割合

	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
全語数	144	659	1,040	129
/Q/	38 (26%)	142 (21%)	232 (22%)	30 (23%)
/N/	24 (17%)	202 (31%)	124 (12%)	26 (20%)
/ri/	1 (0.7%)	84 (13%)	252 (24%)	17 (13%)

この表の割合をグラフで表示すると、その相違点がよく分りやすくなる。

図 13 /Q/・/N/・/ri/を伴う日本語オノマトペの割合

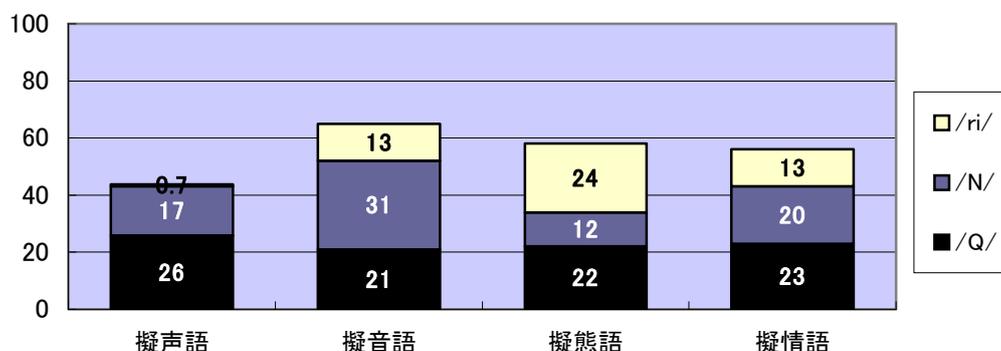


図 13 から、擬音語・擬態語・擬情語は語末構成要素を伴う比率がほぼ同様に 6 割程度であるが、擬声語はその比率が最も低い（約 4 割）ということが明らかである。/Q/に関する比率は、擬音語・擬態語・擬情語がほぼ同様にあり、約 22%を占めているのに対し、擬声語は 26%にのぼる。/N/の場合は、擬音語は最も高い比率をみせ、31%を占めるが、擬態語は最も低くて 12%である。また、/ri/に関する相違が興味深い。擬態語は 24%に至るのに対し、擬声語は /ri/を伴わない傾向にある。

最初に、/Q/について検討する。日本語の促音は「無声声門閉鎖音」であり、発音されると口腔内で完全な閉鎖がおこって一瞬で気流が止まるため音の突然の停止が起こる。そのため無声閉鎖音の前の母音が短音化され、短く切り取られたような終わり方をする印象を与えると考えられているのである。以上の結果から、このような意味を表す/Q/は「おぎゃーと叫んだ」「びっという音がした」「ころっと動いた」「かっと怒った」のようにすべての下位類のオノマトペに起こる。

しかしながら、/N/の用法に関しては下位類には相違点がみられ、/N/が擬音語に最も高い比率（31%）で出現するが、擬態語にもっとも低い比率（12%）で出現することが分かる。擬音語と擬態語に用いられる/N/に関する先行研究においては田守（2002）の主張が興味深い。田守（2002）は「撥音が基本的には「共鳴」という音象徴的な意味を表し、共鳴可能な擬音オノマトペに用いられ、擬態オノマトペには用いられない」と述べている。先行研究から分かるように、/N/は「ドアを開ける音ががちゃんと響く」のように音の響きや共鳴を表すことが多い。このように、/N/は基本的に音の「共鳴」を表わすとすると、擬態語に用いられないのは当然なことである。擬態語は様子や状態を表わすからである。しかしながら、/N/は擬態語にも出現し、擬音語に用いられる/N/と異なる意味を表わす。語末に/N/を持つ擬態語は、「運河はどろんとよどんで流れている」「白身をだらんと小皿に落とす」のように、ある物体の様態を表すものが多い。このような語の/N/は「柔軟性」「弾力性」を表すと指摘されている（Hamano1986 : 65）。

/N/は擬情語にも高い比率で出現するが、中でも感覚を表す語によく用いられる。

(15) どきん、どつきん、がーん、がんがん、きんきん、きゅん、きゅーん、ぴん、ぴーん、つん、つんつん、つーん、じん、じんじん、ずきん、ずきんずきん

このような感覚を表す擬情語は、「頭ががんがんする」「胸がきゅんと痛くなった」「腰にずきんと痛みがきた」のように痛みを表す。ここの/N/は「痛みが響くようにはしる」を表し、擬音の「共鳴」という意味からメタファーという比喻によって拡張したものであると考えられる（撥音の意味拡張について次章で詳細に検討する）。

最後に、/ri/について検討する。構成要素/ri/が独立したモーラになるというのは、音韻的にも/Q/・/N/と大きく異なっている点である。/ri/は擬声語に起こらない傾向が明らかになったが、その理由の一つとしては次のことが考えられる。表 8 から見られるように、擬声

語の 8 割は「かー」「ぎゃっ」「きゃんきゃん」のように 1 モーラの語基からなっている。ここで注意されたいのは、/ri/が 1 モーラの語基に起こらず、2 モーラの語基だけに起こるということである。このことから擬声語では/ri/が起こる確率が極めて低くなるということが分かる。もう一つ理由としては、次のことが挙げられる。

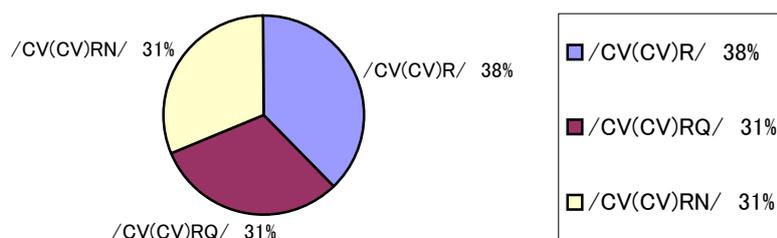
(16) とびらが {がちゃーっ / がちゃーん / *がちゃーり} と音をたてて開いた。

(16) では「がちゃーっ」と「がちゃーん」が適格であるのに対し、「*がちゃーり」が不適格である。それは、長音/R/の後ろに/Q/と/N/が起こることができるが、/ri/は起こらない。つまり、/CVCVRQ/・/CVCVRN/などの形態が存在するのに対し、/*CVCVRri/という形態が存在しない。このように考えると、長音/R/を高い比率で伴う擬声語では、/Q/・/N/の比率が上がるのに対し、/ri/の比率が下がることが分かる。

7.1.2 長音/R/

本節では、長音/R/について論じる。本研究で扱っている 1,591 語のうち長音/R/を伴う語彙は 182 (11%) 語が得られた。これらは、/CV(CV)R/・/CV(CV)RQ/・/CV(CV)RN/のタイプに分けることができる。図 14 が示しているように、

図 14 長音/R/を伴うオノマトペの百分比



/CV(CV)R/タイプのものが最も多く、38%に相当する 69 語が得られた。次に/CV(CV)RN/・/CV(CV)RQ/であり、いずれも 31%である。前者に 57 語、後者に 56 語があった。

/R/を伴うオノマトペについてはもう一つの特徴が明らかになった。それは、/R/を伴うオノマトペの大半が 1 モーラの語基であるということである。/R/を伴う 182 語の 161 語 (88%) は「かーかー」「しーしー」「えーんえーん」「ぶーっ」「にーっ」のような 1 モーラの語基を持つものであるが、21 語 (12%) は「かちゃーん」「ずどーん」「すらーっ」のような 2 モーラの語基を持つものである¹⁹。

¹⁹ 日本語オノマトペにおいては「こけっこー」という 1 モーラと 2 モーラにも属しないものと、長音/R/

次に、日本語オノマトペの下位類は、長音/R/をどの頻度で伴うかを見る。得た結果を表18にまとめた。

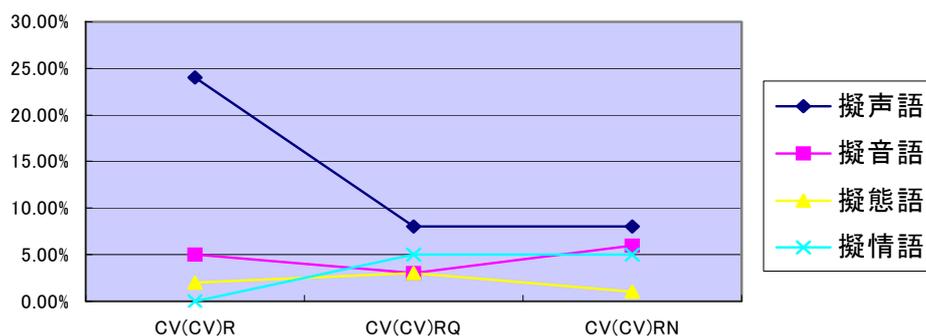
表 18 /R/を伴う語数と割合

	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
全語数	144	659	1,040	129
/R/	55 (38%)	100 (15%)	61 (6%)	12 (9%)

擬声語は長音を伴う比率がもっとも高く、38%を占めており、これに対して擬態語は、逆に長音を伴わない傾向にあり、その比率が6%である。

/R/を伴う/CV(CV)R/・/CV(CV)RQ/・/CV(CV)RN/のタイプは下位類のオノマトペにおいては、図15が示しているように出現している。

図 15 /R/を伴う下位類のオノマトペ



擬声語には/R/を伴うすべてのタイプが観察されるが、その中では/CV(CV)R/が圧倒的に多い(34語(24%))。擬音語の場合は、/CV(CV)RN/は42語(6%)、/CV(CV)R/は36語(5%)、/CV(CV)RQ/は21語(3%)である。擬態語は/CV(CV)RQ/は32語(3%)、/CV(CV)R/は19語(2%)、/CV(CV)RN/は10語(1%)である。また、擬情語には/CV(CV)RQ/と/CV(CV)RN/の2タイプしか見られず、いずれも6語(5%)である。

以上の結果から、擬声語は下位類の中で最も/R/を伴いがちであるということが明らかになる。

7.2 カザフ語オノマトペの語末構成要素

以下では、カザフ語オノマトペにおける語末構成要素とそれに関する下位類の相違点について論じる。上記したように、カザフ語オノマトペの派生過程における接辞は、語基の

が語基の中に挿入される「ぐーすく」、「びーちく」、「びーちくびーちく」、「びーちくばーちく」のような例外的な形態も見られる。ここではこれらを扱わないことにする。

後ろに付加される接尾辞のみである。例えば, жалтақ /zhaltaq/, жалтан /zhaltang/, күмбір /kümbir/にみられる下線部の-ақ /aq/, -ан /ang/, -ір /ir/ (これらを単に「閉鎖音」-q/, 「鼻音」-ng/, 「ふるえ音」-r/と呼ぶ) がそれである。これらの接尾辞の他に, 例えば тайталақ /tajtalaq/, тайталан /tajtalang/から窺えるように, 下線部の-алақ /alaaq/と-алан /alang/ (これらを単に「閉鎖音」-l+q/と「鼻音」-l+ng/と呼ぶ) という接尾辞も存在する²⁰。

7.2.1 接尾辞

本節では, 接尾辞に関する下位類の相違点について述べる。

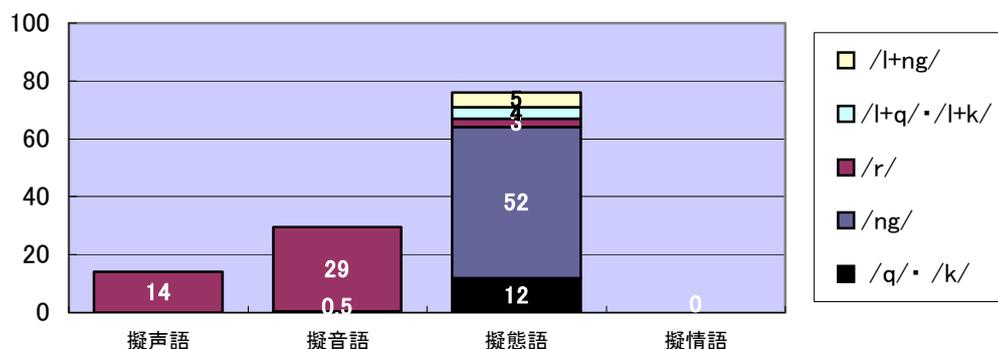
カザフ語オノマトペの派生過程における接尾辞「閉鎖音」-q/・/k/, 「鼻音」-ng/, 「ふるえ音」-r/という基本的な接辞と, 接尾辞「閉鎖音」-l+q/・/l+k/, 「鼻音」-l+ng/がある。これらの接尾辞がカザフ語オノマトペにどの程度の頻度で出現するかを調査した結果, 表 19 のような結果が得られた。

表 19 接尾辞を伴う語数と割合

	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
全語数	106	369	829	10
-q/・/k/			99(12%)	
-ng/		2(0.5%)	433(52%)	
-r/	15(14%)	106(29%)	27(3%)	
-l+q/・/l+k/			31(4%)	
-l+ng/			46(5%)	

この表の割合をグラフで表示すると, 相違点をより分かりやすく把握できる。

図 16 接尾辞を伴うカザフ語オノマトペの割合



²⁰ 以上で示した接尾辞以外に, гүрсіл /gürsil/, күлім /külüm/にみられる-іл /il/と-ім /im/という接尾辞も観察されるが, 極めて数が少ないため, 本稿では扱わないことにする。

図 16 では、擬声語から擬音語、また擬態語へというようにグラフの数値が増加している。このことから、カザフ語オノマトペにおいては、擬態語が接尾辞を伴いがちであり、全擬態語の数から観察すれば、77%が接尾辞を伴うことが分かる。これと比べて擬声語は接尾辞を伴う比率が 14%、擬音語は 29%である。擬情語は数少ないためか、接尾辞を伴う形態がみられない。

図 16 からもう一つの重要なことが分かる。それは、擬声語・擬音語は殆どすべてが接尾辞「ふるえ音」-r/を伴うのに対し、擬態語は逆に「ふるえ音」-r/を伴う語数の比率が最も低いということである。擬態語は、接尾辞「鼻音」-ng/が最も高い比率を占めている (52%)。その次に、接尾辞「閉鎖音」-q/・-k/が後続し、12%である。接尾辞「閉鎖音」-l+q/・-l+k/と「鼻音」-l+ng/は、擬態語のみと用いられ、前者は 4%、後者は 5%に云っている。この結果から、擬音オノマトペか擬態オノマトペかによって、接尾辞の用法がはっきりと区別されていることが分かる。

7.2.2 「ふるえ音」-r/

以下では、接尾辞「ふるえ音」-r/について述べる。最初は、күмп /kümp/ 「ある重い物が水に沈みこむときの音」とそれに接尾辞「ふるえ音」-r/が付加した күмбір /kümbir/ という語を比較する。以下の例を見よう。

- (17) {күмп/күмбір/ *күмпақ/ *күмпан} еткен дыбыс шықты.
 {kümp/kümbir/ *kümpaq/ *kümpang} etken dibıs shıqtı.
 {ぱしゃっ・ばしゃっ・ばしゃん} という音がした。

(17)では、күмп /kümp/という擬音語と、接尾辞「ふるえ音」-r/が付加した күмбір /kümbir/ という形態が適切であるのに対し、күмпақ /kümpaq/, күмпан /kümpang/が不適切である。では、以下より、語基のままで使用されるという形態 (күмп /kümp/, сақ-сақ /saq-saq/など) と、接尾辞「ふるえ音」-r/を伴ったという形態 (күмбір /kümbir/, сақыр-сақыр /saqır-saqır/など) を対照し、その違いを明らかにする。

- (18) a. Ол суға {күмп/ *күмбір} беріп, көрінбей кетті.
 ol sugha {kümp/ *kümbir} berip, körinbej ketti.
 彼は水にバシャンととびこんで、きえた
- b. Кенеттен құлағыма домбыраның { *күмп-күмп/ күмбір-күмбір} үні естілді.
 Kenetten qulaghıma dombıranıng { *kümp-kümp/ kümbir-kümbir} üni estildi.
 急にドムブラ (弦楽器) のベベンベベンという音が聞こえてきた。
- (19) a. Қасқырдың тісі {сақ-сақ/?сақыр-сақыр} етті.

qasqırđing tisi {*saq-saq*/*?saqır-saqır*} etti.

狼の歯はザクザクという音が出した。

- b. Самауыр {*?saq-saq*/*saqır-saqır*} қайнады.

samaur {*?saq-saq*/*saqır-saqır*} qajnadı.

ポットのお湯がぶつぶつと沸いた。

- (20) a. Біреу есікті {*taq*/**taqır*} етіп бір ұрды.

bireu esikti {*taq*/**taqır*} etip bir urdı.

誰かドアをどんと一回打った。

- b. Ағаш бұтақтарының {**taq-taq*/*taqır-taqır*} еткен дыбысы шықты.

Aghash butaqtarınıń {**taq-taq*/*taqır-taqır*} etken dıbısı shıqtı.

木の枝が折れてぼきぼきという音がした。

例 (18a) は、*kүмп* /*kүmp*/を接尾辞「ふるえ音」*-r*/が付加した *kүмбір* /*kүmbir*/に置き換えると、不適切な文になる。逆に (18b) は、*kүмбір* /*kүmbir*/を *kүмп* /*kүmp*/に置き換えることが不可能である。*kүмп* /*kүmp*/は、*kүмбір* /*kүmbir*/に比べて単純な感じの音を表す語である。また急に終わるという暗示を与える。*kүмп* /*kүmp*/と異なって *kүмбір* /*kүmbir*/は、ある堅くて重量の物体や金属質などのものが衝突するときに出る響く音、震動する音を表す。例えば *kүмбір* /*kүmbir*/はドムブラという弦楽器を弾くとき出る音を描写することが多い。また、例 (19) (20) では、*сақ* /*saq*/と *тақ* /*taq*/は急に終わる音を表すのに対し、*сақыр* /*saqır*/と *тақыр* /*taqır*/が置き換えられないのは、接尾辞「ふるえ音」*-r*/を伴うこの *сақыр* /*saqır*/と *тақыр* /*taqır*/はより響いて、振動する音を表すからであろう。このことから、接尾辞「ふるえ音」*-r*/は、「震動」や「響き」という意味を表すと推測できる。擬声語の場合は、*дабыр* /*dabır*/「男性の大きな声などを表す語」や *шәңгір* /*shänggir*/「子供などの高い声を表す語」のように人の声の響きなどを表すときに用いられる。

7.2.3 「閉鎖音」*-/q/・/k/*と「鼻音」*-/ng/*

本節では、接尾辞「閉鎖音」*-/q/・/k/*と「鼻音」*-/ng/*について論じる。既に述べたように、これら接尾辞は擬態語のみに用いられる。以下では、接尾辞「閉鎖音」*-/q/・/k/*と「鼻音」*-/ng/*を伴った *жалтақ-жалтақ* /*zhaltaq-zhaltaq*/ないし *жалтаң-жалтаң* /*zhaltang-zhaltang*/「おそるおそる見る様子」と *ыржақ-ыржақ* /*ırzhaq-ırzhaq*/ないし *ыржаң-ыржаң* /*ırzhang-ırzhang*/「にやりする、微笑む様子」という語を例とし、接尾辞「閉鎖音」*-/q/・/k/*と「鼻音」*-/ng/*の違いと意味を説明する。以下の例を見よう。

- (21) a. Бала шешесіне еркелеп {**жалтақ-жалтақ*/*жалтаң-жалтаң*} етіп қарады.

bala sheshesine erkelep {**zhaltaq-zhaltaq*/*zhaltang-zhaltang*} etip qaradı.

子供はお母さんを物言いたげにちらりちらりと見つめた。

- b. Жігіттер { * жалтақ-жалтақ / жалтаң-жалтаң } Әлібиге көз тастап қояды. Әліби жүзінде еш абыржуды білдірмейді.
 zhigitter { * *zhaltaq – zhaltaq / zhaltang – zhaltang* } alibi:ge köz tastap qoyadı. alibi: zhüzinde esh abırzhudı bildirmejdı.
 男たちはちらちらとアレビをみている。しかし，アレビは気にもとめない。
- c. Уры { жалтақ-жалтақ / ??жалтаң-жалтаң } етіп жан-жағына қарай берді.
 urı { *zhaltaq-zhaltaq / ??zhaltang-zhaltang* } etip zhan-zhaghina qaraj berdi.
 泥棒はおそろおそろ，目をきよろきよろ動かしてあちこちみていた。

(3. Шүкіров, “Ізгілік”)

(21) から分かるように，*жалтаң /zhaltang/* は *жалтақ /zhaltaq/* に置き換えることが出来ない。*жалтаң /zhaltang/* は *жалтақ /zhaltaq/* と同様におそろおそろ見る様子を表すことがあるが，多くの場合は，(21a) のように子供が母に愛撫されて見る様子や，(21b) のように女性が男性に，ないし男性が女性に対してふざけて見る様子を表す。接尾辞「鼻音」*-/ng/* を伴う *жалтаң /zhaltang/* のほうが見る様子が柔らかくてかわいらしく感じられる。それとは逆に，接尾辞「閉鎖音」*-/q/* を持つ *жалтақ /zhaltaq/* は緊張している様子や激しい様子を表す。

- (22) a. Ербол жын қаққан адамша { ыржақ-ыржақ / ??ыржаң-ыржаң } етіп күле береді.
 Erbol zhın qaqqan adamsha { *ırzhaq-ırzhaq / ?ırzhang-ırzhang* } etip küle beredi.
 エルボルは狂ったかのようににやりにやりと笑っている。
- b. Ұялғанның белгісі емеспе бір-біріне қарап,
 { ?? ыржақ-ыржақ / ыржаң-ыржаң } күле береді.
 uyalghannıng belgisi emespe bir-birine qarap,
 { ?? *ırzhaq-ırzhaq / ırzhang-ırzhang* } küle beredi.
 恥ずかしそうに二人は視線を合わせて，にやにやと微笑んでいる。

(Сыздыкова, Хусаин 2001. p.532)

笑う様子を表す *ыржақ-ыржақ /ırzhaq-ırzhaq/* と *ыржаң-ыржаң /ırzhang-ırzhang/* は，ほとんど同様の笑い方を表しているが，微妙なニュアンスで異なっている。接尾辞「閉鎖音」*-/q/* を伴う *ыржақ-ыржақ /ırzhaq-ırzhaq/* は，緊張感があり，様子が激しいのに対し，*ыржаң-ыржаң /ırzhang-ırzhang/* はそれより緊張感を感じさせないより柔らかい様子の笑い方を表している。

以上のことをまとめて，接尾辞「閉鎖音」*-/q/*・*/k/* と「鼻音」*-/ng/* を伴うオノマトペは擬

態語にだけ使用され、接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/が付いたオノマトペが語彙的な意味以外に表す動作が激しく感じられるのに対し、接尾辞「鼻音」-/ng/が付いたオノマトペは表す動作が滑らかで柔らかく感じられるということが言える。このことから接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/は「激しさ」、接尾辞「鼻音」-/ng/は「滑らかさ」「柔らかさ」を表すと推測する。

7.2.4 「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/と「鼻音」-/l+ng/

本節では、「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/と「鼻音」-/l+ng/という接尾辞について述べる。上で見たように、接尾辞「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/と「鼻音」-/l+ng/は擬態語だけに出現するものである。これらの接尾辞は、意味的な面からいうと接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/と「鼻音」-/ng/に似た役割を果たしている。最初は、接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/と接尾辞「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/を考察する。

- (23) a. Енесінің көзі күлімдеп {ыржақ/ыржалақ} қағып бір кіріп, бір шығып жүр.
enesinig közi külimdep {ırzhaq/ırzhalaq} qaghıp bir kirip, bir shıghıp zhur.
お母さんは私を見て、にやりとしながら家に入ったり出たりしている。
- b. Ол ірі денемен {далбақ-далбақ/далбалақ-далбалақ} етіп жүгіріп келеді.
ol iri denemen {dalbaq-dalbaq/dalbalaq-dalbalaq} etip zhügirip keledi.
彼は太い体をして、のっしのっしと走ってくる。

(Сыздыкова, Хусаин 2001. p.199)

(23a) では、ыржақ /ırzhaq/の場合は ырж /ırzh/という語基に接尾辞「閉鎖音」-/q/が付き、ыржалақ /ırzhalaq/の場合は接尾辞「閉鎖音」-/l+q/が付加した形態である。両者とも「声を立てずに笑いをもらす様子」という意味を表すことで共通しているが、接尾辞「閉鎖音」-/l+q/を伴う ыржалақ /ırzhalaq/の方がより長い強調した動作を表す表現である。同様に、(23b)の далбақ-далбақ /dalbaq-dalbaq/と далбалақ-далбалақ /dalbalaq-dalbalaq/は、同じ「体重のあるものが、下手そうに動く様子」という意味を表すが、前者は急に終わる動作を表すのに対し、後者は動作に長さが感じられ、より強調されたものである。

次に、接尾辞「鼻音」-/ng/と接尾辞「鼻音」-/l+ng/を対照する。

- (24) a. Егор ішпей жемей қызара бөртеп, {ыржаң-ыржаң/ыржалаң-ыржалаң} етеді.
Egor ishpej zhemej qızara börtöp, {ırzhang-ırzhang/ırzhalang-ırzhalang} etedi.
エゴルは何も食わず飲まずに、にやにやしているばかり。
- b. Қарақұс {далбаң-далбаң/далбалаң-далбалаң} етіп аспанға қайта көтеріліп кетті.

qaraqus { *dalbang-dalbang / dalbalang-dalbalang* } etip aspangha qajta köterilip ketti.

黒色の鳥は羽をばたばたして空に飛んだ。

(Сыздыкова, Хусаин 2001. p.200)

(24a) では、接尾辞「鼻音」-/ng/が付いた ыржаң-ыржаң /ırzhang-ırzhang/と接尾辞「鼻音」-/l+ng/が付いた ыржалаң-ыржалаң /ırzhalang-ırzhalang/が同じ意味の語基に付加し、近似している意味を表す。しかし、接尾辞「鼻音」-/l+ng/が付加した語は、より動作に長さが感じられ、より強調した意味を表す。

以上のことから、接尾辞「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/と「鼻音」-/l+ng/は接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/と「鼻音」-/ng/と同様な意味を表すが、より強調したものになることが分かる。その故に、接尾辞「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/と「鼻音」-/l+ng/は「強調」といった意味を表すと推測する。Катембаева (1974) によると、接尾辞「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/と「鼻音」-/l+ng/は、接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/と「鼻音」-/ng/に/l/要素が加わったことによってできたものであるということである。にもかかわらず、接尾辞「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/と「鼻音」-/l+ng/それぞれ1つの接尾辞とみなされるのは通常であり、/l/は「強調」や「長くする」という接中辞として独立させられない。

興味深いことに、擬態語だけに使用される接尾辞においては「閉鎖音」-/q/・/k/と「鼻音」-/ng/と同様な接尾辞「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/と「鼻音」-/l+ng/が存在するが、擬音オノマトペに用いられる接尾辞「ふるえ音」-/r/には*-/l+r/という接尾辞が存在しない。

8. まとめ

本章では、日本語とカザフ語のオノマトペの構成要素と、それに関する下位類の相違点について考察した。その結果、両言語においても擬音と擬態オノマトペの間にはいくつかの相違点があることが明らかになった。

日本語オノマトペの相違点としては次のことが挙げられる。擬声・擬音のオノマトペには長音/R/を伴うものの比率が高いが、語中に促音/Q/・撥音/N/を伴うものの比率が極めて少ない。これに対し、擬態・擬情のオノマトペには/R/を伴うものが少数で語中に/Q/・/N/を伴うものの比率が圧倒的に多い。そして、その中で/CVQCVri/・/CVNVCVri/といったタイプのほとんどすべては擬態語である。

カザフ語オノマトペの場合は、接尾辞に関する相違が大きい。擬音オノマトペは接尾辞「ふるえ音」-/r/のみを伴うのに対し、擬態オノマトペは接尾辞「閉鎖音」-/q/・/k/、「鼻音」-/ng/、「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/、「鼻音」-/l+ng/を伴う。また、擬態語は他の下位類に比べて接尾辞を伴う比率が最も高く77%に至る。

以上のことを踏まえると、ある音を模倣する擬声・擬音オノマトペが形態的な面からみ

て，比較的単純であるのに対し，様子・状態を描写する擬態・擬情オノマトペは複数の構成要素を付加させ，より多く派生過程を受けるといえる。

第 6 章 意味的考察

1. はじめに

オノマトペの特徴の一つは、音と意味の間に有縁性が見られるということである。このように考えると、一般語彙に多く見られる多義語がオノマトペにはないはずであろう。しかしながら、多義性はオノマトペにおいてはごく普通に見受けられる現象である。本章では、日本語とカザフ語のオノマトペがどれくらい多義的かを明らかにすることを目的とする。詳しく説明すると、両言語のオノマトペの下位類においては、どれが最も多義的か、どれが最も単義的かということを考察し、得た結果を認知言語学的な立場から説明することを試みる。

2. 先行研究

2.1 角岡(2007)

角岡(2007)は、日本語オノマトペにおける擬音語・擬態語・比喩的用法について分析を行い、オノマトペ語彙にどの程度の多義性が見られるのかを検証した。その結論として、「擬音語は具体的で、擬態語は抽象的である。また、比喩的用法は、擬音語や擬態語の本来の意味より抽象的であり、擬音語と擬態語双方に関わるものである」ということを挙げている。

角岡(2007)は、分析する際、オノマトペを「擬音語／擬態語専門語彙」、「擬音語＋擬態語用法混成語彙」、「擬音語＋比喩的用法混成語彙」などに分ける。また、擬音語と擬態語はどれくらい多義的かを示すために、「擬音語／擬態語専門語彙」のみを取り上げ、それにおいて語義が1つしか定義されていない語が圧倒的に多数であるという点を示している。その結果が次のようなものである。擬音語では語義が1つしか定義されていない語が498語中476(96%)、擬態語では783語中619(79%)である。この結果から、擬音語も擬態語も語義が1つしか定義されていない語が非常に多いことが分かる。しかしながら、この分析からは擬音語と擬態語が、オノマトペ全数から見てどのように、ないしは、どれくらい多義的になっているのかということが分からない。また、それに関して「擬音語＋擬態語用法混成語彙」(1つの形式が擬音と擬態の語義を持つ語)のような語をどのように扱うべきかについて述べていない。このような方法では、日本語オノマトペがどの程度多義的かということ客観的に把握することはできないと思われる。

3. 両言語オノマトペの多義語の割合

第3章で既に説明した通り、両言語オノマトペの下位類の正確な語数を得るために、下位類それぞれにおいてはどの程度「単義語」「単一多義語」「多義混成語」が観察されるかを考察した。その考察結果を表2（日本語オノマトペ）と表3（カザフ語オノマトペ）にまとめた。ここではもう一度このデータを扱う。

表2 日本語オノマトペ

	単義語	単一多義語	多義混成語
擬声語	105 (73%)	4 (3%)	35 (24%)
擬音語	343 (52%)	33 (5%)	283 (43%)
擬態語	509 (49%)	198 (19%)	333 (32%)
擬情語	33 (26%)	7 (5%)	89 (69%)

表3 カザフ語オノマトペ

	単義語	単一多義語	多義混成語
擬声語	80 (75%)	7 (7%)	19 (18%)
擬音語	292 (79%)	7 (2%)	70 (19%)
擬態語	622 (75%)	153 (18%)	54 (7%)
擬情語	7 (70%)		3 (30%)

この表から両言語オノマトペはどの程度多義的であるかということを知ることができる。これを知るために以下のことをする。繰り返して述べるが、本稿では「多義混成語」は「擬音+擬態」「擬声+擬態」「擬態+擬情」などの意味の組み合わせがある語を指す。このような組み合わせの意味の間にはある関連性が見られることから「多義混成語」を「多義語」として見なしても誤りが無いであろう。しかし、第3章では詳しく議論したように、「単一多義語」は必ずしも「多義語」ではない場合がある。上では「単一多義語」を、1つの形式が2つ以上の意味を持つが、それは同一の下位類に属する「擬声+擬声」「擬音+擬音」「擬態+擬態」「擬情+擬情」のような語であるとした。ある形式が擬声と擬声の意味（「擬声+擬声」）、或いは擬音と擬音の意味（「擬音+擬音」）を持つ場合は、擬声と擬声の意味ないしは擬音と擬音の意味の間には通常関連性がない故に、ここでは、このような語を多義語ではなく「同音異義語」と見なす方が妥当である。本稿ではこのような語を意味ごとに区別して2つの異なる意味の語と見なすことにする（これについては5.1節で詳しく検討する）。一方、「擬態+擬態」「擬情+擬情」という「単一多義語」の場合は、常に2つの意味の間には何らかの関連性が存在するため「多義語」として見なしてもかまわないわけである。このことから、両言語オノマトペはどれくらい多義的かを明らかにするために、両言

語の「擬態語」と「擬情語」の「単一多義語」の語数それぞれを「多義混成語」の語数と合わせて「多義」に数える。しかしながら、「擬声語」と「擬音語」の「単一多義語」は「多義」的になっておらず、「同音異義」的であるため、それを意味ごとに区別して異なる語として「単義」の語数に足すことにする。得た結果を表にすると、次のようになる。

表 20 両言語オノマトペの単義と多義の割合

	日本語		カザフ語	
	単義	多義	単義	多義
擬声語	113 (76%)	35 (24%)	94 (83%)	19 (17%)
擬音語	412 (59%)	283 (41%)	306 (81%)	70 (19%)
擬態語	509 (49%)	531 (51%)	625 (75%)	211 (25%)
擬情語	33 (25%)	96 (75%)	7 (70%)	3 (30%)

両言語オノマトペの単義語と多義語の百分比をグラフ化してみると、偏在の様子がよく観察できる。

図 17 日本語のオノマトペ

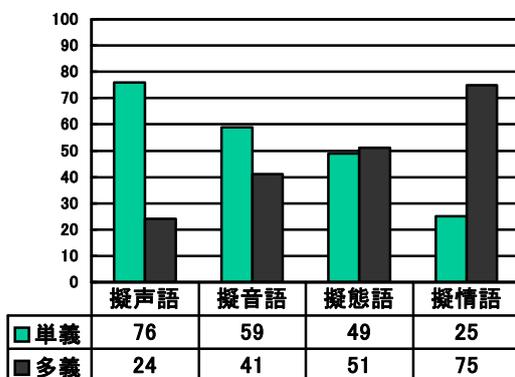
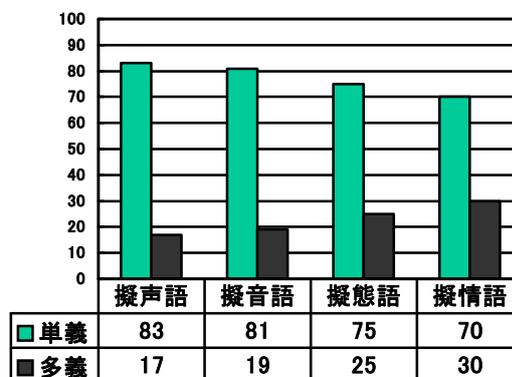


図 18 カザフ語のオノマトペ



これらの図から窺えるように、日本語とカザフ語のオノマトペは多義性という観点からかなり異なる状況になっているが、ある興味深い点で共通している。その共通点とは、両言語オノマトペにおいても、擬声語から擬情語へのような順番でオノマトペが多義的になっていくという傾向があるということである。ただし、日本語の場合はその偏在が急激的である。

両言語の違いについて言えば、次のことを強調することができる。日本語オノマトペは、擬声語・擬音語で、単義語数の比率が多義語数の比率を上回っているのに、対し、擬態語・擬情語では逆に「多義」的であるということである。これと比べて

カザフ語は、擬声語・擬音語・擬態語・擬情語それぞれの多義語数が 3 割を超えていないので、「単義」的であると言えるだろう。

以下では、両言語オノマトペの性質を明らかにしながら得た結果を説明する。

4. 両言語オノマトペの語義

前節で見たように、両言語の擬態オノマトペの方が、擬音オノマトペより多義的になっているという傾向が明らかになった。以下では、オノマトペはどのように多義的になっているのか、つまり、1つの形式は最大どれぐらいの語義を持つことができるのかということを探ることとする。また、これに関しては擬音・擬態のオノマトペの間には相違点がないかということ考察する。

4.1 日本語オノマトペ

本節では、日本語オノマトペについて述べる。日本語オノマトペの下位類の中ではどれが最も複数の語義を持つかを調べるために、「単一多義語」と「多義混成語」を分析した。得た結果を表 21 にまとめた。

表 21 日本語オノマトペの語義数

	単義語	単一多義語			多義混成語		
	1 義	2 義	3 義	4 義	2 義	3 義	4 義
擬声語	105	4			2		
擬音語	343	30	3		27	1	
擬態語	509	153	40	5	94	25	8
擬情語	33	7			3		

上記の表の数字は語数を表示し、「2 義」「3 義」「4 義」はある形式がどれぐらいの語義を持つかを意味している。例えば、表 21 から擬態語のある形式が最大（4 義）4 つの語義まで含むことが可能であることが分かる。このように、日本語オノマトペを分析した結果、擬態語が最も多数の語義を持つということが明らかになった。「単一多義語」と「多義混成語」においては擬態語は最大 4 義までである。それは例えば単一多義語の「とろとろ」と多義混成語の「ばらばら」のようなもので、それぞれは擬態の語義を 4 つまで持つ。「ばらばら」は意味 1 では擬音、意味 2~5 では擬態の意味を表す。

(1) 「とろとろ」(単一多義語)

Takehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味①】 M1 : The manner of becoming soft or glutinous in consistency; the state of

being soft or glutinous.

【意味②】 M2 : The manner in which flames burn slowly.

【意味③】 M3 : The manner of dozing off; the state of being drowsy.

【意味④】 M4 : The manner of a vehicle moving too slowly.

(2) 「ばらばら」(多義混成語)

Takehi, Tamori, Schourup (1996) 'Dictionary of Iconic Expressions in Japanese'

【意味①】 S : The sound made when a large number of relatively small, hard objects strike a surface repeatedly.

【意味②】 M1 : The state of being sparsely scattered about.

【意味③】 M2 : The state of something which should be intact being disorganized or broken into pieces.

【意味④】 M3 : The state of having no unity.

【意味⑤】 M4 : The manner of coming from or going to a place separately.

擬態語の次に擬音語が来る。擬音語は最大 3 までである。擬声語と擬情語は最も少なく、「単一多義語」と「多義混成語」においては 2 義のものしか見られない。

表 21 からもう一つ興味深いことが言える。それは、例えば日本語オノマトペを狭義レベルではなく、広義レベルで観察すると、上記の表 21 の結果が若干変わることである。つまり、擬声語と擬音語を合わせて「広義擬音語」としてみても、語義の数が変わらず、最大 3 義までであるが、擬態語と擬情語を合わせて「広義擬態語」としてみると、この場合は語義の数が 4 義ではなく 5 義まで増加するということである。以下の表 22 はそれをまとめて示したものである。

表 22 日本語広義レベルのオノマトペの語義

	多義混成語			
	2 義	3 義	4 義	5 義
広義擬音語	37	4		
広義擬態語	118	45	4	5

この表から「広義擬音語」は通常 2 義 (37 語) のものであるが、3 義のものが非常に少なく 4 語しか見られないことが分かる。これに対して「広義擬態語」は、2 義のものが 118 語、3 義のものが 45 語もみられた。また、4 義のものは 4 語、5 義のものは 5 語が得られた。ここで注目すべきことは、「広義擬態語」の 2 義から 3 義への語数の減少が「広義擬音語」と異なって激減的ではないということである。このことから擬態語においては、3 義のものが比較的多くあることが分かる。

4.2 カザフ語オノマトペ

次はカザフ語オノマトペである。カザフ語オノマトペがどれぐらいの語義を持つかを考察した結果、次の表 23 のような結果が得られた。

表 23 カザフ語オノマトペの語義数

	単義語	単一多義語			多義混成語		
	1 義	2 義	3 義	4 義	2 義	3 義	4 義
擬声語	80	7					
擬音語	292	7			4		
擬態語	625	135	17	2	14		
擬情語	7						

表 23 から、「単一多義語」の場合は、擬態語は最も複数の語義を持ち、最大 4 義までであるということが分かる。擬声語・擬音語は 2 義のものしか見られない。「多義混成語」の場合は、擬音語・擬態語しかないが、両方とも最大 2 義までである。カザフ語の擬情語は、数が少ないという理由も関係しているのかもしれないが、1 つの語形で 2 つの擬情の語義を表すものは見られない。

カザフ語オノマトペを広義レベルで考察しても、多義混成語は比較的単純で数少ないので上記の結果は変わらない。

日本語とカザフ語のオノマトペを対照すると、両言語の擬態語は複数の語義（最大 4 義）を持つことに対し、擬音語は通常 2 義までであるという共通点があることが分かる。しかしながら、両言語は「多義混成語」の点では大きく異なっている。日本語は擬態語が 4 義までであるが、カザフ語は 2 義のものしかない。

5. 意味の関連性から見たオノマトペ

以上では、両言語オノマトペを考察した結果、ある 1 つの形式が最大 4 つの語義まで持つことができるということが明らかになった。このようなオノマトペの場合、複数の語義の間には関連性があるかどうかについて以下で詳細に述べる。以下では、主に「単一多義語」のケースを考察する。

5.1 擬音オノマトペについて

本節では、擬音オノマトペについて議論する。同一の形式が複数の擬音の語義を持つ場合を考察しながら、擬音の語義の間には通常関連性がないという立場をとることにする。

最初、日本語オノマトペの「わんわん」を例にして説明する。

(3) 「わんわん」

Takehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味①】 S1 : The sound of a dog barking.

【用例】 ふたりは暗い道をとぼとぼ歩いていくと、軒下から犬がわんわんとほえたててきます。

【意味②】 S2 : The loud sound of weeping.

【用例】 負けず嫌いの金太は、近所に引っ越して来たガキ大将にやられたのが余程悔しいのか、さっきからわんわん（と）大声で泣き続けていて、泣き止む様子もない。

【意味③】 S3 : A loud echoing sound.

【用例】 トンネルの中で大声を出すとわんわん（と）響いて面白いので、学校へ行く子供たちは、大声を出しながらトンネルを通って行く。

【意味④】 M : The manner in which a large number of similar things flock to or gather in one place; the state of a large number of similar things gathered together in one place.

【用例】 アイドル歌手のサインや握手を求めて、女子学生が朝早くから、劇場にわんわん（と）押しかけている。

上記の辞書の記述から分かるように、「わんわん」は意味 1 と意味 2 では擬声の語義、意味 3 では擬音の語義、意味 4 では擬態の語義を持つものである。これらの擬音と擬声の語義はそれぞれ区別できるほど特定のである。しかしながら、これらの語義の間には何らかの関連性があると考えにくいであろう。例えば擬声の語義を観察すると、「わんわん」は意味 1 では犬の鳴き声、意味 2 では人の泣く声を表しているが、意味 2 は意味 1 から、あるいは逆に意味 1 は意味 2 から何らかの比喩に基づき拡張したとはまず考えられない。したがって、これらの意味の間には何らかの関連があるとは言えない。同じように、擬音の意味 3 の場合も言えるだろう。例えば「犬がわんわんと鳴いた」の「わんわん」と、「声はわんわんひびいた」の「わんわん」の間には関連性を見出すことが難しい。このような同一の形式が複数の擬音の意味を表しているということは、言語音には限りがあり、オノマトペに形態上の制限があるため、自然界や動物などの音を同じような言語音の形式で表さざるをえないからである。そうすると、もし同一の形式が複数の擬音の語義を持つ場合、これらの語義の間には関連性を見出すことが難しいため、このような語を同音異義語として見なし、その語義は互いに同音異義的な関係にあると見なしたほうが妥当であろう。

5.2 擬態オノマトペについて

前節では、1つの形式が複数の擬声・擬音の語義を持つ場合、このような語義の間には通

常、関連性がないということについて述べた。以下では擬態オノマトペについて考究し、同一の擬態の形式が複数の擬態の語義を持つ場合、その語義の間には何らかの関連性があるという考えをとることにする。

まず、日本語オノマトペを例にし、3つの擬態の意味を持つ「ぐにゃぐにゃ」を簡単に考察する。「ぐにゃぐにゃ」については阿刀田・星野(1995)では次のように解釈されている。

(4) 「ぐにゃぐにゃ」

阿刀田・星野(1995)『擬音語・擬態語使い方辞典』

【意味①】 M1：柔らかくて弾力の弱い物体が、力を加えられるままにゆがんだり折れ曲がったりねじれたりする様子。また、そうなっている様子。

- 【用例】 a. 細かいガラス管をぐにゃぐにゃとねじり曲げて作ったオブジェ。
b. 地震で線路がぐにゃぐにゃに曲がった。
c. 子供がゴムボートの空気をぬこうとして踏んだり押ししたりしているが、ぐにゃぐにゃゆがむばかりでなかなかしぼまない。

【意味②】 M2：張りがなく柔らかい様子。

- 【用例】 a. 生まれたばかりの子犬。両手につかむとぐにゃぐにゃと柔らかく温かい。
b. 赤黒くぐにゃぐにゃした豚の肝臓を切って焼いてくれたが案外いける。

【意味③】 M3：性格、態度、また決定事項が堅実堅固でない様子。

- 【用例】 a. かなり仕事できる男だったのに、悪い女に骨抜きにされ、ぐにゃぐにゃになっってしまった。
b. あいつのぐにゃぐにゃして煮えきらぬ態度、なんとかならないものかね。いらいらしてくる。

ここではまず、意味2から検討する。意味2の〈柔らかい〉という意味特徴は、「柔らかい」と言えるのは「ふんわりとしている状態のもの」に対してであって、「石」のような硬い物体には通常言えないということを踏まえたものである。また、〈張りがない〉という意味特徴は、力がない非常に弱くて柔らかいということである。意味1は、〈本来あるべき形が崩れて変化してくる様子〉を問題にしている意味であるが、力が加えられることによってその物体が簡単に柔らかくゆがんだり折れ曲がったりする様子を表す意味である。以上のことから、上記の意味1と意味2の間には〈ものが柔らかく動くさま〉という共通点が存在し、つまり、2つの意味が類似の関係にあるとうことが言えるであろう。意味3の「あいつのぐにゃぐにゃして煮えきらぬ態度…」などにおける「ぐにゃぐにゃ」の意味は〈人間が自信をなくし、体から力が抜ける状態にあるさま〉ということである。この意味3は意味2からメタファーという比喻によって拡張した意味であると考えられる。ここで意味2と意味3に共通する意味として、〈力がなく柔らかくなっている様子〉というスキーマを抽出することができる。

次に、カザフ語オノマトペの **жалт** /zhalt/ を見よう。жалт /zhalt/ は以下のような意味を表す。

(5) жалт /zhalt/

Болғанбаев, Дәулетқұлов (1999) ‘Қазақ тілінің сөздігі’

【意味①】 M1 : жалт беру /zhalt беру/ 物事の動作, 移動, 変化がすばやく行われる様子。

【意味②】 M2 : жалт ету /zhalt ету/ 光が瞬間的に点滅して見える様子。

【意味③】 M3 : жалт қарау /zhalt қарау/ 一回鋭く見る様子。

この辞書の記述から窺えるように、жалт /zhalt/ は 3 つの擬態の語義を持つオノマトペである。では、それぞれの意味に対応する例文を挙げながら詳しく説明しよう。

(6) a. Мен арба үстінен **жалт** беріп түстім де қалдым.

men arba üstinen *zhalt* berip tüstim de qaldım.

俺は馬車の上からさっとすばやく下りた。

(Сыздыкова, Хусаин 2001. p.275)

b. Мотоцикл баспалатып жетіп келгенде, құлын **жалт** берді жолдан.

Motoci:kl baspalatıp zhetip kelgende, qulın *zhalt* berdi zholdan.

バイクがうるさく来るときは、子馬はさっと道から去った。

(Ғ. Мұстафин, “Миллиционер”)

(7) Бір кезде найзағай **жалт** етті. (Сыздыкова, Хусаин 2001. p.275)

bir kezde najzaghaj *zhalt* etti.

急に稲妻の光がぴかっと光った。

(8) a. Кенеттен шыққан дауысқа Ботагөз “ә” деуге үлгермей, жүрісін кілт доғарып, **жалт** қарады.

Kenetten shıqqan dauısqa Botagöz “a” deuge ülgermej, zhürisin kilt dogharıp, *zhalt* qaradı.

急に出た音にボタゴズがあつという間もなくぱつと振り向いて、さっと見た。

(С. Мұқанов, “Жұмбақ жалау”)

b. Мен аузымды жиғанша болған жоқ, Жақаң кенет шыңғырып жіберді.

Жалт қарасам, жанып барады екен, - дейді Зейін.

Men auzımdı zhi:ghansha bolghan zhoq, Zhaqang kenet shingghırıp zhiberdi. *zhalt* qarasam, zhanıp baradı eken, - dejdi Zejin.

驚く間もなく、ジャカンが急に叫んだ。さっと見ると、(家が)燃えていたとジェイエンが言った。

(Ә. Сәрсенбаев, “Офицер”)

(6) では、жалт /zhalt/は意味 1「物事の動作，移動，変化がすばやく行われる様子」として用いられている。この例から意味 1 の жалт /zhalt/をもっと具体的に<急に速いスピードで動くさま>のように示すことができる。また，(7) の жалт /zhalt/は意味 2「光る様子」として用いられているが，ここでは瞬間的に光って消える様子に焦点がある。このことから，意味 1 と意味 2 の様子は<急に動くさま>という概念で共通していることが分かる。(8) の жалт /zhalt/は，意味 3「人の見る様子」として用いられている。この意味 3 の「見る様子」は意味 2 の「光る様子」から比喩的に拡張したものであると推測する。この場合は，意味 3 と意味 2 の共通する意味として<一瞬素早くおこる様子>が挙げられる。ここでまた，意味 1，意味 2，意味 3 の共通する意味として<急に動くさま>というスーパースキーマを抽出することもできる。

上で「単一多義語」の擬態語とその意味関係について簡単に考察した。調べた語の限りでは，擬音語と異なって擬態語が複数の語義を持つ場合，その語義は何らかの形で関連していることが分かった。したがって，このような相互関連している複数の語義を持つ擬態語を多義語としてみなしても誤解がないであろう。

以上の結果を踏まえると，次のことが言える。まず，両言語において，擬態オノマトペの方が擬音オノマトペより複数の語義を持つという傾向がある。このような結果は，擬態語が相対的に，同じ形式であっても多様な意味を有していることを示しているのである。そして，このような意味の間には通常関連性があるということである。このことから，擬態語は抽象性が高く 1 つの語形で多くの様態を示唆する，というように考えることができる。これに対して擬音オノマトペは 1 つの形式で複数の意味を持つことができず，2 義までのものが通常である。また，このような擬音の意味の間には何らかの関連性を見出すことが難しい。言い換えれば，一方の擬音の意味から何らかの比喩に基づき他方の擬音の意味が生じたとは考え難い。つまり，ある擬音語は別の 2 つの音を表す場合，これらの 2 つの音が偶然同じ音形を有しているということになる。このことから擬音語は抽象性が低く擬態語と比較するとより具象的な存在であると言えよう。

6. 多義混成語

図 17, 図 18 からは日本語とカザフ語オノマトペの多義性に関する状況がかなり異なっていることが窺える。このような結果の差に両言語の「多義混成語」の割合の相違が大きく関わっていると思われる。日本語の多義混成語は 1,591 語中 359 語 (22%) であるのに対し，カザフ語は 1,242 語中 70 語 (6%) のみである。以下では両言語の多義混成語を詳しく考察する。

6.1 日本語オノマトペの多義混成語

本稿で扱う「多義混成語」は「擬音+擬態」の意味上での組み合わせの種の語のみではな

く、例えば「擬声+擬態」「擬態+擬情」などの組み合わせの語も入る。日本語オノマトペの多義混成語の分析結果を表 24 にまとめた。ここでは、[S]は擬音 (sound) の語義、[V]は擬声 (voice) の語義、[M]は擬態 (mimetic) の語義、[P]は擬情 (psychomimes) の語義を表す。例えば 1 つの語が擬音・擬態・擬情の 3 種の語義を持つ場合、それを[SMP]という記号の組み合わせで示すことにする。

表 24 日本語オノマトペの多義混成語

		M		P		MP			
S		SM	126	SP	15	SMP	3	MP	38
		SSM	15	SSP	1	SSMP	1	MMP	13
		SMM	66	SSPP	1	SMMP	5	MMMP	1
		SSMM	2			SMPP	1	MMMMP	2
		SMMM	22			SMMMMP	1		
		SSMMM	1			SSMPP	1		
		SSSMM	1			SSMMP	1		
		SMMMM	2			SMMMMMP	3		
		SSMMMM	1						
V		VM	15						
		VVM	1						
		VMM	5						
VS	VS	7	VSM	3	VSP	1			
	VSS	1	VSSM	1					
			VVSM	1					
			VSMM	1					
合計	359	8		263		18		16	54

表 24 から次のことが言える。まず、[SM] つまり「擬音+擬態」の組み合わせの語と [MP] (「擬態+擬情」) の組み合わせの語が日本語オノマトペには最も多いということである。前者は、多義混成語 359 語の中 236 語 (66%)、後者は 54 語 (15%) である。その次は [VM] (「擬声+擬態」) の組み合わせの語で 21 語 (6%)、[SP] (「擬音+擬情」) は 17 語 (5%)、[SMP] (「擬音+擬態+擬情」) は 16 語 (4%) である。最も少ないのは [VS] (「擬声+擬音」)、[VSM] (「擬声+擬音+擬態」)、[VSP] (「擬声+擬音+擬情」) であり、それぞれ [VS] は 8 語 (2%)、[VSM] は 6 語 (2%)、[VSP] は 1 語 (0.2%) しかない。また表 24 から、論理的に可能な [VP] (「擬声+擬情」) や [VMP] (「擬声+擬態+擬情」)、或いは最も複雑な [VSMP] (「擬声+擬音+擬態+擬情」) という組み合わせの語は存在しないということが分かる。以上の結果を踏まえると、日本語オノマトペの多義混成語の [SM]

つまり「擬音+擬態」という組み合わせが最も多く存在することから最も典型的であると言ってもよいと思われる。

表 24 からもう一つのことを言える。それは、1つの語基が複数の語義を持つにつれ、そのような語の数は少なくなる傾向があるということである。例えば、[SM]（「擬音+擬態」）の組み合わせの欄を見ると、[SM] は 126 語があつて最も数多いが、語義の数が増えれば増えるほど語数が減っていることが明らかである。[SM]（「擬音+擬態」）の組み合わせの語の中でこのように最も複数の語義を持つ語は [SSMMMM] の 6 義の語であり、1つしかみられない。

もう一つ注目すべきことは、擬音語と擬声語の違いである。表 24 の [S] 欄を見ると、擬音語は [SM], [SP], [SMP] のように、擬態語や擬情語と 1 つの形式には数多く出現するが、擬声語は [VM] の組み合わせだけである。このような [VM] の組み合わせの語は 21 語しか見られない。では、なぜこのような結果が出たのだろうか。（次節で詳しく説明するが、）本稿では、「多義混成語」においては、擬態の意味が多くの場合擬音の意味から拡張するという立場をとる。このように表 24 の結果を踏まえて考えると、擬態と擬情の意味は、擬声ではなくて擬音の意味から拡張することが圧倒的に多いということが分かる。言い換えると、擬声の意味から普通意味拡張が行われにくいように考えることができる。それは、擬声語の方が擬音語より意味上ではもっと特定化されているからであろう。例えば、「がたがた」は擬音の「堅い物体が揺れ動いて周辺の堅い部分にぶつかって立てる音」という意味とともに「寒さや恐怖、興奮、驚がく、不安などの緊張で体が震える様子」などの擬態の意味も持つ。この場合は、擬音の意味から比喻によって擬態の意味が拡張すると仮定することが可能である。しかし、例えば「ひひーん」と「こけこっこー」それぞれは馬の鳴き声と鶏の鳴き声を表す擬声語であるが、これらは擬声の意味以外、他の擬態などの意味を表すことはないし、この擬声の意味からある比喻によってある擬態の意味が拡張するという考えにくい。

次は、擬態語と擬情語である。表 24 から、擬態の意味はよく擬音の意味と混成することが明らかである。このような [SM]（「擬音+擬態」）の組み合わせの語は 236 語で最も多い。擬情語の場合は、[SP]（「擬音+擬情」）の組み合わせより、[MP]（「擬態+擬情」）の組み合わせの方が多（54 語）。繰り返しになるが、本稿では擬態語は何らかの比喻にもとづき擬音語から拡張するという立場をとるが、擬情語も同様に擬音語から拡張すると考える。つまり、擬情語は心内に発声する擬似的な音を言葉にしたものと考えのが自然だと思われる。[SP] と [SMP] のタイプの混成語の存在はそれで説明できる。

6.2 カザフ語オノマトペの多義混成語

本節ではカザフ語オノマトペの多義混成語について検討する。上述したように、カザフ語オノマトペの多義混成語は全語数 1,242 語中 70 語（6%）しかない。これは日本語の 359 語（22%）に比べると、小数であるということが分かる。カザフ語オノマトペの多義混成語

の分析結果を以下の表 25 にまとめる。

表 25 カザフ語オノマトペの多義混成語

		M		P		MP			
S		SM	31			SMP	1	MP	2
		SSM	3						
		SMM	13						
		SSMM	1						
V		VM	1						
VS	VS	16	VSM	2					
合計	70	16		51			1		2

この表からカザフ語オノマトペの場合は、[SM]（「擬音+擬態」）の組み合わせのものが最も多いことが明らかである。このようなものは 48 語（68%）が得られた。その次は [VS]（「擬声+擬音」）で 16 語（23%）が得られた。残りのものは非常に少なく、[VSM] は 2 語、[MP] は 2 語、[VM] は 1 語、[SMP] は 1 語である。

表 25 からカザフ語オノマトペの多義混成語は比較的単純であることが分かる。このことは、カザフ語オノマトペにおいては、同一の形式は複数の語義を持たないということであろう。つまり、擬音と擬態などの意味が混成しないと言える。カザフ語オノマトペの特徴の一つは、形態的な面から見ると、広義レベルの擬音語と擬態語の間にははっきりとした境界線があるということである。それは、前章では詳しく述べたように、擬音オノマトペが通常、語基そのままであるか、あるいは接尾辞「ふるえ音」-r/を伴う形であるのに対し、擬態オノマトペは語基が接尾辞「閉鎖音」-q/・/k/、「鼻音」-ng/などを伴うという区別である。カザフ語の擬音語は、例えば күмп /kümp/ 「重い物が水に落ちて沈むときの音」のように語基がそのまま使用されているのが通常であり、 күмбір /kümbir/ 「堅くて重量物や金属などが衝突するときに出る響音、震動する音」のように、接尾辞「ふるえ音」-r/を伴う語も見られる。この接尾辞「ふるえ音」-r/を伴う語は擬態語として使用される場合があるが、例外的な存在と考えられるほど非常に稀である。これに対して、擬態語は語基そのままではなく、接尾辞「閉鎖音」-q/・/k/、「鼻音」-H /ng/などを伴うことが一般的である。これらの接尾辞を伴う語は擬態語としてのみ使用される。

このように、カザフ語の広義レベルの擬音語と擬態語は形態的にはっきりと区別されている。カザフ語の多義混成語の少なさは、このようなはっきりとした境界線が擬音と擬態のオノマトペに存在することで説明されるであろう。

7. オノマトペにおける意味拡張

以上で説明したように、同一の形式が複数の擬音の語義を持つ場合、このような語義の間には通常、関連性がないが、同一形式が複数の擬態の語義を持つ場合、このような語義の間には関連性がみられるということである。本稿では、ある形式が擬音と擬態の語義を持つ場合は、これらの語義の間には関連がみられ、擬態の語義は何らかの比喻によって擬音の語義から拡張するという立場をとる。

7.1 多義混成語と意味拡張

本節では、両言語オノマトペの多義混成語の意味拡張について議論する。多義混成語の調査結果から、両言語オノマトペにおいては [SM] (「擬音+擬態」) の組み合わせのものが最も多いということが明らかになった。以下、[SM] の様々なケースを考察する際、同一の形式が擬音と擬態の語義を持つ場合は、このような語義の間には関連があるという立場をとることにする。具体的に説明すると、擬態の語義は何らかの比喻に基づき擬音の語義から拡張するという見方である。擬態の語義が擬音の語義から拡張することは、擬音語が具象的なものになっているのに対し、擬態語は抽象性が高くて 1 つの語形で複数の様態を示唆するものであるからである。つまり、意味拡張は具象的なものから抽象的なものへ拡張することが通常であり、その逆は不可能であろう。

最初は、[VSM] という 3 つの語義が定義されている「ぶーぶー」を例にして説明する。Takehi・Tamori・Schourup (1996) には「ぶーぶー」については以下のように解釈される。

(9) 「ぶーぶー」

Takehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味①】S1 : Loud, usually low-pitched, sonorous sounds, such as those made by a car’s horn.

【用例】：子供におもちゃのラッパを買って来てやったら、気に入ったらしく、やたらぶーぶー (と) 吹き鳴らすので、うるさくてかなわない。

【意味②】S2 : The sound of a pig grunting.

【用例】：普通、豚はぶーぶー (と) 鳴くものだが、身の危険を感じた時は「きーきー」というような悲しそうな声で鳴くそうだ。

【意味③】M : The manner of complaining or expressing one’s dissatisfaction repeatedly and bitterly.

【用例】：いきなり「今から試験をする」と言ったら、生徒は一斉にぶーぶー文句を言い始めた。

以上の辞書の記述から分かるように、「ぶーぶー」は意味 1 では擬音語として「太く低い連続音」、意味 2 では擬声語として「豚の鳴き声」、意味 3 では擬態語として「不満を盛んに言う様子」を表す。上述したように、同一形式の別の 2 つの擬音の意味の間には関連性を見出すことが難しい。例えば「ぶーぶーとクラクションを鳴らす」の「ぶーぶー」と「豚がぶーぶーと鳴く」の「ぶーぶー」は全く異なる性質の音を表し、間には何らかの関連性があるとは考えられない。しかし、擬態語としての意味 3 の「不満を盛んに言う様子」という意味の場合も同様な説明がよいであろうか。ここでは意味 3 を表す「ぶーぶー」は同音異義語として別にするという解釈を取らず、意味 3 の「不満を盛んに言う様子」は意味 1 の「太く低い連続音」と関連しており、多義的になっていると見なすことにする。以下の例を見よう。

- (10) a. ゆっくり走っていると、後ろからすぐにぶーぶー (と) クラクションを鳴らすドライバーがいる...
- b. 祭りの行列の出発。山伏のほら貝の音がぶーぶーと鳴り響く。
- c. 子供の走り回る音だけでなく、夜 10 時過ぎても洗濯機を回している音が聞こえるし、携帯電話を床に置いているみたいで毎日何度もバイブのブーブーという音がうるさいのです。

(<http://www.queserastyle.com/life/sumai/tonarikinjo/47803/>)

- (11) a. いきなり「今から試験をする」と言ったら、生徒は一斉にぶーぶー文句を言い始めた。
(Takehi, Tamori, Schourup 1996 p.163)
- b. こんな時間に友人を連れて帰ったら女房にぶーぶー言われてしまった。

(阿刀田・星野 1995. p.101)

(10) の「ぶーぶー」は「太く低い連続音」を表すが、(11) では「不満を盛んに言う様子」を表す。これらはまったく異なる意味を表すが両方とも<うるさい>というイメージを与えることで共通している。ここでは「ぶーぶー」の意味 3 「不満を盛んに言う様子」は意味 1 の「太く低い連続音」からメタファーによって拡張したと推測できる。このことを具体的に次のように示すことができる。意味 1 と意味 3 は<うるさい>という概念で共通しており、意味 1 <低く不快な音が鳴りやまない>→意味 3 <不満で不快な声をあげる様子>のように意味の転移が行われると推測する。

以上のことを踏まえて次のことが言える。「ぶーぶー」は 3 義を持つ語であるが、擬態の意味 3 はメタファーによって擬音の意味 1 から拡張すると解釈するのが可能なため、多義的になっている。それに対して擬声の意味 2 は、意味 1 と意味 3 と関連性が見られないため、同音異義語と見なしたほうがよいかもしれない。

同様に、カザフ語オノマトペの場合も擬態の意味は擬音の意味から拡張するという解釈

が可能である。ここでは具体的な例として、非反復形の *тарс* /tars/と反復形の *бұрқ-бұрқ* /burq-burq/という語を挙げて考察しよう。最初は *тарс* /tars/である。辞書の記述によると、*тарс* /tars/は次の意味を表す。

(12) *тарс* /tars/

Болғанбаев, Дәулетқұлов (1999) ‘Қазақ тілінің сөздігі’

【意味①】 S : Резкий стук, бряк, хлопок. ~ет- резко стукнуть, сильно хлопнуть. 「二つの硬い物体が衝突するときの大きい音」

【意味②】 M1 : Вдруг, внезапно, сразу. 「動作、行動などがためらわず、急に行われる様子」

【意味③】 M2 : Плотно, крепко. 「隙間やずれがなく、強く密着する様子」

この辞書の記述から、*тарс* /tars/は意味 1 では擬音語、意味 2, 3 では擬態語として使用されている。次の例 (13) では *тарс* /tars/は意味 1 の擬音語、(14) では意味 2 の擬態語、(15) では意味 3 の擬態語として用いられている。

(13) a. Терезеге бірдеме қатты тиып тарс еткен дыбыс естілді.

Terezege birdeme qatti ti:ıp *tars* etken dibis estildi.

窓に何か強く当たってどんという音がした。

(Сыздыкова, Хусаин 2001. p.785)

b. Сүгір есікті бар күшімен тарс етіп жауып, жоқ боп кетті.

Sügir esikti bar küshimen *tars* etip zhaup, zhoq bop ketti.

スグルはドアをすべての力でどんと閉め、去ってしまった。

(14) a. Боран тарс тына қалды. (Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.867)

boran *tars* tına qaldı.

風が急にやんだ。

b. Қазырғана айтылған нәрсені тарс етіп ұмытып қалдым.

qazırghana ajılghan narseni *tars* etip umıtıp qaldım.

先だけ言われたものを急に忘れてしまった。

(15) a. Мылтықтың гүрс еткен дауысынан құлағым тарс бітіп қалды.

mltıqtıng gürs etken dauısınan qulaghım *tars* bitip qaldı.

銃声の大きい音から耳は強く塞いだ。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.867)

b. Көзін тарс етіп жұму. (Сыздыкова, Хусаин 2001. p.785)

Közin *tars* etip zhumu.

眼をぱっと閉じる。

tapc /tars/の場合も、擬態の意味が擬音の意味から拡張するという解釈が可能である。ここでは、意味 1 からメタファーによって意味 2 と意味 3 の転移が行われたと推測できる。意味 1 は様々な物体が衝突した結果生じた音を表す語であるが、具体的に何の音なのかを決定することが難しいため、その性質を<急に、大きくて強く聞こえる音>というふうに決定付ける。tapc /tars/の意味 1 から意味 2 への意味の転移を次のように示すことができる。

(16) 意味 1<急に大きくて大きい音が起こる>→ 意味 2<急に起こる>

つまり tapc /tars/の意味 1 と意味 2 の転移の場合、<急に行われる>という概念が共通点で焦点になる。それでは、意味 3 の「隙間やずれがなく、強く密着する様子」という用法についてはどのように説明できるだろうか。この場合は、意味 1 と意味 3 の関係を (17) のように示し、<強い>という概念に焦点がかわると推測する。

(17) 意味 1<急に大きくて大きい音が起こる>→ 意味 3<強くあるものが密着する>

次に、反復形 бұрқ-бұрқ /burq-burq/について検討する。辞書においては бұрқ-бұрқ /burq-burq/は以下のように解釈される。

(18) бұрқ-бұрқ /burq-burq/

Болғанбаев, Дәулетқұлов (1999) ‘Қазақ тілінің сөздігі’

【意味①】 S : подраж. звуку сильного кипения и пр. 「蒸気やガスが液体の表面に連続して噴出したり沸き立ったりする音」

【意味②】 M1 : Сильно кипеть, закипать. 「煙や雲などが大量に発生し、勢いよく立ちのぼる様子」

【意味③】 M2 : Не на шутку сердиться, гневаться. 「ひどく腹を立てる様子」

(18) から分かるように、бұрқ-бұрқ /burq-burq/には擬音語と擬態語としての用法がある。以下の (19) は意味 1, (20) は意味 2, (21) は意味 3 の例である。

(19) a. Сүт бұрқ-бұрқ етіп қайнап жатыр. (Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.64)
süt burq-burq etip qajnap zhatır.

牛乳はぶつぶつと沸き立っている。

b. Астындағы шоқтың қызуы етіп, бұрқ-бұрқ қайнаған бір шәйнек [...]
astındaghı shoqtıng qızui etip, burq-burq qajnaghan bir shäjneк [...]

下にはタキギが燃え、ポットはぶつぶつという音をした [...].

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.65)

- (20) a. Әлдеқайда балшықты орға қызымырлап, машина бұрқ-бұрқ түтін атып,
патыр-патыр үн қатады. (Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.65)
äldeqajda balshıqtı orgha qızımırлаp, mashi:na burq-burq tütin atıp,
patır-patır ün qatadı.
どこかで車がもくもくとガスを出して、ぶーぶーという音をする。
- b. Аяқтарының астында ойылып қалған қалың қар бұрқ-бұрқ борады.
Ayaqtarınıng astında ojılıp qalghan qalıng qar burq-burq borajdı.
足元ので積もった雪は風がふくともくもくと舞上がる。
(М. Әуезов, “Қарагөз”)
- (21) a. Борандай бұрқ-бұрқ етіп долданғанда, алты қанат ақ орда үй шайқалды.
borandaj burq-burq etip doldanghanda, altı qanat aq orda üj shajqaldı.
彼がふんふんと怒ったときに、家がまるで揺れたように感じた。
(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.65)
- b. Жын ұрғандай бұрқ-бұрқ етіп ұрысты.
zhın urghandaj burq-burq etip urıstı.
彼が狂ったかのようにふんふんと怒った。

бұрқ-бұрқ /burq-burq/の場合も意味の拡張がメタファーという比喻によって行われ、意味 2 と意味 3 は意味 1 から拡張するという解釈できる。(19) でみられるように、意味 1 は「牛乳」「お湯」などの液体が沸き立っている音、具体的にお湯が沸き立っているときの＜複数の気泡や水泡が次々に出て破裂する音＞を描写する。意味 2 は、ガスや煙がまるで沸き立っている気泡のように次々に出る様子を描写するが、ここではガスや煙の立ちのぼる様子に焦点があり、＜次々に出現する＞ということ共通していると思われる。このことを、次のように示す。

- (22) 意味 1 <複数の気泡が次々に出て破裂する音> → 意味 2 <柔らかいものが盛り上がるように次々に出現する様子>

次に、意味 1 から意味 3 への拡張について述べる。この場合は、意味 1 と意味 3 の間の共通するところは若干異なってくる。上述したように、意味 1 は沸き立っているお湯の音を描写するが、意味 3 はその沸き立った様子に焦点をおき、興奮して気が荒くなる状態を表す。これらの 2 つの意味は＜興奮する状態＞ということ共通し、意味 1 <どンドン気泡が出て沸き立つ音> → 意味 3 <興奮して (沸き立つように) 怒る様子> のように意味の転移が行われる。

以上では、擬態の語義が擬音の語義から拡張する例を見た。次に、日本語の [SSMMP] の「じりじり」を例にとり、擬情の語義を含むケースを考察する。

(23) 「じりじり」

Takehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味①】 S1 : A muffled buzzing sound, as of an alarm clock ringing.

【意味②】 S2 : A sizzling sound, as of oil or hair burning.

【意味③】 M1 : The manner in which the sun beats down on a hot sunny day.

【意味④】 M2 : The state of being impatient.

【意味⑤】 M3 : The manner of progressing a little at a time.

辞書の記述に見られるように、「じりじり」は5つの語義を持つ語である。その意味1と意味2は擬音を表し、意味3, 5は擬態、意味4は擬情の意味を表す。意味1と意味2の「じりじり」が2つの性質の異なる音を表すことは明らかである。これらの擬音の語義の間には何らかの関連性を見出すことが難しいであろう。つまり、意味2「ちぢれるように燃え焦げる連続音」は意味1「ベルの連続音」から、あるいは逆に意味1は意味2から何らかの比喩に基づき拡張したとは考えられない。したがって、これらの意味の間には何らかの関連があるとは言えない。しかしながら、意味3「日光が連続して照りつける様子」、意味4「持ちきれずに気持ちがいらだつ様子」、意味5「少しずつ刻むように迫り進む様子」についてはどのように解釈できるのであろうか。

(24) ろうそくがじりじりと音を立てて燃え尽きた。

(25) 真夏の太陽が、猛暑の中農作業に汗を流している老人を、容赦なくじりじり(と)照りつけた。

(26) 約束の時間に遅れているとき、せつかく乗ったタクシーが信号待ちをしたりするとじりじりする。

(27) 敵軍が砦に向かってじりじり(と)攻め寄せて来ていた。

(阿刀田・星野 1995. pp.219-220)

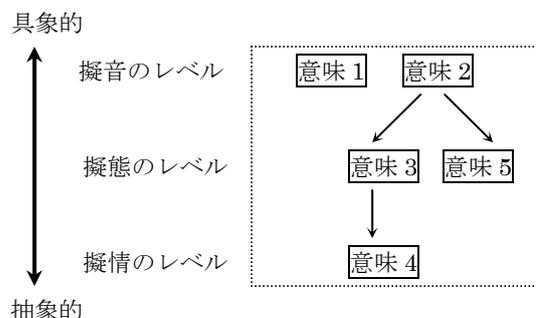
(24) の「じりじり」は意味2「ちぢれるように燃え焦げる連続音」のものであるが、(25) の「じりじり」は意味3「日光が連続して照りつけるさま」を表すものである。ここでは、意味3は意味2からメタファーに基づき拡張したと解釈することが可能である。つまり、意味2は燃えこげる時の音を表すが、意味3は太陽が熱く照りつけて身体の一部が焼き焦がされるように熱く感じられるということを問題にする意味である。ここでは感覚に焦点があり、意味2と意味3は「熱い」というイメージで共通している。このように意味拡張は、意味2<ものが焼ける音がする>→意味3<焼かれるように熱い>のように行われると推測する。次は、意味4について検討する。(26)「じりじり」は強い焦燥を感じる様子を表している擬情語である。この意味4は具体的に「ところがだんだん苛立ってきて、落ち

着かない様子」を表しており、意味 3 からメタファーによって拡張したものだと考えられる。このことを次のように示すことができる。意味 3<焼き焦がされるように熱く感じられるさま>から、意味 5 は<心が（焼き焦げるように）いらだって落ち着かないさま>へのように意味の拡張が行われる。(27) の意味 5 は「少しずつ刻むように迫り進む様子」を表すが、この意味 5 は意味 2「ちぢれるように燃え焦げる連続音」からメタファーによって拡張した意味であると考えられる。ここには意味 2 の燃える様子に焦点があり、より具体的に説明すると、「ものが少しずつ燃え焦げる音」を表すと解釈することが可能である。加えて、意味 2 に関して飛田・浅田（2002）では「焼けにくい物が少しずつ焼ける音や様子を表す」のような解釈があり、(28) のような例とその説明が載せられている。

- (28) a. ろうそくがじりじり燃える。(少しずつ燃える)
 b. ろうそくがじーじー燃える。(小さな音がする)

この例から「じりじり」は「じーじー」と比べると、「少しずつ燃える」という暗示の意味があるということが分かる。つまり、意味 2 と意味 5 は<少しずつ行われる>ということで共通しており、意味 2<ちぢれるように少しずつ燃え焦げる音>から、意味 5<少しずつ進行する様子>へというように意味の転移が行われると解釈することが可能である。以上のことをまとめると、「じりじり」の意味の拡張は以下の図 19 のように示すことができる。

図 19 「じりじり」の意味拡張



ここでは、太い矢印は具象性と抽象性を示すものであるが、小矢印は意味の拡張を示すものである。図 19 から、擬音の意味 2 から擬態の意味 3 と意味 5 が拡張したということが分かる。更に、擬情の意味 4 は擬態の意味 3 から転移される。上では、1 つの形式は別の 2 つの擬音の意味を持つ場合、その擬音の意味の間には関連がないことが通常であるが、それと異なって擬態語は 5 つの意味まで持つことができ、その意味の間には何らかの関連があるということについて述べた。このことから、擬音語は具象的であるのに対し、擬態語は抽象性が高い存在であると推測した。このように考えると、意味拡張は具象的なものから抽象的なものへというように行われることが妥当になる。その逆は不可能であろう。言

いかえると、擬態語は抽象性が高いため、より具象的である擬音語から拡張されると考えるのが自然である。また、図 19 で示されているように、擬情語は最も抽象性の高いものである。擬情語が抽象性の最も高いものであるということは、擬情語の性質にあり、外側の様態を表す擬態語と異なって人の内面心理を表すからであろう。

7.2 構成要素における意味拡張

前節で見たように、意味拡張は具象的なものから抽象的なものへというように行われ、擬態の意味は擬音の意味から、また、擬情の意味は擬態の意味から拡張するのが普通である。同様な現象は、日本語オノマトペの語末に起こる構成要素においても見られる。ここでは、特に撥音/N/の場合は、擬音語・擬態語・擬情語それぞれに起こることによって表す意味が異なっているが、擬態語と擬情語に起こる撥音の意味が擬音語の撥音から拡張するという考え方も適切である。以下では、撥音/N/に焦点を当てて意味拡張を考察していく。

7.2.1 先行研究と問題点

田守・スコウラップ (1999) が、日本語オノマトペの語末に付加する要素については、促音/Q/は「急な終わり方」と「瞬間性」、撥音/N/は「共鳴」、/ri/は「完了」と「ゆったりした感じ」といった意味を表すと述べている。ここで問題になるのは撥音である。撥音は基本的には「共鳴」を表し、共鳴可能な擬音オノマトペに用いられ、擬態オノマトペには用いられないと考えられている (田守 2002 : 89)。しかしながら、「ぐるん」「きょろん」「ころん」「どろん」「くにゃん」などのような様子を表す擬態オノマトペの場合はどのような意味を表すのであろうか。以下では、撥音を伴う擬音語・擬態語・擬情語を区別して考察を行う。

7.2.2 撥音/N/の意味

本節では、擬音語・擬態語・擬情語を区別して撥音が表す意味を明らかにする。最初は以下の例を見よう。

(29) 車のドアを閉める音が { *ばたっ / *ばたり / ばたん } と響く。

(29) では、撥音がついた「ばたん」は適切であるが「ばたっ」は不適切である。ここでは「ばたっ」という言葉が一瞬におこる音を表す場合、その促音の調音の完全な閉止は音の突的な停止をもたらし、つまり、無声閉鎖音の前の母音は短音化され、短く切り取られたような終わり方をするという印象を与えると考えられている (田守・スコウラップ 1999 : 123)。これと異なって、撥音の場合、呼気が完全に止まらず、鼻から出続けるということを体内感覚として捉えたものが、音の「時間的継続」、つまり時間的長さという意味に置き換えられて表れていると考えることができる。擬音オノマトペの場合は、撥音にはこのような時間的長さが見られる故に、それが音の「共鳴」とよく呼ばれているのだろう。次に擬態語に

現れる撥音を観察する。まず、動作や行動を表すオノマトペに付加する撥音を見よう。

- (30) a. (ぬいぐるみの丸っこい) 人形が{ころっ／ころり／ころん}と動いた。
b. (人間の形をしている) 人形が{ころっ／?ころり／??ころん}と動いた。

例(30b)では、瞬間的な動作や急に終わる動作を表す「ころっ」のみが適切であることが分かる。球体状の物が動くと動作が連続的に続くのが印象的であるが、それと違って細長い物が倒れる場合、動作がどこか途中で止まってしまうのが普通である。つまり、球体の物の場合と同じく、さらに続かないのである。このように考えると、途中でどこかで急に止まる動作を表すのは、瞬間的な動作や急に終わる動作を表す促音の「ころっ」が最も自然である。「ころり」「ころん」が表す動作が途中で止まらず、さらに続くという印象が強い。

- (31) パンダはまるい体で{*ごろっごろっ／ごろんごろん}と二回でんぐり返し。

回転が繰り返される場合は、動作が連続的であり、完全なでんぐり返しが前提とされる。促音を用いてはこのような動作を表すことができないため、連続を表す「*ごろっごろっ」といった反復した異形も存在しない。このように促音の「ごろっ」は瞬間的な動作や急に終わる動作を表すと言えるであろう。それと違って、二回転の連続的な動作を表すときは撥音を伴う「ごろん」が適切である。これは、撥音は一瞬の動作や変化ではなく、さらに「勢いよく続く」という印象を与えるからである。以上のことから「ころん」「ごろんごろん」などの動作や行動を表すオノマトペの撥音は「勢い」を表すと推測する。

続いて、様態・状態を表すオノマトペの撥音である。

- (32) a. ビルの谷間を縫って流れる運河は{?どろっ／*どろり／どろん}とよどんで流れがないように見える。
b. 卵の白身を{?だらっ／*だらり／だらん}と小皿に落とし、黄身だけ殻に残す。
c. 型から抜いたゼリーはお皿の上で{*ぷりっ／*ぷりり／ぷりん}と揺れた。

(32)では、撥音が付いた「どろん」「だらん」は液体の様態を表し、促音ないし/ri/と置き換えることが出来ない。また、(32c)の「ぷりん」はゼリーの揺れる様態を表し、促音と/ri/がついた「ぷりっ」「ぷりり」は不適格である。「どろん」と「だらん」はそれぞれ液体の柔らかくてねばねばする様子、「ぷりん」はゼリーの弾む様子を表していることからこれらの擬態オノマトペの撥音が「柔軟性」を表すと推測する。

撥音はあり様を表すオノマトペにも起こる。

- (33) a. 菩提樹は丘の上に今でも{*ぼっつ／*ぼつり／ぼつん}と立っている。

- b. 小石が{*ころっ／*ころり／ころん}とある。
 c. {ころっ／ころり／*ころん} と {変わる／死ぬ／忘れる}。

(33b) では「ころん」は「ある」という存在動詞と用いられるが、「ころっ」「ころり」は違和感を覚えるそうである。逆に例 (33c) では、「ころん」は不適切であるのに対し、「ころっ」「ころり」は適切になっている。これらの例から、撥音がついた「ころん」は「変わる」という変化動詞と「死ぬ／忘れる」という瞬間動詞と用いられないが、促音と/ri/がついた「ころっ」「ころり」は違和感なく用いられることがわかる。

- (34) a. {ころっ／ころり／*ころん}と死んだ。
 b. {*ころっ／*ころり／ころん}と死んでいる。

「死ぬ」という動作はどこから始まるかどこで終わるかが分からないし、一瞬の出来事である。(34a) では、促音と/ri/を伴う「ころっ」と「ころり」が「死ぬ」という動詞と用いられるのは、いずれとも突然・一瞬の変化を前提とする語であるからということが分かる。しかしながら、(34b) では、結果残存のアスペクト形式「している」と共に用いられるのは「ころん」だけである。それは「長く続く様子」を前提とする語であるからであろう。このような撥音は「あり様」を表すと推測する。

最後に、擬情語の語末に起こる撥音について述べる。以下の例を見よう。

- (35) a. 毎晩の接待でアルコールが抜けず、頭が{*がっ／がん}割れそうに痛む。
 b. 親子の対面番組を見て胸が{きゅっ／きゅん}と痛くなった。
 c. 立ちあがろうとしたら腰に{ずきっ／*ずきり／ずきん}と痛みがきた。

(35) の語は感情・感覚を表す擬情語である。ここでは、促音の「きゅっ」「ずきっ」は一瞬に走る痛みを表すが、撥音のものは「痛みが響くようにはしる」を表す。このことから感覚を表す擬情語の撥音は「響き」を表すといえよう。以上のことをまとめると、撥音が表す意味を次のように示すことができる。

(36) 日本語オノマトペの語末に起こる撥音/N/

- 【意味①】 擬音語：音の「共鳴」
- 【意味②】 擬態語：動作の「勢い」
- 【意味③】 擬態語：様態の「柔軟性」
- 【意味④】 擬態語：状態の「あり様」
- 【意味⑤】 擬情語：感情・感覚の「響き」

7.2.3 撥音/N/の意味拡張

本節では、撥音が拡張により、意味 1 音の「共鳴」から意味 2 動作の「勢い」、意味 3 様態の「柔軟性」、意味 4 状態の「あり様」、意味 5 感情・感覚の「響き」といった意味へと転移したことを示す。

まず、意味 1 音の「共鳴」と意味 2 動作の「勢い」について検討する。ここでは、意味 2 は意味 1 からメトニミーという比喻によって拡張したという解釈が可能である。それを以下のように示すことができる。

(37) メトニミー：〈ある音が長く続く〉と〈ある動作が長くて勢いよく行なわれる〉

ここでは、「二つの事柄が同時に生じる」という類のメトニミーである。例えば、「ころんころん」という語で説明すると、「ころんころん」は転がる音と同時に転がる様子を表すことに基づき、意味の拡張が行われると考えられる。

次は意味 3 様態の「柔軟性」である。ここでは、意味 3 は意味 2 からメトニミーによって拡張すると解釈することができる。

(38) メトニミー：〈ある動作が長くて滑らかに行なわれる〉と〈あるものが柔らかい〉

ここでは、「ぐにゃんと大きくゆがんだ」と「ぐにゃんぐにゃんとした豚の肝臓」で説明すると、動作が様態を表すことになり、「二つの事柄が連続して生じる」というメトニミーの解釈が可能になる。

次に、意味 4 状態の「あり様」について検討する。意味 4 は意味 2 からメトニミーによって拡張する。

(38) メトニミー：〈ある動作が長くて滑らかに行なわれる〉と〈ある状態が長く続く〉

この場合、「ころんと転がる」と「ころんとある」で見られるように、意味が転がる動作から状態に変わり、同じく「二つの事柄が連続して生じる」というメトニミーの解釈ができる。

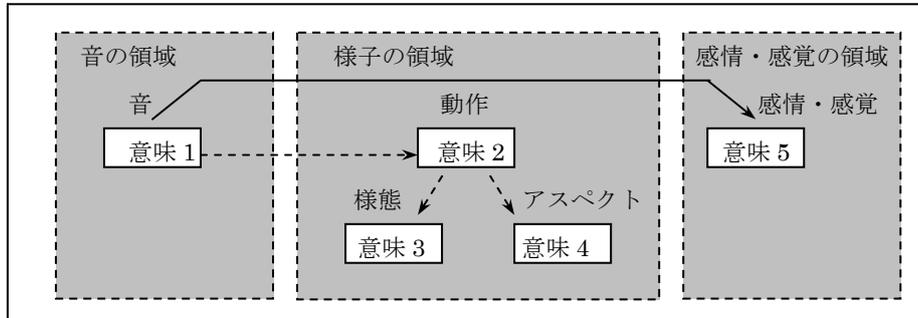
最後に、意味 5 感情・感覚の「響き」である。意味 5 は意味 1 からメタファーによって拡張する。それを次のように示す。

(39) メタファー：〈ある音が長く続く〉→ 〈ある感情・感覚が響くように長く続く〉

ここでは「がんがん」という語で説明すると、次のようになる。「がんがんという音がする」と「がんがん頭が痛む」では、痛みという難しい概念をよりやさしい（音の）概念で例えられる。その共通する意味として〈長く続く〉というローカルスキーマを抽出する。以上の

ことをまとめると、撥音の意味構造を次の図 20 のように示すことができる。

図 20 撥音/N/の意味構造



ここでは、点線の矢印はメトニミーに基づく拡張を表すが、実線の矢印はメタファーに基づく拡張を表す。また、点線の 3 つの四角それぞれは、音の領域、様子の領域、感情・感覚の領域を表す。図 20 から撥音が、具象的な音の概念領域から、様子の概念領域に拡張され、さらに、より抽象的な感情・感覚という概念領域の意味に拡張することが分かる。

先行研究から、促音は「急な終わり方」「瞬間性」といった意味、/ri/は「完了」「ゆったりした感じ」といった意味を表すことが分かる（田守・スコウラップ 1999:28）。本稿では、撥音が音の「共鳴」以外に、動作の「勢い」、様態の「柔軟性」、状態の「あり様」、感情・感覚の「響き」という意味を表すと推測した。促音と/ri/の意味の場合は、撥音と同じく音から動作、動作から様態、またさらに感情・感覚の領域まで拡張するが、アスペクトまで至っていない。

8. まとめ

日本語とカザフ語のオノマトペを多義性という観点から考察した結果、次のことが明らかになった。多義性に関する両言語の結果（表 20）を対照すると、かなり異なっていることが分かる。このような相違に両言語の「多義混成語」が大きく関わっており、日本語オノマトペには、1つの形式で擬声・擬音・擬態・擬情の語義が混成する語が多く存在するのに対し、カザフ語オノマトペには逆に 1つの形式に別種の語義が混成しない傾向が見られる。

両言語の多義性に関する分析結果が異なっているが、擬音語と擬態語の性質は一緒である。日本語とカザフ語のオノマトペにおいて、広義レベルの擬音語は同一の形式において複数の擬音の意味を持たない傾向がある。もし、同一の語形に 1つ以上の擬音の意味がある場合、これらの意味の間には関連が見られないため、これらの意味が偶然同じ音形を有していると考えられる。これと異なって擬態語は同一の形式に複数の擬態の意味を持つことができ、さらに、これらの意味の間には何らかの関連性があるのが通常である。以上から、「広義擬音語」が具象性の高いものであるということが言えるのに対し、「広義擬態語」

は逆に抽象性の高いものであるということがいえよう。

第7章 統語的考察

1. はじめに

擬声語・擬音語・擬態語・擬情語とは外界の物音や人間・動物の声、様子・心情などを具体的に表す言語表現全体をいい、文の中での使われ方に関する用語ではない。そのため、用法としては主語・述語・修飾語・独立語の働きをすることが可能であり、その用いられ方によって、動詞・名詞・副詞など異なる品詞名で呼ばれることになる。

オノマトペは、もともとが音声や様子を描写して述語を修飾する用法から出発しているので、結果として副詞の用法がもっとも多くなるという考え方がある（飛田良文・浅田秀子 2002）。しかしながら、田守・スコウラップ（1999）が示しているように、英語オノマトペの場合は、副詞用法が極めて稀であり、名詞として機能することが一般的であるということである。こうした中では、日本語とカザフ語のオノマトペを対照する際、両言語オノマトペの統語的な属性を明らかにしなければならないと思われる。本章では、日本語とカザフ語のオノマトペを動詞・副詞・名詞・形容詞の用法を考察し、相違点を明らかにすることを目的とする。

2. 動詞用法

2.1 日本語オノマトペの動詞用法

日本語オノマトペは「ばたばたする」「いらいらする」などのように「する」動詞、また「ばたつく」「いらつく」などのように接尾辞「つく」と結びついて、動詞の役割を果たすことができる。最初は最も生産的な「する」動詞との組み合わせを考察する。

2.1.1 「する」動詞

日本語オノマトペは、「する」動詞が付加し、「オノマトペ+する」という構造で動詞の役割を果たすことができる。日本語オノマトペに関する研究は多く成されているが、「オノマトペ+する」という動詞的な用法があまり注目されてこなかったようである。例えば、次の「うんざり」と「うずうず」の辞書の記述を見よう。

(1) 飛田良文・浅田秀子（2002）『現代擬音語擬態語用法辞典』

「うんざり」：【解説】前途に希望を見出せず不快に感じる様子を表す。マイナスイメージの語。

「うずうず」：【解説】ある行動をする欲求がおさえられず、落ち着かない様子を表す。

プラスマイナスのイメージはない。

(2) 阿刀田稔子・星野和子 (1995) 『擬音語擬態語使い方辞典』

「うんざり」:【意味】同じ状態や経験にすっかりあきて、いやになっているようす。

【用法】態

〈人〉が〈物・物事・人〉に…する, だ
…した〈ようす〉

「うずうず」:【意味】やりたい気持ちをおさえきれず、落ち着かないようす。

【用法】態

〈人〉が…する

「うんざり」「うずうず」は「する」動詞と共起し、「うんざりする」「うずうずする」として用いられるのが普通であるが、以上の辞書の記述から分かるように、「うんざりする」「うずうずする」という動詞的な用法については特に記述がない。以下では、「する」動詞がどのようなオノマトペと共起するかを明らかにすることを試みる。そして「オノマトペ+する」という構造をテンスとアスペクトの観点から簡単に考察する。

2.1.1.1 「オノマトペ+する」構造

本節では、「オノマトペ+する」という構造について検討する。「オノマトペ+する」という構造は1つの1語の動詞として見てよいのか、或いは、「副詞+する」の2語としてみてよいのかという疑問がある。最初は、「する」動詞のみをみよう。

森田 (1994) が「する」動詞については「「する」動詞は、いわゆるサ変動詞を造る働きを持つ」と述べ、日本語における次の種類を示している。

(3)

- 1) 和語名詞+する…汗する, 値する, 噂する, 歯ざしりする, くしゃみする, いたずらする, だっこする, えんこする
- 2) その他の和語+する…青々する, 寒々する, はつとする, しゃんとする, がっかりする, はっきりする, ぴったりする, かつかする, ぐらぐらする
- 3) 漢語名詞+する…運動する, 研究する, 練習する
- 4) 外来語名詞+する…パスする, ヒットする, アルバイトする
- 5) お・和語名詞+する…お招きする, お誘いする, お願いする
- 6) ご・漢語名詞+する…ご招待する, ご報告する, ご連絡する
- 7) 和語・ん+する…甘んずる, 重んずる, 軽んずる, 先んずる, 安んずる, 諳んずる
- 8) 字音語+する…賀する, 解する, 害する, 議する, 辞する, 信ずる, 案ずる
- 9) 字音語+とする…寂とする, 杳とする, れっきとする (歴と～)

以上から、森田（1994）が「する」動詞は一般語彙とオノマトペ語彙に付いて全体を動詞化させる機能を持ち、または、「オノマトペ+する」という構造をサ変動詞として認定しているということが分かる。

しかしながら、これについては影山（1993）は「勉強する」「研究する」のような「漢語名詞+する」は1つの1語の動詞として認めているが、「オノマトペ+する」は1語として認めていない。「頭がズキズキする」という例を挙げて「全体で1つの動詞になっているかに思えるが、（略）「句」であって、「語」になっていない。」と述べている。また、以下の（4）の例を挙げており、それを（5）の例と並べながら形態的な緊密性が弱いことを示している。

(4) 頭がズキズキする。

頭はズキズキ、心臓はドキドキした。

(5) 飲んだり食ったりする。

Aさんは飲んだり食ったり、Bさんは歌ったりふざけたりしている。

（影山 1993. p.261）

このように、影山（1993）は形態的な緊密性が弱い故に「オノマトペ+する」という構造を1語ではなく、「句」であると認定している。

語という単位は、統語論の観点からすると、最も小さいまとまりを形成しており、形態的な緊密性という性質を持つ（影山（1993）参照）。「オノマトペ+する」は、影山（1993）が主張しているように、本当に形態的な緊密性が弱いであろうか。これに関して筧（1993）が、「オノマトペ+する」という構造は逆に極めて緊密的であるという立場をとっている。「オノマトペ+する」の緊密さを証明する例としては以下のものを挙げている。

(6) 彼はぶらぶら（と）歩いている。

(6') 彼は歩いている ぶらぶらと。

(7) 枝がポッキリ（と）折れた。

(7') 枝が折れた ポッキリと。

（筧 1993）

(6) (7) のオノマトペを後置してみると、成立するが、以下の(8) の場合は成立しない。

(8) 彼女はびっくりした。

(8') *彼女はした、びっくりと。

（筧 1993）

このように、「オノマトペ+する」という構造は、一方、1語にも見えるが、他方、影山(1993)が主張しているように形態的には複合語になっておらず、形態的緊密性の弱い構造にもみえる。本稿では、「オノマトペ+する」全体が1つの述語(合成述語)を形成すると見なすことにする。

2.1.1.2 「する」動詞と共起できるオノマトペのタイプ

「する」動詞への組み入れはきわめて生産的であるが、すべてのオノマトペに適用できるとは限らない。「する」動詞と組み合わせるオノマトペを音韻形態的に以下のようにまとめることができる。まず、1モーラを基本形に持つ語末に促音と撥音を伴うオノマトペを挙げる。

(9) /CVQ/

ぎよっとする、きっとする、じっとする、すっとする、にっとする、むっとする

(10) /CVN/

きゅんとする、じんとする、しゅんとする、ちゃんとする、つんとする、ぷんとする

次に(11)(12)の異形と思われる長音を伴う/CVRQ/・/CVRN/も「する」動詞を伴うことができる。

(11) /CVRQ/

かーっとする、じーっとする、すーっとする、にーっとする、ぼーっとする

(12) /CVRN/

あーんとする、きゅーんとする、じーんとする、つーんとする、ぷーんとする

次の(13)(14)(15)ものは、2モーラを基本形に持つものであり、それぞれ語末に促音、撥音、/ri/を伴うものである。

(13) /CVCVQ/

うかっとする、うとっとする、ぐらっとする、さらっとする、じとっとする
ずきっとする、だらっとする、とろっとする、どろっとする、にこっとする

(14) /CVCVN/

きちんとする、きよとんとする、ぎゃふんとする、ずきんとする、べろんとする

(15) /CVCVri/

とろりとする、にたりとする、にやりとする、ひやりとする、びくりとする

次に、語中に促音と撥音を持ち、語末に/ri/を伴う2モーラの基本形を持つものである。

(16) /CVQCVri/

うっかりする, うっとりする, おっとりする, がっかりする, ぐったりする
じっとりする, にっこりする, すっきりする, びっくりする, むっつりする

(17) /CVNVCVri/

ぐんなりする, げんなりする, しんなりする, にんまりする, しんみりする

次の (18) (19) のものは反復形である。(18) は語末に撥音を持つ 1 モーラ, (19) はもつとも多くみられる 2 モーラの反復形の例である。

(18) /CVN/の反復形

がんがんする, きんきんする, じんじんする, ちんちんする, つんつんする

(19) /CVCV/の反復形

あぶあぶする, いじいじする, うかうかする, うとうとする, こそこそする
すべすべする, にこにこする, にたにたする, ねばねばする, ねちゃねちゃする

このように, 「する」動詞と用いられるオノマトペのタイプをまとめると, 次のようになる。それは/CVQ/, /CVN/, /CVRQ/, /CVRN/, /CVCVQ/, /CVCVN/, /CVCVri/, /CVQCVri/, /CVNVCVri/と/CVN/ないし/CVCV/の反復形である。

2.1.1.3 下位類オノマトペの「する」動詞との共起

本節では, 日本語の下位類のオノマトペは, 「する」動詞をどの程度で伴うかについて述べる。

日本語オノマトペのデータベース (Kakehi, Tamori, Schourup 1999) を分析した結果, 1,591 語の内, 「する」動詞を伴うオノマトペは 422 語 (26%) が得られた。この結果を表 26 にまとめる。

表 26 日本語オノマトペの「する」動詞との共起

	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
単義語		4	171	17
単一多義語			81	6
多義混成語		6	100	52
合計		10 (1%)	352 (34%)	75 (58%)

この表の数字は語数を表し, () のパーセンテージは各下位類の全語数からの比率を表すものである。例えば, 擬態語を例にすると, 擬態語の全語数 1,040 語の中では 352 語のみ

が「する」動詞を伴い、それは 34%に相当する。また、表 26 の下位類の総合数を合わせると、422 語になっていないのは、多義混成語には 2 回と数えられているものがあるからである。つまり、例えば (20) の「つん」をみると、

(20) 「つん」

Takehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味①】 M1 : The state in which a pointed object sticks out prominently.

【例文】「彼女のつんと尖った鼻が彼女の傲慢さを象徴しているようだ。」

【意味②】 M2 : The state of feeling a sharp sensation in the nose.

【例文】我々の胃を生理的に刺戟する、つんとする臭気であった。

【意味③】 M3 : The state of appearing proud or affected.

【例文】[...]あの愛想のいい奥さんが妙につんとしていた。

「つん」は意味 2 と意味 3 では「する」動詞を伴い、意味 3 の「つん」は「つんとしている美女だ」のように状態を表す「擬態語」であるのに対し、意味 2 の「つん」は「鼻の奥がつんとした」物理的感覚を表している「擬情語」である。そのため、このような「する」を伴う擬態語と擬情語の意味を持つ語を「擬態語」としても「擬情語」としても数えることにした。また、例えば 2 つの擬態と擬情の意味を持つ多義混成語の場合は、1 つの擬態の意味のみが「する」と共起できたら、その語を「擬態語」としてだけ数えた。表 26 をグラフ化すると、以下ようになる。

図 21 「する」動詞を伴う日本語オノマトペ

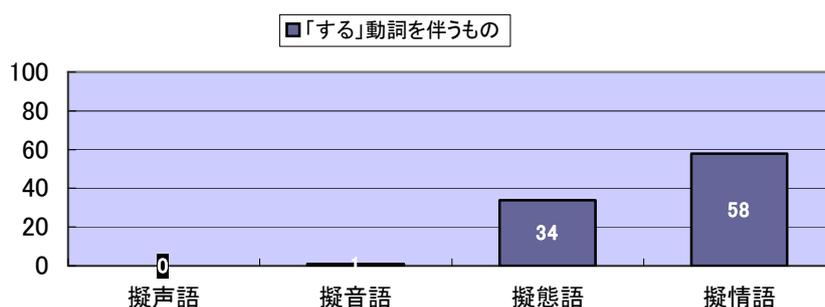


図 21 から、「擬声語」は「する」を伴わないが、「擬音語」はもともと少なくとも 1%に相当する 10 語しかみられなかった。「擬態語」は 34%を占めている。「擬情語」は日本語オノマトペの中では最も多くて、58%に到っている。

2.1.1.4 「オノマトペ+する」動詞の分類

前節の「つん」の辞書の記述から窺えるように、「つん」は意味 2 と意味 3 では「する」

動詞を伴い、前者は「鼻の奥がつんとした」物理的感覚を表すが、後者は「つんとしている美女だ」のように状態を表す。両者の「する」動詞の用法の間には、以下の例(21)が示しているような違いがある。

- (21) a. 急に鼻の奥がつんとして涙が出てきた。 a'. 急に鼻の奥がつんとした。
b. あの人, いやにつんとしてるわね。 b'. *あの人, いやにつんとした。

このように、意味が異なることによって「する」動詞の用法も異なっている。そのため、本稿では「する」動詞と共起できるオノマトペを擬音・擬態・擬情だけではなく、もっと細かく分類する。「する」動詞を伴うオノマトペを次のように分類する。①「行為・行動的なもの」、②「動作・振動的なもの」、③「状態的なもの」、④「心理・感情的なもの」、⑤「生理・感覚的なもの」である。以下では、これらについて詳細に説明する。

2.1.1.4.1 「擬音語+する」について

繰り返しになるが、「する」動詞を伴うオノマトペを①「行為・行動的なもの」、②「動作・振動的なもの」、③「状態的なもの」、④「心理・感情的なもの」、⑤「生理・感覚的なもの」のように分類した。以下では詳しく説明する通り、これらは全て擬態語・擬情語に属するものである。しかし、表 26 からは擬音語にも「する」を伴うオノマトペ(10語)があるということがわかる。本節では、「擬音語+する」という構造についてごく簡単に説明する。「擬音語+する」という構造のものを以下の(22)にまとめる。

- (22) ごそごそ ([SM] 誰かが隣の部屋でごそごそし始めた)、がぼがぼ ([SMMM] ビールを飲み過ぎて、お腹ががぼがぼする)、きんきん ([SP] あの奥さん、きんきんする声で朝晩子供さんをしかっている)、ざわざわ ([SMP] 水面がざわざわし始めたと思ったら、間欠泉が勢いよく噴き上げた)、ぜーぜー、だぶだぶ ([SMMM] パーティーでビールを飲みすぎたらしく、お腹がだぶだぶする)、だぼだぼ、ちゃぶちゃぶ、どたばた、ばたばた ([SSMMM] 納屋の木戸は、古くて立て付けが悪くなっている、ちょっと強い風が吹くとばたばたして耳障りだ)²¹

(22) のオノマトペは、Kakehi, Tamori, Schourup (1996) では、擬音語 [S] として扱われ、「する」動詞と共起できると記述されている。例えば、「がぼがぼ」という語は以下ようになっている。

- (23) 「がぼがぼ」

²¹ () では、[SM]などで示されているものが多義混成語である。また、() 中の例文は全てが Kakehi, Tamori, Schourup (1996) から引いたものである。

Takehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味①】 S : The sound made by bubbles rising to the surface of a liquid.

gabo-gabo (to)

gabo-gabo-suru: to make a bubbling or gurgling sound.

【例文】 ビールを飲みすぎて、お腹ががぼがぼする。

【意味②】 M1 : The state of piece of clothing or shoes being too loose.

【例文】 兄のお下がりの靴は、がぼがぼして歩きにくい。

【意味③】 M2 : The manner of making large profits; the manner of vigorously eating or drinking a large amount.

【例文】 「あんな味気ないハンバーガーで庶民からガボガボ金を吸い上げて、自分達は毎日あの山海の珍味を…」

この辞書の記述から「がぼがぼ」の意味 1 は擬音語として扱われ、「する」動詞と共起できると示されている。またその例として「ビールを飲みすぎて、お腹ががぼがぼする」が挙げられている。このことから、「する」動詞は擬音オノマトペとも共起できるという解釈が可能になる。ここでは問題になっているのは、「ビールを飲みすぎて、お腹ががぼがぼする」という例自体が適切であるかどうかということである。つまり、ここの「がぼがぼする」は辞書の記述で示されているように本当に音を表しているか、或いは様子を表しているかという疑問である。以下の例から分かるように、「がぼがぼ」が音を表すのは確実である。

(24) ガボガボとゴム長を鳴らして雪道を降りながら。(小野 2007. p.46)

また、「がぼがぼと音がする」という言い方も可能であり、ここから「がぼがぼ」は音を表すことができることが分かる。しかしながら、「お腹ががぼがぼする」というときに、「お腹ががぼがぼという音をたてる」というより、「液体がいっばいはいついて、揺ると音をたてそうな様子」という意味の方が強い。つまり、「音」というよりは「様子」の暗示が強いということである。「する」動詞は元々「動作・作用が現れる」という意味を表すので、オノマトペにつくときは、その語が様子・状態を表すことが多い。したがって、「お腹ががぼがぼする」の「がぼがぼ」は、元々音を表す「がぼがぼ」から来ている、様子を表すものであると推測する。このようになると、Takehi, Tamori, Schourup (1996) が擬音の意味を解説するのに挙げている「ビールを飲みすぎて、お腹ががぼがぼする」という例が適切ではないことになるだろう。本稿では、「する」動詞が何らかの様子を前提とするととらえ、擬音オノマトペと共起しないという立場をとることとする。

2.1.1.4.2 ①「行為・行動的なもの」

本節では①「行為・行動的なもの」について検討する。まず、以下の例をみよう。

(25) a. 「わ、わかった。かんべんしてくれ…」と、入墨の若者は、舟べりに片ひじかけて、まだアップアップしながら叫んだ。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.6)

b. 「警視庁きっての腕きき警部ってふれこんであるから、あまりへらへらしないでね！」

c. はい、写しますよ。みなさん、もっとにこにこしてください。

(阿刀田・星野 1995. p.341)

「擬態語」においては、主語の行為や行動を表すものがある。これらの語は人が主体になるものに限る。このような語を①「行為・行動的なもの」と呼ぶことにする。これらの語は現在を「ル」形ではなく、「テイル」形で表す。

(26) a. 連れの学生は、あわてて、プールの中でアプアプしている仲間に手をさしのべた。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.6)

b. 一刻も早くここを立ち去りたいのに、妻がぐずぐずしているので、[信一は]不愉快でたまらない、という顔つきだ。(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.493)

c. 彼は船の上で週刊誌を持ってウロウロしているわたしを見たとき、二十歳ぐらいの学生かと思ったそうだ。(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.1236)

このタイプの語は、様態副詞として機能することが一般的である。

(27) a. 財布をすられたという男が駅長室にあたふたかけ込んできた。

(阿刀田・星野 1995. p.2)

b. 父親のケーキのおみやげを見て、子供たちはにこにこと出迎える。

(阿刀田・星野 1995. p.341)

c. 会場全体をきよろきよろ見回したが、知っている人はいなかった。

(飛田・浅田 2002. p.91)

①「行為・行動的なもの」を以下の(28)にまとめる。

(28) あたふた、あふあふ、あっぷあっぷ ([MM] 魚が水面にあがってきてあっぷあっぷしている)、いちゃいちゃ、いそいそ、うじうじ、うっかり、うかうか、うとうと、うつらうつら、うろうろ、おたおた、おろおろ、おずおず、がつがつ、きよときよと、きよろきよろ、ぐずぐず ([SMMM] ぐずぐずするな! 放って行くぞ!), こそこそ、せかせか、じたばた、ちょこちょこ、ちやほや、ちょろちょろ、にこにこ、

にたにた, にやにや, にんまり, のらくら, のろのろ, ばたばた ([SSMMM] 朝起きてから出かける寸前までばたばたして, 周りの人間をいらいらさせる), ひよろひよろ ([MM] …ひよろひよろしながら汽車に乗り込んだ), へらへら, べたべた ([MMM] 昼間っからこんな人目につく所でべたべたするな), ぼやぼや, まごまご ([MM] 新入社員はまごまごするばかりで手も出せない), まごまご ([MM] まごまごしていると乗り遅れるよ), もじもじ, めそめそ, もそもそ ([MM] お茶席で三十分坐っていようものなら, しびれをきらして, もそもそし始める), もたもた, よろよろ, よたよた, など

2.1.1.4.3 ②「動作・振動的なもの」

擬態オノマトペにおいては, ①「行為・行動的なもの」と異なって, 人そのものではなく, 人の一部か, 他の物体を主体として取るものがある (29)。このような語を②「動作・振動的なもの」と呼ぶことにする。

- (29) a. 歯がぐらぐらして抜けそうだ。(飛田・浅田 2002. p.120)
 b. 大きなきつねが一びき, ほえたてている犬にむかって, へいきで近づいていきます。かれは, まだびくびくするニワトリをくわえていました。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.937)

①「行為・行動的なもの」と異なっている②「動作・振動的なもの」の特徴としては次のことが挙げられる。「動作・振動的なもの」は「テイル」形を持つが, 現在を「ル」形で表すことが一般的である。以下の (30) を見よう。

- (30) a. このテーブルがたがたするのよ。直して。(飛田・浅田 2002. p.39)
 b. 今朝, バナナを食べた後に下の前歯を指差しながら「お母さん, この歯, グラグラするよ」と…。(plaza.rakuten.co.jp/gonron/diary)
 c. この橋, がたびしするけれど渡ってだいじょうぶかな。

(阿刀田・星野 1995. p.341)

②「動作・振動的なもの」の語は文の中で様態副詞として機能することが多い。

- (31) a. 藤の花房がゆらゆらと風に吹かれている。(飛田・浅田 2002. p.39)
 b. 高原の夜空には宝石をちりばめたようにきらきら星が光っている。
 c. 苦痛があるのか, 眠っている病人のまぶたが時々びくびくけいれんする。

(阿刀田・星野 1995. p.101)

(阿刀田・星野 1995. p.402)

②「動作・振動的なもの」のオノマトペを以下の(32)にまとめる。また、第2.1.1.4.1節で挙げた(22)のオノマトペも②「動作・振動的なもの」の範疇に入れる。

(32) がくがく、がたがた ([SMMMM] 江戸時代から使っているたんすだもの、がたがたしているから移動は無理ですよ)、がたびし ([SMM] この橋、がたびしするけれど渡ってだいじょうぶかな)、ぎくぎく、きらきら、ぎらぎら、ぐらぐら、ちかちか ([MP] 信号がちかちかし始めた)、ちらちら、にゆるにゆる、びくびく ([MP] 男は立ったままのどをびくびくさせて大ジョッキのビールを一気に飲み干した)、ひくひく (目がひくひくする)、びくびく、ゆらゆら、など

2.1.1.4.4 ③「状態的なもの」

擬態オノマトペにおいては、以上でみた①「行為・行動的なもの」と②「動作・振動的なもの」と異なって、動作ではなく、ある物体の状態を描写するものが多く見られる(33)。このような語を③「状態的なもの」と呼ぶことにする。

- (33) a. グラニュー糖はふつうの砂糖に比べてさらさらしている。
(阿刀田・星野 1995. p.187)
- b. 友達が勧めてくれた栄養クリームを使ってから、かさかさに荒れていた手がつるつるしてきた。(Kakehi, Tamori, Schourup 1996. p.937)
- c. ぞうきんをよくしぼってふかないから、まだ廊下がびしょびしょしている。
(阿刀田・星野 1995. p.408)
- d. 鍵盤の上に踊る指がすんなりしていて美しい。(飛田・浅田 2002. p.248)

以上の例から、「さらさら」「つるつる」「びしょびしょ」「すんなり」はあるものの様態(属性)を表している。この点においては、③「状態的なもの」と②「動作・振動的なもの」の間には類似点がある。しかしながら、以下の例が示しているように、「～ている」を連体修飾の「～た」とした場合、③「状態的なもの」は同じことを表すが、②「動作・振動的なもの」は意味が異なったり、使わなかったりすることが多い。

(34) ③「状態的なもの」の場合

- a. 髪がさらさらしている＝さらさらした髪
- b. 肌がつるつるしている＝つるつるした肌

(35) ②「動作・状態的なもの」の場合

- a. 電線がぶらぶらしている ≠ *ぶらぶらした電線
- b. ビルがゆらゆらしている ≠ *ゆらゆらしたビル

以上の (34) の「～ている」と連体修飾の「～た」は同じことを表すが、(35) は成り立たない。どのような場合に「～ている」と連体修飾の「～た」は同じことを表すのかについてみよう。原則としては、例えば「その人は本を呼んでいる≠本を読んだ人」のように継続動詞の場合は、「～ている」と「～た」とが同じことを表すことにならない。「～ている」と「～た」とがほぼ同じことを表すのは、結果動詞の場合である (吉川 1989 : 114)。

もう一つの違いとしては②「動作・振動的なもの」と異なって③「状态的なもの」は文の中で助詞「に」と共起し、結果副詞として機能することが多い。

- (36) a. 消防車の放水で夜具も畳もカーペットもびしょびしょにぬれて使い物にならない。
(阿刀田・星野 1995. p.408)
- b. 患部に塗った湿布薬がすぐに熱でかさかさに乾いてしまう。
(阿刀田・星野 1995. p.28)
- c. 食べずにテーブルに置いておくから、アイスクリームがとろとろにとけてしまったじゃないの。(阿刀田・星野 1995. p.408)

③「状态的なもの」においては、「ル」形になれるものと、「ル」形になれないものがある。以下の (37) は「ル」形になれるものを示しているが、(38) は「ル」形になれないものを示している。

- (37) a. 一日中水仕事をしたから手がかさかさしている。
a'. 一日中水仕事をしたから手がかさかさする。
b. 猫の舌はひどくざらざらしている。
b'. 猫の舌はひどくざらざらする。
- (38) a. まだ廊下がびしょびしょしている。
a'. *まだ廊下がびしょびしょする。
b. このスープは味があっさりしている。
b'. *このスープは味があっさりする。

以下の (39) に「ル」形になれるもの、(40) に「ル」形になれないものをまとめる。一般的には、(40) は「ル」形を伴わない方が好ましいが、「ル」形との使用を許容する日本語話者がいるかもしれない。

- (39) かさかさ ([SMM] 手がかさかさする), がさがさ ([SMM] 手すりも壁もペンキがはげてがさがさしている), がさがさ ([SMM] 実に無神経でがさがさした男だ),

がたびし ([SMM] ふつうの家では、木製のサッシを用いているから、必ずどこかがたびししていてすきま風が入るのが特徴で)、かりかり ([SMP] かりかりするまで焼く)、ぐしゃぐしゃ、ぐりぐり ([MM] ぐりぐりした目をむいて私をにらみつけた)、げっそり ([MM] 50歳を過ぎてから、急にげっそりしてきた)、げっそり ([MM] 毎日そんな話ばかりでげっそりしています)、ごちゃごちゃ ([MMM] 字がごちゃごちゃしていて読めないよ)、ごちゃごちゃ ([MMM] ストーリがごちゃごちゃしていて、結末まできても何がどうなったのかわからなかった)、ごそごそ ([SM] 麻は一見ごそごそしているようだが、着心地は抜群だ)、ごたごた、ごつごつ、こつこつ、ごてごて、こりこり、ごりごり、ころころ、ごわごわ、さくさく、さらさら、ざらざら、ざわざわ ([SMP] こんなざわざわした所ではゆっくり話もできない)、じくじく、しっかり ([MM] なかなかしっかりした体つきの少年だ)、しっかり ([MM] 若いのになかなかしっかりした考えの男じゃないか)、しっとり ([MM] 肌がしっとりする)、しとすと、じとじと、じっとり、しゃきしゃき、じめじめ ([MM] 今の時期は湿度が高いので干してもじめじめする)、すべすべ、だぶだぶ ([SMMM] 最近はまだだぶだぶしたズボンが流行しているようだ)、だぶだぶ ([SMMM] 走ると胸などが揺れるくらいだぶだぶしている)、だらっ、ちゃん ([MM] 必要な書類はちゃんとしているだろうね)、つるつる、つんつん ([MMMP] 高慢ちきな娘だ。つんつんしてあいさつひとつしない)、つん ([MMP] 美人だがつんとしていて、あいきょうもかわいげもない)、てかてか、とろとろ、どろどろ、にちゃにちゃ、ぬるぬる、ねちねち ([MM] 古くなってねちねちするガスのゴム管を使っているなんて危険だよ)、ねちゃねちゃ、ねとねと、ねっとり、ねばねば、ばりばり、ばさばさ、ばさばさ、びしゃびしゃ、ぴらぴら、ふかふか、ぶくぶく、ふっくら、ふさふさ、ふわふわ、ぶよぶよ、ふんわり、べたべた ([MMM] お皿がみんなべたべたしている)、べとべと、べっとり、へなへな ([MM] この庭ぼうき、へなへなしていて掃き寄せられやしない)、へなへな ([MM] お前のようにへなへなしては、嫁の来てがない)、ほかほか、ぼこぼこ、ぼさぼさ、ぼっちゃり、ぼつたり、もさもさ、もそもそ ([MM] らくがんという菓子はもそもそしていて食べにくいから嫌いだ)、むくむく、など

- (40) あっけらん、あっさり ([MMMM] ゆかたの柄ゆきもあっさりしている)、あっさり ([MMMM] このスープは味があっさりしている)、かさかさ ([SMM] 応対かさかさしている)ので患者に嫌われている)、がっちり ([MM] がっちりした体つきの男)、がっちり ([MM] 先輩はがっちりしているから、決して後輩を飲み連れて行ったりしない)、ぎとぎと、ぎざぎざ、ぎよろっ、ぎよろり、ぐたぐた、ぐにやっ、ぐにゃん、ぐにやり、ぐしょぐしょ、こんもり、しっとり ([MM] 上品でしとやかでしっとりした婦人だね)、しなしな、ずっしり、すらっ、すらり、ずんぐり、すんなり、ちゃっかり (ひと)、ちんまり、つやつや、でぶっ、でっぷり、どっしり、どろっ、

どろり, なよなよ, ぬめぬめ, ねちねち ([MM] あきらめの悪いねちねちした男だね), はきはき, ぱっちり, びしょびしょ, ひんやり, びっちり, ひよろひよろ ([MM] みすばらしい服装のひよろひよろした男が店に入ってきた), ふくふく, ふっくり, ぶつぶつ, べらべら, ぼってり, むしゃくしゃ ([MP] むしゃくしゃした髪), もしやもしや, もじゃもじゃ, よぼよぼ, やんわり, など

2.1.1.4.5 ④「心理・感情的なもの」

いままで擬音・擬態のオノマトペについて述べてきたが, 以下では, 擬情のオノマトペについて検討する。

擬情語においては, 「いらいらする」「わくわくする」のような感情「人の内側で生じるもの」を表すものがある, 「頭がずきずきする」「舌がぴりぴりする」のような感覚「身体で感じるもの」を表すものがある。前者を④「心理・感情的なもの」, 後者を⑤「生理・感覚的なもの」と呼ぶことにする。

④「心理・感情的なもの」と⑤「生理・感覚的なもの」の間には次のような大きな違いがある。

(41) ④「心理・感情的なもの」の場合

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| a. <u>私</u> はいらいらする。 | a'. <u>彼</u> は今日はいらいらしている。 |
| b. <u>私</u> はわくわくする。 | b'. <u>彼</u> は今日わくわくしている。 |

(42) ⑤「生理・感覚的なもの」の場合

- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| a. <u>私</u> は頭がずきずきする。 | a'. * <u>彼</u> は頭がずきずきしている。 |
| b. <u>私</u> は舌がぴりぴりする。 | b'. * <u>彼</u> は舌がぴりぴりしている。 |

④「心理・感情的なもの」は「私はいらいらする」「私はわくわくする」のように話者にも, (a', b') の「彼は今日はいらいらしている」「彼は今日わくわくしている」のように他人にも使うことができる。これに対して⑤「生理・感覚的なもの」は「私は頭がずきずきする」「私は舌がぴりぴりする」のように話者の生理的感覚を表すことはできるが, (a', b') の「*彼は頭がずきずきしている」「*彼は舌がぴりぴりしている」のように三人称には使うことができない。

④「心理・感情的なもの」は「テイル」形を持つが, 現在を「ル」形で表す。

(43) a. 救急車の前に不法駐車, まったくいらいらする。(阿刀田・星野 1995. p.7)

- b. 「おれだって, この記事は, むかむかする。人を子供だと思って, ばかにしている。お兄さんがおこるの, あたりまえだよ。」

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.779)

④「心理・感情的なもの」のもう一つの特徴としては、「心理・感情的なもの」は助詞「と」を伴わないことが多くあり、文中で様態副詞として働きにくいということが挙げられる。例えば、以下の例(44)が示しているように、「むかむか」と「むずむず」は「する」動詞としか使用できず、「と怒る」「と待つ」などのようには用いられない。

- (44) a. 顔を見ただけでむかむか {する/* (と) 怒る/* (と) 不愉快に感じる}。
b. 早く試合が始まらないかとむずむず {する/* (と) 待つ}。

しかしながら、これらの「むかむか」「むずむず」は⑤「生理・感覚的なもの」として用いられる場合、様態副詞として用いられやすくなる。

- (45) a. 船酔いでむかむか {する/ (と) 吐き気がする}。
b. 鼻の奥がむずむず {する/とかゆくなる}。

以下の(46)(47)に④「心理・感情的なもの」をまとめる。ここでは(46)は様態副詞として用いられにくいもの、(47)は様態副詞としての用法が許容されるものをまとめたものである。

(46) うんざり, うずうず, がっかり, かりかり ([SMP] 幼女誘拐事件で団地のお母さんたちはかりかりしている), しんみり, ぞくぞく ([PP] 気味悪さでぞくぞくしてくる), ときどき, はらはら, びくびく ([MP] 監督の罵声がついつとんでくると, 若手選手はびくびくしているよ), びっくり, びりびり ([SSMPP] びりびりしないで, 心に余裕をもたなければ, 受験に成功するのは難しい), ひやひや ([PP] 親にひやひやする), ひやっ, ひやり, むかむか ([PP] 顔を見るだけでむかむかする), むかっ, むしゃむしゃ, むしゃくしゃ ([MP] ねえちゃんに, 頭をたたかれたので, たろうはむしゃくしゃしています), むずむず ([PP] 早く始まらないかとむずむずする)

(47) いらいら ([PP] 返事が来ないのでいらいらする), うきうき, おちおち, おどおど, かつ, かーっ, かつか ([PP] お父さんはお前のことでかつかしているので, 下手に近寄らない方がいいよ), ぎよっ, そわそわ, じりじり, むっ ([MP] 失礼な雑言でむっとする), むーっ, やきもき, わくわく

2.1.1.4.6 ⑤「生理・感覚的なもの」

前節で述べたように、「生理・感覚的なもの」は主語の感覚「身体で感じるもの」を表す。

⑤「生理・感覚的なもの」は④「心理・感情的なもの」と同様に、「テイル」形を持つが、現在を「ル」形で表す。

- (48) a. わめかずに静かに話してよ。耳ががんがんとするわ。(阿刀田・星野 1995. p.7)
 b. 先生、こめかみのところがずきずきするんです。(飛田・浅田 2002. p.222)
 c. 背中がぞくぞくする。風邪を引いたのかな。(Chang 2000. p.79)

⑤「生理・感覚的なもの」を以下の(49)にまとめる。

(49) いらいら ([PP] のどがいらいらする)、かっか ([PP] 体がかっかとする)、がんがん、きりきり、きんきん ([SP] 頭がきんきんする)、くさくさ (気分がくさくさします)、ざわざわ ([SMP] 僕は蛇が大嫌いで、長いものを見ただけでざわざわしてくる)、じーん (胸がじーんとする)、しくしく、すっ、すーっ (頭がすーっとする)、ずきっ、ずきん (胸がずきんとした)、ずきずき、ぞくぞく ([PP] スリルで背筋がぞくぞくする)、ちかちか ([MP] 目がちかちかする)、ちくちく、つーん、つん ([MMP] 鼻の奥がつんとするよ)、つんつん ([MMMP] 未だに鼻がつんつんして気分が悪い)、どきんどきん、ぴりぴり (舌がぴりぴりする)、びりびり ([SSMPP] 足がしびれてびりびりする)、ひやひや ([PP] 足元がひやひやとする)、ぼっぼ (頭がぼっぼとする)、むかむか ([PP] 胸がむかむする)、むずむず ([PP] 鼻がむずむずする)、もぞもぞ (背筋がもぞもぞする)、もやもや ([MMP] 気持ちがもやもやする)

以上の分類を図にまとめると以下のようなになる。

図 22 「する」動詞を伴うオノマトペの分類



2.1.1.5 テンスから見た相違点

前節では、「する」動詞を伴うオノマトペを①「行為・行動的なもの」、②「動作・振動

的なもの, ③「状態的なもの」, ④「心理・感情的なもの」, ⑤「生理・感覚的なもの」という下位類に分類した。これらの下位類は「する」動詞の共起に関する大きな相違点が存在する。それは, あるオノマトペは「スル」形と「シテイル」形になれるが, あるオノマトペは「シテイル」形にしかねないという違いである。本節では, 「スル」形と「シテイル」形の違いを「現在」を表す側面から考察する。

以上でみたように, 「状態的なもの」には, 「スル」形にも「シテイル」形にもなれる「かさかさ」「ざらざら」というものと, 「シテイル」という形にしかねない「びしょびしょ」「あっさり」というものがある。後者以外は, 「する」動詞を伴うオノマトペはすべて「スル」形になれる (50)。

- (50) a. 突然の来客であたふたする。
- b. このテーブルがたがたするのよ。直して。(飛田・浅田 2002. p.39)
- c. 一日中水仕事をしたから手がかさかさする。(阿刀田・星野 1995. p.28)
- d. 球急車の前に不法駐車, まったくいらいらする。(阿刀田・星野 1995. p.7)
- e. 背中がぞくぞくする。風邪を引いたのかな。(Chang 2000. p.79)

以上では, (50a) は「行為・行動的なもの」, (50b) は「動詞・振動的なもの」, (50c) は「状態的なもの」の「スル」形になれるもの, (50d) は「心理・感情的なもの」, (50e) は「生理・感覚的なもの」の例である。これらは「スル」形にも「シテイル」形にもなれるが, その用法には大きな違いが見られる。それは, 現在を表すことであり, 「行為・行動的なもの」は現在を「シテイル」形だけで表すのに対し, 「動作・振動的なもの」「状態的なもの」「心理・感情的なもの」「生理・感覚的なもの」は現在を「シテイル」形でも「スル」形でも表すことができるということである。

- (51) a. ほら, あそこ, 人があつぷあつぷ {*する/している} よ。
- b. そろそろゆっくりした曲歌わしてください。今, にここにこ {*します/しています} けど体の中, バックンバックンいってますから。
- c. チケットをとりそこねてしまい, 今あたふた {*する/している} ところです。

(51) では, 「行為・行動的なもの」の「あつぷあつぷ」「にここにこ」「あたふた」は現在を表しており, 「シテイル」形で用いられるが, 「スル」形で用いられない。次の (52) は示しているように, 「行為・行動的なもの」は「スル」形で用いられると, 通常習慣ないし近い未来を表す。(52a) の「あたふたする」は習慣, (52b) 「あたふたする」は近い未来を表す。

- (52) a. 毎朝の荷物まとめて少々あたふたする。(oshiete1.goo.ne.jp/qa2728488.html)

- b. さて、準備しなくちゃ。出かける前にあたふたするんですわ。

(nagonagoboo.blog.so-net.ne.jp)

「行為・行動的なもの」と異なって「動作・振動的なもの」「状態的なもの」「心理・感情的なもの」「生理・感覚的なもの」が現在形で現在、主語の現実の状態を描写することができる。

- (53) a. このテーブルがたがたするのよ。直して。(飛田・浅田 2002. p.39)
b. 今朝、バナナを食べた後に下の前歯を指差しながら「お母さん、この歯、グラグラするよ」と…。(plaza.rakuten.co.jp/gonron/diary)
- (54) a. 舌で触ると、歯の表面がざらざらする。
b. お肌がつるつるしますね。
- (55) a. 救急車の前に不法駐車、まったくいらいらする。(阿刀田・星野 1995. p.7)
b. 今までは尊敬しててすごい人だって思ってきたのに、今は、ものすごくむかむかする。(blog.livedoor.jp/ayanomom928/archives/50294953.html)
- (56) a. 寒いです。肌も乾燥して痒くてピリピリします。
(ultramarine.way-nifty.com/ultramarine/2008/11/post-90c1.html)
b. 今なんかそこの歯がむずむずする。

この例から明らかなように、(53)「動作・振動的なもの」の「たがたする」「グラグラする」はそれぞれテーブルと歯の現在の揺れ動く状態、また(54)「状態的なもの」の「ざらざらする」は歯の表面がなめらかではない状態、「つるつるする」は肌のなめらかな状態を表す。(55)「心理・感情的なもの」の「いらいらする」「むかむかする」は主語の心の現在状態、また(56)「生理・感覚動詞」の「ピリピリする」「むずむずする」は主語の現在の身体的感覚の状態を表す。このように、「動作・振動的なもの」「状態的なもの」「心理・感情的なもの」「生理・感覚的なもの」は現在形で現在を表せるということが特徴的である。

以上では、「行為・行動的なもの」は現在を「スル」形で表すことができないと述べた。原則としては、現在形は習慣ないし未来を表すのは「彼は毎日よく働く」「彼は明日も働く」のよう非状態動詞の場合である。現在形で現在を表すのは「金庫の中に大金がある」「窓の外に変な男がいる」から窺えるように、「ある」「いる」の状態動詞である。一般的には、「スル」形は未来を表すのは動的述語の場合、「スル」形は現在を表すのは静的述語の場合と考えられている(庵(2001)参照)²²。

²² 庵(2001)が、以下のア～エの述語を動的述語、オ～クの述語を静的述語と呼んでいる。

ア：{まもなく／*現在} A国とB国の間に戦争が起こる。

イ：{まもなく／*現在} ここでパーティーがある。

ウ：{まもなく／*現在} 太郎は花子に電話をかける。

エ：私は6時に夕食を食べる。

以上の例は未来を表すが、以下の例は現在を表す。

このようにテンスから見ると、「行為・行動的なもの」は述語になる場合、動的述語（「スル」形が未来を表す）、「動作・振動的なもの」「状態的なもの」「心理・感情的なもの」「生理・感覚的なもの」は述語になる場合、静的述語（「スル」形が現在を表す）ということにとまとめることができる。

2.1.1.6 形容詞・アスペクト的な用法から見た相違点

前節では、「行為・行動的なもの」の述語を動的述語、「動作・振動的なもの」「状態的なもの」「心理・感情的なもの」「生理・感覚的なもの」の述語を静的述語とした。「行為・行動的なもの」は「あっぷあっぷしている」「にこにこしている」のように「シテイル」形と用いられると、その「シテイル」がアスペクトと直接結びつく。しかしながら、静的述語「びしょびしょしている」「あっさりしている」などの「シテイル」はアスペクトと関係しているのかという疑問がある。以下では「動作・振動的なもの」「状態的なもの」「心理・感情的なもの」「生理・感覚的なもの」の「シテイル」を考察する。最初は、先行研究について述べる。

「シテイル」形は、動作や現象が継続していることを表す場合と、ある過去の出来事が終わって、その結果がいまある状態として残っていることを表す場合があることが認められ、この二つが「シテイル」形の基本的な意味であるとされている（寺村（1984））。工藤（1982）は、この二つの基本的意味と「派生的」意味として現在での習慣を表す用法と、過去の事実を回想して、いわば頭の中に再現させるような用法もあるとしている。

しかしながら、一般語彙においては継続でも、結果でもなく、品定めの、性状規定的、その意味で形容詞のような、物事の様子、性質、形状などを表す用法もある（金田一 1950）。寺村（1984）が、「フトル」「ヤセル」には「私ハコノ半年デ 5 キロモ {フトツテイル／ヤセテイル}」で見られるように、変化の起こった「結果の状態」を述べる用法があれば、(57)から見られるように、当人の過去との比較でなく、他の人との比較という意味の「単なる状態」を表す形容詞的な用法もあると強調している。

- (57) a. アノ人ハズイブンフトツテイルネ
b. 彼女ハヤセテイルガ、健康ソウダ

(寺村 1984. p.138)

寺村（1984）が、このような形容詞的な用法に対して動作の現象の継続・進行とか、完了の結果とかを表す場合を一括して、アスペクト的な用法と呼んでいる。また、「ノンビリシテイル」という単語の例を挙げて、(58a) はアスペクト的な用法であるが、(58b) は形容

オ：{*まもなく／現在} 窓の外に変な男がいる。
カ：{*まもなく／現在} 机の上にケーキがある。
キ：{*まもなく／現在} この町は静かだ。
ク：{*まもなく／現在} ここは静かな町だ。

詞的な用法であると強調している²³。

- (58) a. 久シブリニ温泉ニ来テ, ノンビリシテイル
b. 彼女ノ物ノ言イカタハ, ドコトナクノンビリシテイル

同様に、オノマトペにおいても、「シテイル」形になりながら形容詞と同様な働きを持っているものが数多く見られる。これらの語には (59) (60) の例が表示しているように、アスペクトの対立がない。

- (59) a. 油で表面がべとべと {する/している}。
b. 油でべとべと {する/している/した} 表面
(60) a. 手がかさかさ {する/している}。
b. かさかさ {する/している/した} 手

このようなアスペクトの対立が見られないオノマトペを「形容詞的なもの」と呼ぶことにする。そして、以下では「する」動詞を伴う下位類オノマトペのどのものが形容詞的な用法、どのものがアスペクト的な用法が見られるかを考察していく。

「する」動詞を伴うオノマトペはアスペクト的用法か、形容詞的用法かの認定を客観的なものとするために、いくつかのテストを設けることができる。まずは、未来の基本形の用法、過去の過去形の用法が考えられるかどうかということである。考えられない場合は形容詞的用法である。また、連体修飾で「～タ」という形になるのが普通で、その「～タ」形には、完了の意味も、過去の意味も感じられない、ということがあるかどうかである（寺村（1984）参照）。

・「動作・振動的なもの」の場合

- (61) a. この歯はぐらぐらしている。
b. この歯は一週間でぐらぐらする（だろう）。

²³ 寺村（1984）が（a）の「ノンビリシテイル」はアスペクト的であると強調しているのは、主体のありようを時間軸にそった変化、展開としてみて、その一局面を捉えて述べたものであるからと主張している。

ア：来週ハ温泉へ行ッテ, 少シノンビリスルツモリダ

イ：先週ハ温泉へ行ッテ, 久シブリニノンビリシタヨ

また、（b）は形容詞的であるということは、それが、主体のある様子を、他と比較して、特徴づけている点があるからと示している。

ウ：彼女ノ物ノ言イカタハ セカセカシテイル
間がヌケテイル
丁寧ダ
乱暴ダ
冷タイ
ヤサシイ

- c. この歯は昨日ぐらぐらした。
- d. ぐらぐらしている歯は抜いたほうがいいのでしょうか。
- e. ぐらぐらした歯は抜いたほうがいいのでしょうか。

((61a) は形容詞的とアスペクト的な用法が見られる。)

- (62)
- a. このテーブルはがたがたしている。
 - b. やがてこのテーブルは一年でがたがたする (だろう)。
 - c. 当時テーブルががたがたしたが...
 - d. がたがたしているテーブルには足の調節が必要。
 - e. がたがたしたテーブルには足の調節が必要。

((62a) は形容詞的とアスペクト的な用法が見られる。)

・「状態的なもの」の「ル」形になれるものの場合

- (63)
- a. 髪がさらさらしている。
 - b. ?明日髪がさらさらする (はずだ)。
 - c. *当時髪がさらさらしたが...
 - d. ?さらさらしている髪にするためには、どのシャンプーを使えば良いんですか。
 - e. さらさらした髪にするためには、どのシャンプーを使えば良いんですか。

((63a) は形容詞的なものである。)

- (64)
- a. 肌がつるつるしている。
 - b. 一ヶ月で肌がつるつるする (はずだ)。
 - c. ?当時肌がつるつるしたが...
 - d. つるつるしている肌...
 - e. つるつるした肌...

((64a) は形容詞的なものである。)

・「状態的なもの」の「ル」形になれないものの場合

- (65)
- a. このスープの味はあっさりしている。
 - b. *やがてこのスープの味はあっさりするはずだ。
 - c. *あのみせに行ったとき、スープの味があっさりした (よ)。
 - d. あっさりしている味のラーメンが好きな友人がいて...
 - e. あっさり (と) した味のラーメンが好きな友人がいて...

((65a) の「シテイル」は形容詞的なものである。)

- (66)
- a. 油を使ったフライパンはぎとぎとしている。
 - b. *やがてこのフライパンはぎとぎとする。
 - c. 昨日の焼肉を料理したせいで、フライパンがぎとぎとした。
 - d. ぎとぎとしているフライパン...

- e. ぎとぎとしたフライパン…
(a) は形容詞的なものである。

・「心理・感情的なもの」の場合

- (67) a. あいつの心無い言葉のせいで、むかむかしている。
b. 明日彼の顔を見たら、むかむかすると思う。
c. 当時は彼の顔を見て、いつもむかむか {した／していた}。
d. *むかむかしている私…
e. *むかむかした私…
(67a) はアスペクト的なものである。
- (68) a. 彼はむしゃくしゃしている。
b. 明日の試験の結果によっては、彼はむしゃくしゃすると思う。
c. 昨日、彼はむしゃくしゃ {*した／していた}。
d. *むしゃくしゃしている彼…
e. *むしゃくしゃした彼…
(68a) はアスペクト的なものである。

・「生理・感覚的なもの」の場合

- (69) a. 鼻がむずむずしている。
b. *明日から鼻がむずむずする。
c. 昨日鼻がむずむずした。
d. ?むずむずしている鼻…
e. ?むずむずした鼻…
(69a) アスペクト的なものである。
- (70) a. 胃がちくちくしている。
b. *今から胃がちくちくする (よ)。
c. 昨日胃がちくちくした。
d. ?ちくちくしている胃…
e. ?ちくちくした胃…
(70a) はアスペクト的なものである。

以上では、「動作・振動的なもの」「状態的なもの」「心理・感情的なもの」「生理・感覚的なもの」を考察し結果、オノマトペには「シテイル」が形容詞的になるものと、アスペクト的になるもの、また、「シテイル」が形容詞的にもなるし、アスペクト的にもなるものが存在することが分かった。以上の観察を次の表 27 にまとめる。

表 27 「シテイル」形の形容詞的・アスペクト的な用法

分類	オノマトペ	形容詞的	アスペクト的
「動作・振動的なもの」	ぐらぐらしている	+	+
	がたがたしている	+	+
「状态的なもの」	さらさらしている	+	-
	つるつるしている	+	-
	あっさりしている	+	-
	ぎとぎとしている	+	-
「心理・感情的なもの」	むかむかしている	-	+
	むしゃくしゃしている	-	+
「生理・感覚的のもの」	むずむずしている	-	+
	ちくちくしている	-	+

以上のことをまとめると次のことになる。「する」動詞と共起するオノマトペを考察した結果、下位類のオノマトペの中では、擬情語は「する」動詞を伴う比率が最も高く6割に近いということが分かった。擬態語はその比率が3割程度である。これらに対して擬声語・擬音語は「する」動詞を伴わない傾向にある。

また、「する」動詞と共起できるオノマトペを分析し、①「行為・行動的のもの」、②「動作・振動的なもの」、③「状态的なもの」、④「心理・感情的なもの」、⑤「生理・感覚的のもの」のように分類した。これらをテンスという観点から考察した結果、①「行為・行動的のもの」は動的述語であるのに対し、②「動作・振動的なもの」、③「状态的なもの」、④「心理・感情的なもの」、⑤「生理・感覚的のもの」は静的述語である。アスペクトという観点から見ると、①「行為・行動的のもの」、④「心理・感情的なもの」、⑤「生理・感覚的のもの」の「シテイル」はアスペクトに関係しているが、③「状态的なもの」の「シテイル」は形容詞的のものである。また、②「動作・振動的なもの」の「シテイル」は形容詞的にもなるし、アスペクト的にもなる。

2.1.2 「-つく」動詞

日本語オノマトペにおいては、「する」動詞によっておこる動詞化以外に、2モーラの語基に接尾辞「つく」が付加することによって派生する過程も見られる。しかしながら、接尾辞「つく」によるこの派生過程は「する」動詞ほど生産的ではない。本研究で扱われている1,591語のうち、接尾辞「つく」によって派生したと考えられる語は39語(2%)しか見られなかった。これらを(71)にまとめる。

- (71) いちゃつく, うろつく, かさつく, がさつく, がたつく, がちゃつく, ぎらつく, ぐらつく, こせつく, ごたつく, ごちゃつく, ごてつく, ごろつく, ざらつく, ざ

わつく, じとつく, じめつく, しょぼつく, じゃらつく, そわつく, だぶつく, ちらつく, でれつく, ぬらつく, ねばつく, ぱくつく, ぱさつく, ばたつく, ぱらつく, びくつく, ひょろつく, ひりつく, ふらつく, ぶらつく, べたつく, べとつく, まごつく, むかつく, もたつく

(71) の動詞は対応する 2 モーラ反復形のオノマトペと意味的に関係していて, このような対応形の 2 モーラの語基を接尾辞「つく」に組み入れることによって派生したと考えられている (田守・スコウラップ (1999) 24)。

接尾辞「つく」は, 「する」動詞が共起するオノマトペの語基に付加することができ, 非常によく似た意味を表す。

- (72) a. 汗とほこりで髪が {べとついて／べとべとして} 困ったことがある。
 b. 糊で手が {べたついていて／べたべたして} 切手をうまく貼れない。
 c. 平仮名ばかりで書いたノートを見る度に {むかつく／むかむかする}。

「つく」に組み入れられるオノマトペは基本的には否定的な (マイナスの) 意味を持つと考えられている。これについて田守・スコウラップ (1999) が, 以下 (73) (74) の例を挙げて次のように述べている。

- (73) a. にやにや → にやつく
 b. ぎらぎら → ぎらつく
 (74) a. にここに → *にこつく
 b. きらきら → *きらつく

(田守・スコウラップ 1999. p.57)

「(73) が否定的な意味を表すのに対して, (74) が肯定的な意味を表すという点で異なる。(略) すなわち, 肯定的な意味を持つオノマトペは「つく」組み入れが不可能で, 否定的な意味を表すものだけがこの組み入れを受ける」と強調している。また, 「ひりひり」／「*ひりつく」, 「うかうか」／「*うかつく」, 「おずおず」／「*おずつく」, 「くさくさ」／「*くさつく」という例を挙げ, 否定的な意味を持つすべてのオノマトペがこの組み入れを受け入れるとは限らないと述べている。

24 田守・スコウラップ (1999) が, アにまとめた動詞は, イにまとめた 2 モーラ反復形に対応しており, この対応形の語基を「つく」に組み入れらることによって派生したと強調している。

ア: ばさつく いらつく べとつく もたつく ぐらつく
 むかつく がさつく がたつく ばたつく ねばつく
 イ: ばさばさ いらいら べとべと もたもた ぐらぐら
 むかむか がさがさ がたがた ばたばた ねばねば

Hamano (1986) が、オノマトペに使われる「つく」は、一般語彙に使われる「つく」と異なって、‘to exhibit the feature of (the mimetically-expressed condition)’ といった意味を表すと主張している²⁵。

接尾辞「つく」によって派生した動詞を観察すると、「ざわつく」「ばたつく」を除いてほとんどすべてが擬態の語基からなっていることが分かる。「ざわつく」「ばたつく」については、Kakehi・Tamori・Schourup (1996) が次のように解釈している。

(75) 「ざわざわ」

Kakehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味】 S : A noisy sound, as of many people talking at once; the sound of leaves rustling, or water moving vigorously.

【例文】 : そのときどうっと、森から吹きつけてくる暗い風が、千光寺をとりまく森をざわざわと鳴らした。

zawa-tsuku: [of a group of people] to talk noisily

【例文】 : 休み時間、生徒達がざわついていたので教室に行ってみると、黒板にユーモラスな校長の似顔絵が描いてあった。

(76) 「ばたばた」

Kakehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味】 S : A loud flapping sound, such as that made by cloth blown by the wind, or by wings beating; the pattering sound of quick footsteps.

【例文】 : 雨が降ると、子供達は外で遊べないので、家の中をばたばた (と) 走り回ったりして、お母さんによく叱られることがある。

bata-tsuku: to rattle

【例文】 : 戸がばたつく。

辞書の記述から分かるように、「ざわつく」「ばたつく」はそれぞれ「ざわざわ」「ばたばた」

²⁵ Hamano (1986) は、以下の例を挙げて、これらは2モーラの「CVCV」語基から派生したものであると強調している。

para-tuk-u	‘to be sprinkled’
peta-tuk-u	‘to be sticky’
bara-tuk-u	‘to be disorganized, to be diffuse’
basa-tuk-u	‘to be excessively dry’
hura-tuk-u	‘to be shaky’
huwa-tuk-u	‘to behave frivolously’
tira-tuk-u	‘to flicker’
tyara-tuk-u	‘to be flashy’
dabu-tuk-u	‘to be overabundant’
kira-tuk-u	‘to glitter’
gira-tuk-u	‘to glare’

に対応し、擬音の意味に由来する。しかしながら、「ざわつく」「ばたつく」という形で用いられる時は、音そのものではなく、前者は「多くの物がさわぎ動く状態」、後者は「大きな音を立てるような様子」を表す。

2.1.3 その他の派生動詞

日本語オノマトペにおいては、「つく」ほど生産的ではないが、他の接尾辞によって派生した派生動詞が観察される。まず (77) に、接尾辞「めく」の動詞の例を挙げる。これらの動詞は、対応する 2 モーラ反復形のオノマトペと意味的に関係していると言える。

- (77) きらめく＝きらきら くるめく＝くるくる ざわめく＝ざわざわ
 はためく＝はたはた ひしめく＝ひしひし ひらめく＝ひらひら
 ゆらめく＝ゆらゆら よろめく＝よろよろ

次に、接尾辞「ける」によって派生した動詞が挙げられる。これらの動詞も 2 モーラの反復形のオノマトペと関係して、よく似た意味を表す。

- (78) いじける＝いじいじ だらける＝だらだら とろける＝とろとろ
 にやける＝にやにや ばらける＝ばらばら ぼやける＝ぼやぼや
 よろける＝よろよろ

接尾辞「めく」「ける」は接尾辞「つく」と同じく、2 モーラの語基のみに付く。Hamano (1986) によると、これらの接尾辞は次のような意味を表す。接尾辞「めく」は ‘to fashionably/elegantly exhibit the mild feature of (the condition expressed by the mimetic root)’、接尾辞「ける」は ‘to turn into (the state expressed by the mimetic root)’ である。

以上と異なって、他の方法で派生する動詞も見られる。「いらだつ」「ぐずる」「ちびる」はそれであるが、このような方法で造られる動詞は非常に稀である²⁶。このように、通常 2

²⁶ Hamano (1986) は、上で示されている接辞以外に、/e-/ /-as-/、/ge-/ /-gas-/、/k-/ /-g-/、/mar-/ /-m-/ /-me-/、/bar-/ /-b-/ の接辞を挙げており、これらによって作られた動詞も直接オノマトペ語彙と関係があると強調している。Hamano (1986) はこれらの接辞が次の意味を表すと述べている。/e/ は ‘to do (the action/movement indicated by the mimetic root)’、/as-/ は ‘to cause X to do (the action indicated by the mimetic root)’、/k-/ /-g-/ は ‘to do (the action/movement indicated by the mimetic root)’、/mar-/ は ‘to become (the condition indicated by the mimetic root)’、/m-/ は ‘to turn X into (the condition indicated by the mimetic root)’、/bar-/ は ‘to become (the condition indicated by the mimetic root)’ である。

/e-/ /-as-/:	a.	yur-e-ru	(cf. yura-yura)	‘to sway’
		yur-as-u	(cf. yura-yura)	‘to rock’
	b.	tar-e-ru	(cf. tara-tara)	‘to droop’
		tar-as-u	(cf. tara-tara)	‘to hang’
/ge-/ /-gas-/:	a.	koro-ge-ru		‘to tumble (intr.)’

モーラのあるオノマトペの語基に接尾辞がつき、その派生過程によって複数の動作が造られている。ある接尾辞によってオノマトペから動詞が派生するというふうに考えるのは普通であるが、日本語オノマトペには逆に動詞からオノマトペが派生したと考えられている例も存在する。以下の (79) にまとめる例は田守・スコウラップ (1999) によって挙げられたものである。これらについては田守・スコウラップ (1999) は動詞とオノマトペがそれぞれ意味的に関連しているが、派生過程に関してはオノマトペから動詞が派生したのか、逆に動詞からオノマトペが派生したのか定かではないと述べている。

- | | | |
|---------|-------------|-------------|
| (79) a. | ぼやかす ⇔ ぼやぼや | ふやかす ⇔ ふやふや |
| b. | いらだつ ⇔ いらいら | うきだつ ⇔ うきうき |
| c. | ひやす ⇔ ひやひや | ひたす ⇔ ひたひた |
| d. | うづく ⇔ うずうず | はたく ⇔ はたはた |
| | そよぐ ⇔ そよそよ | さわぐ ⇔ さわさわ |
| | ゆらぐ ⇔ ゆらゆら | |
| e. | きしむ ⇔ きしきし | ひそむ ⇔ ひそひそ |
| | ゆるむ ⇔ ゆるゆる | むくむ ⇔ むくむく |
| | くらむ ⇔ くらくら | くるむ ⇔ くるくる |
| f. | ゆるまる ⇔ ゆるゆる | くるまる ⇔ くるくる |
| g. | ゆるめる ⇔ ゆるゆる | くるめる ⇔ くるくる |
| h. | ゆれる ⇔ ゆらゆら | たれる ⇔ たらたら |
| i. | ゆらす ⇔ ゆらゆら | たらす ⇔ たらたら |
| j. | ころげる ⇔ ころころ | |
| k. | ころがす ⇔ ころころ | |

	b.	koro-gas-u		'to tumble (tr.)'
	c.	koro-gar-u		'to tumble (intr.)'
/-k-/:		hata-k-u	(cf. pata-pata)	'to dust, to beat'
/-g-/:		soyo-g-u	(cf. soyo-soyo)	'to rustle in the wind'
		sawa-g-u	(cf. sawa-sawa)	'to clamor'
		yura-g-u	(cf. yura-yura)	'to sway'
/-mar-/:		yuru-mar-u	(cf. yuru-yuru)	'to become loose'
		kuru-mar-u	(cf. kuru-kuru)	'to be rolled up'
/-me-/:		heko-me-ru	(cf. peko-peko)	'to flatten'
		yuru-me-ru	(cf. yuru-yuru)	'to loosen'
		kuru-me-ru	(cf. kuru-kuru)	'to wrap up'
/-m-/:		muku-m-u	(cf. muku-muku)	'to swell (intr.)'
		yuru-m-u	(cf. yuru-yuru)	'to become loose (intr.)'
		kisi-m-u	(cf. gisi-gisi)	'to squeak (intr.)'
		kura-m-u	(cf. kura-kura)	'to become dizzy (intr.)'
		kuru-m-u	(cf. kuru-kuru)	'to roll up (tr.)'
/-bar-/:		heta-bar-u	(cf. heta-heta)	'to become exhausted'
		kuta-bar-u	(cf. kuta-kuta)	'to become exhausted'
/-b-/:		koro-b-u	(cf. koro-koro)	'to tumble (intr.)'

1. ころがる ⇔ ころころ

(田守・スコウラップ 1999. pp.58-59)

2.2 カザフ語オノマトペの動詞用法

カザフ語オノマトペは直接に動詞として機能することができないが, сып ету /*sip etu*/ 「すつとする」のように助動詞 ету /*etu*/ (「する」), жымың қағу /*zhyming qaghu*/ 「にやりとする」のように助動詞 қағу /*qaghu*/ (「うつ」) などの助動詞と共起して動詞の役割を果たすことがあれば, дедекте /*dedekte*/, майманда /*majmangda*/, зырла /*zirla*/ のように接尾辞, -та /*-ta*/ / -те /*-te*/, -да /*-da*/ / -де /*-de*/, -ла /*-la*/ / -ле /*-le*/ などと結びついて, 派生動詞として用いられることがある。最初は, オノマトペと共起する助動詞について論じる。

2.2.1 「オノマトペ+助動詞」構造

カザフ語オノマトペは, 助動詞 ету /*etu*/ (「する」), қағу /*qaghu*/ (「うつ」), болу /*bolu*/ (「なる」), беру /*beru*/ (「あげる」) と用いられ, 「オノマトペ+助動詞」という構造で動詞の役割を果たすことができる。このような「オノマトペ+助動詞」という動詞的な用法についての研究はあまりなされてこなかったようである。Катембаева (1974) では, 「オノマトペ+助動詞」についての多少の記述が見られる。Катембаева (1974) がカザフ語のオノマトペは жалт етті /*zhalt etti*/, гүрс етті /*gürs etti*/, сылдыр етті /*sıldır etti*/ のように助動詞 ету /*etu*/ と共起することが多く見られると述べている。また, ету /*etu*/ 以外に қағу /*qaghu*/, болу /*bolu*/, беру /*beru*/ と共起することがあると示している。しかしながら, これらの助動詞はどのようなオノマトペと共起するのか, またそのオノマトペはどのように異なっているのかについて何も述べていない。以下では, カザフ語オノマトペと共起する助動詞 ету /*etu*/, қағу /*qaghu*/, болу /*bolu*/, беру /*beru*/ はどのようなオノマトペと用いられるか, そのオノマトペは形態的にどのように異なっているのかということをも明らかにする。

2.2.2 下位類オノマトペの助動詞との共起

本節では, カザフ語の下位類オノマトペの助動詞との共起について検討する。

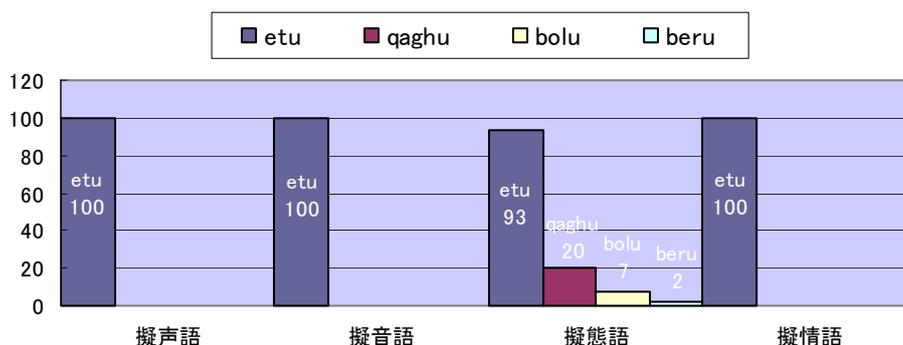
先述したように, カザフ語オノマトペは助動詞 ету /*etu*/ (「する」), қағу /*qaghu*/ (「うつ」), болу /*bolu*/ (「なる」), беру /*beru*/ (「あげる」) と共起する。カザフ語オノマトペのデータベースを分析した結果, 殆どすべてのオノマトペが助動詞 ету /*etu*/ (「する」) と共起できるということと, 助動詞 қағу /*qaghu*/ (「うつ」), болу /*bolu*/ (「なる」), беру /*beru*/ (「あげる」) は擬態語とのみ共起できるということが明らかになった。詳細な結果を表 28 にまとめる。

表 28 カザフ語オノマトペの助動詞との共起

	擬声語	擬音語	擬態語			擬情語	
	etu	etu	etu	gahu	bolu	beru	etu
単義語	80	292	573	131	49	15	7
単一多義語	7	7	146	38	7	2	
多義混成語	19	70	52		2	1	3
総合数	106 (100%)	369 (100%)	771 (93%)	169 (20%)	58 (7%)	18 (2%)	10 (100%)

この表の数字は語数を表し、() のパーセンテージは各下位類の全語数からの比率を表すものである。例えば、擬態語を例にすると、擬態語の全語数 829 語の中では 58 語のみが助動詞 болу /bolu/ を伴い、それは 7% に相当する。以上の表をグラフで示すと、以下のようになる。

図 23 助動詞を伴うカザフ語オノマトペ



以上から明らかなように、カザフ語オノマトペにおいては助動詞 етү /etu/ は最も生産的なものである。これと比べて助動詞 қағу /qaghu/, болу /bolu/, беру /beru/ はそれほど生産的ではないし、擬態語とのみ共起するものである。以下では、これらの助動詞について詳しく説明する。

2.2.3 助動詞 е т ү /etu/ (「する」)

前節で示したように、カザフ語オノマトペ殆ど全てが助動詞 етү /etu/ と共起することができる。唯一の例外としては дал-дал болу /dal-dal bolu/, мыж-мыж болу /mızh-mızh bolu/ のように助動詞 болу /bolu/ としか共起しないオノマトペが挙げられる。これらの助動詞 болу /bolu/ と共起するオノマトペは擬態語のみであって、通常に етү /etu/ と共起しない。

助動詞 етү /etu/ は殆ど全てのオノマトペと共起することができるため、音韻形態的な側面から見て次のようにまとめることができる。

- (80) a. /CVC/
дік ету /*dik etu*/, лап ету /*lap etu*/, сып-сып ету /*sip-sip etu*/
- b. /CVCC/
қарқ ету /*qarq etu*/, салп ету /*salp etu*/, тарс-тарс ету /*tars-tars etu*/
- (81) a. /CVC-q/
қопақ ету /*qopaq etu*/, секек ету /*sekek etu*/
- b. /CVCC-q/
жалтақ ету /*zhaltaq etu*/, тайқақ ету /*tajqaq etu*/
сөлпек-сөлпек ету /*sölpek-sölpek etu*/
- (82) a. /CVC-ng/
қиқаң ету /*qi:qang etu*/, секең ету /*sekeng etu*/
тықаң-тықаң ету /*tıqang-tıqang etu*/
- b. /CVCC-ng/
жалтаң ету /*zhaltang etu*/, солпаң ету /*solpang etu*/
қалтаң-қалтаң ету /*qaltang-qaltang etu*/
- (83) a. /CVC-r/
сатыр ету /*satır etu*/, тыпыр-тыпыр ету /*tıpır-tıpır etu*/
- b. /CVCC-r/
күмбір ету /*kümbir etu*/, мыңғыр-мыңғыр ету /*mingghır-mingghır etu*/
- (84) a. /CVC-l+q/
жыпылық-жыпылық ету /*zhıpılıq-zhıpılıq etu*/
қыпылық-қыпылық ету /*qıpılıq-qıpılıq etu*/
- b. /CVCC-l+q/
күйгелек-күйгелек ету /*küjgelek-küjgelek etu*/
шайқалақ-шайқалақ ету /*shajqalaq-shajqalaq etu*/
- (85) a. /CVC-l+ng/
қисалаң-қисалаң ету /*qi:salang-qi:salang etu*/
сипалаң-сипалаң ету /*si:palang-si:palang etu*/
- b. /CVCC-l+ng/
қорбалаң-қорбалаң ету /*qorbalang-qorbalang etu*/

тырбалаң-тырбалаң ету /*tırbalang-tırbalang etu*/

(80) ~ (85) のオノマトペは反復形であっても非反復形であっても助動詞 *ety /etu/* と共起できる。

前節の図 23 から見られるように、助動詞 *ety /etu/* は擬音・擬態オノマトペに関係なく共起するものである。以下の (86) は擬音オノマトペ、(87) は擬態オノマトペの例である。

(86) a. Сөйлегенде даусы қыр-қыр етеді. (Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.922)
söjlegende dausı qır-qır etedi.

話すとき声ががらがらする。

b. Еламанның уысына қысып отырған кесе кенет күтір етті.

Elamanning uısına qısqıp otırghan kese kenet kütir etti.

エラマンが手に取っていた茶碗が急にかちやんと鳴った。

c. Балалар үйден топыр-топыр етіп жүгіріп шықты.

balalar üjden topır-topır etip zhügirip shıqtı.

子供たちは家からばたばたと出てきた。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.815)

(87) a. Маусынбай сақалын сипап қойып жымың етті.

mausınbaj saqalın sı:paq qojıp zhımyng etti.

マウシンバイがあごひげを撫でてにやりとした。

(Ғ. Мұстафин, “Миллиционер”)

b. Итбай Асқардың бетіне жалтақ етіп қарады.

i:tbai asqarding betine zhaltaq etip qaradı.

Итбайが顔にきょろっとみた。

(С. Мұқанов, “Жұмбақ жалау”)

c. Баласы шешесінің артынан сөлпек-сөлпек етіп келеді.

balası sheshesining artınan sölpek-sölpek etip keledi.

子供はお母さんの後ろについて元気がなく歩いている。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.726)

上で述べたように、カザフ語オノマトペにおいては、「オノマトペ+助動詞」という構造によって動詞化が起こるが、最も生産的な助動詞 *ety /etu/* の場合は、さらに、句の後ろに *қалу /qalu/* 「のこる」(88)、*түсу /tüsu/* 「おりる」(89) という助動詞が付加して複雑な合成述語を構成することがある。

(88) a. Жүрегім су ете қалды.

zhüregim su ete qaldi.

心臓がびくっとした。

- b. Бұл сөз менің жүрегіме зырқ ете қалды. (С. Мұқанов, “Жұмбақ жалау”)

bul söz mening zhüregime *zirq ete qaldi*.

この言葉は私の心臓にぱっとはいた。

- (89) a. Шымырбек сасып селк ете түсті. (Сыздыкова, Хусаин 2001. p.713)

shımırbek sasıp *selk ete tüsti*.

シミルベックは驚いてびくっとした。

- b. Суық тер бұрқ ете түсті.

suiq ter *burq ete tüsti*.

冷たい汗がぱつとでてきた。

以上の(88)は助動詞 қалу /qalu/, (89)は助動詞 түсу /tüsu/の例である。このような「オノマトペ+ete+qalu/tüsu」という構造は、音や動作の瞬間的な行われ方を表す。この助動詞 қалу /qalu/ないし түсу /tüsu/は、助動詞 ету /etu/だけを後続し、助動詞 қағу /qaghu/, болу /bolu/, беру /beru/の後ろに用いられない。

- (90) a. зырқ ете {қалу / түсу} .

zirq ete {qalu / tüsu} .

ぱつとおこる。

- b. балпан қаға { *қалу / *түсу } .

*balpang qagha { *qalu / *tüsu}* .

体重のある人がゆっくりと歩く様子。

- c. быт-шыт бола { ? қалу / *түсу } .

*bit-shit bola { ? qalu / *tüsu}* .

めちやくちやになる。

- d. жып бере { *қалу / *түсу } .

*zhyp bere { *qalu / *tüsu}* .

さつと動いた。

(90a)は助動詞 ету /etu/, (90b)は助動詞 қағу /qaghu/, (90c)は助動詞 болу /bolu/, (90d)は助動詞 беру /beru/の例である。この例から明らかのように、「オノマトペ+ete+qalu/tüsu」という構造は助動詞 ету /etu/の場合だけ成立する。

2.2.4 動詞 қағу /qaghu/ (「うつ」)

次によく見られる動詞化は、助動詞 қағу /qaghu/ (「うつ」)によるものである。この助

動詞 қағу /qaghu/は一般的には擬態オノマトペと共起する。音韻形態的な側面から助動詞 қағу /qaghu/と共起するオノマトペを (91) (92) (93) にまとめることができる。

(91) a. /CVC-ng/

бүкең қағу /bükeng qaghu/ сипаң қағу /si:pang qaghu/

тықаң қағу /tiqang qaghu/ шоқаң қағу /shoqaq qaghu/

b. /CVCC-ng/

балпаң қағу /balpang qaghu/ жыртың қағу /zhirting qaghu/

тыржаң қағу /tirzhang qaghu/ шыбжаң қағу /shibzhang qaghu/

c. /CVCC-l+ng/

бұлтапаң қағу /bultalang qaghu/ далбалаң қағу /dalbalang qaghu/

(92) a. /CVC-q/

безек қағу /bezek qaghu/ қиқақ қағу /qi:qaq qaghu/

секек қағу /sekek qaghu/ тықақ қағу /tiqaq qaghu/

b. /CVCC-q/

бүлкек қағу /bülkek qaghu/ дірдек қағу /dirdek qaghu/

жаутақ қағу /zhautaq qaghu/ қалбақ қағу /qalbaq qaghu/

c. /CVCC-l+q/

бұлтапақ қағу /bultalaq qaghu/ далбалақ қағу /dalbalaq qaghu/

(93) a. /CVC-r/

дабыр қағу /dabır qaghu/ тыпыр қағу /tipır qaghu/

b. /CVCC-r/

даңғыр қағу /dangghır qaghu/ шілдір қағу /shildir qaghu/

(91a,b) では、/CVC/・/CVCC/語基を基本形に持つものは接尾辞「鼻音」-ң /ng/を伴ったものである。また、(91c) は/CVCC/の語基に接尾辞-л+ң /l+ng/が付加したものである。

(92a,b) は、/CVC/・/CVCC/語基に接尾辞「閉鎖音」-қ /q/・-к /k/が付加したもので、(92c) は、/CVCC/語基に接尾辞-л+қ /l+q/が付加したものの例である。また、(93) では、/CVC/・/CVCC/に接尾辞「ふるえ音」-р /r/が付加したものである。この例から次のことが言える。助動詞 қағу /qaghu/は接尾辞が付加した形態のみと共起するということである。つまり、*сып қағу /sip qaghu/, *томп қағу /tomp qaghu/という語基は助動詞 қағу /qaghu/と用いられない。сып^{ың} қағу /siping qaghu/, томп^{аң} қағу /tompang qaghu/のように接尾辞を伴った形態ではなければならない。もう一つの特徴は、非反復形のものが好ましいということである。

(94) a. Ол маған қарап жымың {қақты/етті} .

ol maghan qarap *zhiming* {qaqtı/etti} .

彼は私を見てにやっとした。

b. Ол маған қарап жымың-жымың {??қақты/етті} .

ol maghan qarap *zhiming-zhiming* {??qaqtı/etti} .

彼は私を見てにやにやとした。

(94) から見られるように、反復形の *жымың-жымың* /*zhiming-zhiming*/は助動詞 *ету* /*etu*/と共起するが、助動詞 *қағу* /*qaghu*/の場合は不適切である。

(93) は、助動詞 *қағу* /*qaghu*/が接尾辞「ふるえ音」-p /r/が付いたオノマトペと共起する例である。このような接尾辞が付いたオノマトペは一般的には擬音語である。しかしながら、これは助動詞 *қағу* /*qaghu*/と共起する場合は、擬音ではなく擬態オノマトペのように用いられる。

(95) Ол дабыр {қағып/етіп} сөйлей бастады.

ol *dabır* {qagıp/etip} söjlej bastadı.

彼はがらがらという声で話しはじめた。

(95) から、通常に擬音語として使用される *дабыр* /*dabır*/「大きな声で話す」は助動詞 *ету* /*etu*/と助動詞 *қағу* /*qaghu*/と共起できることが分かる。しかしながら、*дабыр* /*dabır*/は、助動詞 *ету* /*etu*/か助動詞 *қағу* /*qaghu*/かを伴うかによって表す意味のニュアンスが異なってくる。*дабыр ету* /*dabır etu*/の場合は、大きな声、つまり実際の音を模倣しているように示唆されるが、*дабыр қағу* /*dabır qaghu*/の場合は、話している様子が強調されるという違いがある。

2.2.5 助動詞 *болу* /*bolu*/ (「なる」)

次に助動詞 *болу* /*bolu*/ (「なる」) について検討する。助動詞 *болу* /*bolu*/と共起できるオノマトペは、前節で述べた助動詞 *қағу* /*qaghu*/と用いられるオノマトペよりも数が少ない。このようなオノマトペの語数は、データベースの 1,242 語の中では 58 語しか見られなかった。これらも擬態語だけに限られるものである。形態的な側面から次のようにまとめることができる。

(96) /(C)VC/

a. бал-бул болу /*bal-bul bolu*/ быт-быт болу /*bit-bit bolu*/

дал-дал болу /*dal-dal bolu*/ дал-дул болу /*dal-dul bolu*/

b. аң-таң болу /*ang-tang bolu*/ быт-шыт болу /*bit-shıt bolu*/

быж-тыж болу /*bızh-tızh bolu*/ мең-зең болу /*meng-zeng bolu*/

(97) /(C)VC-V/

- a. дуда-дуда болу /*duda-duda bolu*/ пара-пара болу /*para-para bolu*/
пәре-пәре болу /*päre-päre bolu*/ сүме-сүме болу /*süme-süme bolu*/
b. ығы-жығы болу /*ıghı-zhıghı bolu*/ қиқа-жиқа болу /*qi:qa-zhi:qa bolu*/
қиқы-жиқы болу /*qi:qı-zhi:qı bolu*/ қиқа-сиқа болу /*qi:qa-si:qa bolu*/

(98) /(C)VCC-V/

- a. арса-арса болу /*arsa-arsa bolu*/ жалба-жалба болу /*zhalba-zhalba bolu*/
далба-далба болу /*dalba-dala bolu*/ жалба-жұлба болу /*zhalba-zhulba bolu*/
b. алба-жалба болу /*alba-zhalba bolu*/ алба-жұлба болу /*alba-zhulba bolu*/
олпы-солпы болу /*olpı-solpı bolu*/ ұйпа-жұйпа болу /*ujpa-zhuipja bolu*/

上で挙げた例の (a) は、規則的な反復形をしているものであるか、語基の/a/-/u/の母音交換が見られるものであるかである。(b) は、第一語基の語頭子音が抜けているか、子音交換が見られるかのものである。(97) (98) のオノマトペの特徴の一つは、/CVC/・/CVCC/語基の後ろに母音が付加した特別な形態をしているということである。

助動詞 болу/*bolu*/と共起するオノマトペのうち、語基に接尾辞が付加したものが観察される。このようなものが少数ではあるが、存在する。(99) は、語基に接尾辞-м /-m/が付加した例である。

(99) /CVC-m/

- a. жырым-жырым болу /*zhırım-zhırım bolu*/
жулым-жулым болу /*zhulım-zhulım bolu*/

/(C)VCC-m/

- b. алқам-салқам болу /*alqam-salqam bolu*/
салқам-салқам болу /*salqam-salqam bolu*/

これらの他に、語基に接尾辞「閉鎖音」-қ /q/, 「鼻音」-ң /ng/, 「ふるえ音」-р /r/を伴ったものも多少観察される。

(100) /CVC-q/・/CVCC-q/

- жалақ-жалақ болу /*zhalaq-zhalaq bolu*/
тайпақ-тайпақ болу /*tajpaq-tajpaq bolu*/

(101) /(C)VCC-ng/

- ойпаң-тойпаң болу /*ojpang-tojpang bolu*/

(102) /(C)VCC-r/

- олбыр-солбыр болу /*olbir-solbir bolu*/

助動詞 болу /bolu/と共起するオノマトペの形態的特徴は、形態的に反復形でなければならないということである。つまり、助動詞 болу /bolu/は、*жырым болу /zhırım bolu/, *дуда болу /duda bolu/のように非反復形のもので用いられない。

次に、助動詞 болу /bolu/が表している機能について述べる。болу /bolu/と用いられるオノマトペはある物体の状態を表すものである。

(103) Көйлегі дал-дал болып жыртылды. (Бұралқыұлы 2007. p.136)

köjlegi *dal-dal bolıp* zhırtıldı.

シャツがこまかい部分に破れた。

(103) の дал-дал /dal-dal/はシャツが破れている音や様子ではなく、破れている状態そのものを描写している。дал-дал /dal-dal/のような状態を描写するオノマトペは、болу /bolu/を義務的に伴い、それ以外の助動詞と共起することができない。

(104) Көйлегі дал-дал {болып / *етіп / *қағып / *φ} жыртылды.

köjlegi *dal-dal* {bolıp / *etip / *qaghıp / *φ} zhırtıldı.

シャツがこまかい部分に破れた。

2.2.6 助動詞 беру /beru/ (「あげる」)

本節では、助動詞 беру /beru/ (「あげる」) という動詞化について論じる。助動詞 беру /beru/と共起できるオノマトペは最も少数である。助動詞 беру /beru/と共起できるオノマトペが18語しか見られなかった。これらのものを(105)にまとめる。

(105) a. /CVC/

жып беру /zhıp beru/ күп беру /küp beru/ лап беру /lap beru/

лып беру /lıp beru/ сып беру /sıp beru/ тап беру /tap beru/

шап беру /shap beru/ шып беру /shıp beru/

b. /CVCC/

жылп беру /zhılp beru/ жымп беру /zhımp beru/

зымп беру /zımp beru/ күмп беру /kümp beru/

күрп беру /kürp beru/ шомп беру /shomp beru/

助動詞 беру /beru/と共起できるオノマトペは音韻形態的な側面から見て、/CVC/・/CVCC/の接尾辞がついていない形態に限定される。また、これらのオノマトペは非反復形でなければならない。このような(105)で表示されている、助動詞 беру /beru/と共起するオノマ

トペは音や様子の瞬間的や急な行われ方を表す。

(106) a. Тауау тұрған бір теке тап берді. (І. Жансүгіров, “Жолдастар”)

tayau turghan bir teke *tap berdi*.

たっていた一匹の山羊はさっと走った。

b. Мен арба үстінен жалт беріп түстім де қалдым.

men arba üstinen *zhalt berip* tüstim de qaldım.

私は馬車の上からパッと一瞬におりてきた。

(С. Мұқанов, “Жұмбақ жалау”)

2.2.7 その他の助動詞

以上で示した助動詞以外に、オノマトペと用いられるのは қылу /qilu/ (「仕上げる」), салу /salu/ (「いれる」), тарту /tartu/ (「引っ張る」) という助動詞である。しかしながら、これらはオノマトペと共起して用いられるのは極めて少ない。

助動詞 қылу /qilu/ (「仕上げる」) は、ある物体の外部状態を描写する反復形の擬態オノマトペと共起する。また、ある行動や動作の終わった状態の結果を表す。

(107) a. Басын мыж-мыж қылған екен.

basın *mızh-mızh qılghan* eken.

頭の髪をめちやくちやにさせたみたい。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.145)

b. Қасапшының етін жұмыскерлер быт-шыт қылып бөліп алысты.

qasapshıning etin zhumiskerler *bit-shıt qılıp* bölip alıstı.

肉屋からもろった肉を労働者達がめちやくちやにして喧嘩をしながらわけた。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.67)

c. Үш қырлы оқ дал-дал қылған мына құсты.

üşh qırlı oq *dal-dal qılghan* mına qustı.

弾丸がこの鳥をめちやくちやにさせた。

次は, салу /salu/ (「いれる」) である。助動詞 салу /salu/は数に限れた擬態語と共起する。

(108) a. Бұдан әрі Қобыланды қит-қит салып шүү деді.

budan äri qobılandı *qi-t-qi-t salıp* shüu dedi.

ここからコブランディがきやつきゃつと騒いで馬を走らせた。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.355)

- b. Дұшпанды таптап ойран-асыр салады.

dushpandı taptap *ojran-asır saladı*.

敵を破りめちやくちやにした。

最後は、助動詞 *tartu* /*tartu*/ (「引っ張る」) であるが、これが接尾辞がついた非反復形の擬態語と共起する。

- (109) a. Ақсақалдың, әкенің, білімдінің сөзінен сырдаң тартыш, тез жиренбек.

aqsaqaldıng, äkening, bilimdingin sözinen *sırdang tartıp*, tez zhi:renbek.

老人の, お父さんの教えの言葉から 逃げる。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.375)

- b. Төлтай өңі кірбең тартыш, ызаланып отыр.

Töltaj öngi *kirbeng tartıp*, ızalanıp otır.

トリタイの顔がかつとなり, 怒っているようだ。

(Бұралқыұлы 2007. p.90)

2.2.8 派生動詞

カザフ語オノマトペにおいては、複数の助動詞によっておこる動詞化以外に、オノマトペにある接尾辞が付加することによって派生する過程も見られる。しかしながら、接尾辞によるこの派生過程は助動詞による動詞化ほど生産的ではない。最初は最も生産的と考えられる接尾辞について述べる。

2.2.8.1 接尾辞 -та /*ta*/ -те /*te*/, -да /*da*/ -де /*de*/, -ла /*la*/ -ле /*le*/

カザフ語オノマトペに付加する最も生産的な接尾辞としては、-та /*ta*/ -те /*te*/, -да /*da*/ -де /*de*/, -ла /*la*/ -ле /*le*/が挙げられる²⁷。これらの接尾辞が、/CVC+q/k/・/CVCC+q/k/・/CVC+ng/・/CVCC+ng/・/CVC+r/・/CVCC+r/という形態に付加する。例えば, жалтақ /*zhaltaq*/ (「おそろおそろ見る様子」) と жалтаң /*zhaltang*/ (「おそろおそろ見る様子」) というオノマトペで説明すると, (110) のようになる。жалтақ /*zhaltaq*/ と жалтаң /*zhaltang*/ それぞれは接尾辞「閉鎖音」-қ /*q*/, 「鼻音」-ң /*ng*/がついた/CVCC/語基を基本形にするものである。これらは、動詞化の接尾辞を伴うと、以下のようになる。

- (110) a. жалтақ+та- /*zhaltaq+ta-*/

- b. жалтаң+да- /*zhaltang+da-*/

²⁷ -та /*ta*/ -те /*te*/, -да /*da*/ -де /*de*/, -ла /*la*/ -ле /*le*/ という接尾辞それぞれは母音調和で2つずつに分けられているが、これらは通常3つの接尾辞と見なされている。

この例から、(110a) の жалтақ /zhaltaq/ は接尾辞 -та /ta/, (b) の жалтаң /zhaltang/ は接尾辞 -да /da/ を伴うことが分かる。このように、カザフ語オノマトペにおいては、接尾辞 -та /ta/ / -те /te/ は、語末に接尾辞「閉鎖音」 -қ /q/ / -к /k/ がついた /CVC+q/k/ ・ /CVCC+q/k/ のオノマトペだけに付加するが、接尾辞 -да /da/ / -де /de/ は、語末に接尾辞「鼻音」 -ң /ng/ がついた /CVC+ng/ ・ /CVCC+ng/ という形態に付加する。また、接尾辞 -ла /la/ / -ле /le/ は、語末に接尾辞「ふるえ音」 -р /r/ がついた /CVC+r/ ・ /CVCC+r/ のものだけに付加する。

(111) 接尾辞 -та /ta/ / -те /te/

a. /CVC+q/k/

безек-те /bezbek-te/ дедек-те /dedek-te/
 секек-те /sekek-te/ тақақ-та /taqaq-ta/

b. /CVCC+q/k/

бүлкек-те /bülkek-te/ жалбақ-та /zhalbaq-ta/
 жалтақ-та /zhaltaq-ta/ шоқақ-та /shoqaq-ta/

(112) 接尾辞 -да /da/ / -де /de/

a. /CVC-ng/

бүкең-де /bükeŋ-de/ кекең-де /kekeng-de/
 қожан-да /qozhang-da/ қылман-да /qilmang-da/

b. /CVCC-ng/

байпаң-да /bajpaŋ-da/ далбаң-да /dalbaŋ-da/
 жайнаң-да /zhajnaŋ-da/ жалтаң-да /zhaltang-da/

(113) 接尾辞 -ла /la/ / -ле /le/

a. /CVC-r/

дабыр-ла /dabır-la/ дүбір-ле /dübir-le/
 тысыр-ла /tısr-la/ шытыр-ла /shıtır-la/

b. /CVC-r/

даңғыр-ла /dangghır-la/ дыңғыр-ла /dingghır-la/
 салдыр-ла /saldır-la/ шілдір-ле /shildir-le/

次の (114) では、(114a) жалтақтап /zhaltaqtap/ 「おそるおそる見る」、(114b) салпаңдады /salpaŋdadı/ 「ぶらぶらする」、(114c) дабырламай /dabırlamaj/ 「騒がず」という、オノマトペからできた動詞が用いられている。

- (114) a. Ол айналасына жалтақтап көз салды. (Сыздыкова, Хусаин 2001. p.275)
 ol aynalasına *zhaltaqtap* köz saldı.
 彼は周辺をおそるおそるとみた。
- b. Аңшы аң кездеспей кешке дейін құр салпаңдады.
 angshı ang kezdespej keshke dejin qur *salpangdadı*.
 狩人が獲物をみつけず晩まで無駄にぶらぶらしただけ。
 (Сыздыкова, Хусаин 2001. p.691)
- c. Дабырламай жәй айтсаңшы. (Сыздыкова, Хусаин 2001. p.197)
dabırlamaj zhäj ajtsangshı.
 騒がず少し小さな声で話さない。

2.2.8.2 接尾辞-ы л /il/ /-і л /il/ + -д а /da/ /-д е /de/

前節では、オノマトペの語基に接尾辞がついた形態からの動詞の派生形の意味について考察した。本節では、接尾辞を伴わない гүр /gür/ 「ごろん」、тарс /tars/ 「とん」のような語基のままで用いられる形態からの派生形の意味について述べる。カザフ語オノマトペにおいては、接尾辞を伴わない語基そのものからなるオノマトペは擬音語が多い。このようなオノマトペからある接尾辞によって派生する動詞が数多く存在する。しかしながら、これらのオノマトペは、語基に名詞を導く接尾辞-ыл/il/ /-і л /il/が付加してから、動詞を導く接尾辞-да /da/ /-д е /de/が付加することによって派生するものである。

- (115) 語基 名詞を導く接尾辞 動詞を導く接尾辞
- a. /CVC/ : гүр /gür/ + і л /il/ + д е /de/
- b. /CVCC/ : тарс /tars/ + ыл /il/ + да /da/

(115) では、語基が接尾辞-ыл/il/ないし-і л /il/, または、接尾辞-да /da/ないし-д е /de/を伴うかということは、母音調和、つまり語基の中の母音によって決定される。(115a) から窺えるように、オノマトペ гүр /gür/ 「ごろ」に接尾辞-і л /il/またさらに接尾辞-д е /de/が付加する。これによって гүрілде- /gürilde-/ 「雷の音など大きな音を表す」という派生した動詞ができる。

- (116) a. /CVC/
- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| дүп-і л-д е- /düp-il-de-/ | жып-ыл-д а- /zhıp-il-da-/ |
| күр-і л-д е- /kür-il-de-/ | қор-ыл-д а- /qor-il-da-/ |
- b. /CVCC/
- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| борп-ыл-д а- /borp-il-da-/ | дүңк-і л-д е- /düngk-il-de-/ |
| күрс-і л-д е- /kürs-il-de-/ | саңқ-ыл-д а- /sangq-il-da-/ |

(117) の *бақылдап* /baqıldap/ 「カエルの鳴き声」と *шырылдап* /shırıldap/ 「小鳥の鳴き声」という語それぞれは, *бақ* /baq/ と *шыр* /shır/ という語基からできている動詞である。

(117) Бақа бақылдап, шіл де шырылдап, мына тыныш дүниеге қуаныш, шаттық ұранын салды. (Бұралқыұлы 2007. p.75)

baqa *baqıldap*, shil de *shırıldap*, mına tınısh dūni:ege quanısh, shattıq uranın saldı.

カエルが鳴き, 鳥も鳴き, この静かな世界に喜び, 幸福を与えた。

2.2.8.3 その他の派生動詞

カザフ語オノマトペから他の方法で派生したと考えられる動詞が多くあり, このような動詞を (118) に挙げておく。

(118) a. 接尾辞-и /i:/

жым-и- /zhım-i:/ бұлт-и- /bult-i:/

балп-и- /balp-i:/ барб-и- /barb-i:/

b. 接尾辞-ай /aj/

қиқ-ай- /qi:qaj-/ соп-ай- /sopaj-/

томп-ай- /tompaj-/ талт-ай- /taltaj-/

c. 接尾辞-ына /ına/ /-іне /ine/

быж-ына- /bızhına-/ кіс-іне- /kisine-/

пыс-ына- /pısına-/ шыт-ына- /shıtına-/

(118) は, 接尾辞-и /i:/, ай /aj/, -ына /ına/ /-іне /ine/によって派生した動詞の例である。このような動詞が非常に数が少ないが, 存在している。(119) の接尾辞によって派生した動詞の意味を考察すると, すべてが否定的な (マイナスの) 意味を持っている。

(119) a. Жымып отырған шал.

Zhimi: ıp otırghan shal.

にやりついている老人。

b. Барбиған саусақтар.

barbi:ghan sausaqtar.

ぶくぶく太っている指。

- c. Кемпір қиқая басып кетті.
 kempir *qi:qaya* basıp ketti.
 老婆が可笑しそうに歩き始めた。

この特徴は次の (120) と (121) の対照的な例から明らかである。接尾辞-и /i:/を例にして説明する。

- (120) a. жымың /zhıming/ → жым-и- /zhım-i:-/
 b. жырбың /zhırbıng/ → жырб-и- /zhırb-i:-/
 (121) a. жайнаң /zhajnang/ → *жайн-и- /zhajn-i:-/
 b. жайраң /zhajrang/ → *жайр-и- /zhajr-i:-/

(120) と (121) のオノマトペは基本的に非常によく似た意味（「笑う様子」）を持っているが、(120) が否定的な意味の笑い方を表すのに対して、(121) が肯定的な意味の笑い方を表すという点で両者は異なる。前者が接尾辞-и /i:/の組み入れを受けるが、後者は受けない。すなわち、肯定的な意味を持つオノマトペは接尾辞-и /i:/の組み入れが不可能で、否定的な意味を表すものだけがこの組み入れを受けるということである。

3. 副詞用法

3.1 日本語オノマトペの副詞用法

日本語オノマトペは典型的に副詞として働くと認定されている（田守・スコウラップ 1999；丹野 2007）。「にこにここと笑う」の「にこにこ」や「ぼつんと立っている」の「ぼつん」が動詞「笑っている」「立っている」の有様や様態を修飾している。しかしながら、オノマトペが文中で副詞として機能するとき、助詞「と」を伴うという点が一般語彙の副詞と異なっている。また、オノマトペには、「がちゃっと鳴った」のように助詞「と」との共起が義務的なものと、「がちゃがちゃ（と）鳴った」のように随意的なものがある。

以下では、日本語オノマトペの副詞用法を考察し、助詞「と」がどのようなオノマトペと義務的、どのようなオノマトペと随意的に共起できるかということと、「オノマトペ+と」という構造での助詞「と」の機能を明らかにする。

以上のことを明らかにするために、次のことを考察する。①副詞的用法と助詞「と」の共起、②助詞「と」と共起するオノマトペの音韻形態の特徴、③オノマトペの文外独立用法である。

3.1.1 副詞の定義

ここでは副詞という品詞について簡単に議論する。副詞は、一般的に、動詞、形容詞、

あるいは他の副詞に伴って、その意味を修飾したり厳密にしたりする語と定義される（『ラールス言語学用語辞典』より）。また、副詞を狭義と広義の意味で定義する学者もいる。たとえば、森田（2002）が副詞の定義を「専ら修飾するだけの働きの語群」ないし「述語に込めた認識の有様を引き出す働きの語群」としている。前者の定義に従うと、以下の例の

- (122) a. 彼女はにこにこ笑っている。
b. あの男、私をじーっと眺めている。

「にこにこ」「じーっ」というオノマトペは副詞として機能するということになる。一方、森田（2002）が後者については「単純語相当の語彙だけでなく、複合語はもちろん、句形式の連用修飾までがその範疇に含まれることになる」と強調している。オノマトペ語彙を、森田（2002）が挙げている広義の意味からすれば、

- (123) a. 加代子は電車の中で誠の同級の高校生に話しかけられたとニタニタして帰って来るし [...]。(Kakehi, Tamori, Schourup 1996. p.815)
b. 崩れ落ちそうな橋をひやひやしながら渡った。(飛田・浅田 2002. p. 455)

という例文の「ニタニタして」「ひやひやしながら」の部分全体が副詞的形態であると考えられる。本稿では、日本語とカザフ語のオノマトペの副詞用法を考察する際、「ニタニタして」「ひやひやしながら」の部分副詞と見なさず、前者の「専ら修飾するだけの働きの語群」という副詞の狭義意味の定義に従うことにする。

3.1.2 副詞的用法と助詞「と」の共起

3.1.2.1 先行研究

3.1.2.1.1 田守・スコウラップ(1999)

田守・スコウラップ（1999）は、日本語のオノマトペは「様態副詞」「結果副詞」「程度副詞」「頻度副詞」として機能できると述べている。また、それぞれを音韻形態的な側面から考察している。例えば、結果副詞として機能するオノマトペは 2 モーラ反復形に「に」を伴ったものと、CVQCVri, CVNVCVri という形態を持つものであるが、程度副詞は、CVCV ないし CVN の反復形および CVQ/NCVri という音韻形態を持つものに限定されると述べている。また、様態副詞については、ほとんどすべての日本語オノマトペは、その音韻形態に関係なく様態副詞として機能できると述べている。頻度副詞については特に何も述べていない。

田守・スコウラップ（1999）は、オノマトペは助詞の共起に関して、次の 5 つに分類されると言う。それは、1) 助詞「と」を随意的に伴うもの、2) 通常助詞を伴わないもの、3)

「と」を伴った方が好ましいもの、4)「と」を義務的に伴うもの、5)「に」を義務的に伴うものである。1) 助詞「と」を随意的に伴うものは/CVCV/という2モーラの反復形で、2) 通常助詞を伴わないものとしては頻度副詞と程度副詞として機能するものを挙げている。また、3)「と」を伴った方が好ましいものとしては、/CVCVri/ないし/CVCVN/の反復形を持つものであると述べている。4)「と」を義務的に伴うものとしては、/CV/, /CVQ/, /CVN/, /CVCV/, /CVCVQ/, /CVCVN/, /CVQCV/, /CVNCV/といった音韻形態を持つものは「と」を必ず伴わなければならないと述べている。5)「に」を義務的に伴うものとしては、2モーラ反復形の結果副詞として機能するものは「に」を義務的に伴うと強調している。

本稿では、下位類のオノマトペを副詞的な観点から考察する際、主に田守・スコウラップ(1999)を参照する。

3.1.2.1.2 丹野(2007)

丹野(2007)では、日本語のオノマトペが「様態副詞」「結果副詞」「程度副詞」「頻度副詞」として機能すると述べている。様態副詞の特徴として「と」を挙げており、「「と」がつくことで、この表現は動詞を修飾し、この用法がもっとも多い」と述べている。結果副詞については、結果副詞が「と」つきでは扱えないオノマトペであると強調している。また、程度副詞については、程度を限定的に表すもので、オノマトペ語尾「ri」のものがかなりみられると述べている。

3.1.2.2 様態副詞

本節では、様態副詞として機能するオノマトペについて述べる。様態副詞の定義については、仁田(2002)を参照されたい。仁田(2002)は様態の副詞について、「「…」様態の副詞は、動きの展開過程の局面に内属する側面のありように言及することによって動きの実現のされ方を特徴づけたものである」と述べている。

先行研究で見たように、田守・スコウラップ(1999)と丹野(2007)がオノマトペの様態副詞的な機能について詳しく述べている。田守・スコウラップ(1999)が強調しているように、日本語オノマトペのほとんど全ては、その音韻形態に関係なく、様態副詞として機能することができる。田守・スコウラップ(1999)が挙げている例で様態副詞として機能するものを音韻形態的な面から次のように示すことができる。/CV/, /CVQ/, /CVN/, /CVR/, /CVCV/, /CVCVri/, /CVCVN/とその反復形、ないし/CVCVQ/, /CVQCVri/, /CVNCVri/の非反復形である。

以下の例からみられるように、日本語の下位類のオノマトペに関係なく、すべてが様態副詞として機能できる²⁸。最初は、擬声語・擬音語の例を挙げる。以下の(124)は1モー

²⁸ 本節では、次の型のオノマトペについて述べる。1モーラを基本形に持つ/CVQ/・/CVN/・/CVR/である。2モーラを基本形に持つ/CVCV/・/CVCVQ/・/CVCVN/・/CVCVri/・/CVQCVri/・/CVNCVri/である。比較的数が少ない1モーラの/CVRN/・/CVRQ/と2モーラの/CVCVRQ/・/CVCVRN/・/CVQCVN/など型のオノマトペの例を挙げないことにする。

ラ語基 (/CVQ/, /CVN/, /CVR/) のオノマトペの例であり, (124a,b) のものは擬音語, (124c) のものは擬声語である。

- (124) a. 子供がタッタと階段を上った。(飛田・浅田 2002. p.450)
b. 能で舞台をとんと踏み鳴らす何気ない動作は, 一見簡単そうに見えるが, 我々素人がやったんでは様にならない。
(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.1188)
c. 数羽のカラスがかーかー (と) 鳴きながら, 山の方へ飛んで行った。
(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.597)

(125) は 2 モーラ語基 (/CVCV/, /CVCVQ/, /CVCVN/, /CVCVri/) を持つ擬声語・擬音語の例である。(125a) は擬声語で, (125b,c,d) は擬音語である。

- (125) a. けらけらと笑ってごまかしているけれど, あいつ何か知っているよ。
(阿刀田・星野 1995. p.144)
b. 排水管がガバガバと音を立てて水を吸い込む。(飛田・浅田 2002. p.60)
c. スイカは包丁を入れたとたんにぱちんと割れた。(飛田・浅田 2002. p.402)
d. いきなり口にげんこつを見舞われ前歯がぼきりと折れた。
(阿刀田・星野 1995. p.497)

次に擬態語・擬情語の例を挙げる。(126) は 1 モーラ語基 (/CVQ/, /CVN/) の例であり, (126a) は擬態語, (126b) のものは擬情語である。

- (126) a. その赤ん坊はほっぺたがぷつとふくらんでいる。(飛田・浅田 2002. p.493)
b. 中国残留孤児と肉親の対面, きゅんと胸が痛んで涙が出た。
(阿刀田・星野 1995. p.96)

また, (127) は 2 モーラ語基 (/CVCV/, /CVCVQ/, /CVCVN/, /CVCVri/, /CVQCVri/, /CVNVCVri/) の例である。(127a) は擬情語, (127b~f) のものは擬態語である。

- (127) a. 報告の電話をじりじり待っていたが, とうとう待ちきれず病院へ飛んでいった。
(阿刀田・星野 1995. p.219)
b. 病人はフラツと立ち上がったが, また座り込んだ。(Chang 2000. p.69)
c. ちょっとさわっただけなのに, 人形はころんと横倒しになった。
(阿刀田・星野 1995. p.173)
d. 教壇の上の福島先生は, ふたりを見てちょっといじわるそうな顔つきになり,

ニヤリと笑っていた。(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.819)

- e. 「飛行機に乗り込む時に、ベっぴんさんのスチュワーデスににっこり (と) 挨拶されると、思わず頭を下げてしまうよ」と、団体の海外旅行から帰ってきたお祖父さんは照れくさそうに言った。(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.811)
- f. 霧で向こうの景色がぼんやりとかすんでいる。(飛田・浅田 2002. p.585)

以上のことから、日本語オノマトペはその音韻形態に関係なく様態副詞として機能できると言える。また、(124)～(127)の例から窺えるように、全ての下位類のオノマトペには様態副詞として働くものがある。しかしながら、様態副詞的な用法に関する下位類のオノマトペには次の違いがある。結論から言うと、擬声語・擬音語全てが様態副詞として働くのに対し、擬態語・擬情語には様態副詞として機能することができないものが多く観察される。以下で詳しく述べるように、擬態語の場合は、程度副詞や頻度副詞などとして機能するものが多数存在する。擬情語の場合は、(46)で示したように、心理・感情を表すものの中には様態副詞として働きにくいものがある。このようなものは19語が見られ、「うんざりする」「がっかりする」のように通常「する」動詞としてしか用いられない。

3.1.2.3 結果副詞

本節では、結果副詞として機能するオノマトペについて述べる。仁田(2002)は結果副詞の定義を「<結果の副詞>とは、動きの結果の局面を取り上げ、動きが実現した結果の、主体や対象の状態のありように言及することによって、事態の実現のされ方を限定し特徴づけたものである」のように挙げている。結果副詞に用いられるオノマトペのパターンは、2モーラの反復形に助詞「に」を伴ったものが典型である(丹野 2007, 田守・スコウラップ 1999)。

- (128) a. 母が退院してくるといので、僕は姉と一緒に窓ガラスをぴかぴかに磨いた。
(阿刀田・星野 1995. p.399)
- b. ゆうべの寒さで外に干してあった洗濯物がかちかちに凍ってしまった。
(阿刀田・星野 1995. p.40)

この助詞「に」は「結果」を表すとよく言われている。よって、菊池(1998)が指摘しているように、「に」を用いたものは変化の「結果」を表すが、「と」を用いたものは変化の「様態」を表している。

- (129) a. アイスクリームがどろどろに溶けた。(変化の結果)
- b. アイスクリームがどろどろと溶けた。(変化の様態)

(菊池 1998)

このような助詞「に」を伴うオノマトペは擬態語に限るものである。以下 (130) のオノマトペは「に」を伴うことができるものである。

(130) がくがく, かさかさ, がさがさ, かすかす, がたがた, かちかち, がちがち, からから, かりかり, がりがり, ぎざぎざ, きちきち, ぎちぎち, ぎとぎと, ぐしょぐしょ, くしゃくしゃ, ぐしゃぐしゃ, たくた, くちやくちや, ぐちやぐちや, ぐにやぐにや, ごたごた, こちこち, ごちやごちや, ころころ, ごりごり, ごわごわ, さらさら, ざらざら, じとじと, ずたずた, ずぶずぶ, すべすべ, たじたじ, だぶだぶ, ちりちり, つるつる, てかてか, でぶでぶ, とろとろ, だろだろ, にちやにちや, ばさばさ, ばさばさ, ばらばら, ばらばら, ぱりぱり, ぱりぱり, ぴかぴか, びしゃびしゃ, びしょびしょ, ひたひた, びちやびちや, ふかふか, ぶかぶか, ぶくぶく, ふにやふにや, ふらふら, ぶよぶよ, ふわふわ, ぶわぶわ, ぺこぺこ, べたべた, べちやべちや, べとべと, へとへと, へなへな, べろべろ, ほかほか, ほくほく, ぼさぼさ, ぼそぼそ, ぼてぼて, ぼとぼと, めためた, めろめろ

(130) 以外に, /CVCVN/の反復形を持つオノマトペも結果副詞として働くことができる。

(131) a. 金魚を液体空気の中に入ると, 一瞬にしてがちんがちんに凍ってしまう。

(飛田・浅田 2002. p.51)

b. その夜, おそくなって帰ってきた父親は, ぐでんぐでんによっていた。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.459)

しかしながら, /CVCVN/の反復形という形態のものは数としては少ない。これらは 6 語しか見られなかった。

(132) がちんがちん, がちんがちん, けちよんけちよん, ぐでんぐでん, こちんこちん, こてんこてん

2 モーラの反復形以外に²⁹, 結果副詞として機能できると考えられるオノマトペには, 1

²⁹ 田守・スコウラップ (1999) は /CVQCVri/・/CVNVCri/ という形態を持つオノマトペが結果副詞として働いていると述べている。また, 以下の例を挙げて, 次のように解説している。

ア: オシャレをしてデートに出かけたが, 途中で車に泥水をかけられて, スカートがびっしょり (と) 濡れてしまった。

イ: お父さんは 4 人の子供たちを動物園につれていき, 家に帰ったときには ぐったり (と) 疲れてしまった。

ウ: ふんわり (と) 焼いたホットケーキは見るからに美味しそうだ。

「(ア, イ, ウ) の動詞はすべて起動動詞で, (20) オノマトペはこのような動詞によってつくられた新

モーラの/CVN/の反復形に「に」を伴ったものがある。しかしながら、このような/CVN/型のオノマトペは非常に少なく、2語しか観察されていない。「かんかんに」「ぱんぱんに」がそれである。

以上で挙げた例においては、オノマトペは結果副詞として機能する。ここで注意されたいのは、結果副詞的用法は擬態語だけにあるということである。

3.1.2.4 程度副詞

次は程度副詞的な用法である。程度副詞の定義については、仁田（2002）を参照されたい。仁田（2002）は程度副詞の定義を「<程度副詞>の基本は、事態に存在する程度性に対して、その度合いに言及することによって、事態の実現のされ方を限定し特徴付けることにある」としている。

田守・スコウラップ（1999）は程度副詞が、/CVCV/ないし/CVN/の反復形および/CVQCVri/ないし/CVNCVri/という音韻形態を持つものに限定されると述べている。しかしながら、日本語オノマトペを考察した結果³⁰、/CVN/の反復形と/CVNCVri/の程度副詞として働くものは極めて稀であるということが分かった。田守・スコウラップ（1999）は程度副詞として機能するものとして/CVN/の反復形があると述べ、以下の例を挙げている。

- (133) a. 優等生だった秀夫は、両親の離婚以来悪い友達と付き合いはじめ、成績がどん
どん下がり、今では卒業もおぼつかなくなった。
b. 小学校のとき「おちびちゃん」だった息子は、中学校に入るとどんどん背が伸びはじめ、卒業する頃には父親を追い抜いていた。

（田守・スコウラップ 1999. p.54）

(133) の「どんどん」は、状態にかかる場合で、状態の程度が加速度的に進む様子を表すため、程度副詞と解釈される可能性もある。しかしながら、常に「どんどん」は「人がどんどん入ってくる」「酒をどんどん持ってこい」などのように動作・進行にかかる場合に主体の進行が停滞することなく加速度的に進む様子を表すので、頻度副詞として解釈してもよいと思われる。

また、田守・スコウラップ（1999）が指摘している/CVNCVri/という型のもは、1語「たんまり」しか見られなかった。

しい状態を表しており、したがって結果副詞として機能していることがわかる。(ア、イ)のオノマトペはそれぞれ1つの特定の起動動詞としか共起しないが、(ウ)の「ふんわり」は、例えば「大きな雲が空にふんわり(と)浮かんでいる」のように、「浮かぶ」のような非起動動詞とも共起できる。このような場合、問題のオノマトペは結果副詞ではなく様態副詞として機能する。」と述べている。

³⁰ 程度副詞として機能するオノマトペを収集した際、阿刀田・星野（1995）の辞書を参考にした。阿刀田・星野（1995）は、オノマトペに程度副詞的な用法がある場合、【程度】というふうに表示している。

(134) お年玉をたんまりもらって子供たちはほくほく顔。(阿刀田・星野 1995. p.270)

本稿では、程度副詞として機能するオノマトペを形態的に 3 つに分類する。それは 2 モーラの/CVCV/の反復形、/CVQCVri/型と語末に/Q/を持つ 1 モーラと 2 モーラの/CVQ/ないし/CVCVQ/のものである。次の (133) は/CVCV/の反復形の例である。

(133) a. 去年日本に来たばかりなのに日本語がめきめき上達している。

(阿刀田・星野 1995. p.537)

b. バイクを乗り回すようになってからは学校の成績ががたがたと下がってしまった。(阿刀田・星野 1995. p.38)

程度副詞として機能できる 2 モーラ「CVCV」の反復形のオノマトペを (23) にまとめた。

(134) かすかす, がたがた, かつかつ, がぼがぼ, がぼがぼ, ぎりぎり, こてこて, ざくざく, すれすれ, そろそろ, ちびちび, ちょびちょび, ちょぼちょぼ, どかどか, どさどさ, ぼちぼち, ぼつぼつ, めきめき

次に、/CVQCVri/のオノマトペの例を挙げる。

(135) a. 五時に会う約束だったのをすっかり忘れていた。(飛田・浅田 2002. p.228)

b. 料理も酒もたっぷりあるから、友達を何人呼んでもだいじょうぶだよ。

(阿刀田・星野 1995. p.264)

/CVQCVri/³¹という形態を持つオノマトペを (136) にまとめる。

(136) かつきり, がつくり, がつぱり, きつかり, ぎつしり, きつちり, ごつそり, こつてり, さつぱり, すつかり, すつぱり, そつくり, たつぷり, ちよつきり, ちよつぱり, どつくり, どつさり, とつぷり, ぼつちり, みつちり, めつきり, など

これらのオノマトペ以外に、語末に促音を持つ 1 モーラないし 2 モーラの程度副詞として機能するものが見られる。それは以下のものである。

³¹ (136)にまとめたオノマトペ以外に、第 1 モーラには促音が、第 2 モーラには「ら」がある/(C)VQCVCV/という形態を持ち、程度副詞として機能できるものが見られた。それは「うっすら」「ちよっくら」の 2 語である。

ア：ふとんにはまだうっすらと温かみが残っていた。(阿刀田・星野 1995. p.12)

イ：今度の工事はちよっくらめんどうなことがあって延期だそうだ。(阿刀田・星野 1995. p.286)

(137) /CVQ/: ぐっ, ざっ, どっ

/CVCVQ/: がばっ, ごそっ, ちょこっ, どかつ, どさっ, どしっ

(138) 地震騒ぎでこのところ観光客がぐっと減ってしまった。(阿刀田・星野 1995. p.124)

(134), (136), (137) に挙げたオノマトペは程度副詞として機能する。これらのオノマトペは擬態語に限定される。

3.1.2.5 頻度副詞

先行研究で述べたように、日本語オノマトペにおいては、頻度副詞として機能するものがあるとされている。頻度副詞の定義については仁田 (2002) を参照する。仁田 (2002) は、程度副詞の定義を次のようにしている。「[...] 事態の外側から、事態生起の回数的あり方を限定し特徴づけたものである」である。

しかしながら、他の副詞的な用法と比べると、頻度副詞として機能できるものはかなり限られている。

(139) a. その子はお餅が焼けるのが待てなくて、ちょいちょい引っ繰り返す。

(飛田・浅田 2002. p.281)

b. 仕事は、ダンボールの荷を卸して回る、小型トラックの運転で、給料も特別良くもないが、途中でちよくちよくさぼるのがいいところだった。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.225)

c. (独居老人が) 近くに住んでいる娘がちょこちょこ顔を出してくれるから、寂しくないですよ。(飛田・浅田 2002. p.283)

(139) に挙げたオノマトペは頻度が高い様子を表し、頻度副詞として働いている。これらは擬態語に限定されており、文中で助詞「と」を伴わないことが一般的である。

3.1.2.6 助詞「と」の共起の相違

以上で挙げた様々な用例からオノマトペの助詞「と」の共起の仕方が異なることが明らかである。以下では、日本語オノマトペの助詞「と」との共起について述べる。まず、次の例を見よう。

(140) a. ドアがぎーっ {と/*φ} 音を立てて開いた。

b. 子供がばちゃん {と/*φ} 水に落ちた。

(141) a. ボールはころころ {と/φ} 外野へ転がった。

b. 遠くの方から、漁船がぼんやり {と/φ} 見えてきた。

- (142) a. 定年を迎えた夫は、ちょいちょい {?と/φ} 私を旅行に誘った。
 b. そろそろ {?と/φ} 夫が帰ってくるところです。

(140) に示したように、助詞「と」を伴わなければ適格性が下がるオノマトペもあれば、(141) のように「と」の共起が随意的なものも存在する。また、(142) のオノマトペのように、通常「と」を伴わないものがある。本稿では、下位類のオノマトペを助詞「と」との共起という観点から考察するにあたり、田守・スコウラップ (1999) を参照し、オノマトペを次のように3つに分類する。Ⅰ)助詞「と」を義務的に伴うもの、Ⅱ)助詞「と」を随意的に伴うもの、Ⅲ)助詞「と」を伴わないものである。ここでは、Ⅰ)助詞「と」を義務的に伴うものという範疇に(140) で示した「きーっ」「ばちゃん」のような助詞「と」がないと用いられないオノマトペを入れる。Ⅱ)助詞「と」を随意的に伴うものには、(141) で示した「ころころ」「ぼんやり」のような「と」があってもなくても適切性が下がらないオノマトペを入れる。また、田守・スコウラップ (1999) が「と」を伴った方が好ましいオノマトペ」という範疇に入れている「フワリフワリ」「ばたんばたん」のような/CVCVri/ないし/CVCVN/の反復形のオノマトペも入れる。なぜならば、このような/CVCVri/・/CVCVN/の反復形のものは、必ずしも「と」を義務的に伴うわけではないからである。

(143) いかにもうまそうに茶わんの冷や酒をぐびりぐびりあおる。

(阿刀田・星野 1995. p.131)

Ⅲ)助詞「と」を伴わないものに、(142) で示した「ちょいちょい」「そろそろ」のような「と」を通常に伴わないオノマトペを入れる。また、「する」動詞としか用いられない擬情語を表すものと、助詞「に」を伴う結果副詞として機能するものを入れる。

次節より、順番に音韻形態的・意味的な側面から各ケースを考察するが、その前に、助詞「と」が擬声語・擬音語・擬態語・擬情語の下位類とどのような共起をみせるのかについて述べる。

3.1.2.7 下位類のオノマトペの助詞「と」との共起

日本語の擬声語・擬音語・擬態語・擬情語が助詞「と」をどのように伴うかを明らかにするために、Ⅰ)助詞「と」を義務的に伴うもの、Ⅱ)助詞「と」を随意的に伴うもの、Ⅲ)助詞「と」を伴わないもの、という三分類によって、その出現状況を考察した。しかしながら、日本語オノマトペにおいては、異なる複数の意味を持つ多義語が多数存在するため、意味が異なることによって助詞「と」との共起の仕方も異なってくる。例えば、「かりかり」で説明すると次のようになる。

(144) 「かりかり」

Takehi, Tamori, Schourup (1996) ‘*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*’

【意味①】 S : The sound made when gnawing or crunching something hard.

kari-kari (to)

【用例】 どうも天井裏に鼠が住み着いたらしく、毎晩この時間になると、何やらかりかり
り(と)かじる音が聞こえる。

【意味②】 M1 : The state of a foodstuff being crisp and/or dry.

kari-kari no N, kari-kari ni, kari-kari da, kari-kari-shite-iru

【用例】 僕は日本の柔らかい焼きそばよりも、かりかりに揚げたそばにとろっとした具
の入った葛を掛けて食べる中華風の揚げそばが好きだ。

【意味③】 M2 : The state of being nervous, annoyed or excited.

kari-kari-suru, kari-kari-kuru

【用例】 「たかが子供が悪戯したことぐらいで、かりかりするなんて、あの人も随分大人
気ない人だ。」

上記の辞書の記述から、S と印されている意味①の「かりかり」は音を表す擬音語で、助詞「と」を随意的に伴うが、M1 や M2 のように M と印されている意味②と意味③の「かりかり」は様子を表し、「と」を通常伴わないということが分かる。M1 の「かりかり」は結果副詞として機能する擬態語であり、助詞「と」のかわりに助詞「に」を伴うことが一般的である。また、M2 の「かりかり」は擬情語であり、「する」という動詞と組み込まれて用いられ、「と」を通常伴わない。

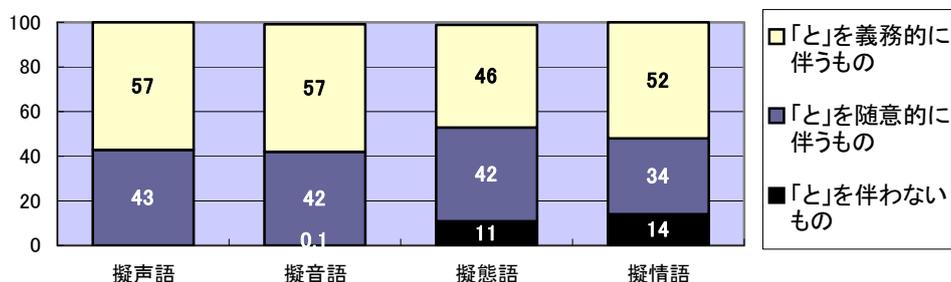
このように、意味と用法が異なるとき、オノマトペと助詞「と」との共起の仕方も異なってくる。そのため、下位類のオノマトペがどのように助詞「と」と共起するかを分析するためには、各オノマトペの意味を個別に扱う必要がある。本稿で扱う日本語オノマトペの 1,591 語を分析した結果を表に示す。

表 29 日本語オノマトペの助詞「と」との共起

	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
下位類の総合の意味数	151	722	1,441	135
I) 「と」を義務的に伴うもの	86 (57%)	415 (57%)	668 (46%)	70 (52%)
II) 「と」を随意的に伴うもの	65 (43%)	306 (42%)	607 (42%)	46 (34%)
III) 「と」を伴わないもの		1 (0.1%)	166 (11%)	19 (14%)

表 29 の数字は語数ではなく、下位類の意味数を表すものである。この結果をグラフ化してみると、以下のようなになる。

図 24 日本語オノマトペの助詞「と」との共起の割合



この図から、下位類のオノマトペには類似点があるということがわかる。Ⅰ)「と」を義務的に伴うものの比率は、Ⅱ)「と」を随意的に伴う比率を上回っている。しかしながら、Ⅲ)「と」を伴わないものに関しては結果が異なる。擬声語・擬音語はⅢ)「と」を伴わないものが観察されていない。擬音語には 1 語だけ観察された。これに対して、擬態語・擬情語は異なる結果を見せており、前者は 11%に相当する 166 語、後者 14%に相当する 19 語が得られた。このことから、擬声語・擬音語は「と」を伴いがちであるのに対し、擬態語・擬情語は伴わない傾向にあるということが分かる。

では、以上の結果を踏まえながら、どのようなものが助詞「と」を義務的に伴うか、どのようなものが随意的に伴うか、またはどのようなものが「と」を伴わないかについて順番に、その音韻形態と意味的な側面から考察し、得た結果を解説する。

3.1.3 助詞「と」と共起するオノマトペの音韻形態的特徴

3.1.3.1 助詞「と」を義務的に伴うもの

本節では、「と」を義務的に伴うオノマトペについて検討する。先行研究で触れたように、田守・スコウラップ (1999) は、「と」を義務的に伴うものとしては、/CVI/, /CVQ/, /CVN/, /CVCV/, /CVCVQ/, /CVCVN/, /CVQCV/, /CVNVCV/といった音韻形態を持つものは「と」を必ず伴わなければならないと述べている。

日本語オノマトペを考察した結果、田守・スコウラップ (1999) が指摘している形態以外に、/CVi/, /CVR/, /CVRQ/, /CVRN/, /CVCVRQ/, /CVCVRN/, /CVNVCV/, /CVQCVN/, /CVCVri/という形態が助詞「と」を義務的に伴うということが明らかになった。以下の(145)は/CVi/の例、(146)は/CVR/の例、(147a,b)それぞれは/CVCVRQ/と/CVCVRN/の例、(148)は/CVNVCV/の例、(149)は/CVQCVN/の例、(150)は/CVCVri/の例である。この例のオノマトペは「と」がなければ不適切になる。

(145) ムツゴロウは泥の中に棲んでるンです。そこからひょいと顔を出す。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.549)

(146) ドアの間隙から風がびゅうと吹き込んできた。(飛田・浅田 2002. p.283)

(147) a. どうぶ屋さんは、大きく息をすって、ラッパを口にくわえると、高らかに鳴らしました。するとラッパの中から金色の光が、ぴかあつと、出てきたのです。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.930)

b. このあたりでは、ときおり、木に斧を入れる音がかつーんと響いてくる。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.644)

(148) この祭りには土地の者だけでなく観光客もわんさと集まってくる。

(阿刀田・星野 1995. p.562)

(149) 表で木戸がカッタンと音を立てた。(山口 2003. p.60)

(150) 庶民の私までが、ヨーロッパの果ての、このポルトガルまで、ふらりと旅をする時代になってしまった。(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.328)

以上で示した型のものはすべて助詞「と」を義務的に伴う。このような型のものは様態副詞と、(137)にまとめたように程度副詞にも見られる。以上からもう一つ興味深いことが分かる。それは、通常に非反復形で用いられる/CVQCVri/・/CVNVCVri/という型のオノマトペ以外に、擬音語か擬態語かに関係なく非反復形で用いられるオノマトペ全てが助詞「と」を義務的に伴うということである。

3.1.3.2 助詞「と」を随意的に伴うもの

本節では、「と」を随意的に伴うオノマトペについて述べる。「と」を随意的に伴うオノマトペを形態的な側面から反復形のものにまとめることができる。つまり、語末に促音を持つものを除き、擬音語か擬態語かに関係なく反復形の場合は全て助詞「と」を随意的に伴う。(151)は/CVi/の例、(152)は/CVCV/の反復形、(153)は/CVR/の反復形、(154)は/CVN/・/CVCVN/の反復形、(155)は/CVVCVri/³²の反復形の例である。また、これらの例の(a)は擬音オノマトペで、(b)は擬態オノマトペである。

(151) この地方の子供たちは、細い丸太橋を、いとも簡単にひょいひょい(と)渡って行く。(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.550)

(152) a. 酒蒸しを作る時、貝を空の鍋でゆでるので、貝の蓋が開く時にかたかた(と)

³² 田守・スコウラップ(1999)は/CVVCVri/・/CVCVN/の反復形を持つオノマトペを「「と」を伴った方が好ましいオノマトペ」と名付け、「と」を伴うのが普通であると述べている。

ア：飛行船は頼りなさそうに、フワリフワリと、空を移動していた。

(藤川圭介(1986)『童話めいた歴史ウインダリア』講談社)

イ：その傍には一挺の斧がなげ出しているが、風の具合でその白い丸がぴかりぴかりと光ることがある。
(夏目漱石(1968)「倫敦塔」『倫敦塔・幻影(まぼろし)の盾』新潮社)

音を立てる。(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.638)

- b. 娘を迎えに幼稚園に行ったら、丁度を遊戯の時間で園児達は先生のピアノに合わせて床の上をころころ (と) 転げ回っていた。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.696)

- (153) a. 木枯しがびゅーびゅー (と) 吹く夜は、山小屋の一人暮らしのわびしさを一層強く感じる。(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.1056)

- b. 珍しく渋滞なしでつーつー (と) 運転できた。(阿刀田・星野 1995. p.297)

- (154) a. 今日もまた朝早くから夫婦喧嘩をしているらしく、森岡夫人のヒステリックな声が隣のアパートの部屋からきんきん (と) 響いて来る。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.664)

- b. 某ポルノ女優は、歩くたびにふるんふるん (と) 揺れる大きなバストを売物にしている。(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.1035)

- (155) a. それに倉吉までが、お雪の手振りを目で追いながら、裸の股をびたりびたり (と) 叩いて、調子を取り出した。(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.969)

- b. 停年退職した今、彼の唯一の楽しみはぐびりぐびり (と) 晩酌をやることである。(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.455)

(151) ~ (155) のオノマトペは様態副詞として機能し、「と」を伴うかは随意的である。この例では「と」を付加しても、除去しても、文の適格性が変わらない。これらのオノマトペと反対に、語末に促音を持つ 1 モーラ/CVQ/ないし 2 モーラ/CVCVQ/のオノマトペは反復形であっても「と」を義務的に伴う。

- (156) a. 窓の外で小鳥がチッチツとさえずっている。(飛田・浅田 2002. p.273)

- b. 彼はここぞというところでカシャッカシャツとシャッターを切る。

(飛田・浅田 2002. p.35)

(156) の例で「と」を除去すると、文が非文になる。語末に促音を持つものは、反復形でも「と」を義務的に伴うということに注意されたい。語基に促音がついたものに関しては「と」を伴わないと発音がしにくい、ということが常に「と」を伴うことの理由として考えられるであろう。この点に関して田守・スコウラップ (1999) が指摘しているように、「と」の付加が義務的でなかったならば、促音+母音という、日本語では不可能な組み合わせが生じてしまう可能性があるからである。

次に、通常反復しない/CVQCVri/・/CVNVCVri/という型について検討する。田守・スコウラップ (1999) も指摘しているように、これらの様態と結果副詞として機能する/CVQCVri/・/CVNVCVri/という音韻形態を持つものは、「と」を随意的に伴う。

- (157) まだ小さいので仲間に入れてもらえなかった三郎は、お兄ちゃん達が野球をしているのを、しょんぼり (と) みていた。

(Kakehi, Tamori, Schourup 1996. p.1114)

3.1.3.3 助詞「と」を伴わないもの

本節では、助詞「と」を伴わないオノマトペについて述べる。先行研究で既に見たように、田守・スコウラップ (1999) が、2) 通常助詞を伴わないオノマトペとしては、頻度副詞と程度副詞として機能するものを挙げている。本節では、助詞そのものではなく、「と」の共起について検討しているため、「と」を伴わないオノマトペとしては、田守・スコウラップ (1999) が挙げている頻度副詞と程度副詞だけではなく、結果副詞として機能するオノマトペも加えることができる。以下の (158) は頻度副詞、(159) は程度副詞の例である。

- (158) a. 定年を迎えた夫は、ちょいちょい { ϕ /?と} 私を旅行に誘った。
b. あの人は上京の折にちょくちょく { ϕ /?と} 訪ねてくるよ。
- (159) a. 朝寝ぼうはしたがいつもの電車にぎりぎり { ϕ /*と} 間に合った。
b. あんないい娘さんを断るなんて、あいつの気持ちがさっぱり { ϕ /*と} わからないよ。

結果副詞として機能するオノマトペの場合は、「と」のかわりに助詞「に」を義務的に伴う。

- (160) a. 梅干しの種をかんだら歯がぎざぎざに欠けてしまった。
(阿刀田・星野 1995. p.78)
b. がりがりに焦げたステーキをもったいないからって食わせられた。
(阿刀田・星野 1995. p.70)

既に述べたように、助詞「に」と共起できるオノマトペの中では、助詞「と」を伴うこともできるものがある。このようなオノマトペは、菊池 (1998) が指摘しているように、「に」を用いたものは変化の「結果」を表すが、「と」を用いたものは変化の「様態」を表している。

- (129) a. アイスクリームがどろどろに溶けた。(変化の結果)
b. アイスクリームがどろどろと溶けた。(変化の様態)
(菊池 1998)

つまり、助詞「に」を伴うか助詞「と」を伴うかことによって、同一のオノマトペでも結果・様態という副詞的な機能が異なってくるのである。

(158) ~ (160) に示したように、頻度副詞、程度副詞、結果副詞の用法を持つものは擬態語に限定される。図 24 から窺えるように、擬態語は「と」を伴わないものの比率が 11% である。擬態語は「と」を伴わないものの比率が高いということに関して、一つの理由として、擬態語には頻度・程度・結果副詞的な用法が存在するということが考えられる。

また、図 24 は擬情語にも「と」を伴わないオノマトペが存在することを示している。これらのオノマトペは「CVCV」の反復形をしており、「むかむかする」「むずむずする」のように「する」動詞に組み込まれて用いられる。また、「*むかむか(と)怒る」「*むずむず(と)待つ」のように「する」以外の動詞とは結びつきにくい。

(161) いらいら, うずうず, うんざり, かりかり, くさくさ, くしゃくしゃ, ずたずた,
ひやひや, むかむか, むしゃくしゃ, むずむず, もやもや (など)

3.1.3.4 反復形・非反復形の助詞「と」との共起

以上のことをまとめると、「CVQCVri」「CVNCVri」といった音韻形態を持つものを除けば、擬音語・擬態語を問わず、反復形のものが「と」を随意的に伴うが、非反復形のものには「と」を義務的に伴うという傾向が見られた。図 24 から窺えるように、日本語オノマトペの下位類は、それぞれ「と」を義務的に伴うものの比率が「と」を随意的に伴うものの比率を上回り、近似している結果を見せている。このような類似点があるのは、日本語オノマトペには形態的な側面からみてはっきりとした境界線が存在し、反復形か非反復形かによって「と」の共起が異なるからだと考えられる。

- (162) a. ガサと音がして急にイノシシが飛び出してきた。(飛田・浅田 2002. p.31)
b. 金庫のダイヤルをカチと合わせると鍵が開いた。(飛田・浅田 2002. p.44)
- (163) a. 満員電車の中で新聞をがさがさ広げるな。(飛田・浅田 2002. p.32)
b. スペインレストランでは料理もさることながら、カスタネットをかちかち鳴らし、ギターに合わせて激しく踊るフラメンコダンサーの踊りも素晴らしい。
(Takehi, Tamori and Schourup 1996. p.602)

(162), (163) のオノマトペは「CVCV」という形態を持ち、同一の語基が(162)の「ガサ」「カチ」のように、語基そのまま使用されると、「と」を義務的に伴うが、(163)の「がさがさ」「かちかち」のように反復形で使用されると、「と」の付加の随意性が許容される。その一つの理由としては、反復が起こることによってオノマトペが慣習化され、「と」との共起が随意的になるということが考えられる。ここでいう「慣習化」とは、語彙性が低くて、生き生きとした臨場感があるものは、ある派生過程などによって語彙化の程度が高まることである(語彙化の程度について第 8 章に詳細に論じる)。

3.1.4 オノマトペの文外用法

日本語オノマトペの文外独立用法については田守・スコウラップ（1999）が詳細に考察し、その結果として次の結論を出している。1) 臨時の擬音オノマトペが独立して最も用いられやすい、2) 「と」を必要とする擬音オノマトペは「と」を必要としないものよりも独立して用いられやすい、3) 異形はもとのオノマトペよりも独立して用いられやすい、4) 具体的な描写力を持つオノマトペはこのような描写力に欠けるものよりも独立して用いられやすい、5) /CVQCVri/ないし/CVNCVri/という音韻形態を持つオノマトペが独立して最も用いられにくいということである。本節では、田守・スコウラップ（1999）の仕方を参照して日本語下位類のオノマトペを簡単に考察していく。まず、以下の例を見よう。

- (164) a. パン, パン。手を合わせる音が青空に小気味よく響く。(朝日新聞 06.1.5)
b. ブツブツ。クラクションの音がした。彼が迎えに来たのだ。
(飛田・浅田 2002. p.497)

以上の例が示すように、オノマトペには文外に独立して起こるという用法がある。まず、様態副詞として用いられているオノマトペをみる。

- (165) a. 小鳥がかわいい声でびつと鳴いた。
b. 遠くでだんと銃声が出た。
c. 箱を振ると中で何かがかたかた音を立てる。
(166) a. 子供はにやつと笑った。
b. 高原の夜空には宝石をちりばめたようにきらきら星が光っている。
c. 彼女を見るとうきうき (と) 心が弾む。

(165a) は擬声語、(165b,c) 擬音語の例で、また (166a,b) は擬態語、(166c) は擬情語の例である。これらのオノマトペを文外に取り出すと、次のようになる。

- (165') a. びつ。小鳥がかわいい声で鳴いた。
b. だん。遠くで銃声が出た。
c. かたかた。箱を振ると中で何かが音を立てる。
(166') a. ??にやつ。子供は笑った。
b. *きらきら。高原の夜空には宝石をちりばめたように星が光っている。
c. *うきうき。彼女を見ると心が弾む。

以上から見られるように、(165') は成り立つが、(166') の許容度は低い。このことから擬

態語・擬情語は文外に独立しがたいということがわかる。同じように、結果副詞・程度副詞・頻度副詞として機能する擬態語は文から独立して使用できない。以下の(167)は結果副詞、(168)は程度副詞、(169)は頻度副詞として機能するオノマトペの例である。

- (167) a. 汗でびしょびしょに濡れたシャツを着替えた。(飛田・浅田 2002. p.440)
b. *びしょびしょ。汗で濡れたシャツを着替えた。
- (168) a. ほおひげには白いものがちょびちょびまじっていた。(阿刀田・星野 1995. p.278)
b. *ちょびちょび。ほおひげには白いものがまじっていた。
- (169) a. あの人ならちょいちょい店に来ますよ。(飛田・浅田 2002. p.281)
b. *ちょいちょい。あの人なら店に来ますよ。

この例から見られるように、様態副詞として機能する擬声語・擬音語は文外独立用法としては適切であるのに対して、擬態語・擬情語は不適切になっている。また、その中では結果副詞、程度副詞、頻度副詞として機能するものはもっとも不適切であるということである。その理由としては、擬声語・擬音語は、文外で独立して使用されるとき、音の正確な模倣であるかのように提示されるからであると仮定できる。一方、擬態語・擬情語は音ではなく様子やものの状態を描写するものであるため、文外独立用法に用いられにくくなる。

文外独立用法に用いられるオノマトペの考察からもう一つのことわかる。それは、文外独立用法に使用できる擬声語・擬音語は語彙度が低いが、擬態語・擬情語は語彙度が高いということである。ここでは、一般語彙が様態副詞として使用する例を挙げよう。

- (170) a. 彼は…、女房の肩を掴んで、はげしくゆさぶった。(仁田 2002. p.75)
b. 岩津は…喜んで彼の家へ遊びに行ったのだそうです。(仁田 2002. p.75)

(170)の様態副詞として機能する語を文外に取り出すと、不適格な文になることは明らかである。

- (170') a. *はげしく。彼は…、女房の肩を掴んで、ゆさぶった。
b. *喜んで。岩津は…彼の家へ遊びに行ったのだそうです。

以上から、様態副詞として機能する一般語彙は、文外独立用法がまったく許容されない。このことから、上でみた文外独立用法に用いられない結果副詞・程度副詞・頻度副詞として機能する擬態語は語彙度が高いということが推測できる。また逆に、文外独立用法に用いられる擬声語・擬音語は語彙度が低いということになるであろう。

3.1.4.1 助詞「と」の役割とまとめ

本節では、助詞「と」の役割について検討する。日本語では、「オノマトペ+と」という構造の助詞「と」が「引用用法」³³と直接関わっていると考えられている（紫谷 1978³⁴；藤田 1987；田守・スコウラップ 1999 など）。以下の例をみよう。

- (171) ゴーシュは弓をかまえました。かっこうは「くっ」と一つ息をして「ではなるべく永くお願いいたします。」といってまた一つおじぎをしました。

（宮沢賢治 2006.『銀河鉄道の夜』新潮社）

(171) では、下線を引いた「くっ」と「ではなるべく永くお願いいたします。」には引用符がついており、両方とも助詞「と」を伴っていることが分かる。ここでは、「くっ」には引用符が使われている理由は、オノマトペが実際の音の引用として用いられていることを示唆するためであると考えられる。また、この『くっ』と』は『くっ』といって』が縮まったもの、つまり、「いって』が省略されたものであると考えることもできる。いずれにせよ、「くっ」は引用的に用いられており、その「と」の付加は引用用法と直接関わっている。

こうした引用用法に最も適切なオノマトペは、ある声や音を描写している擬声語・擬音語である（田守・スコウラップ 1999）。引用的にもっとも用いられやすいものは、音声を使ってある音を実際に描写しようとするものであると通常考えられる。したがって、前節で見た文外独立的に用いられる擬声語・擬音語は、文の中で起こるときに、引用的に用いられるということになる。

しかしながら、擬声語・擬音語は引用的に用いられやすいが、擬態語・擬情語が用いられにくいという点からは、擬態語・擬情語と共起する「と」をどのように解釈すべきかという疑問が生じる。これに関する解釈の一つとしては、擬態語・擬情語と共起する助詞「と」は、副詞句を様態化するという役割を果たすということが挙げられる。繰り返しになるが、助詞「に」と「と」を比較すると、

- (172) a. 手がかさかさに荒れてしまった。
b. 手がかさかさと荒れてしまった。
- (173) a. 建物がばらばらに崩れた。
b. 建物がばらばらと崩れた。

³³ 引用用法の定義については田守・スコウラップ (1999) を参照されたい。田守・スコウラップ (1999) が引用用法と呼んでいるのは、「X (オノマトペ) という音/声」という構造である。

³⁴ 紫谷 (1978) は助詞「と」を引用標識と称し、{引用, 文} からなる「引用句」は「引用標識挿入規則」を経て、{引用, 文} + 引用標識「と」という形の「引用句」になると考え、それはオノマトペが「即席に物音を引用して」、それに引用標識の「と」が付随され、「副詞節」が生成されるのと同じであると主張している。

(172a) (173a) の「に」を用いたほうは変化の結果を表し、(172b) (173b) の「と」を用いたほうは変化の様態を表している (仁田 1983 ; 菊池 1998)。このように擬態語の場合、「と」が使用できるのは、様態・結果・程度・頻度の中で様態といった副詞的な用法のときだけである。

以上では、日本語オノマトペの副詞用法と助詞「と」について考察した。この考察によって、助詞「と」の役割と、それがどのようなオノマトペと共起するののかについて、ある程度の整理ができたように思われる。

オノマトペを分析した結果、下位類のオノマトペの中では、擬声語・擬音語は助詞「と」をより高い比率で伴うということと、これと反対に、擬態語・擬情語においては「と」を伴わないものが 1 割程度存在するということが明らかになった。一方、オノマトペの下位類は、それぞれ「と」を義務的に伴うものの比率が、「と」を随意的に伴うものの比率を上回り、近似している結果になっているということも明らかになった。このような類似点があるのは、日本語オノマトペには音韻形態的な側面からみてはっきりとした境界線が存在し、反復形か非反復形かによって「と」の共起が異なるからだと考えられる。以上で見たように、反復が起こることによってオノマトペが慣習化 (語彙化) され、「と」との共起が随意的になるということである。

擬声語・擬音語は擬態語・擬情語と比べて、文外独立的に用いられやすいものであり、文中で起こるときは引用的に用いられる。そのときの「と」の付加は引用用法と直接関わっている。これと異なって、擬態語・擬情語と共起する「と」は引用ではなく副詞句の様態化に関係していると思われる。

文外独立用法と引用用法をもとに、オノマトペの「語彙度」を測定することができる。つまり、引用用法に用いられやすいものは語彙度が低く、用いられにくいものはその程度が高い。そのため、擬声語・擬音語は語彙度が低いのに対し、擬態語・擬情語は語彙度が高いということになる。

3.2 カザフ語オノマトペの副詞用法

3.2.1 カザフ語オノマトペの副詞

上述したように、副詞を狭義と広義の意味で定義することができる。たとえば、森田 (2002) が副詞の定義を「専ら修飾するだけの働きの語群」ないし「述語に込めた認識の有様を引き出す働きの語群」としている。後者については「単純語相当の語彙だけでなく、複合語はもちろん、句形式の連用修飾までがその範疇に含まれることになる」と強調している。オノマトペ語彙を、森田 (2002) が挙げている広義の意味からすれば、

(174) a. 加代子は電車の中で誠の同級の高校生に話しかけられたとニタニタして

帰って来るし [...]。(Kakehi, Tamori, Schourup 1996. p.815)

- b. 崩れ落ちそうな橋をひやひやしながら渡った。(飛田・浅田 2002. p. 455)

という例文の「ニタニタして」「ひやひやししながら」の部分全体が副詞的形態であると考えられる。既に述べたように、本稿では「ニタニタして」「ひやひやししながら」の部分副詞とせず、前者の「専ら修飾するだけの働きの語群」という定義に従うことにする。

カザフ語のオノマトペの場合も同様に、以下の例の

- (175) a. Балалар үйден топыр-топыр етіп жүгіріп шықты.

balalar üjden *topır-topır etip* zhügirip shıqtı.

子供たちは家からばたばたと出てきた。

- b. Итбай Асқардың бетіне жалтақ етіп қарады.

i:tbai asqardıng betine *zhaltaq etip* qaradı.

イットバイが顔にざっとみた。

(С. Мұқанов, “Жұмбақ жалау”)

топыр-топыр етіп /topır-topır etip/と жалтақ етіп /zhaltaq etip/のような「オノマトペ+助動詞」という部分を副詞的形態と見なすことができる。しかしながら、上で説明したように、助動詞 ету /etu/, қағу /qaghu/, болу /bolu/, беру /beru/と共起する形態を動詞と見なすのが自然である以上、カザフ語オノマトペの副詞用法を考察する際、森田 (2002) の「専ら修飾するだけの働きの語群」という定義を採用し、オノマトペの直接本動詞を修飾する用法を副詞的用法と見なすことにする。

3.2.2 反復形の副詞的用法

カザフ語のオノマトペは文の中で助動詞を伴わずに本動詞を修飾して、副詞として機能することがある。しかしながら、日本語オノマトペと異なって、カザフ語オノマトペにおいては様態副詞的な用法のみが観察される。これらのオノマトペをその形態的な側面から次のようにまとめることができる。/CVC/, /CVCC/, /CVC-q/, /CVC-ng/, /CVC-r/, /CVC-l+q/, /CVC-l+ng/, /CVCC-q/, /CVCC-ng/, /CVCC-r/, /CVCC-l+q/, /CVCC-l+ng/の反復形である。カザフ語の様態副詞として働くオノマトペの特徴の一つは形態的に反復形でなければならないということである。次の (176) (177) はその典型的な例である。

- (176) a. Байжанды Сарыбай құшақтай алды да, екі бетінен шоп-шоп сүйді.

bajzhandı sarıbjaj qushaqtaj aldı da, eki betinen *shop-shop* süjdi.

サリバイはバイジャンを抱きしめて、頬にちゅっちゅっとキスをした。

(С. Мұқанов, “Жұмбақ жалау”)

- b. Ол сөйлеушілерге үмітпен жапақ-жапақ қарайды.
 ol söjleushilerge ümitpen *zhapaq-zhapaq* qaradı.
 彼は話している人を希望を持ってかわいそうにみつめていた。
 (Ғ. Мұстафин, “Миллиционер”)
- c. Сол кезде шатыр-шүтыр бұлт жарылып, серпілді төбемізден түн арылып.
 sol kezde *shatır-shutır* bult zharılıp, serpildi töbemizden tün arılıp.
 そのときごろごろと雲がわれて,
 (Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.755)

(176) は, /CVC/型を基本形に持つオノマトペが様態副詞として用いられている例である。
 (176a)は/CVC/の反復形, (176b)は/CVC-q/の反復形, (176c)は/CVC-ng/の反復形, (176d)
 は/CVC-r/の反復形の例である。

- (177) a. Кемпір әр қабырғаны нұсқай балп-балп сөйледі.
 kempir är qabırghanı nusqaj *balp-balp* söjledi.
 お婆さんが各肋骨を指してぶつぶつ話し始めた。
 (Ғ. Мұстафин, “Миллиционер”)
- b. Бқылас аяғын тәлтек-тәлтек басып, есік ауызына барды.
 ıqılas ayaghın *tältek-tältek* basıp, esik auızına bardı.
 イキラスはきよときよとと足を動かして, 出口に向かった。
 (Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.231)
- c. Асыққаны қызық, қорбаң-қорбаң алға түсе жөнелді.
 asıqqanı qızıq, *qorbang-qorbang* algha түse zhöneldi.
 いそぐのは面白くて, のしのしと前に出て歩く。
 (Ғ. Мұстафин, “Миллиционер”)
- d. Осымен қалың топ жапыр-жұпыр бірінші рет айкасты.
 osımen qalıng top *zhapır-zhupır* birinshi ret ajqastı.
 これでたくさんの人がごちゃごちゃと戦いはじめた。

(177) は/CVCC/型を基本形に持つオノマトペの例である。(177a)は/CVCC/の反復形,
 (177b)は/CVCC-q/の反復形, (177c)は/CVCC-ng/の反復形, (177d)は/CVCC-r/の反
 復形の例である。上の例から, 擬音オノマトペも擬態オノマトペも直接動詞を修飾し, 様
 態副詞として働くことができることが分かる。しかしながら, これらのオノマトペは非反
 復形で起こる場合は, 直接動詞を修飾することができなくなる。例 (178) (179) に示した
 ように, 非反復形のオノマトペは動詞を修飾するときは, 助動詞 *ety* /*etu*などを伴わなけ
 れば文が非文になる。最初は擬音オノマトペを見よう。

- (178) a. Шынжырлаулы ит арс-арс { ϕ /etip} үріп тұр.
shinzhirlaulı i:t ars-ars { ϕ /etip} ürip tur.
鎖がついた犬はわんわんと鳴いている。
- b. Шынжырлаулы ит арс { $*\phi$ /etip} үрді.
shinzhirlaulı i:t ars { $*\phi$ /etip} ürdi.
鎖がついた犬がわんと鳴いた。
- (179) a. Алыста мылтықтың үні дүп-дүп { ϕ /etip} естілді.
alısta mıltıqtıng üni düp-düp { ϕ /etip} estildi.
遠くから銃声がパンパンと聞こえた。
- b. Алыста мылтықтың үні дүп { $*\phi$ /etip} естілді.
alısta mıltıqtıng üni düp { $*\phi$ /etip} estildi.
遠くから銃声がパンと聞こえた。

上の (178) は擬声語, (179) は擬音語の例である。この例の (178a) (179a) から窺えるように, 反復形は助動詞 *ery* /etu/ を随意的に伴い, 本動詞を直接修飾することができる。しかし (178b) (179b) では, 同様な語基のオノマトペは非反復で用いられる場合は, 助動詞 *ery* /etu/ を義務的に伴い, 形式的には動詞として働く。同様に, 語末に接尾辞「ふるえ音」*-r* を伴った /CVC-r/・/CVCC-r/ の擬音オノマトペの場合も, 非反復形は本動詞を直接修飾することができない (180)。

- (180) a. Есік сықыр { $*\phi$ /etip} жабылды.
esik sıqır { $*\phi$ /etip} zhabıldı.
戸ががちゃりと閉まった。
- b. Арба даңғыр { $*\phi$ /etip} орнынан қозғалды.
arba dangghır { $*\phi$ /etip} ornınan qozghaldı.
馬車が大きな音を鳴らして動いた。

次に, 擬態オノマトペの例を挙げる。

- (181) a. Бала дедек-дедек { ϕ /etip} жүгіріп келеді.
bala dedek-dedek { ϕ /etip} zhügirip keledi.
子供は下手そうに走ってくる。
- b. Бала дедек { $*\phi$ /etip/қағып} жүгіріп келеді.
bala dedek { $*\phi$ /etip/qaghıp} zhügirip keledi.
子供は下手そうに走ってくる。

- (182) a. Ол жымың-жымың { ϕ / etip } күлді.
 ol zhimng-zhimng { ϕ / etip } küldi.
 彼はにやりにやりと笑った。
- b. Ол жымың { * ϕ / etip / қағып } күлді.
 ol zhimng { * ϕ / etip / qaghip } küldi.
 彼はにやりと笑った。

(181), (182) のオノマトペは、非反復形で助動詞 қағу /qaghu/ と共起できるものである。これらのオノマトペの場合も、反復形は助動詞 ету /etu/ を随意的に伴い、本動詞を直接修飾できる。しかし、非反復形の場合は、本動詞を直接修飾できず、助動詞 ету /etu/, қағу /qaghu/ を義務的に伴う。

次に、助動詞 болу /bolu/ と共起するオノマトペを見る。

- (183) a. Көйлегі дал-дал { * ϕ / болып } жыртылды.
 köjlegi dal-dal { * ϕ / bolıp } zhırtıldı.
 シャツがこまかい部分に破れた。
- b. * Көйлегі дал жыртылды.
 köjlegi dal zhırtıldı.
 シャツがこまかい部分に破れた
- (184) a. Жау әскері быж-быж { * ϕ / болып } қашты.
 zhau äskeri bızh-bızh { * ϕ / bolıp } qashtı.
 敵軍はめちやくちやになって逃げた。
- b. * Жау әскері быж қашты.
 zhau äskeri bızh qashtı.
 敵軍はめちやくちやになって逃げた。

上述したように、助動詞 болу /bolu/ と共起するオノマトペの形態的な特徴は、反復形だけで用いられ、非反復形は存在しないということである (* дал болып жыртылды / * dal bolıp zhırtıldı/ ; * быж болып қашты / * bızh bolıp qashtı/)。この助動詞 болу /bolu/ と共起するオノマトペは、(183a) (184a) から窺えるように、反復形で用いられても助動詞 болу /bolu/ を義務的に伴う。したがって、形式的に動詞として用いられ、副詞的な用法がないと分かる。

次、助動詞 беру /beru/ と共起するオノマトペである。これらのオノマトペの形態的な特徴は、非反復形だけで用いられるということであるため、以下では非反復形の例のみを挙げる。

- (185) Алтай үйден сып { ? φ / етіп / беріп } шыға келді.
 altaj üjden sıp { ? φ / etip / berip } shıgha keldi.
 アルタイは家からさっと出てきた。
- (186) Атты әскер лап { * φ / етіп / беріп } жаудың отрядын орнында басты.
 attı äsker lap { * φ / etip / berip } zhauding otryadın ornında bastı.
 馬に乗っていた兵士は一瞬に敵を襲った

(185), (186) のオノマトペは助動詞 *ery /etu/*, *bery /beru/* を義務的に伴い、本動詞を直接修飾することができない。

このように、カザフ語オノマトペにおいては、反復形のものには副詞的な用法が見られるが、非反復形は通常に助動詞を義務的に伴って動詞として働く。唯一の例外は、助動詞 *болу /bolu/* と共起するもので、これらは反復形であっても助動詞を義務的に伴い、本動詞を直接修飾できない。

3.2.3 非反復形の副詞的用法

上で例示したように、カザフ語オノマトペは擬音語・擬態語に関係なく、非反復形で用いられる場合は本動詞を修飾しないのが一般的である。しかしながら、*қарау /qarau/* 「見る, 眺める」, *тоқтау /toqtau/* 「止まる」, *басу /basu/* 「歩く, 踏む」のような極めて数に限られた動詞を修飾する非反復形も見られる。

- (187) a. Ақ күшік мысықты кілт тоқтатты. (М. Әуезов, “Қарағөз”)
 aq küshik mısıqtı kilt toqtattı.
 白い子犬は猫を急に止めた。
- b. [...] Қайрат кілт тоқтап қалып, жалт қарады.
 [...] qajrat kilt toqtap qalıp, zhalt qaradı.
 [...]カイラットは急に止まって, さっと見た。
 (Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. р.377)
- c. Мен аузымды жиғанша болған жоқ, Жақаң кенет шыңғырып жіберді.
Жалт қарасам, жанып барады екен, - дейді Зейін.
 men auzımdı zhıghansha bolghan zhoq, zhaqang kenet shıngghırıp
 zhiberdi. zhalt qarasam, zhanıp baradı eken, - dejdi Zejin.
 驚く間もなく, ジャカンが急に叫んだ。さっと見ると, (家が) 燃えていたと
 ジェイエンが言った。
 (Ә. Сәрсенбаев, “Офицер”)
- d. Алшаң басып, аяндап аю келді, иіскелеп келді де, байқап көрді.

alshang basıp, ayangdap ayu keldi, i:iskelep keldi de, bajqap kördi.

のしのと歩いて熊がやってきた、空気を嗅いで周りを見た。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.22)

(187) では, килт /kilt/, жалт /zhalt/, алшаң /alshang/ という非反復形は қарай /qarau/, тоқтау /toqtau/, басы /basu/ という動詞を修飾して様態副詞として働いている。ただし, このようなケースはかなり少数で例外的であるように思われる。

3.2.4 助動詞 е т у /etu/と引用用法

以上から窺えるように, 助動詞 болу /bolu/と共起するオノマトペ以外の, 全てのオノマトペは助動詞 е т у /etu/と共起することができる。また, 助動詞 е т у /etu/を義務的に伴うオノマトペがあれば, 随意的に伴うオノマトペもある。以下では, 反復形と非反復形について, 助動詞 е т у /etu/が果たしている役割について考察する。

3.2.4.1 助詞「と」・助動詞 е т у /etu/と両言語の非反復形

カザフ語オノマトペの副詞的な用法から見られるように, 助動詞 болу /bolu/と共起するオノマトペ以外に, 反復形をしているオノマトペほとんど全てが助動詞 е т у /etu/を随意的に伴うのに対して, 非反復形オノマトペは助動詞 е т у /etu/, また擬態語の場合は助動詞 қағу /qaghu/, беру /beru/も義務的に伴うという傾向がある。

(188) a. Есік сықыр { * φ / етіп } жабылды.

esik sıqır { * φ / etip } zhabıldı.

戸ががちゃりと閉まった。

b. Арба даңғыр { * φ / етіп } орнынан қозғалды.

arba dangghır { * φ / etip } ornınan qozghaldı.

馬車が大きな音を鳴らして動いた。

同様な傾向が日本語オノマトペにも見られる。これについては「3.1.2.4.反復形・非反復形の助詞「と」との共起」で述べた。日本語オノマトペにおいては, /CVQCVri/・/CVNVCVri/とといった音韻形態を持つもの以外では, 擬音語か擬態語かにかかわらず, 反復形のものが「と」を随意的に伴うが, 非反復形のものには「と」を義務的に伴う。両言語のオノマトペの反復形それぞれが助詞「と」・助動詞 е т у /etu/を随意的に伴う理由としては, 慣習化(語彙化)が挙げられる。つまり, 反復が起こることによってオノマトペが慣習化され, 助詞「と」・助動詞 е т у /etu/との共起が随意的になると考えられる。

3.2.4.2 カザフ語オノマトペにおける引用用法

以下では、助動詞 *ety /etu/* の引用用法という役割について述べる。日本語においては、助動詞「と」は直接引用用法に用いられる助動詞であり、オノマトペと用いられると、「と」の付加は引用用法と直接関わっていると推測した。これと異なって、カザフ語の助動詞 *ety /etu/* は直接引用用法に用いられない。カザフ語においては引用用法に直接用いられるのは助動詞 *dey /deu/* (「言う」) である。例えば、次の用例 (189) から見られるように、

(189) a. “Аты-жөні де құрсын, өзі де құрсын осының!” - деді жігіт тыжырына күнк етіп.

“atı-zhöni de qursın, özi de qursın osınyng!” - *dedi zhigit tızhyryna күnk etip.*

「名前も彼自体のことも気にしないよ！」といった男性はいやな顔をした。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.66)

b. “Дұрыс айтады аю” - деп, бір ыр-р етті сұр қасқыр.

“durıs ajtady ayu” - *dep, bir ır-r etti sur qasqır.*

「クマの話したのは正しい」といって、オオカミが一回吠えた。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.65)

助動詞 *dey /deu/* (「言う」) は直接引用に用いられる助動詞である。ここではいう「引用」を、砂川 (1989) が挙げている定義を参照して「ある発言の場ないしは思考の場で成立した発言や思考を、それとは別の発言の場において再現するということである」にする。カザフ語においては、引用は主に助動詞 *dey /deu/* を伴って行なわれる³⁵。それにも関わらず、助動詞 *ety /etu/* はオノマトペと用いられる場合、引用用法と関わる用法が見られる。以下では、助動詞 *ety /etu/* の引用用法について述べる前に、文外独立用法について議論する。

カザフ語オノマトペの中には、それ自体で文外に独立して起こることができるものがある。すなわち、以下の例から見られるように、文の一部としてではなく、関連する談話の中で独立して起こるものである。

³⁵ この助動詞 *dey /deu/* は擬声オノマトペのみと共起する。

a. Ыңқ дейтін менде дәрмен жоқ.

ıngq dejtın mende dărmen zhoq.

うんという (声を出す) のに力がない。

b. Бұл жалқаулар шып-шып десіп шуласып тұр.

bul zhalqaular ship-ship desıp shulasıp tur.

この怠け者はぼそぼそいって (話して) 騒いでいる。

ここでは、*ыңқ /ıngq/* 「うん」といううなり声と *шып-шып /ship-ship/* 「ぼそぼそ」とつぶやく声を表す擬声語が助動詞 *dey /deu/* を伴っている。この助動詞 *dey /deu/* は擬声語以外のオノマトペを伴うことができない。その理由は、助動詞 *dey /deu/* が「言う・話す」という意味を表し、口に出すという行為を前提とする語であるからであろう。

(190) a. Қа-қа-қа-қа!... қақ-қақ-қақ-қақ!... қық-қық-қық-қық... күліп отырғандар қыран-топан қырылып қалыпты.

qa-qa-qa-qa!... qaq-qaq-qaq-qaq!... qiq-qiq-qiq-qiq... külip otırghandar qıran-topan qırılıp qalıptı.

かかかか...かっかっかっかっ...けっけっけっけっ...という人は皆笑って倒れた。

(Ғ. Мұстафин, “Миллиционер”)

b. Сырт-сырт, шақ-шақ, тақ-тақ, дүрс-дүрс, кірш-кірш. Мне, бұл дыбыстар, шынында, би емес пе?

sirt-sirt, shaq-shaq, taq-taq, dürs-dürs, kirsh-kirsh. Mne, bul dibıdstar, shınında, bi: emes pe?

sirt-sirt, shaq-shaq, taq-taq, dürs-dürs, kirsh-kirsh. この音は本当に踊りではないか。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.188)

(191) a. Трамвай тырр-тырр! Фабрика-завод күрр-күрр! Бүрк-бүрк!

tramvaj tırr-tırr! fabri:ka-zavod kürr-kürr! burq-burq!

電車ががたがた! 工場ががやがや! もくもく!

(Сыздыкова, Хусаин 2001. p.50)

b. Бұлдыр тұман бірдемені отырар ед танытып тегі. Өзі тіпті күлмеуші еді.

Күңк-күңк. Мыңк-мыңк!

buldır tuman birdemeni otırar ed tanıtıp tegi. özi tipti külmeushi edi.

küngk-küngk. mingq-mingq!

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.134)

(190) (191) では、オノマトペは文の外に現れている。(190) では、オノマトペが文の前に現れるが、(191) では、文の後ろに続いている。これらのものは擬声語・擬音語である。日本語の例で説明したように、文の外に最も現れやすいのは擬声・擬音のオノマトペである。繰り返しになるが、擬声語・擬音語（またはこれらの臨時形）の文外独立的に用いられやすいのは、これらは音を模倣して出来たものであるため、音の正確な模倣であるかのように提示されるからであると考えられる。このような文外に起こる擬声・擬音のオノマトペ及び臨時語ないしそれに近いものが文中で起こる際、助動詞 *ety /etu/* の使用が義務的になる。

(192) a. Қық-қық-қық-қық {еткен / * φ} күлкі естілді.

qiq-qiq-qiq-qiq {etken / * φ} külki estildi.

けっけっけっけ {という / * φ} 笑い声が聞こえた。

b. Трат-тат-тат {еткен / * φ} дыбыс естілді.

trat-tat-tat {etken / * φ} dıbyıs estildi.

だっだっだっ {という / * φ} 音が聞こえた。

以上の(192a)は笑声を表す擬声語の例で、(192b)は堅い物体が衝突してその結果おこる擬音語の例である。この例から明らかなように、*қық-қық-қық-қық /qıq-qıq-qıq-qıq/*と *трат-тат-тат /trat-tat-tat/*は文中で起こる際、助動詞 *ету /etu/*を *еткен /etken/*「という / といった」という形で伴わなければ、文が成り立たない。(192)のオノマトペは「オノマトペ *еткен /etken/* (という / といった) 音 / 声」という構造で起こっている。これについては、田守・スコウラップ (1999) が日本語オノマトペにおいては「X という (ような) 音 / 声」という構造を引用構造と名付け、この引用構造に起こるオノマトペは擬態オノマトペより擬音オノマトペの方がはるかに多いと主張している。このような引用構造におこるオノマトペの場合は、話者が造ったものではなく、話者が聞いたある音や声に単に名前を与え、引用的に聴者に伝えると考えられる。

(193) a. Қа-қа-қа-қа {етіп / * φ} біреу желке тұсынан күліп жіберді.

qa-qa-qa-qa {etip / * φ} bireu zhelke tusınan külip zhiberdi.

かかかか {といて / * φ} 誰かが後ろから笑い出した。

(193)の *Қа-қа-қа-қа /qa-qa-qa-qa/*は笑い声を表す擬声語である。この文では *етіп /etip/* を除外すると、文の適格性が下がる。

このように、(190) (191) に例示したオノマトペは臨時の擬声語・擬音語である。これらは、文の中で用いられると助動詞 *ету /etu/*を *еткен /etken/*「という / といった」及び *етіп /etip/*「と」という形で伴わなければならない。このことから助動詞 *ету /etu/*はオノマトペと使用されるときに、引用用法と関わっているということが分かる。日本語と対照すると、助詞「と」と似たような役割を果たしていると言える。

4. 名詞用法

上で見たように、日本語とカザフ語のオノマトペは文の中では、主に動詞的・副詞的な役割を果たしている。これらの用法以外に両言語のオノマトペにおいては、名詞的な用法も見られる。

4.1 日本語オノマトペの名詞用法

本節では、日本語オノマトペの名詞としての用法について述べる。まず、以下の例を見よう。

- (194) a. 一向に進まぬ行政改革に国民のいらいらが募る。(飛田・浅田 2002. p.39)
 b. 有害家庭用品がチクチクやムズムズの原因だ。(飛田・浅田 2002. p.594)
 c. ザクロはあのブツブツが嫌だと言う人がある。(飛田・浅田 2002. p.459)
 d. 歯のずきずきは軽くなりました。

(detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail)

(194) の例から見られるように、日本語オノマトペは名詞として機能することがある。このような名詞用法が様態副詞として機能するオノマトペにはよく観察される。名詞として働くオノマトペにおいては 1 モーラ/CV/と 2 モーラ/CVCV/のものがあるが、形態的に反復形が多いことが特徴的である。

- (195) ぷつぷつ, ぼつぼつ, ぶつぶつ, しゃぶしゃぶ, ぬるぬる, がらがら

田守・スコウラップ (1999) も指摘しているように、名詞として用いられる日本語オノマトペにおいては、「わんわん」「こんこん」「ぶんぶん」のような幼児語や俗語が多く観察されている。

- (196) a. (幼児が) 赤いブーブーが来たよ。(飛田・浅田 2002. p.485)
 b. (幼児が) あ, ぶんぶんが飛んできた。(飛田・浅田 2002. p.512)
 c. 後ろの娘のポインが背中に当たる。(飛田・浅田 2002. p.536)

また、接尾辞「つく」、「めく」によって作られた動詞から、派生した名詞もある。それは以下のものである。

- (197) a. いちゃつき うろつき かさつき がさつき がたつき
 がちゃつき ぎらつき ぐらつき こせつき ごちゃつき
 b. きらめき くるめき ざわめき はためき ひしめき
 ひらめき ゆらめき よろめき

4.2 カザフ語オノマトペの名詞用法

本節では、カザフ語オノマトペの名詞用法について論じる。カザフ語の名詞的なオノマトペは、(198) に示されているように、多様な構造に現れる。

- (198) a. Бұның жыпылығы менің жыныма тиеді.
 buning *zhıpylghı* mening zhinıma ti:edi.

彼の瞬きが気になる。

- b. Оның кипак-сипағы көп.

oning *qi:paq-si:paghı* kör.

彼にはうそをつくことや汚いトリックが多い。

- c. Әкесінің жаңағы қомпаңына аз күлгеннен кейін, Айша өз сөзін тағы бастыды. (М. Әуезов, “Қарагөз”)

äkesining zhangaghı *qompañına* az külgennen kejin, Ajsha öz sözün taghı bastadı.

お父さんの不器用な動きに少し笑ってから、アイシャは話を続けた。

- d. Көңілі талай күнгі қірбеңінен жадырағандай. (М. Әуезов, “Қарагөз”)

köngili talaj küngi *kirbenginen* zhadraghandaj.

ぼりぼりの気分からいい気持ちになったみたい。

- e. Даладан аттардың топыры мен ерлердың дабыры естілді.

daladan attardıng *topır*ı men erlerding *dabır*ı estildi.

外から馬の走った足音と男性達の大きい声が聞こえてきた。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.762)

- f. Күбір-сыбырдың бәрі өшіп, жұрт төбеге ұрғандай тына қалды.

kübir-sıbirding bäre öship, zhurt töbege urghandaj tına qaldı.

わいわいが全部消えて、人々が急に静かになった。

(Болғанбаев, Дәулетқұлов 1999. p.442)

以上の (198a) は接尾辞 $-л+қ$ / $l+q$ / がついた /CVC- $l+q$ / の例, (198b) は /CVC- q / の反復形の例である。また, (198c,d) は /CVCC- ng / の例, (198e) は /CVC- r / の例である。(198f) は /CVC- r / の反復形の例である。以上の例から分かるように, カザフ語オノマトペには接尾辞「閉鎖音」 $-к/q/$ / $-к/k/$, 「鼻音」 $-ң/ng/$, 「ふるえ音」 $-р/r/$ がついたものは名詞として機能することができる。しかしながら, これらの接尾辞がついたオノマトペのうち, /CVC- r /・/CVCC- r / 型のものが名詞として機能することが最も多くみられる。

- (199) a. /CVC- r /

дабыр /*dabır*/ дүбір /*dübir*/ сыбыр /*sıbir*/

сақыр /*saqır*/ тыпыр /*tıpır*/ шытыр /*shitır*/

- b. /CVCC- r /

даңғыр /*dangghır*/ дыңғыр /*dingghır*/ салдыр /*saldır*/

сыбдыр /*sıbdır*/ сыңғыр /*singghır*/ шылдыр /*shıldır*/

(199) に示したものはすべて擬音オノマトペである。語末に接尾辞「ふるえ音」 $-р/r/$ を持

つ擬態語も名詞として機能できる。次の (200) はそれを示す例である。

- (200) a. Алыстан түманның бүлдіры көрінді.
alistan tumanning *buldıry* körindi.
遠くから霧のぼんやりしている状態が見えた。
- b. Су бетінде жыбыр пайда болды.
su betinde *zhıbyr* pajda boldı.
水の上に震えがあらわれた。

(199) のような語末に接尾辞「ふるえ音」-p /r/を持つオノマトペにおいては、反復形であっても名詞として機能できるものがある。しかしながら、*дабыр-дабыр* /dabır-dabır/ のような規則的な反復形より、*сақыр-суқыр* /saqır-suqır/ ないし *күбір-сыбыр* /kübir-sıbyr/ のような不規則的な反復形には名詞用法に適切なものが多く観察される。

- (201) a. Алыстан {?? дабыр-дабыры / дабыр-дүбірі} естілді.
alistan {?? *dabır-dabıry* / *dabır-dübiri*} estildi.
遠くから大きな声が聞こえてきた。
- b. Алыстан {?? салдыр-салдыры / салдыр-гүлдірі} естілді.
alistan {?? *saldır-saldıry* / *saldır-güldiri*} estildi.
遠くから大きな雑音が聞こえてきた。

上の (201a) では、規則的な反復形の *дабыр-дабыры* /dabır-dabıry/ と不規則的な反復形 *дабыр-дүбірі* /dabır-dübiri/ という語、(201b) では、規則的な反復形の *салдыр-салдыры* /saldır-saldıry/ と不規則的な反復形の *салдыр-гүлдірі* /saldır-güldiri/ が同じ条件で用いられている。しかしながら、不規則的な反復形が成り立つのに対し、規則的な反復形のもの成り立たない。

(199) と比べて、接尾辞「閉鎖音」-к /q/ /-к /k/, 「鼻音」-ң /ng/ を持つ /CVC-q/k/ ・ /CVCC-q/k/ ・ /CVC-ng/ ・ /CVCC-ng/ はすべて擬態語であり、名詞としての用法が稀である。

- (202) /CVC-q/k/ ・ /CVCC-q/k/
кипак /qi:paq/ қоқақ /qoqaq/ жалтақ /zhaltaq/ жалбақ /zhalbaq/
- (203) /CVC-ng/ ・ /CVCC-ng/
қолбаң /qolbang/ қорбаң /qorbang/ жалмаң /zhalmang/

カザフ語オノマトペにおいては、以上の名詞的なものと異なって、語基に接尾辞が付加することによって派生した名詞が多く存在する。これらは自立語として用いられる /CVC/ ・

/CVCC/のオノマトペに名詞を導く接尾辞-ыл/ıl/-іл /il/が付加したものである。

(204) a. /CVC/

баж-ыл /bazh-ıl/ бақ-ыл /baq-ıl/ бар-ыл /bar-ıl/ быж-ыл /bizh-ıl/
дыз-ыл /dız-ıl/ дың-ыл /ding-ıl/ зың-ыл /zing-ıl/ күж-іл /küzh-ıl/

b. /CVCC/

балп-ыл /balp-ıl/ барп-ыл /barp-ıl/ бұрқ-ыл /burq-ıl/ былп-ыл /bilsh-ıl/
гүрс-іл /gürs-ıl/ зірк-іл /zirk-ıl/ дүмп-іл /dümp-ıl/ дүңк-іл /düngk-ıl/
дүрс-іл /dürs-ıl/ жалп-ыл /halp-ıl/ зырқ-ыл /zirq-ıl/ күрк-іл /kürk-ıl/
күрс-іл /kürs-ıl/ қаңқ-ыл /qangq-ıl/ қарқ-ыл /qarq-ıl/ қорс-ыл /qors-ıl/
салп-ыл /salp-ıl/ сарт-ыл /sart-ıl/ сыңқ-ыл /singq-ıl/

(204) のオノマトペはすべて擬声・擬音オノマトペである。これに対して自立語として用いられる/CVC/・/CVCC/の擬態語は、接尾辞-ыл/ıl/-іл /il/を付加することによる方法では通常に名詞にならないということが興味深い³⁶。

(205) жып /zhıp/ 「すばやくきえる」	* жып +ыл /zhıp+ıl/
зып /zıp/ 「すつととおる様子」	* зып+ыл /zıp+ıl/
жырқ /zhırq/ 「にやりと笑う様子」	* жырқ+ыл /zhırq+ıl/
қылт /qılt/ 「急に起こる様子」	* қылт+ыл /qılt+ ıl/
солқ /solq/ 「脈が一回うつ様子」	* солқ+ыл /solq+ ıl/

(202) ～ (205) にまとめた名詞以外に、カザフ語オノマトペには極めて少数であるが、接尾辞-/u/によってできた派生名詞が見られる。

(206) қиқ-у /qi:q-u/, желп-у /zhelp-u/, қыңқ-у /qingq-u/, қаңқ-у /qangq-u/

以上で日本語とカザフ語のオノマトペの名詞用法を考察した。この考察から分かるように、両言語のオノマトペは名詞用法があるが、すべてのオノマトペは名詞として機能するわけではない。名詞用法は、日本語の場合は様態副詞として機能する反復形に良く見られるが、カザフ語の場合は接尾辞「ふるえ音」-p /r/を伴う/CVC-r/ないし/CVCC-r/によく観察される。

³⁶ /CVC/・/CVCC/型の擬態語のうち、接尾辞-ыл/ıl/-іл /il/が付加することによって多少の名詞が見られる。それは дір-іл /dir-ıl/, жалт-ыл /zhalt-ıl/, жарқ-ыл /zharq-ıl/, желк-іл /zhelk-ıl/, жылт-ыл /zhilt-ıl/である。

5. 形容詞用法

両言語においても形容詞的な用法はほとんど見られない。日本語オノマトペの場合は、多少のオノマトペから派生した形容詞が見られるが、カザフ語オノマトペの場合はそういうものがないようである。日本語オノマトペは直接に形容詞として機能することができないが、それ自体あるいはその一部の要素が接尾辞と結びついて、「けばけばしい」「とげとげしい」という派生した形容詞として用いられる。田守・スコウラップ（1999）が、このような形容詞には2種類があると述べ、(207)のようにオノマトペに形容詞を導く接尾辞を付加して派生したものと、(208)のように形容詞にオノマトペの語基を接頭辞として付加して派生したものであると強調している。

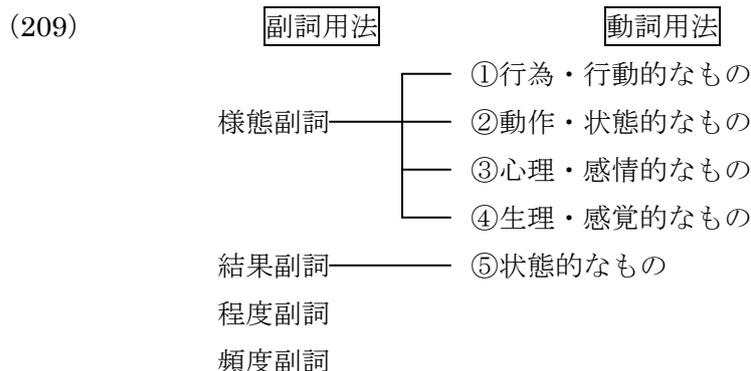
- (207) けばけばしい ← けばけば+しい
とげとげしい ← とげとげ+しい
たどたどしい ← たどたど+しい
- (208) ほろ苦い ← ほろっ(と)+苦い
むず痒い ← むずむず+痒い
ひよろ長い ← ひよろひよろ/ひよろっ(と)長い

(田守・スコウラップ 1999. p.64)

(207) は、2モーラ反復形に形容詞を導く「しい」という接尾辞がついて派生した形容詞であるが、(208) は、オノマトペの語基が接頭辞として形容詞に付加している。このような方法で派生する形容詞は日本語には非常に稀である。

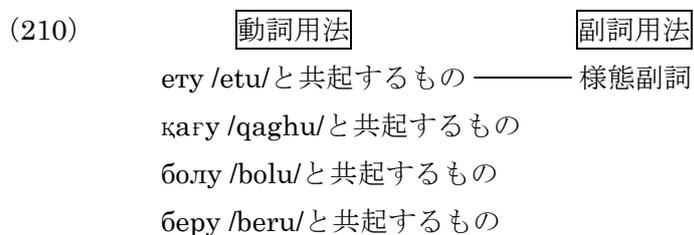
6. 両言語オノマトペにおける相違点

本章では日本語とカザフ語のオノマトペを品詞という観点から考察した。その結果、両言語のオノマトペは副詞と動詞の用法が最も多いということで共通しているということが明らかになった。しかしながら、両言語は次のことで異なっている。日本語オノマトペはほとんど全てが副詞として機能するが、動詞として（「する」動詞と共起する）機能できるオノマトペはすべてではない。動詞的用法が見られるのは擬態・擬情のオノマトペだけである。このように、使用される量という基準から日本語オノマトペを以下のように示すことができる。



(209) の日本語オノマトペの場合は、様態副詞として機能するものは、「する」動詞と共に①行為・行動的なもの、②動作・状态的なもの、③心理・感情的なもの、④生理・感覚的なものとして動詞的に用いられることができる。また、結果副詞のものは、「する」動詞と共に起する時、状态的なものとして用いられる。

日本語オノマトペに対してカザフ語オノマトペは次のように異なっている。カザフ語オノマトペの全てが助動詞 *ery /etu/* (「する」), または *қағу /qaghu/* (「うつ」), *болу /bolu/* (「なる」), *беру /beru/* (「あげる」) と共起し、動詞的な役割を果たすことができる。しかしながら、副詞的用法は全てのオノマトペにあるわけではない。副詞的用法が見られるのは、反復形をしているオノマトペにだけである。したがって、カザフ語オノマトペを使用される量ということから次のように示すことにする。



(210) のカザフ語オノマトペの場合は、助動詞 *ery /etu/* と共起するオノマトペだけには様態副詞的な用法がある。助動詞 *қағу /qaghu/* と *беру /beru/* と共起するオノマトペは非反復形だけで用いられるため、直接動詞を修飾できない。したがって、動詞的な用法になり副詞的に使用されない。また、助動詞 *болу /bolu/* と共起するオノマトペは反復形であっても、*болу /bolu/* を義務的に伴うため、直接動詞を修飾することができない。

このように、両言語には、日本語オノマトペの場合は副詞的用法、カザフ語オノマトペの場合は動詞的用法が最も多くなっているという相違点がある。

第3部 結論

第8章 オノマトペにおける語彙化の程度

1. はじめに

本章では、日本語とカザフ語のオノマトペの語彙化 (lexicalization) の程度について検討する。オノマトペの語彙化の程度を測定するために、第7章で見てきた両言語オノマトペの動詞と副詞的な用法を基準にし、つまり、動詞的用法 (日本語の場合「する」動詞、カザフ語の場合 *ету /etu/*, *қағу /qaghu/*, *болу /bolu/*, *беру /beru/* 助動詞との共起が見られるかどうか) と、引用性 (引用として括弧内に入るか、引用を示す助詞の「と」をとるかどうか) という2つの基準を扱うことにする。

最初は、語彙化の程度 (語彙度) に関する先行研究を挙げる。その次に、先行研究の問題点に触れ、本稿の語彙度の段階を設定する。最後に、統語的な基準をもとに、両言語オノマトペが語彙化の観点から見てどのように異なっているのかということ を明らかにする。

2. 語彙化の定義

まず、以下の例を見よう。

- (1) a. 「それから^{ほうきぼし}彗星がギーギーフーギーギーフーて云って来たねえ。」
(宮沢賢治 2006. 『銀河鉄道の夜』新潮社)
- b. Қа-қа-қа-қа!... қақ-қақ-қақ-қақ!... қық-қық-қық-қық... күліп отырғандар қыран-топан қырылып қалыпты.
qa-qa-qa-qa!... qaq-qaq-qaq-qaq!... qıq-qıq-qıq-qıq... külip otırghandar qıran-topan qırılıp qalıptı.
かかかか...かっかっかっかっ...けっけっけっけっ... といる人は皆大笑いした。
(F. Мұстафин, “Миллиционер”)

(1) に示したオノマトペは「ギーギーフーギーギーフー」、*қа-қа-қа-қа /qa-qa-qa-qa/*, *қақ-қақ-қақ-қақ /qaq-qaq-qaq-qaq/*, *қық-қық-қық-қық /qıq-qıq-qıq-qıq/* という擬声語である。これらのものはいわゆる臨時語ないしそれに近いものであると考えられる。ここでいう臨時語は、音形や表記形式があまり固定的ではないオノマトペで、一定の文脈がないとその語が表しているのが何の音なのか解りにくいことがあるものである。オノマトペにおいては (2) のようなものも見られる。

(2) a. その男優は初舞台を前にしていらいらしていた。(飛田・浅田 2002. p.9)

b. Tisi tisine timей дiрдек-дiрдек етедi.

tisi tisine ti:mej *dirdek-dirdek etedi*.

歯は歯にあわずぶるぶるしている (震えている)。

(2a) の「いらいら」は擬情語, (2b) の *дiрдек-дiрдек /dirdek-dirdek/* は擬態語である。これらは、音形および表記法が比較的固定していて、文脈がなくてもその語が何の様子(音など)を表しているかが比較的に解りやすく、(2) の臨時語と比べて安定しているといえるだろう。(2) の「いらいら」と *дiрдек-дiрдек /dirdek-dirdek/* はそれぞれ「する」動詞と、助動詞 *ety /etu/* を伴うことができ、これによって時制の変化を示すことができる。例えば、「いらいら」といった擬情語は過去なら「いらいらした」、現在なら「いらいらする」のように表すことが可能である。臨時語の「ギーギーフーギーフー」と *қа-қа-қа-қа /qa-qa-qa-qa/* などは過去や現在を表すことができない。このことから、(2) の「いらいらする」と *дiрдек-дiрдек еты /dirdek-dirdek etu/* は語彙化が進んでいるのに対し、(1) の臨時語は語彙化の程度が低いことが推測できる。

一般的には、語彙化は一連の形態素が語彙単位となる過程を指す(『ラールス言語学用語辞典』より)。本稿でいう語彙化とは、実際に生じたりした音声や物体の様子などが人間の聴覚・視覚などでとらえられ、擬音語・擬態語という語彙単位、また更に一般の語彙と等価に近い語までに定着する一定の過程を指している。本稿では、この過程を「語彙化」(lexicalization) と呼び、その程度を「語彙度」とする。

3. 語彙度の段階

3.1 先行研究

日本語オノマトペの語彙化に関する先行研究としては飛田・浅田(2002)と筧(1993)が挙げられる。飛田・浅田(2002)はオノマトペに至るまでの段階について議論しているが、筧(1993)はオノマトペにおける段階について述べている。本稿では、主に筧(1993)を参考にし、両言語オノマトペにおける段階を設定する。

3.1.1 飛田・浅田(2002)

飛田・浅田(2002)は、擬音語・擬態語に至るまでの5つの段階を認定し、次のように示している。

1) 「類似の音・声や様子で模倣する段階」。これは、音や声の場合は、対象の音・声生じたときと類似の行為を行うことによって、当該の物音や声を模倣するものを指す。または様子の場合は、対象となる様子を類似の様子で模倣することによって該当の様子を表現するものを指すと述べている。

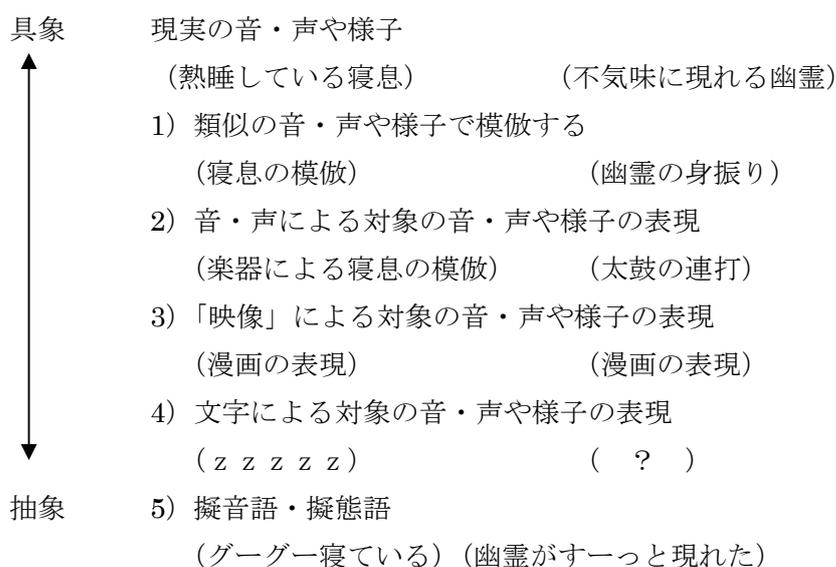
2) 「音・声による対象の音・声や様子の表現の段階」。これは、対象となる物音・声や様子を、全く違う音や声で表現するものを指す。

3) 「映像」による対象の音・声や様子の表現の段階」。これは、音の場合は、漫画のコマの中に書かれた動かない「文字」表記や作者がその場だけのものとして、手書きで書く位置や大きさ、線の太さ、強さ、色などに工夫を凝らして表現するものを指す。擬態語の場合は漫画やイラストに書かれる擬態表現を指す。

4) 「文字による対象の音・声や様子の表現の段階」。これは、詩歌・小説などの文字言語に表れた擬音表現・擬態表現を指す。

5) 「擬音語・擬態語の段階」。これは、擬音語・擬態語の段階であり、活字化できる音声連続および撥音できる文字表記によって対象の音・声や様子を表現したものである一定の形と意味を持ち、一定のグループの人々の間で抽象的・普遍的に通用するものであると主張している。このように、飛田・浅田(2002)が擬音語・擬態語に至る段階として5つの段階を設定し、これを以下の図のようにまとめている。

図 25 飛田・浅田(2002)により擬音語・擬態語に至る5つの段階



3.1.2 筧(1993)

筧(1993)は、オノマトペの一般の語彙に至るまでの4つの段階を設定している。このようなオノマトペの語彙化の程度を測定するために、2つの基準を扱っている。その一つ目は、引用性(引用として括弧内に入るか、引用を示す助詞の「と」をとるかどうか)であって、二つ目は語形変化(時制の変化を示す「活用」がみられるかどうか)である。筧(1993)によって設定された語彙度の段階は次のものである。

第一段階は、その場その場で創作される臨時語と呼ばれるオノマトペである。

第二段階は、「と」を伴い、かつ「語形変化」をしないものである。筧（1993）は日本語オノマトペのほとんどがこの第二段階に属していると述べている。この段階のものには「ツと立ち上がる」の「ツ」や「バサッと落ちる」の「バサッ」つまり助詞「と」の生起が義務的なオノマトペと、「ぶらぶら（と）歩く」の「ぶらぶら」や「ポッキリ（と）折れる」の「ポッキリ」助詞「と」の生起が随意的なオノマトペがあると強調している。

第三段階は、「と」が起こらず、「語形変化」をなす類である。これらの代表的なものとして筧が「する形」を取り上げ、「びっくりする」を例にし、「びっくりする」においては「びっくり」と「する」の結合が極めて緊密であるために、その間に「と」が挿入されない」と述べている。

第四段階は、語源的にオノマトペであったものが、語彙化の程度が進んで、もう一般の語と区別されなくなったものである。「驚く」「注ぐ」「騒ぐ」「轟く」はそれであると示している。

3.2 先行研究の問題点

最初は、飛田・浅田（2002）が設定した擬音語・擬態語に到るまでの段階について議論する。飛田・浅田（2002）は、1) の段階を「類似の音・声で対象の音・声を模倣する」とし、これを「(略) 鳥を餌づけしたり捕らえたりするために鳴き声そっくりに作った笛を吹いたりするのがこれにあたる。」のように説明している。また、2) の段階を「音・声による対象の音・声の表現」とし、以下のように説明している。

- (3) 「対象となる物音や声を、まったく違う音や声で表現するものを指す。波の音を表現するのに豆の入ったザルを振り動かして音を出したり、動物の鳴き声を人間が舌や唇の操作によって表現したりするもので、(略)」

(飛田・浅田 2002. p.7)

この引用から分かるように、飛田・浅田（2002）は1) と2) の段階が1) の場合は類似の音や声で模倣するか、2) の場合はまったく違う音や声で模倣するかということで異なっていると示している。1) の説明として鳥の鳴き声を笛で模倣するという例を挙げているが、ここで問題になっているのは鳥の鳴き声は笛の音にどのくらい類似しているのかということである。また2) 段階の説明には、波を豆のザルで模倣するという例があるが、波の音と豆のザルから出る音はどのくらい違うのかということが問題になってくる。この例から1) 段階より2) 段階のほうがより抽象的であるということが言えないのではないと思われる。いずれにしても、擬音語は我々人間がしゃべっている言葉であるため、擬音オノマトペに人間が口・鼻・のどを使って模倣したもの（音声模写）が関わっているが、それ以外のもので模倣することは擬音語に直接関係がないように思われる。同じように、飛田・浅田（2002）が設定した3) 段階の「映像による対象の音・声の表現」が擬音語に直接関係し

ていないと言える。

もう一つの問題としては、擬態語の段階を上げることができる。擬音語の場合は、擬音語は音を表すものであるため段階が考えられるが、擬態語の場合は、簡単に段階を設定することが難しい。つまり、擬音語の場合は、実際の寝息と、寝息を模倣した本物の寝息だと思っただけの音声模写と、「グーグー」という擬音語との間には何らかの類似性(関連性)を抽出する(感じる)ことができる。しかしながら、擬態語の場合は、例えば、飛田・浅田(2002)が挙げている例で言うと、不気味に現れる幽霊の様子と、「すーっ」という擬態語とが直接関わっているとは考えにくい。

次に、筧(1993)について検討する。筧(1993)が臨時語のオノマトペから一般の語彙に到るまでの4つの段階を設定している。第一段階は臨時語、第二段階は語形変化をしないもの、第三段階は語彙変化をなすもの、第四段階は一般語彙と区別されなくなったものを挙げている。筧(1993)が、語彙化の程度を測定するために、2つの基準を扱っている。それは「引用性」と「語形変化」である。ここで問題になるのは「語形変化」であって、オノマトペ自体は語形変化しないものであるため、「語形変化」という用語自体は適切なものではない。本稿では、語彙度の段階を設定するために、「動詞用法」つまり、動詞的な用法が見られるかどうか(日本語の場合は「する」動詞、カザフ語の場合 *ery /etu/, қару /qaghu/, болу /bolu/, беру /beru/* 助動詞との共起が見られるかどうか)と、「引用性」つまり、引用要素を伴うかどうか(日本語の場合引用を示す助詞の「と」をとるかどうか)という基準を扱うことにする。

本稿で扱ったオノマトペが辞書から引いたものであるため、これらのオノマトペの範囲で語彙度の段階を設定する。

3.3 本稿の語彙度の段階

最初はオノマトペとその臨時形(臨時語)についてごく簡単に触れる。我々人間が、ある自然界の音や声を真似すれば、それが全てオノマトペというわけではない。ここでは、どこからどこまでがオノマトペかという問題について考えてみよう。ある人が動物の鳴き声を真似して、それが本物の鳴き声とそっくりで、本物の動物の本物の鳴き声と思っただけであれば、それがオノマトペではないであろう。なぜならば、言葉ではないからである。このような音真似(音声模写)は仮名やアルファベットなどでいくら上手に組み合わせても表すことができないであろう。オノマトペは例えば、犬の鳴き声は日本語では「わんわん」、牛の鳴き声は「もーもー」、豚の鳴き声は「ぶーぶー」であって、その言語で使用されている音素で成り立っている。例えば、「わんわん」の「わ」は「私」の「わ」と同じ音であり、「ん」は「本」の「ん」と同じ音であると言ってもよいであろう。また、オノマトペは言葉であるため、体系的になっており、反復・母音/子音交換などの現象が見られる。しかしながら、言葉には(4)から見られるようなものが存在する。

(4) 地震が起きたとき、営業所のガレージに帰る途中で、信号待ちしておったんですわ。ごーっという音がして、風がぶわーっというてあがってなあ。おかしいなって思うたら、いきなりどどどーんときた。

(『AERA』1995. 215号. p.29)

(4) の「どどどーん」がオノマトペでいいかどうかという問題がある。本稿では、このようなものをオノマトペとして認定する。なぜならば、話者が実際に生じた音を日本語で使用される音素に合わせて表しているからである。それは仮名を使って「どどどーん」と書ける。そういう意味でそれはオノマトペである。ただし、「どどどーん」というものは実際の会話ではあまり聞かない形態であり、一定の文脈がないとこの語が何を表しているかが解りにくいということがある。このような語は「臨時形（臨時語）」とよく呼ばれている。本論文では、(4) の「どどどーん」のような語をオノマトペに認定するが、語彙度の段階を設定するとき、対象としないことにする。なぜならば、臨時語は、話者が作り上げたものであり、辞書に入っている語のような普遍性を持たない。本論文は辞書に含まれる語に限定することで、オノマトペの普遍的性質を研究するものであるので、臨時語の語彙性についてはこれ以上論じない。

オノマトペの第一段階としては次のものが挙げられる。それを筧(1993)の「引用性」という基準をもとに設定し、①「引用要素を義務的に伴うオノマトペの段階」とする。この段階に入るオノマトペの音形や表記法は固定しており、日本語の場合は助詞「と」、カザフ語の場合は助動詞 *ery /etu/* (*еткен /etken/* 「という／といった」及び *erip /etip/* の形で) を義務的に伴うものである。「瓶をかちやんと鳴らす」「ころっと転がった」の「かちやん」「ころっ」はそれである。

第二段階としては②「引用要素を随意的に伴い、動詞用法がないオノマトペの段階」が挙げられる。この段階に入るものは、助詞「と」を随意的に伴い、「する」動詞と共起できないものである。日本語で説明すると、「する」動詞を伴わない 2 モーラの反復形である。日本語の場合は「瓶をかちやかちや (と) 鳴らす」「ころころ (と) 転がった」の「かちやかちや」「ころころ」はそれである。日本語オノマトペのほとんどがこの段階に属する。

最後の第三の段階としては③「動詞用法があるオノマトペの段階」が挙げられる。この段階に入るものは、様態副詞として機能するとき引用要素(助詞「と」)を随意的に伴い、「する」動詞と共起できる類である。日本語の「いらいらした」の「いらいら」と、カザフ語の *жалтақ-жалтақ етті /zhaltaq-zhaltaq etti/* 「きよろきよろした」の *жалтақ-жалтақ /zhaltaq-zhaltaq/* はそれである。上のことをまとめて本稿の語彙化の段階を次のように示す。

- ①引用要素を義務的に伴うオノマトペの段階
- ②引用要素を随意的に伴い、動詞用法がないオノマトペの段階
- ③動詞用法があるオノマトペの段階

4. 語彙度の段階と両言語のオノマトペ

4.1 擬声語・擬音語

本節では、両言語の擬声語・擬音語について述べる。

日本語の擬声語・擬音語においては第一段階と第二段階に属するものが大半である。第一段階と第二段階のオノマトペの差を以下の例で示すことができる。ここでは、第一段階と第二段階の間に絶対的な境界線を引くことが不可能であるため、その差を相対的なものとする。

- (5) a. 食器をがちやがちや { ϕ /と} 鳴らす。
b. 食器をがちやがちやつ { $*\phi$ /と} 鳴らす。
c. 食器をがちやーつ { $*\phi$ /と} 鳴らす。

(5a) の「がちやがちや」は 2 モーラの反復形であり、助詞「と」を随意的に伴う。(5b) の「がちやがちやつ」は (5a) 2 モーラの反復形の異形であると考えられる。この「がちやがちやつ」は語末に促音を持つだけで、「と」を必ず必要とし、より直接的で生き生きした臨場感を与えるものである。また、(5c) の非反復形の「がちやーつ」も語末に長音と促音を持ち、助詞「と」を必要とするものである。ここの (5a) の「がちやがちや」を第二段階のものし、(5b,c) の「がちやがちやつ」「がちやーつ」を第一段階のものにする。

次に、第三段階であるが、この段階に属する日本語の擬声語・擬音語はほとんどない。統語的な考察で述べたように、日本語の擬声語・擬音語は文の中で様態副詞としてしか用いられず、「する」動詞を伴わない。そのため、例えば「はははと笑った」での擬声語の「ははは」と「ごんごん(と) 打つ」の擬音語の「ごんごん」は、「*はははする」「*ごんごんした」のようにまず用いられない。このことから、日本語の擬声語・擬音語は第三段階③「動詞用法があるオノマトペの段階」まで至っていないということが言える。

次に、カザフ語の擬声語・擬音語について論じる。カザフ語の擬声語・擬音語においては第一段階に属するオノマトペが多少存在するが、非常に稀である。これらは笑い声を表す反復が 2 回おこった擬声語のものに限る。

- (6) a. Бұл ха-ха-ха { $*\phi$ /etip} күлді.
bul *ha-ha-ha* { $*\phi$ /etip} күлді.
彼がははは { $*\phi$ /と} 笑った。
b. Бұл қа-қа-қа { $*\phi$ /etip} күлді.
bul *qa-qa-qa* { $*\phi$ /etip} күлді.
彼がかかか { $*\phi$ /と} 笑った。

(6a) の *xa-xa-xa /ha-ha-ha/* と (6b) の *qa-qa-qa /qa-qa-qa/* は、副詞として機能するときには文中では引用要素の役割を果たしている助動詞 *ery /etu/* (*erip /etip/* という形で) を伴わなければならない。(6) の擬声語のもう一つの特徴は、*xa-xa-xa /ha-ha-ha/* と *qa-qa-qa /qa-qa-qa/* は文の中で様態副詞としてしか機能できず、通常にかザフ語オノマトペに見られる動詞的な用法がない。

- (7) a. *Бұл xa-xa-xa etti.
bul ha-ha-ha etti.
 彼がはははした。
- b. *Бұл qa-qa-qa etti.
bul qa-qa-qa etti.
 彼がかかかした。

これらと比べて殆ど全てのかザフ語オノマトペは動詞的な用法が見られる。例えば、*жырқ-жырқ /zhırq-zhırq/* 「くすくす」という擬声語は副詞として機能するとき助動詞 *ery /etu/* (*erip /etip/* という形で) を随意的に伴うし (8)、動詞的な用法も見られる (9)。

- (8) Бұл жырқ-жырқ { ϕ / *erip*} күлді.
bul zhırq-zhırq { ϕ / *etip*} küldi.
 彼がくすくす { ϕ / と} 笑った。
- (9) Бұл жырқ-жырқ etti.
bul zhırq-zhırq etti.
 彼がくすくす (した)。

このことから (7) の *xa-xa-xa /ha-ha-ha/*, *qa-qa-qa /qa-qa-qa/* を第一段階のものにする。

かザフ語オノマトペの殆ど全てが助動詞 *ery /etu/* などと共に起することができ、動詞的な用法がある。以下の (10) は擬声語の例で、(11) は擬音語の例である。

- (10) Ит {арс-арс / арс} etti.
i:t {*ars-ars / ars*} etti.
 犬が {わんわん / わん} (した)。
- (11) Бірдеме {тарс-тарс / тарс} etti.
birdeme {*tars-tars / tars*} etti.
 何か {とんとん / とん} (した)。

以上の例から分かるように、反復形か非反復形かに関係なく擬声語・擬音語は助動詞 *ery/etu/*を伴い、動詞の役割を果たすことができる。これらのものには動詞用法があるため、カザフ語の擬声語・擬音語は第三段階「動詞用法があるオノマトペの段階」に属すると言える。このように、日本語とカザフ語の擬声語・擬音語を対照すると、カザフ語の方がより語彙化が進んだと分かる。

4.2 擬態語・擬情語

本節では両言語の擬態語・擬情語について論じる。最初は、日本語オノマトペである。

第一段階に属する擬態語・擬情語としては、非反復形の語末に促音・撥音・「ri」を持つ1モーラないし2モーラ語基のものが挙げられる。これらのものは引用要素の助詞「と」を義務的に伴うものであり、「する」動詞を伴わないオノマトペである。文中では様態副詞として機能することが多い。次の例に示した擬態語はそれである。

- (12) a. 競争馬が一斉にだっと飛び出した。
b. パンダはまるい体でぐるんとでんぐり返し。
c. 電車で隣のおじさんが居眠りしていてゆらりと倒れ込んでくるので困りはてた。
(阿刀田・星野 1995. p.552)

このように、引用要素の「と」と「動詞用法」の有無という基準をもとにして考えると、(12)に挙げた「だっ」「ぐるん」「ゆらり」が第一段階に入るわけである。

しかしながら、「にこっとした」「ちゃんとした」のような「と」との義務的な付加が見られると同時に、「する」動詞と共起するオノマトペはどうしたほうがよいだろうか。本稿では、「にこっとした」「ちゃんとした」のようなオノマトペは「する」動詞と共起できるため、これらを第三段階「動詞用法があるオノマトペの段階」に入れることにする。「動詞用法」を基準に選んで考えると、非反復形の擬情語のほとんど全てが第三段階に入ることになる。なぜならば、非反復形の擬情語の大半が「する」動詞と共起できるからである。

- (13) a. かつとしたら何をするかわからない人だから怒らせないように話してくださいよ。
(阿刀田・星野 1995. p.47)
b. 息子が自分の部屋で静かにしていたので、てっきり一生懸命勉強しているものと思いき、オヤツを持って行ってやったら、マンガの本を読んでいた。むかつとして「今日はオヤツ無しよ」と、つい大人気ないことを言ってしまった。
(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.777)

第二段階を②「引用要素を随意的に伴い、動詞用法がないオノマトペの段階」のように設定した。「と」を随意的に伴い、「する」動詞との共起がみられないオノマトペとしては、

形態的な面から次のものが挙げられる。それは「する」動詞と共起しない非反復形の「CVQCVri」「CVNVCVri」のもと、反復形の1モーラと2モーラのオノマトペである。これらは文中では、様態副詞・程度副詞・頻度副詞として機能することが多い。このような基準に対応するオノマトペにおいては、擬態語が多く見られるが、擬情語は「する」動詞と共起して用いられる比率が高いため、数的に限定されている。以下のものは第二段階に属する典型的なオノマトペの例である。

(14) a. あたしは、ぐっすり眠っていて、揺れたことを知らなかったのだ。

(Takehi, Tamori, Schourup 1996. p.486)

b. 予習をしていないと漢文はすらすら読めない。

(阿刀田・星野 1995. p.244)

最後に、第三段階である。これを「動詞用法があるオノマトペの段階」と設定した。それは、「がんがんする」「にこにこする」のような「と」が通常に挿入されないものと、「かっとする」「にこっとする」「ちゃんとする」のような「と」の除去が許されないものである。日本語オノマトペを考察した結果、擬態語は「する」動詞を伴う比率が34%であるが、擬情語は58%であるということが明らかになった。この結果から、擬情語の大半が第三段階に属し、より語彙化が進んでいることが分かる。

次に、カザフ語の擬態語・擬情語について述べる。カザフ語の擬態語・擬情語のほとんど全てが助動詞 *ету /etu/*・*қағу /qaghu/*・*болу /bolu/*などと共起し、動詞的な役割を果たすことができる。(17a)は助動詞 *ету /etu/*、(17b)は助動詞 *қағу /qaghu/*、(17c)は助動詞 *болу /bolu/*の例である。また、(17)は擬態語、(18)は擬情語の例である。

(17) a. Ол {жымың-жымың/жымың} етті.

ol {*zhiming-zhiming/zhiming*} etti.

彼が {*にやにや/にやっ*} とした。

b. Бала {томпаң-томпаң/томпаң} қақты.

bala {*tompang-tompang/tompang*} qaqtı.

子供が {*よちよち*} した。

c. Көйлегі дал-дал болды.

köjlegi *dal-dal boldı*.

シャツが *めちやめちや* になった。

(18) Жүрегім {лүп-лүп/лүп} етті.

Zhüregim {*lüp-lüp/lüp*} etti.

心臓が {*どきどき/どきっ*} とした。

以上の例から分かるように、反復形か非反復形かに関係なく擬態語・擬情語は助動詞 *ety /etu/*・*кағы /qaghu/*・*болу /bolu/*を伴い、動詞の役割を果たしている。これらのものには動詞用法があるため、カザフ語の擬態語・擬情語は殆ど全てが第三段階に属すると断定する。

5. まとめ

以上のことを踏まえながら、次のことが言える。両言語オノマトペの語彙化の程度を「引用性」と「動詞用法」を基準にして測定すると、日本語オノマトペの広義レベルの擬音語と擬態語の間には大きな差異が明らかになり、擬音語より擬態語の方が語彙化が進んだと分かる。日本語と異なってカザフ語の擬音語・擬態語の間には大きな差異が見られず、いずれにも動詞用法が見られるため、比較的同じレベルにあると推測する。このことを次のように示すことができる。

図 26 日本語とカザフ語のオノマトペの語彙化の段階

	日本語オノマトペ				カザフ語オノマトペ			
	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語	擬声語	擬音語	擬態語	擬情語
臨時語ないしそれに近いものの段階	-----							
{(+引用要素／(-)動詞用法) 第一段階	+	+	+	+	+	-	-	-
{(-)引用要素／(-)動詞用法) 第二段階	+	+	+	+	-	-	-	-
{(-)引用要素／(+動詞用法) 第三段階	-	-	+	+	+	+	+	+
一般語彙と区別されなくなった段階	-----							

第9章 結語

本章は、本研究のまとめである。以下では、オノマトペの範疇化にに触れてから、本研究の結論を述べる。

1. 範疇化の問題

1.2 日本語のオノマトペ

第2章では言及しているように、オノマトペは、形態（音）と意味（イメージ）が何らかの形で結びついており、この点で一般語彙と異なっている存在であるとよく言われている。本節では、日本語とカザフ語におけるオノマトペが一般語彙から区別できるほどの語彙層を形成しているかどうかということについて述べる。

本研究では、両言語オノマトペを形態・意味・統語的な側面から考察した結果、日本語オノマトペは一般語彙から形態的な側面から見て区別することが出来るが、意味・統語的用法では明確な形で区別していないと言えよう。まず形態的な側面である。

日本語オノマトペにおいては、構成要素の「挿入」「付加」ないし語基の「反復」ということによって派生過程が行われる。促音/Q/・撥音/N/の「挿入」は、「とつても」「すつごーい」「真ん丸」「すんごい」から窺えるように、一般語彙に見られることから必ずしもオノマトペを特徴付けるものではないと言えよう。しかし、/Q/・/N/・/ri/・/i/の「付加」は、オノマトペのみに起こり、一般語彙には通常に見られない現象である（「*人つ」「*人ん」「*人り」；「*赤いっ」「*赤いん」「*赤いり」；「*食べるっ」「*食べるん」「*食べるり」）。また「反復」は、一般語彙に見られる現象であってそれ自体はオノマトペだけのパターンではないが、いくつかの特徴によって一般語彙から区別される。その特徴の一つは、意味的な面で、一般語彙の反復の意味は「複数」ないし「強調」であるのに対し、オノマトペの反復は、音や動作の「繰り返し」ないし「連続」を表す点である。もう一つは、一般語彙は「人々」「山々」などのように、一回のみの反復しか可能でないのに対し、オノマトペ語彙はそれ以上の反復した形態が可能である（「ころころころと転がった」）。さらに、一般語彙からオノマトペを区別する基準としては、連濁現象が挙げられる。つまり、反復形の一般語彙は「人々」/hito-bito/、「国々」/kuni-guni/のように連濁を受けるが、反復形のオノマトペは「*かちやがちや」/katya-gatya/、「*ころごろ」/koro-goro/のように連濁を受けることはない。このような形態的な特徴によってオノマトペは一般語彙と区別されていると言えよう。

次は統語的な面である。日本語オノマトペには「する」動詞との共起と「一つく」「一めく」「一ける」などの接辞の付加も見られる。しかしながら、これらは一般語彙に幅広く用

いられる要素であるため、オノマトペを特徴付けるものではない。オノマトペは副詞として機能する場合は、助詞「と」及び「に」を多く伴うことがある。しかし、これらの助詞は「赤々と燃える」「きれいになる」に見られるように、非オノマトペと用いられることから一般的な文法事項であると言える。意味的な面からも、オノマトペを区別する特異な特徴は見られない。

1.2 カザフ語オノマトペ

カザフ語オノマトペを考察した結果、一般語彙から区別される特徴がいくつか明らかになった。まず、形態的な面である。カザフ語オノマトペにおいては、語末に付加する接辞と反復によって派生過程が行われる。接辞「閉鎖音」-/q/・/k/、「鼻音」-/ng/、「ふるえ音」-/r/は、жалтақ /zhaltaq/, бортаң /bortang/, дабыр /dabır/のように、オノマトペの語基の後ろに付いて、一般語彙に見られないものである。更に、接辞「閉鎖音」-/l+q/・/l+k/及び「鼻音」-/l+ng/は、ыржалақ /ırzhalaq/, далбалаң /dalbalang/のように語基の後ろに付加する。これらは、一般語彙に見られない接尾辞であるため、カザフ語オノマトペの特有の特徴であると言ってよいだろう。次は反復である。カザフ語オノマトペの反復を、前節で言及したように、一般語彙から意味的な観点から見て区別することができる。カザフ語の反復形のオノマトペと反復形の一般語彙との大きな相違点としては、母音・子音交換の違いが挙げられる。オノマトペの反復の場合は、салп-сүлп /salp-sulp/のように、第1語基の母音 a /a/が第2語基の母音 ʏ /u/に交換することがある。また、күлдір-гүлдір /küldir-güldir/のように、第1語基の無声閉鎖音 к /k/が第2語基の有声閉鎖音 г /g/などと交換する場合も多い。一般語彙の反復の場合は、このような現象が観察されない。もう一つは，гу де гу /gu de gu/から分かるように、オノマトペの場合は、繰り返される語基の間に де /de/ないし да /da/という要素を挿入することが可能である。これは一般語彙の反復にはみられない現象である。

第7章で見たように、カザフ語オノマトペは動詞的用法では助動詞 ету /etu/・қағу /qaghu/・болу /bolu/を伴うことがある。しかしながら、このような用法はオノマトペだけに限ったものではないし、一般語彙に幅広く用いられている。例えば、助動詞 ету /etu/の場合は арман ету /arman etu/「夢を見る」、еңбек ету /engbek etu/「頑張る」、助動詞 қағу /qaghu/の場合は қанат қағу /qanat qaghu/「羽をはばたく」、助動詞 болу /bolu/の場合は жігіт болу /zhigit bolu/「成人になる」、күлкі болу /külki bolu/「笑物になる」などである。

このように、両言語のオノマトペは、すくなくとも、形態的な面においては一般語彙と明確な形で区別することができる。意味・統語的な面ではオノマトペ語彙を明確に特徴付ける難しいようである。

2. まとめ

ここまで第1章から第9章に及んで、日本語とカザフ語のオノマトペについて見てきた。この議論を通じて、次の2つのことが本研究の最も重要な結論として挙げられる。

- ・ 「擬声語」「擬音語」「擬態語」「擬情語」それぞれはいくつかの形態・意味・統語的な諸特徴を持つ故に、それぞれを別の下位類として区別するべきである。
- ・ 形態・意味・統語的な側面から見てオノマトペの中では、擬声語は最も語彙度が低いものであるのに対し、擬情語は最も高いものである。語彙度は、擬声語・擬音語・擬態語・擬情語という順番で高くなっていくということである。

以下、本研究で論じたポイントを章ごとに簡単にまとめ、上の2つの点の結論がどういう流れで得られたのかを確認する。

第4章と第5章では、両言語オノマトペを形態的な面から考察した。ここでは、オノマトペ語彙の形態的体系性をより明確に示すために、オノマトペから「語基」と「構成要素」を抽出して分析を行った。

日本語オノマトペは、2つの基本語基、1モーラの/CV/と2モーラの/CVCV/と、/Q/・/N/・/ri/・/i/・/R/または語基全体の反復という構成要素から成っている。下位類の中では「擬音語」「擬態語」「擬情語」は2モーラ語基の語数が7割以上にのぼって高い割合を占めているのに対し、「擬声語」は逆で1モーラ語基の語数は8割、2モーラはおよそ2割であるという相違があることが明らかになった。この結果からも「擬声語」は比較的単純で、他の下位類から区別すべきであることが分かる。「構成要素」の場合も、下位類の間に大きな相違点が存在することが明らかになった。その相違点の一つは、次のことである。擬声・擬音のオノマトペには長音/R/を伴うものの比率が高いが、語中に促音/Q/・撥音/N/を伴うものの比率が極めて少ない。これに対し、擬態・擬情のオノマトペには/R/を伴うものが少数で語中に/Q/・/N/を伴うものの比率が圧倒的に多い。そして、その中で/CVQCVRi/・/CVNCRi/といったタイプの殆どすべてが擬態語に観察される。

カザフ語オノマトペを6つの語基に分析することが通常であるが、その中では/CVC/と/CVCC/語基が最も多い。カザフ語の下位類の間では、語基に関しては相違が見られないが、構成要素に関しては大きな相違点がある。それは次のことである。擬声・擬音オノマトペは接尾辞「ふるえ音」-r/のみを伴うのに対し、擬態オノマトペは接尾辞「閉鎖音」-q/・/k/、「鼻音」-ng/、「閉鎖音」-l+q/・/l+k/、「鼻音」-l+ng/を伴う。また、擬態語は他の下位類に比べて接尾辞を伴う比率が最も高く77%に至る。両言語オノマトペを形態的な面から考察した結果、次のことが言える。ある音を模倣する擬声・擬音オノマトペが形態的な面からみて、比較的単純であるのに対し、様子・状態を描写する擬態・擬情オノマトペはより多く派生過程を受けて形態的により安定しているということである。

第 6 章は意味的な面である。ここでは、オノマトペにおける語彙度を「多義性」という観点から探った。その結果、両言語オノマトペにおいても、擬声語から擬情語へのような順番でオノマトペが多義的になっていくという傾向が明らかになった。また、両言語の擬音オノマトペは 1 つ形式では最大 2 つの擬音の意味を持つことができ、その擬音の意味の間には関連がないことが通常であるが、それと異なって擬態オノマトペは 5 つの意味まで持つことができ、その意味の間には何らかの関連があるということが分かった。このことから、擬音オノマトペは具象的であるのに対し、擬態オノマトペは抽象性が高い存在であると推測した。つまり、抽象性が高いことは語彙度が高いというふうに言い換えることができる。意味的考察ではもう一つの興味深いことが分かった。それは、意味拡張は具象から抽象へ一方向的に進み、つまり、多くの場合は擬音の意味から擬態・擬情の意味に拡張するということである。ここでは擬情語が抽象性の最も高いものであるということは、擬情語の性質にあり、外側の様態を表す擬態語と異なって人の内面心理を表すからであろう。擬声語は最も具象的なものであっても、擬声の意味が擬態・擬情の意味に拡張する例がほとんどない。それは、擬声語は最も特定化されているからであろう。以上のことを次の図のように示すことができる。

図 27 オノマトペにおける意味拡張の経路



第 7 章は統語的な面である。この章で見たように、日本語とカザフ語のオノマトペは動詞と副詞的な用法が最も多い。日本語オノマトペは動詞的な用法では「する」動詞を伴うものが多く見られる。このような「する」動詞と用いられるオノマトペは擬態オノマトペだけにあり、大きく 5 つに分類することができる。それは、①「行為・行動的なもの」、②「動作・振動的なもの」、③「状態的なもの」、④「心理・感情的なもの」、⑤「生理・感覚的なもの」である。また副詞的な用法では、日本語オノマトペを助詞「と」との共起という観点から考察を行った。その結果、擬声語・擬音語は助詞「と」をより高い比率で伴うということと、これと反対に、擬態語・擬情語においては「と」を伴わないものが 1 割程度存在するということが明らかになった。このような結果は、擬声語・擬音語は擬態語・擬情語と比べて、文外独立的に用いられやすいものであり、文中で起こるときは引用的に用いられるということで説明されるであろう。そのときの「と」の付加は引用用法と直接関わっている。カザフ語オノマトペを考察した結果、動詞的な用法が最も多くて、殆どすべてのオノマトペが助動詞 *ety /etu/* (「する」) と共起できるということと、また助動詞 *қағу /qaghu/* (「うつ」), *болу /bolu/* (「なる」), *беру /beru/* (「あげる」) は擬態語とのみ共起で

きるということが明らかになった。副詞的な用法が反復形のものだけに見られるが、非反復形は通常に助動詞を義務的に伴って動詞として働く。

第 8 章では、両言語オノマトペの語彙化の程度について議論した。オノマトペの語彙化の程度を測定するために、第 7 章で見えてきた両言語オノマトペの動詞と副詞的な用法を基準にし、つまり、動詞的用法（日本語の場合「する」動詞、カザフ語の場合 *ety /etu/*, *қағу /qaghu/*, *болу /bolu/*, *беру /beru/* 助動詞との共起が見られるかどうか）と、引用性（引用として括弧内に入るか、引用を示す助詞の「と」をとるかかどうか）という 2 つの基準を扱った。この 2 つの基準の基に以下の 3 つの段階を設定した。

- ・ ①引用要素を義務的に伴うオノマトペの段階
- ・ ②引用要素を随意的に伴い、動詞用法がないオノマトペの段階
- ・ ③動詞用法があるオノマトペの段階

両言語オノマトペの語彙化の程度を「引用性」と「動詞用法」を基準にして測定すると、日本語オノマトペの広義レベルの擬音語と擬態語の間には大きな差異が明らかになり、擬音語より擬態語の方が語彙化が進んだと分かる。これと反対に、カザフ語の擬音語・擬態語の間には大きな差異が見られず、いずれにも動詞用法があるため、比較的同じレベルにあると推測する。

参考文献

【辞書】

[日本語と英語によるもの]

- 天沼寧（編）（1974）『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
- 浅野鶴子（編）（1978）『擬音語・擬態語辞典』東京：角川書店
- 阿刀田稔子・星野和子（1995）『擬音語擬態語使い方辞典』創拓社
- Chang, Andrew C. (2000) 『〈和英〉擬態語・擬音語分類用法辞典』 「A Thesaurus of Japanese Mimesis and Onomatopoeia : Usage by categories」大修館書店
- 福井芳男（1980）『ラールス言語学用語辞典』大修館書店
- 五味太郎（1989）『英語人と日本語人のための日本語擬態語辞典』ジャパントイムズ
- 飛田良文・浅田秀子（2002）『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 飯沼英三（1994）『カザフ語辞典』
- Takehi, Hisao, Ikuhiro Tamori and Lawrence Schourup (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- 小川芳男（1982）『日本語教育辞典』大修館書店
- 小野正弘（編）（2007）『日本語オノマトペ辞典』小学館
- 田中春美（1988）『現代言語学辞典』成美堂
- 山口仲美（2003）『暮らしのことば擬音・擬態語辞典』講談社

[カザフ語とロシア語によるもの]

- Болғанбаев Ә., Дәулетқұлов Ш. (1999) Қазақ тілінің сөздігі. «Дайк-пресс». Алматы.
- Бұралқыұлы М. (2007) Қазақ тілінің түсіндірме сөздігі. «Мектеп». Алматы.
- Евгеньева А.П. (1981) Словарь русского языка. «Русский язык». Москва.
- Кенесбаев І. (1977) Қазақ тілінің фразеологиялық сөздігі. «Ғылым». Алматы.
- Сыздықова Р. Г., Хусаин К. Ш. (2001) Казахско—русский словарь. «Дайк-пресс». Алматы.
- Тихонов А.Н. (2003) Словообразовательный словарь русского языка. «Русский язык». Москва.

【著書・文】

[日本語と英語によるもの]

- 秋元美晴 (2001) 「日本語教育におけるオノマトペの位置づけ」『日本語学』26.6:24-34.
- 有賀千佳子 (2001) 「オノマトペを通して、語彙の学習・教育について考える」『日本語学』26.6:65-73.
- Brocholos, Holmer (1990) “A Short Review of Korean Onomatopes”, in *Linguistic Fiesta: Festschrift for Professor Hisao Kakehi's Sixtieth Birthday*, 209-212, Tokyo: Kuroshio.
- 藤田保幸 (1987) 「引用された言葉と擬声・擬態語とー「引用」の位置付けのために」『詞林』2:52-67.
- Fukuda, Hiroko (2003) *Jazz Up Your Japanese with Onomatopoeia*, Kodansha.
- 呉川 (2005) 『オノマトペを中心とした中日対照言語研究』白帝社
- Goddard, Cliff (1998) *Semantic analysis: a practical introduction*, Tokyo: Oxford University Press.
- Hamano, Shoko (1994) “Palatalization in Japanese sound symbolism”, in *Sound symbolism*, 148-161, Cambridge University Press.
- Hamano, Shoko (1998) *The Sound – Symbolic System of Japanese*, Tokyo: Kuroshio.
- 羽佐田理恵 (2005) 「副詞の視点から見た感情を表す音象徴語ーその分析過程から導かれた問題点への取り組みー」『副詞的表現をめぐってー対照研究ー』175-211. ひつじ書房
- 長谷川清 (2000) 『ことばへの旅 - 火の世界と音象徴』三友社出版
- Herlofsky, William J. (1990) “Translating the Myth: Problems with English and the Japanese Imitative Words”, in *Linguistic Fiesta: Festschrift for Professor Hisao Kakehi's Sixtieth Birthday*, 213-228, Tokyo: Kuroshio.
- Herlofsky, William J. (2001) 「マンガで学ぶ英語のオノマトペ」『言語』30.9:78-79
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 日向茂男 (1993) 「オノマトペの魅力」『言語』22.6:20-25.
- 日向茂男 (1994) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 14 擬音語・擬態語』荒竹出版
- 日向茂男 (1998) 「擬音語・擬態語」『講座日本語と日本語教育ー日本語の語彙・意味ー』121-144. 明治書院
- Hinton, Leanne, Johanna Nichols and John J. Ohala (1994) *Sound symbolism*, Cambridge University Press.
- 庵功雄 (2001) 『新しい日本語学入門 - ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
- 石黒広昭 (1993) 「オノマトペの「発生」」『言語』22.6:26-33.
- 伊藤理英 (2002) 「オノマトペに関する考察ー擬音語と擬態語間の共感覚的比喻表現について」『日本エドワード・サピア協会研究年報』16:53-66.
- 伊藤理英 (2004) 「中古「～メク」におけるオノマトペの比喻による意味拡張について」『人間文化論叢』7:301-314.

- 泉邦寿 (1976) 「擬声語・擬態語の特質」『日本語の語彙と表現』(鈴木孝雄編) 東京:大修館書店
- Jakobson, Roman (1978) *Six Lectures on Sound and Meaning*, The MIT Press.
- Jakobson, Roman and Linda Waugh (1979) *The Sound Shape of Language*, Indiana University Press.
- Jespersen, Otto (1922) *Language its Nature Development and Origin*, London:George Allen & Unwin LTD.
- ジョーデン, エリノア H. (1986) 「擬声語・擬態語と英語」『日英比較講座』第4巻. 東京:大修館書店
- Kadooka, Ken-Ichi (1995) “Sound Symbolism in English Onomatopoeic Word Forms”, *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences*, 17.1:39-47.
- 角岡賢一 (2001a) 「日本語オノマトペ語彙派生過程における語基」『龍谷大学国際センター年報』10.
- 角岡賢一 (2001b) 「日本語における『かな擬似オノマトペ』」『龍谷紀要』22.
- 角岡賢一 (2003) 「日本語オノマトペ語基の多義性について」『龍谷大学国際センター年報』12.
- 角岡賢一 (2005) 「日本語オノマトペ語彙の交替形語彙分析」『龍谷大学国際センター年報』14.
- 角岡賢一 (2007) 『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版
- Takehi, Hisao (1983) “Onomatopoeic Expressions in Japanese and English”, *Proceedings of the XIIIth International Congress of Linguists*, 913-918.
- 笈壽雄 (1986) 「英語の擬音語・擬態語」『日本語学』7.5:39-46.
- Takehi, Hisao (1987) “Round Table 18 Semantic Investigation of Onomatopoeic Expressions”, *Proceedings of the Fourteenth International Congress of Linguists*, 348-350.
- 笈壽雄 (1993) 「一般語彙となったオノマトペ」『言語』22.6:38-45.
- 笈壽雄 (2001) 「“変身”するオノマトペ」『言語』30.9:28-36.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論一言語と認知の接点一』くろしお出版
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版
- 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』ひつじ書房
- 茅野直子, 秋元美晴, 真田一司 (1995) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ1 副詞』荒竹出版
- 菊池律之 (1998) 「変化の結果を表すニ・トについて」『筑派応用言語学研究』5:29-41. 筑派大学大学院人文・社会学研究科応用言語学コース.

- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15. (金田一春彦編)『日本語動詞の
アスペクト』麦書房. 1976.
- 金田一春彦 (1976) 「コトバの施律」『国語学』5.
- 金田一春彦 (1978) 「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』(浅野鶴子編) 東京：角
川書店
- 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13.4.
- 工藤浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』(渡辺実編) 明治書院
- 黒田成幸 (1967) 「促音および撥音について」『言語研究』50.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal
about the Mind*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Lyons, John (1977) *Semantics*, Cambridge University Press.
- 町田健 (2004) 『ソシユールのすべて—言語学でいちばん大切なこと—』東京：研究社
- Malkiel, Yakov (1990) “Diachronic Problems in Phonosymbolism”, *Edita and Inedita,
1979-1988, Volume I*, University of California, Berkeley.
- Malkiel, Yakov (1990) “Regular sound development, phonosymbolic orchestration,
disambiguation of homonyms”, in *Sound symbolism*, 207-221, Cambridge
University Press.
- 松本治弥, 加藤宏明 (1993) 「「バウワウ」か「ワンワン」か」『言語』22.6:60-67.
- 三上京子 (2001) 「日本語教材とオノマトペ」『日本語学』26.6:36-46.
- 宮地裕 (1978) 「擬音語・擬態語の形態論小考」『国語学』115.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- Murata, Tadao (1990) “AB Type Onomatopes and Reduplicatives in English and
Japanese”, in *Linguistic Fiesta: Festschrift for Professor Hisao Kakehi's Sixtieth
Birthday*, 257-272, Tokyo: Kuroshio.
- 村田忠男 (2001) 「笛はなぜ「ひゃらびー」と鳴らないのか—日英 AB 型オノマトペの音声
条件を中心に—」『言語』30.9:58-63.
- 那須昭夫 (1999) 「重複形オノマトペの強調形態と有標性」『日本語・日本文化研究』9:13-25.
- 那須昭夫 (2001) 「オノマトペの語形成とアクセント」『日本語・日本文化研究』11:9-24.
- 那須昭夫 (2007) 「オノマトペの言語学的特徴—子音の分布と有標性—」『日本語学』
26.6:4-15.
- Newman, Stanley, S. (1933) “Further experiments in phonetic symbolism”, *American
Journal of Psychology*, 45.1:53-75.
- 仁田義雄 (1983) 「結果の副詞とその周辺—語彙論的統語論の姿勢から—」『副用語の研究』
(渡辺実編) 117-136. 明治書院
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 野間秀樹 (2001) 「オノマトペと音象徴」『言語』30.9:12-18.

- 大津由紀雄, 波多野誼余夫 (2004) 『認知科学への招待—心の研究のおもしろさに迫る—』
研究社
- 大坪併治 (2006) 『擬聲語の研究』 風間書房
- 苧阪直行 (1986) 「擬音語・擬態語の感覚尺度(I)—連想順位表に基づく分析—」『追手門学
院大学紀要』 20:21-62.
- 苧阪直行 (1999) 『感性のことばを研究する—擬音語・擬態語に読む心のありか』 新曜社
- 苧阪直行 (2001) 「ことばと感覚—擬音語・擬態語からみるクオリアの探究—」『言語』
30.9:70-77.
- 苧阪直行 (2007) 「オノマトペの脳科学」『日本語学』 26.6:16-23.
- Oswalt, Robert L. (1994) “Inanimate imitatives in English”, in *Sound symbolism*,
293-308, Cambridge University Press.
- 彭 飛 (2001) 「ノンネイティブから見た日本語のオノマトペの特徴」『日本語学』26.6:48-56.
- Sapir, Edward (1929) “A Study of Phonetic Symbolism”, *Journal of Experimental
Psychology*, 12:25-29.
- Sapir, Edward (1963) *Language*, Rupert Hart-Davis, London.
- スコウラップ, ローレンス (1993) 「日・英オノマトペの対照研究」『言語』 22.6:48-55. 大
修館書店
- 紫谷方良 (1978) 『日本語の分析：生成文法の方法』 東京：大修館書店
- 城田俊 (1998) 『日本語形態論』 ひつじ書房
- 鈴木孝夫 (1962) 「音韻交換と意義分化の関係について—所謂清濁音の対立を中心として—」
『言語研究』 42:23-30. 東京：三省堂
- 高橋悦子 (2001) 「日本語学習者のための擬音語・擬態語サイト」『日本語学』 26.6:57-64.
- 高橋太郎 (1994) 『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』 むぎ書房
- 武内道子 (2005) 『副詞的表現をめぐって—対照研究—』 ひつじ書房
- Tamori, Ikuhiro (1990) “Expressiveness of Japanese and English Onomatopoeic
Expressions”, in *Linguistic Fiesta: Festschrift for Professor Hisao Kakehi's Sixtieth
Birthday*, 287-306, Tokyo: Kuroshio.
- 田守育啓 (1993) 「日本語オノマトペの音韻・形態的特徴」『言語』 22.6:70-78.
- 田守育啓 (2001) 「日本語オノマトペの語形成規則」『言語』 30.9:42-49.
- 田守育啓 (2002) 『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』 東京：岩波書店
- 田守育啓, ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペ：形態と意味』 東京：くろしお
出版
- 丹野眞智俊 (2005) 『オノマトペ（擬音語・擬態語）を考える—日本語音韻の心理学的研究
—』 あいり出版
- 丹野眞智俊 (2007) 『オノマトペ（擬音語・擬態語）をいかす—クオリアの言語心理学—』
あいり出版

- Tarte, Robert D. and L. S. Barritt (1971) "Phonetic Symbolism in Adult Native Speakers of English: Three Studies", *Language and Speech*, 17:158-168.
- Tarte, Robert D. (1974) "Phonetic Symbolism in Adult Native Speakers of Czech", *Language and Speech*, 17:87-94.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』2. 東京：くろしお出版
- Tsujimura, Natsuko (2001) "A constructional approach to mimetic verbs", in *Constructional Approaches to Language*, John Benjamins.
- Waida, Toshiko (1984) "English and Japanese Onomatopoeic Structures", in *Bulletin of Osaka Women's University, Studies in English*, 36.
- Whorf, Benjamin Lee (1941) "Language, Mind, and Reality", in *Language, Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, 246-270, New York: John Wiley & Sons.
- 山口仲美 (1989) 『ちんちん千鳥のなく声は—日本人が聴いた鳥の声—』大修館書店
- 山口仲美 (2001) 「擬音語・擬態語の変化」『日本語史研究の課題』東京：武蔵野書院
- 吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」(金田一春彦編)『日本語動詞のアスペクト』麦書房. 1976.
- 吉川武時 (1999) 『日本語文法入門』アルク
- 吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』東京：研究社

[カザフ語とロシア語によるもの]

- Ақанова Д.Х. (2002) Ресми-іскери қазақ тілі. «Арман».
- Аханов К. (1962) Тіл біліміне кіріспе. Алма-ата.
- Ашмарин Н. И. (1925) Подражание в языках среднего Поволжья. Баку.
- Ашмарин Н. И. (1928) О морфологических категориях подражаний в чувашском языке. Казань.
- Әмір Р., Әмірова Ж. (2000) Жай сөйлем синтаксисі. Алматы.
- Баскаков Н. А. (1952) Каракалпакский язык. *Фонетика и морфология*. Стр.293, Москва.
- Воронин С. В. (1982) Основы фоносемантики. Ленинград.
- Имашева С. (1965) Словообразование от подражательных слов. «Известия». Акад Наук Каз. ССР. Алма-ата.
- Исхаков А. И. (1951) О подражательных словах в казахском языке. *Тюркологический сборник*. Алма-ата.
- Кайдаров А. Т. (1986) Структура односложных корней и основ в казахском языке. «Наука». Алма-ата.

- Караев М.Э. (1993) Қазақ тілі. Алматы.
- Катембаева Б. Ш. (1965) Подражательные слова в казахском языке. «Автореферат». Алма-ата.
- Катембаева Б. Ш. (1974) Еліктеу сөздерді оқыту. “Мұғалімдерге, студенттерге арналған көмекші құрал.” «Мектеп». Алма-ата.
- Кенесбаев С.К. (1969) Фонетика казахского языка. Алма-ата.
- Кононов А. Н. (1960) Грамматика современного узбекского литературного языка. Москва.
- Кудайбергенов С. (1957) Подражательные слова в киргизском языке. Фрунзе.
- Левицкий В. В. (1983) Семантика и фонетика. “Пособие, подготовленное на материале экспериментальных исследований.” Черновцы.
- Мырзабеков С. (1993) Қазақ тілінің фонетикасы. “Оқу құралы.” Алматы.
- Сарыбаев Ш. Ш. (1960) Еліктеуіш сөздер. Алма-ата.
- Сарыбаев Ш. Ш. (1970) Еліктеуіш сөздер. “Методикалық кеңес, және бақылау пысықтау жаттығулары.” Алма – ата.
- Сыздық Р. (2000) Қазақ тілінің анықтағышы. Астана.
- Хусаинов К. Ш. (1987) Звукосимволизм в языке и методы его изучения. «Хабаршы». Акад. Наук Каз. ССР. Алма-ата.
- Хусаинов К. Ш. (1988a) Звукоизобразительность в казахском языке. Алма-ата.
- Хусаинов К. Ш. (1988b) Звукоизобразительность номинации в казахском языке. “Автореферат” . Алма-ата.
- Ыскаков А. (1948) Еліктеу сөздер тұралы. «Халық мұғалімі». Алма-ата.

[資料編]

凡例

1. 日本語とカザフ語のオノマトペの情報を提示する。
2. 両言語オノマトペそれぞれを「単義語」「単一多義語」「多義混成語」のように分ける。
3. 提示するオノマトペの情報は以下の図の通りである。

No.	オノマトペ	派生形	語基	構成要素	統語	VSMP
1	からんからん	karaN-karaN	kara	N, redup		S
2	Мырс-мырс	mırs-mırs	mırs	redup	ery	V

4. [統語]では、日本語の場合は「する」動詞，カザフ語の場合は助動詞 *ery /etu/*, *қағу /qaghu/*, *болу /bolu/*, *беру /beru/*との共起を示す。
5. [VSMP]では、オノマトペの下位類を示す。[V]は擬声語 (voice), [S]は擬音語 (sound), [M]は擬態語 (mimetic), [P]は擬情語 (psychomimes) を表す。

日本語オノマトペのデータベース-----	3
【単義語】-----	4
【単一多義語】-----	33
【多義混成語】-----	41
カザフ語オノマトペのデータベース-----	53
【単義語】-----	54
【単一多義語】-----	84
【多義混成語】-----	89

[資料 I]

日本語オノマトペのデータベース

【単義語】

擬声語						
No.	オノマトペ	派生形	語基	構成要素	統語	VSMP
1	あーあ	aR·a	a	redup, R		V
2	あーあー	aR·AR	a	redup, R		V
3	あーんあーん	aRN·aRN	a	redup, R, N		V
4	あっはあっは	aQha·aQha	ha	redup, prefix(a), infix(Q)		V
5	あっはっはー	aQ·haQ·haR	ha	redup, prefix(a), R, Q		V
6	あっはっはっは	aQ·haQ·haQ·ha	ha	redup, prefix(a), Q		V
7	あはあは	aha·aha	ha	redup, prefix(a)		V
8	あはは	a·ha·ha	ha	redup, prefix(a)		V
9	いひひ	i·hi·hi	hi	redup, prefix(i)		V
10	うー	uR	u	R		V
11	うーっ	uRQ	u	R, Q		V
12	うっ	uQ	u	Q		V
13	うえーん	ueRN	en	prefix(u), R, N		V
14	うおーうおー	uoR·uoR	o	redup, prefix(u), R		V
15	うおーっ	uoRQ	o	prefix(u), R, Q		V
16	うおーん	uoRN	o	prefix(u), R, N		V
17	うふ	uhu	hu	prefix(u)		V
18	うふふ	uhu·hu	hu	redup, prefix(u)		V
19	うわーん	uwaRN	wa	prefix(u), R, N		V
20	えっさえっさ	eQsa·eQsa	esa	redup, infix(Q)		V
21	えへへ	e·he·he	he	redup, prefix(e)		V
22	えんえん	en·en	en	redup		V
23	えーんえーん	eRn·eRn	en	redup, R		V
24	おいおい	oi·oi	oi	redup		V
25	おぎゃー	ogyaR	gya	prefix(o), R		V
26	おぎゃーおぎゃー	ogyaR·ogyaR	gya	redup, prefix(o), R		V
27	おほほ	o·ho·ho	ho	redup, prefix(o)		V
28	おんおん	on·on	on	redup		V

29	かー	kaR	ka	R		V
30	がー	gaR	ga	R		V
31	かーかー	kaR-kaR	ka	redup, R		V
32	がやがや	gaya-gaya	gaya	redup		V
33	ぎゃー	gyaR	gya	R		V
34	きゃーっ	kyaRQ	kya	R, Q		V
35	ぎゃーっ	gyaRQ	gya	R, Q		V
36	ぎゃっ	gyaQ	gya	Q		V
37	きゃっきゃっ	kyaQ-kyaQ	kya	redup, Q		V
38	きゃん	kyaN	kya	N		V
39	きゃんきゃん	kyaN-kyaN	kya	redup, N		V
40	くすくす	kusu-kusu	kusu	redup		V
41	ぐすぐす	gusu-gusu	gusu	redup		V
42	くすっ	kusuQ	kusu	Q		V
43	くすり	kusuri	kusu	ri		V
44	げーげー	geR-geR	ge	redup, R		V
45	げーっ	geRQ	ge	R, Q		V
46	げっ	geQ	ge	Q		V(F)
47	けたけた	keta-keta	keta	redup		V
48	げたげた	geta-geta	geta	redup		V
49	けっけ	keQ-ke	ke	redup, Q		V
50	けっけっけっ	keQ-keQ-keQ	ke	redup, Q		V
51	げぼげぼ	gebo-gebo	gebo	redup		V
52	けらけら	kera-kera	kera	redup		V
53	げらげら	gera-gera	gera	redup		V
54	けーん	keRN	ke	R, N		V
55	こけこっこー	kokekoQkoQ		infix(Q), R		V
56	ごによごによ	gonyo-gonyo	gonyo	redup		V
57	ごほん	gohoN	goho	N		V
58	ごほんごほん	gohoN-gohoN	goho	redup, N		V
59	しー	siR	si	R		V
60	しーしー	siR-siR	si	redup, R		V
61	しーっ	siRQ	si	R, Q		V
62	しっ	siQ	si	Q		V
63	しっし	siQsi	si	redup, Q		V

64	しっしっ	siQsiQ	si	redup, Q		V
65	ちーちー	tiR-tiR	ti	redup, R		V
66	ちちちち	ti-ti-ti-ti	ti	redup		V
67	ちっ	tiQ	ti	Q		V
68	ちっちっ	tiQ-tiQ	ti	redup, Q		V
69	ちゅー	tyuR	tyu	R	する	V
70	ちゅっ	tyuQ	tyu	Q		V
71	ちゅっちゅっ	tyuQ-tyuQ	tyu	redup, Q		V
72	ちゅんちゅん	tuyN-tuyN	tyu	redup, N		V
73	ちんちろりん	tintirorin				V
74	にゃーにゃー	nyaR-nyaR	nya	redup, R		V
75	にゃーっ	nyaRQ	nya	R, Q		V
76	はーはー	haR-haR	ha	redup, R		V
77	はーっ	haRQ	ha	R, Q		V
78	はっはっはっ	haQ-haQ-haQ	ha	redup, Q		V
79	ははは	ha-ha-ha	ha	redup		V
80	ひそひそ	hiso-hiso	hiso	redup		V
81	びーちく	piRtiku		R		V
82	びーちくばーちく	piRtiku-paRtiku		redup, R		V
83	びーちくびーちく	piRtiku-piRtiku		redup, R		V
84	ひーひー	hiR-hiR	hi	redup, R		V
85	ひひひ	hi-hi-hi	hi	redup		V
86	ひよひよ	hiyo-hiyo	hiyo	redup		V
87	びよびよ	pyo-pyo	pyo	redup,		V
88	ひひーん	hihiQn		R		V
89	ひんひん	hiN-hiN	hi	redup, N		V
90	ぷーぷー	puR-puR	pu	redup, R		V
91	ふがふが	huga-huga	huga	redup	する	V
92	ぶっ	buQ	bu	Q		V
93	ふふっ	hu-huQ	hu	redup, Q		V
94	ふふふ	hu-hu-hu	hu	redup		V
95	ふふん	hu-huN	hu	redup, N		V(F)
96	ふむふむ	humu-humu	humu	redup		V
97	へっへっへっ	heQ-heQ-heQ	he	redup, Q		V
98	へへへ	he-he-he	he	redup		V

99	ほっほっほ	hoQ-hoQ-ho	ho	redup, Q		V
100	ほーほー	hoR-hoR	ho	redup, R		V
101	ほほほ	ho-ho-ho	ho	redup		V
102	めーめー	meR-meR	me	redup, R		V
103	わっはっはっ	waQ-haQ-haQ	ha	redup, prefix(wa), Q		V
104	わはは	wa-ha-ha	ha	redup, prefix(wa)		V
105	わーんわーん	waRN-waRN	wa	redup, R, N		V
擬音語						
106	がーっ	gaRQ	ga	R, Q		S
107	かーん	kaRN	ka	R, N		S
108	がーん	gaRN	ga	R, N		S
109	かーんかーん	kaRN-kaRN	ka	redup, R, N		S
110	かさこそ	kasa-koso	kasa, koso	redup		S
111	がさごそ	gasa-goso	gasa, goso	redup		S
112	かさっ	kasaQ	kasa	Q		S
113	かさり	kasari	kasa	ri		S
114	がさり	gasari	gasa	ri		S
115	かしゃかしゃ	kasya-kasya	kasya	redup		S
116	かしゃっ	kasyaQ	kasya	Q		S
117	かしゃり	kasyari	kasya	ri		S
118	がしゃり	gasyari	gasya	ri		S
119	がしゃん	gasyaN	gasya	N		S
120	かた	kata	kata			S
121	かたかた	kata-kata	kata	redup		S
122	がたくり	gata-kuri	gata, kuri			S
123	かたこと	kata-koto	kata, koto	redup		S
124	がたごと	gata-goto	gata, goto	redup		S
125	かたっ	kataQ	kata	Q		S
126	かたり	katari	kata	ri		S
127	がたり	gatari	gata	ri		S
128	かたりことり	katari-kotori	kata, koto	redup, ri		S
129	かたん	kataN	kata	N		S
130	がたん	gataN	gata	N		S
131	かたんかたん	kataN-kataN	kata	redup, N		S

132	がたんがたん	gataN-gataN	gata	redup, N		S
133	かたんことん	kataN-kotoN	kata, koto	redup, N		S
134	かちーん	katiRN	kati	R, N		S
135	がちーん	gatiRN	gati	R, N		S
136	かちり	katiri	kati	ri		S
137	がちり	gatiri	gati	ri		S
138	がちん	gatiN	gati	N		S
139	かちゃーん	katyaRN	katya	R, N		S
140	かちゃかちゃ	katya-katya	katya	redup	する	S
141	がちゃがちゃ	gatya-gatya	gatya	redup		S
142	かちゃっ	katyaQ	katya	Q		S
143	がちゃっ	gatyaQ	gatya	Q		S
144	かちゃり	katyari	katya	ri		S
145	がちゃり	gatyari	gatya	ri		S
146	かちゃん	katyaN	katya	N		S
147	がちゃん	gatyaN	gatya	N		S
148	がちゃんがちゃん	gatyaN-gatyaN	gatya	redup, N		S
149	がったん	gaQtan	gata	infix(Q), N		S
150	かったんこっとん	kaQtaN-koQtoN	kata, koto	redup, infix(Q), N		S
151	がったんごっとん	gaQtaN-goQtoN	gata, goto	redup, infix(Q), N		S
152	かつーん	katuRN	katu	R, N		S
153	かつっ	katuQ	katu	Q		S
154	がつつ	gatuQ	gatu	Q		S
155	かっつん	kaQtuN	katu	infix(Q), N		S
156	かつん	katuN	katu	N		S
157	がつん	gatuN	gatu	N		S
158	かぽかぽ	kapo-kapo	kapo	redup		S
159	からころ	kara-koro	kara, koro	redup		S
160	からん	karaN	kara	N		S(F)
161	からんからん	karaN-karaN	kara	redup, N		S
162	からんころん	karaN-koroN	kara, koro	redup, N		S
163	がらんがらん	garaN-garaN	gara	redup, N		S
164	がりっ	gariQ	gari	Q		S
165	がん	gaN	ga	N		S
166	ぎーぎー	giR-giR	gi	redup, R		S

167	きーっ	kiRQ	ki	R, Q		S
168	ぎーっ	giRQ	gi	R, Q		S
169	きこきこ	kiko-kiko	kiko	redup		S
170	ぎこぎこ	giko-giko	giko	redup		S
171	きしきし	kisi-kisi	kisi	redup		S
172	ぎしっ	gisiQ	gisi	Q		S
173	きゅっきゅっ	kyuQ-kyuQ	kyu	redup, Q		S
174	きんこんかん	kinkonkan		redup		S
175	ぐーすか	guRsuka		R		S
176	ぐっぐっ	gutu-gutu	gutu	redup		S
177	ごー	goR	go	R		S
178	ごーごー	goR-goR	go	redup, R		S
179	ごーっ	goRQ	go	R, N		S
180	ごーん	goRN	go	R, N		S
181	ごーんごーん	goRN-goRN	go	redup, R, N		S
182	ごくっ	gokuQ	goku	Q		S
183	ごくり	gokuri	goku	ri		S
184	ごくりごくり	gokuri-gokuri	goku	redup, ri		S
185	ごくん	gokuN	goku	N		S
186	ごくんごくん	gokuN-gokuN	goku	redup, N		S
187	ごちごち	goti-goti	goti	redup	する	S
188	こちん	kotiN	koti	N		S
189	ごっくんごっくん	goQkuN-goQkuN	goku	redup, infix(Q), N		S
190	こっつ	kotuQ	kotu	Q		S
191	ごっつ	gotuQ	gotu	Q		S
192	こっとんこっとん	koQtoN-koQtoN	koto	redup, infix(Q), N		S(F)
193	ごっとんごっとん	goQtoN-goQtoN	goto	redup, infix(Q), N		S
194	こっん	kotuN	kotu	N		S
195	ごっん	gotuN	gotu	N		S
196	こっんこっん	kotuN-kotuN	kotu	redup, N		S
197	ごっんごっん	gotuN-gotuN	gotu	redup, N		S
198	ことっ	kotoQ	koto	Q		S
199	ごとっ	gotoQ	goto	Q		S
200	ことり	kotori	koto	ri		S
201	ごとり	gotori	goto	ri		S

202	ことりことり	kotori-kotori	koto	redup, ri		S
203	ごとりごとり	gotori-gotori	goto	redup, ri		S
204	ことん	kotoN	koto	N		S
205	ごとな	gotoN	goto	N		S
206	ごぼごぼ	gobo-gobo	gobo	redup		S
207	こん	koN	ko	N		S
208	さくりさくり	sakuri-sakuri	saku	redup, ri		S
209	ざざっ	za-zaQ	za	redup, Q		S
210	さっくり	saQkuri	saku	infix(Q), ri		S
211	ざぶざぶ	zabu-zabu	zabu	redup		S
212	ざぶっ	zabuQ	zabu	Q		S
213	ざぶり	zaburi	zabu	ri		S
214	ざぶりざぶり	zaburi-zaburi	zabu	redup, ri		S
215	ざぶーん	zabuRN	zabu	R, N		S
216	ざぶん	zabuN	zabu	N		S
217	ざぶんざぶん	zabuN-zabuN	zabu	redup, N		S
218	さやさや	saya-saya	saya	redup		S
219	さわさわ	sawa-sawa	sawa	redup		S
220	ざんぶ	zaNbu	zabu	infix(N)		S
221	じゃーん	zyaRN	zya	R, N		S
222	じゃーんじゃーん	zyaRN-zyaRN	zya	redup, R, N		S
223	じゃきじゃき	zyaki-zyaki	zyaki	redup		S
224	しゃぶしゃぶ	syabu-syabu	syabu	redup		S
225	じゃぶじゃぶ	zyabu-zyabu	zyabu	redup		S
226	じゃぼじゃぼ	zyabo-zyabo	zyabo	redup		S
227	じゃぼーん	zyaboRN	zyabo	R, N		S
228	じゃぼん	zyaboN	zyabo	N		S
229	じゃぼんじゃぼん	zyaboN-zyaboN	zyabo	redup, N		S
230	じゃらん	zyaraN	zyara	N		S
231	じゃらんじゃらん	zyaraN-zyaraN	zyara	redup, N		S
232	じゃん	zyaN	zya	N		S
233	じゅー	zyuR	zyu	R		S
234	じゅーじゅー	zyuR-zyuR	zyu	redup, R		S
235	しゅーっ	syuRQ	syu	R, Q		S
236	じゅーっ	zyuRQ	zyu	R, Q		S

237	じゅっ	zyuQ	zyu	Q		S
238	しゆるしゆる	syuru-syuru	syuru	redup		S
239	しゅんしゅん	syuN-syuN	syu	redup, N		S
240	じよきじよき	zyoki-zyoki	zyoki	redup		S
241	じよりじより	zyori-zyori	zyori	redup		S
242	ずしずし	zusi-zusi	zusi	redup		S
243	ずしりずしり	zusiri-zusiru	zusi	redup, ri		S
244	ずしーん	zusiRN	zusi	R, N		S
245	ずしん	zusiN	zusi	N		S(F)
246	ずしんずしん	zusiN-zusiN	zusi	redup, N		S
247	ずずん	zuzuN	zu	redup, N		S
248	ずでん	zudeN	zude	N		S
249	ずるっ	zuruQ	zuru	Q		S
250	ずるり	zururi	zuru	ri		S
251	ぜーぜー	zeR-zeR	ze	redup, R	する	S
252	ぞりぞり	zori-zori	zori	redup		S
253	ぞりっ	zoriQ	zori	Q		S
254	だーん	daRN	da	R, N		S
255	だぼだぼ	dabo-dabo	dabo	redup	する	S
256	ちくたく	tiku-taku	tiku, taku	redup		S
257	ちゃぶちゃぶ	tyabu-tyabu	tyabu	redup	する	S
258	ちゃぶちゃぶ	tyapu-tyapu	tyapu	redup		S
259	ちゃぼちゃぼ	tyapo-tyapo	tyapo	redup		S
260	ちゃぼん	tyapoN	tyapo	N		S
261	ちゃぼんちゃぼん	tyapoN-tyapoN	tyapo	redup, N		S
262	ちゃらんちゃらん	tyaraN-tyaraN	tyara	redup, N		S
263	ちゃりちゃり	tyari-tyari	tyari	redup		S
264	ちゃりん	tyariN	tyari	N		S
265	ちゃりんちゃりん	tyariN-tyariN	tyari	redup, N		S
266	ちよきちよき	tyoki-tyoki	tyoki	redup		S
267	ちよきん	tyokiN	tyoki	N		S
268	ちよきんちよきん	tyokiN-tyokiN	tyoki	redup, N		S
269	ちよっきんちよっ きん	tyoQkiN-tyoQkiN	tyoki	redup, infix(Q), N		S
270	ちりんちりん	tiriN-tiriN	tiri	redup, N		S

271	ちーん	tiRN	ti	R, N		S
272	ちん	tiN	ti	N		S
273	ちんどん	tiNdoN		N		S
274	でんでん	deN-deN	de	redup, N		S
275	どかーん	dokaRN	doka	R, N		S
276	とくとく	toku-toku	toku	redup		S
277	どくどく	doku-doku	doku	redup		S
278	どしゃどしゃ	dosya-dosya	dosya	redup		S
279	どしん	dosiN	dosi	N		S
280	どしんどしん	dosiN-dosiN	dosi	redup, N		S
281	どすっ	dosuQ	dosu	Q		S
282	どすどす	dosu-dosu	dosu	redup		S
283	どすーん	dosuRN	dosu	R, N		S
284	どすん	dosuN	dosu	N		S
285	どすんどすん	dosuN-dosuN	dosu	redup, N		S
286	どたどた	dota-dota	dota	redup,	する	S
287	どたーっ	dotaRQ	dota	R, N		S
288	どだーっ	dodaRQ	doda	R, N		S
289	どたっ	dotaQ	dota	Q		S
290	どたっどたっ	dotaQ-dotaQ	dota	redup, Q		S
291	どたばた	dota-bata	dota, bata	redup	Sする, Fする	S(F)
292	どたり	dotari	dota	ri		S
293	どたん	dotaN	dota	N		S
294	どたんばたん	dotaN-bataN	dota, bata	redup, N		S
295	どぶどぶ	dobu-dobu	dobu	redup		S
296	どぶーん	dobuRN	dobu	R, N		S
297	どぶん	dobuN	dobu	N		S
298	どぼどぼ	dobo-dobo	dobo	redup		S
299	どぼーん	doboRN	dobo	R, N		S
300	どぼん	doboN	tobo	N		S
301	どやどや	doya-doya	doya	redup		S
302	どーんどーん	doRN-doRN	do	redup, R, N		S
303	どんちゃん	dontyan				S
304	ばきっ	bakiQ	baki	Q		S
305	ばきっ	pakiQ	paki	Q		S

306	ばきばき	baki-baki	baki	redup		S
307	ばさっ	pasaQ	pasa	Q		S(F)
308	ばさり	pasari	pasa	ri		S
309	ばしばし	pasi-pasi	pasi	redup		S
310	ばしっ	pasiQ	pasi	Q		S
311	ばしん	basiN	basi	N		S
312	ばしん	pasiN	pasi	N		S
313	ばしゃばしゃ	basya-basya	basya	redup		S
314	ばしゃばしゃ	pasya-pasya	pasya	redup		S
315	ばしゃっ	basyaQ	basya	Q		S
316	ばしゃっ	pasyaQ	pasya	Q		S
317	ばしゃり	basyari	basya	ri		S
318	ばしゃり	pasyari	pasya	ri		S
319	ばしゃん	basyaN	basya	N		S
320	ばしゃん	pasyaN	pasya	N		S
321	ばしゃんばしゃん	basyaN-basyaN	basya	redup, N		S
322	はたはた	hata-hata	hata	redup		S
323	ばたりばたり	patari-patari	pata	redup, ri		S
324	ばたん	bataN	bata	N		S
325	ばたん	pataN	pata	N		S
326	ばたんばたん	bataN-bataN	bata	redup, N		S
327	ばたんばたん	pataN-pataN	pata	redup, N		S
328	ばちやばちや	batya-batya	batya	redup	する	S
329	ばちやばちや	patya-patya	patya	redup		S
330	ばちやっ	batyaQ	batya	Q		S
331	ばちやっ	patyaQ	patya	Q		S
332	ばちやり	batyari	batya	ri		S
333	ばちやり	patyari	patya	ri		S
334	ばちゃん	batyaN	batya	N		S
335	ばちゃん	patyaN	patya	N		S
336	ばったんばったん	baQtaN-baQtaN	bata	redup, infix(Q), N		S
337	ばらり	parari	para	ri		S
338	ぱりん	pariN	pari	N		S
339	ばーん	baRN	ba	R, N		S
340	ばーん	paRN	pa	R, N		S

341	ぱん	paN	pa	N		S
342	びー	biR	bi	R		S
343	びーっ	biRQ	bi	R, Q		S
344	びーっ	piRQ	pi	R, Q		S
345	びーびー	biR-biR	bi	redup, R		S
346	びーぼー	piR-poR	pi, po	redup		S
347	びーん	biRN	bi	R, N		S
348	びしりびしり	pisiri-pisiri	pisiri	redup, ri		S
349	びしやびしや	pisya-pisya	pisya	redup		S
350	びしやり	bisyari	bisya	ri		S
351	びちやつ	pityaQ	pitya	Q		S
352	びちやびちや	pitya-pitya	pitya	redup		S
353	びちやり	pityari	pitya	ri		S
354	びちよびちよ	bityo-bityo	bityo	redup		S
355	びっ	piQ	pi	Q		S
356	びっびっ	piQ-piQ	pi	redup, Q		S
357	びゅーびゅー	byuR-byuR	byu	redup, R		S
358	びゅーびゅー	pyuR-pyuR	pyu	redup, R		S
359	びゅーん	byuRN	byu	R, N		S
360	びゅーんびゅーん	byuRN-byuRN	byu	redup, R, N		S
361	ひゅっ	hyuQ	hyu	Q		S
362	びゅっ	pyuQ	pyu	Q		S
363	ひゅっひゅっ	hyuQ-hyuQ	hyu	redup, Q		S
364	びゅっびゅっ	pyuQ-pyuQ	pyu	redup, Q		S
365	びゅん	byuN	byu	N		S
366	びゅん	pyuN	pyu	N		S
367	ひゅんひゅん	hyuN-hyuN	hyu	redup, N		S
368	びゅんびゅん	byuN-byuN	byu	redup, N		S
369	びゅんびゅん	pyuN-pyuN	pyu	redup, N		S
370	ぴんぽん	piN-poN	pi, po	redup, N		S
371	ぷーぷー	puR-puR	pu	redup		S
372	ぷーっ	buRQ	bu	R, Q		S
373	ぷーん	buRN	bu	R, N		S
374	ぷーんぷーん	buRN-buRN	bu	redup, R, N		S
375	ぶすり	busuri	busu	ri		S

376	ふつふつ	hutu-hutu	hutu	redup		S(F)
377	ぶつり	buturi	butu	ri		S(F)
378	ぷちぷち	puti-puti	puti	redup		S
379	ぶりっ	buriQ	buri	Q		S
380	ぶるんぶるん	buruN-buruN	buru	redup, N		S
381	ぶん	buN	bu	N		S
382	ぶんぶん	buN-buN	bu	redup, N		S
383	べちや	betya	betya			S
384	べちやくちや	betya-kutya	betya, kutya	redup		S
385	べちやくちや	petya-kutya	petya, kutya	redup		S
386	べちやつ	petyaQ	petya	Q		S
387	ぺったんぺったん	peQtaN-peQtaN	peta	redup, infix(Q), N		S
388	ぺちやん	petyaN	petya	N		S
389	ぺっ	peQ	pe	Q		S
390	ぺっぺっ	peQ-peQ	pe	redup, Q		S
391	べりっ	biriQ	biri	Q		S
392	べりべり	biri-biri	biri	redup		S
393	べんべん	beN-beN	be	redup, N		S
394	ぺんぺん	peN-peN	pe	redup, N		S
395	ぼかぼか	boka-boka	boka	redup		S
396	ぼかん	bokaN	boka	N		S
397	ぼきっ	bokiQ	boki	Q		S
398	ぼきっ	pokiQ	poki	Q		S
399	ぼきぼき	boki-boki	boki	redup		S
400	ぼきぼき	poki-poki	poki	redup		S
401	ぼきり	bokiri	boki	ri		S
402	ぼきり	pokiri	poki	ri		S
403	ぼきん	bokiN	boki	N		S
404	ぼきん	pokiN	poki	N		S
405	ぼくぼく	poku-poku	poku	redup		S
406	ぼこんぼこん	bokoN-bokoN	boko	redup, N		S
407	ぼしゃっ	bosyaQ	bosya	Q		S
408	ぼしゃぼしゃ	bosya-bosya	bosya	redup		S

409	ぼそぼそ	poso-poso	poso	redup		S
410	ぼそり	posori	poso	ri		S
411	ぼたっ	botaQ	bota	Q		S
412	ぼたっ	potaQ	pota	Q		S
413	ぼたぼた	pota-pota	pota	redup		S
414	ぼたり	botari	bota	ri		S
415	ぼたり	potari	pota	ri		S
416	ぼたりぼたり	botari-botari	bota	redup, ri		S
417	ぼたりぼたり	potari-potari	pota	redup, ri		S
418	ぼたん	botaN	bota	N		S
419	ぼちやっ	botyaQ	botya	Q		S
420	ぼちやぼちや	botya-botya	botya	redup		S
421	ぼちやり	botyari	botya	ri		S
422	ぼちやり	potyari	potya	ri		S
423	ぼちゃん	botyaN	botya	N		S
424	ぼちゃん	potyaN	potya	N		S
425	ぼっきり	boQkiri	boki	infix(Q), ri		S
426	ぼっくりぼっくり	poQkuri-poQkuri	poku	redup, infix(Q), ri		S
427	ぼっとんぼっとん	poQtoN-poQtoN	poto	redup, infix(Q), N		S
428	ぼとっ	botoQ	boto	Q		S
429	ぼとっ	potoQ	poto	Q		S
430	ぼとぼと	poto-poto	poto	redup		S
431	ぼとり	botori	boto	ri		S
432	ぼとり	potori	poto	ri		S
433	ぼとりぼとり	potori-potori	poto	redup, ri		S
434	ぼとん	botoN	boto	N		S
435	ぼとん	potoN	poto	N		S
436	ぼとんぼとん	potoN-potoN	poto	redup, N		S
437	ぼりっ	boriQ	bori	Q		S
438	ぼりっ	poriQ	pori	Q		S
439	ぼりぼり	bori-bori	bori	redup		S
440	ぼりぼり	pori-pori	pori	redup		S
441	ぼろんぼろん	poroN-poroN	poro	redup, N		S
442	ぼん	boN	bo	N		S
443	みしみし	misi-misi	misi	redup	する	S

444	みしりみしり	misiri-misiri	misi	redup, ri		S
445	めりめり	meri-meri	meri	redup		S
446	りーん	riRN	ri	R, N		S
447	りーんりーん	riRN-riRN	ri	redup, R, N		S
擬態語						
448	あくせく	aku-seku	aku, seku			M
449	あたふた	ata-huta	ata, huta		する	M
450	あっけらかん	aQkerakan			している	M
451	あぶあぶ	apu-apu	apu	redup	する	M
452	いそいそ	iso-iso	iso	redup	する	M
453	いちゃいちゃ	itya-itya	itya	redup	する, つく	M
454	うかうか	uka-uka	uka	redup	する	M
455	うかつ	ukaQ	uka	Q	する	M
456	うじうじ	uzi-uzi	uzi	redup	している	M
457	うじゃうじゃ	uzya-uzya	uzya	redup	している	M
458	うだうだ	uda-uda	uda	redup		M
459	うっかり	uQkari	uka	infix(Q), ri	する	M
460	うっすら	uQsura	usu	infix(Q)		M
461	うっすり	uQsuri	usu	infix(Q), ri		M
462	うっとり	uQtori	uto	infix(Q), ri	する	M
463	うつらうつら	utura-utura	utu	redup	する	M
464	うとうと	uto-uto	uto	redup	する	M
465	うとっ	utoQ	uto	Q	する	M
466	うねうね	une-une	une	redup	する	M
467	うまうま	uma-uma	uma	redup		M
468	うようよ	uyo-uyo	uyo	redup	する	M
469	うらうら	ura-ura	ura	redup	する	M
470	えへらえへら	ehera-ehera	ehe	redup		M
471	おたおた	ota-ota	ota	redup	する	M
472	おっとり	oQtori	oto	infix(Q), ri	する	M
473	おめおめ	ome-ome	ome	redup		M
474	がつつ	gatu-gatu	gatu	redup	する	M
475	かっさり	kaQkiri	kaki	infix(Q), ri	した	M
476	がっしり	gaQsiri	gasi	infix(Q), ri	している	M

477	かっちり	kaQtiri	kati	infix(Q), ri	する	M
478	がっぷり	gaQpuri	gapu	infix(Q), ri		M(F)
479	がっぼり	gaQpori	gapo	infix(Q), ri		M
480	がっぼがっぼ	gaQpo-gaQpo	gapo	redup, infix(Q)		M
481	がば	gaba	gaba			M
482	がぶがぶ	gabu-gabu	gabu	redup		M
483	がぶっ	gabuQ	gabu	Q		M
484	がぶり	gaburi	gabu	ri		M
485	かぼっ	kapoQ	kapo	Q		M
486	がみがみ	gami-gami	gami	redup		M
487	ぎくしゃく	giku-syaku	giku, syaku		する	M
488	ぎざぎざ	giza-giza	giza	redup	している	M
489	ぎちぎち	giti-giti	giti	redup		M
490	きちん	kitiN	kiti	N	する	M
491	きちんきちん	kitiN-kitiN	kiti	redup, N		M
492	ぎっ	giQ	gi	Q		M
493	きっかり	kiQkari	kika	infix(Q), ri		M
494	ぎっちら	giQtira	giti	infix(Q)		M
495	ぎっちり	giQtiri	giti	infix(Q), ri		M
496	きっぱり	kiQpari	kipa	infix(Q), ri	した	M
497	ぎっしり	giQsiri	gisi	infix(Q), ri		M
498	ぎとぎと	gito-gito	gito	redup	する	M
499	きびきび	kibi-kibi	kibi	redup	している	M
500	ぎゃふん	gayhuN	gyahu	N	する	M
501	ぎゅーっ	gyuRQ	gyu	R, Q		M(F)
502	きよときよと	kyoto-kyoto	kyoto	redup	する	M
503	きよとん	kyotoN	kyoto	N	する	M
504	きよろきよろ	kyoro-kyoro	kyoro	redup	する	M
505	ぎよろぎよろ	gyoro-gyoro	gyoro	redup	している	M
506	きよろっ	kyoroQ	kyoro	Q		M
507	ぎよろっ	gyoroQ	gyoro	Q	している	M
508	きよろり	kyorori	kyoro	ri		M
509	ぎよろり	gyorori	gyoro	ri	している	M
510	ぎよろん	gyoroN	gyoro	N	する	M

511	きらきら	kira-kira	kira	redup	する	M
512	きらっ	kiraQ	kira	Q		M
513	ぎらっ	giraQ	gira	Q		M
514	きらり	kirari	kira	ri		M(F)
515	ぎらり	girari	gira	ri		M
516	きらりきらり	kirari-kirari	kira	redup, ri		M
517	ぎらりぎらり	girari-girari	gira	redup, ri		M
518	ぎろり	girori	giro	ri		M
519	ぎんぎらぎん	gingiragin				M
520	ぐさっ	gusaQ	gusa	Q		M(F)
521	ぐさり	gusari	gusa	ri		M(F)
522	ぐじぐじ	guzi-guzi	guzi	redup	する	M
523	くしゃっ	kusyaQ	kusya	Q		M
524	くしゃん	kusyaN	kusya	N	する	M
525	ぐしょぐしょ	gusyo-gusyo	gusyo	redup	する	M
526	ぐしょっ	gusyoQ	gusyo	Q		M
527	ぐしょり	gusyori	gusyo	ri		M
528	ぐたぐた	guta-guta	guta	redup	する	M
529	ぐだぐだ	guda-guda	guda	redup	している	M
530	ぐたっ	gutaQ	guta	Q	している	M
531	ぐたり	gutari	guta	ri		M
532	ぐちゃっ	gutyaQ	gutya	Q		M
533	ぐちゃり	gutyasi	gutya	ri		M
534	ぐっしょり	guQsyori	gusyo	infix(Q), ri		M
535	ぐっすり	guQsari	gusa	infix(Q), ri		M
536	ぐったり	guQtari	guta	infix(Q), ri	する	M
537	ぐでんぐでん	gudeN-gudeN	gude	redup, N		M
538	ぐにゃっ	gunyaQ	gunya	Q	している	M
539	ぐにゃり	gunyasi	gunya	ri	した	M
540	ぐびぐび	gubi-gubi	gubi	redup		M
541	ぐびり	gubiri	gubi	ri		M
542	ぐびりぐびり	gubiri-gubiri	gubi	redup, ri		M
543	ぐるりぐるり	gururi-gururi	guru	redup, ri		M
544	ぐんぐん	guN-guN	gu	redup, N		M
545	ぐんなり	guNnari	guna	infix(N), ri	している	M

546	ぐんにやり	guNnyari	gunya	infix(N), ri		M
547	げそっ	gesoQ	geso	Q		M
548	けちよんけちよん	ketyoN-ketyoN	ketyo	redup, N		M
549	けばけば	keba-keba	keba	redup	した	M
550	けろっ	keroQ	kero	Q	している	M
551	けろり	kerori	kero	ri	している	M
552	げんなり	geNnari	gena	infix(N), ri	する	M
553	こくり	kokuri	koku	ri		M
554	ごしごし	gosi-gosi	gosi	redup		M
555	ごしゃごしゃ	gosya-gosya	gosya	redup		M
556	ごじゃごじゃ	gozya-gozya	gozya	redup		M
557	こせこせ	kose-kose	kose	redup	する	M
558	こそこそ	koso-koso	koso	redup	する	M
559	こそっ	kosoQ	koso	Q		M
560	ごちよごちよ	gotyo-gotyo	gotyo	redup		M
561	こっくりこっくり	koQkuri-koQkuri	koku	redup, infix(Q), ri	する	M
562	こっそり	koQsori	koso	infix(Q), ri		M
563	ごっそり	goQsori	goso	infix(Q), ri		M
564	こてこて	kote-kote	kote	redup	している	M
565	こてんこてん	koteN-koteN	kote	redup, N		M
566	ころりころり	korori-korori	koro	redup, ri		M
567	ころん	koroN	koro	N		M
568	ごわごわ	gowa-gowa	gowa	redup	している	M
569	こんがり	koNgari	koga	infix(N), ri		M(F)
570	こんもり	koNmori	komo	infix(N), ri	する	M
571	ざくっ	zakuQ	zaku	Q	する	M
572	ざくり	zakuri	zaku	ri		M
573	ざっくり	zaQkuri	zaku	infix(Q), ri	する	M
574	さっさ	saQsa	sasa	infix(Q)		M
575	さめざめ	same-zame		redup		M
576	しーん	siRN	si	R, N	する	M
577	しおしお	sio-sio	sio	redup		M
578	じくじく	ziku-ziku	ziku	redup	する	M
579	しげしげ	sige-sige	sige	redup		M
580	しこしこ	siko-siko	siko	redup	している	M

581	じっ	ziQ	zi	Q	する	M
582	しっくり	siQkuri	siku	infix(Q), ri	する, くる	M
583	じっくり	ziQkuri	ziku	infix(Q), ri		M
584	じっとり	ziQtori	zito	infix(Q), ri	する	M
585	じとじと	zito-zito	zito	redup	する	M
586	じとっ	zitoQ	zito	Q	する	M
587	しどろもどろ	sidoro-modoro		redup		M
588	しゃなりしゃなり	syanari-syanari	syana	redup, ri		M
589	しゃん	syaN	sya	N	する	M
590	じゅくじゅく	zyuku-zyuku	zyuku	redup	する	M
591	しょんぼり	syoNbori	syobo	infix(N), ri	する	M
592	じろじろ	ziro-ziro	ziro	redup		M
593	じろっ	ziroQ	ziro	Q		M
594	じろり	zirori	ziro	ri		M
595	じわじわ	ziwa-ziwa	ziwa	redup		M
596	じわーっ	ziwaRQ	ziwa	R, Q		M
597	じわっ	ziwaQ	ziwa	Q		M
598	じわり	ziwari	ziwa	ri		M
599	しん	siN	si	N	する	M
600	しんなり	siNnari	sina	infix(N), ri	する	M
601	しんねりむっつり	siNneri-muQturi	sine, mutu	infix(N), infix(Q), ri	している	M
602	じんわり	ziNwari	ziwa	infix(N), ri		M
603	ずい	zui	zu	i		M
604	ずかずか	zuka-zuka	zuka	redup		M(F)
605	すくすく	suku-suku	suku	redup		M
606	すくっ	sukuQ	suku	Q		M
607	ずけずけ	zuke-zuke	zuke	redup		M
608	すごすご	sugo-sugo	sugo	redup		M
609	すたすた	suta-suta	suta	redup		M
610	すたこら	suta-kora	suta, kora			M
611	すっかり	suQkari	suka	infix(Q), ri		M
612	すっく	suQku	suku	infix(Q)		M
613	ずっしり	zuQsiri	zusi	infix(Q), ri	する	M
614	すってん	suQteN	sute	infix(Q), N		M
615	すってんころり	suQteN-korori	sute, koro	infix(Q), N, ri		M

616	すってんころりん	suQteN-kororiN	sute, koro	infix(Q), N, ri		M
617	ずっぷり	zuQpuri	zupu	infix(Q), ri		M
618	ずっぽり	zuQpori	zupo	infix(Q), ri		M
619	すてん	suteN	sute	N		M
620	すてんころり	suteN-korori	sute, koro	N, ri		M
621	すっぱすっぱ	suQpo-suQpo	supo	redup, infix(Q)		M
622	ずばずば	zuba-zuba	zuba	redup		M
623	ずぶっ	zubuQ	zubu	Q		M
624	ずぶり	zuburi	zubu	ri		M
625	すべすべ	sube-sube	sube	redup	する	M
626	ずぼずぼ	zubo-zubo	zubo	redup		M
627	ずぼっ	zuboQ	zubo	Q		M
628	すぼすぼ	supo-suppo	supo	redup		M
629	すやすや	suya-suya	suya	redup		M
630	すらすら	sura-sura	sura	redup		M
631	ずらずら	zura-zura	zura	redup		M
632	ずらーっ	zuraRQ	zura	R, Q		M
633	ずらっ	zuraQ	zura	Q		M
634	ずらり	zurari	zura	ri		M
635	するっ	suruQ	suru	Q		M
636	するり	sururi	suru	ri		M(F)
637	すれすれ	sure-sure	sure	redup		M
638	ずんぐり	zuNguri	zugu	infix(N), ri	する	M
639	ずんずん	zuN-zuN	zu	redup, N		M
640	せかせか	seka-seka	seka	redup	する	M
641	せっから	seQkati		infix(Q)		M
642	せっせ	seQse	sese	infix(Q)		M
643	ぞっこん	zoQkoN	zoko	infix(Q), N		M
644	そよ	soyo	soyo			M
645	そよそよ	soyo-soyo	soyo	redup		M
646	そろっ	soroQ	soro	Q		M
647	そろり	sorori	soro	ri		M
648	そろりそろり	sorori-sorori	soro	redup, ri		M
649	たーっ	taRQ	ta	R, Q		M
650	たじたじ	tazi-tazi	tazi	redup	する	M

651	だっ	daQ	da	Q		M
652	たったっ	taQ-taQ	ta	redup, Q		M
653	だっだっ	daQ-daQ	da	redup, Q		M
654	たっぷり	taQpuri	tapu	infix(Q), ri	する	M
655	たどたど	tado-tado	tado	redup		M
656	たらっ	taraQ	tara	Q		M
657	たらし	tarari	tara	ri		M
658	たらしたらし	tarari-tarari	tara	redup, ri		M
659	ちかっ	tikaQ	tika	Q		M
660	ちびちび	tibi-tibi	tibi	redup		M
661	ちびりちびり	tibiri-tibiri	tibi	redup, ri		M
662	ちぐはぐ	tigu-hagu				M
663	ちまちま	tima-tima	tima	redup	する	M
664	ちゃっ	tyaQ	tya	Q		M
665	ちゃっかり	tyaQkari	tyaka	infix(Q), ri	している	M
666	ちやほや	tiya-hoya	tiya, hoyo	redup	する	M
667	ちゃらんぼらん	tyaraN-poraN	tyara, pora	redup, N		M
668	ちよい	tyoi	tyo	i		M
669	ちよくちよく	tyoku-tyoku	tyoku	redup		M
670	ちよこなん	tyokonan				M
671	ちよこまか	tyoko-maka	tyoko, maka		する	M
672	ちよっ	tyoQ	tyo	Q		M
673	ちよっきり	tyoQkiri	tyoki	infix(Q), ri		M
674	ちよっくら	tyoQkura	tyoku	infix(Q)		M
675	ちよっびり	tyoQbiri	tyobi	infix(Q), ri		M
676	ちよびちよび	tyobi-tyobi	tyobi	redup		M
677	ちよびっ	tyobiQ	tyobi	Q		M
678	ちよろっ	tyoroQ	tyoro	Q		M
679	ちよろり	tyorori	tyoro	ri		M
680	ちら	tira	tira			M
681	ちらほら	tira-hora	tira, hora	redup	する	M
682	ちらりほらり	tirari-horari	tira, hora	redup, ri		M
683	ちりじり	tiri-ziri	tiri, ziri	redup		M

684	ちんまり	tiNmari	tima	infix(N), ri	する	M
685	つ	tu	tu			M
686	つーかー	tuR-kaR	tu, ka	R		M
687	つーっ	tuRQ	tu	R, Q		M
688	つい	tui	tu	i		M
689	つかつか	tuka-tuka	tuka	redup		M
690	つけつけ	tuke-tuke	tuke	redup		M
691	つべこべ	tube-kobe	tube, kobe	redup		M
692	つやつや	tuya-tuya	tuya	redup	している	M
693	てかてか	teka-teka	teka	redup	する	M
694	でかでか	deka-deka	deka	redup		M
695	てきぱき	teki-paki	teki, paki	redup	する	M
696	てくてく	teku-teku	teku	redup		M
697	でこでこ	deko-deko	deko	redup		M
698	でっぶり	deQpuri	depu	infix(Q), ri	する	M
699	でぶっ	debuQ	debu	Q	する	M
700	でぶでぶ	debu-debu	debu	redup	する	M
701	てらてら	tera-tera	tera	redup	する	M
702	でれっ	dereQ	dere	Q	する	M
703	でれーっ	dereRQ	dere	R, Q	する	M
704	でーん	deRN	de	R, N		M
705	でん	deN	de	N	している	M
706	どかり	dokari	doka	ri		M
707	どきっ	dokiQ	doki	Q	する	M
708	どきんどきん	dokiN-dokiN	doki	redup, N	する	M
709	どぎまぎ	dogi-magi	dogi, magi	redup	する	M
710	とげとげ	toge-toge	toge	redup	する	M
711	どっか	doQka	doka	infix(Q)		M
712	どっかり	doQkari	doka	infix(Q), ri		M(F)
713	どっきんどっきん	doQkiN-doQkiN	doki	redup, infix(Q), N	する	M
714	とっくり	toQkuri	toku	infix(Q), ri		M
715	どっさり	doQsari	dosa	infix(Q), ri		M
716	とっと	toQto	to	Q, redup		M
717	どっぶり	doQpuri	dopu	infix(Q), ri		M(F)
718	どてん	doteN	dote	N		M

719	どでん	dodeN	dode	N		M
720	とぼとぼ	tobo-tobo	tobo	redup		M
721	とぼりとぼり	tobori-tobori	tobo	redup, ri		M
722	どろっ	doroQ	doro	Q	する	M
723	どろり	dorori	doro	ri	する	M
724	どんでん	don-den	do, de	N		M
725	どんより	doNyori	doyo	infix(N), ri	している	M
726	なみなみ	nami-nami	nami	redup		M
727	なよなよ	nayo-nayo	nayo	redup	する	M
728	にこっ	nikoQ	niko	Q	する	M
729	にこにこ	niko-niko	niko	redup	する	M
730	にこり	nikori	niko	ri	する	M
731	にたっ	nitaQ	nita	Q	する	M
732	にたにた	nita-nita	nita	redup	する	M
733	にたり	nitari	nita	ri	する	M
734	にちゃにちゃ	nitya-nitya	nitya	redup	する	M
735	にっ	niRQ	ni	R, Q	する	M
736	にっ	niQ	ni	Q	する	M
737	にっこり	niQkori	niko	infix(Q), ri	する	M
738	にやっ	niyaQ	niya	Q	する	M
739	にやにや	niya-niya	niya	redup	する	M
740	にやり	niyari	niya	ri	する	M
741	にゅっ	nyuRQ	nyu	R, Q		M
742	にゅっ	nyuQ	nyu	Q		M
743	にゅるっ	nyuruQ	nyuru	Q	する	M
744	にゅるにゅる	nyuru-nyuru	nyuru	redup	する	M
745	によきっ	nyokiQ	nyoki	Q		M
746	によきによき	nyoki-nyoki	nyoki	redup		M
747	によつきり	nyoQkiri	nyoki	infix(Q), ri		M
748	によろによろ	nyoro-nyoro	nyoro	redup	する	M
749	にんまり	niNmari	nima	infix(N), ri	する	M
750	ぬっ	nuRQ	nu	R, Q		M
751	ぬっ	nuQ	nu	Q		M
752	ぬけぬけ	nuke-nuke	nuke	redup		M
753	ぬめっ	numeQ	nume	Q		M

754	ぬめぬめ	nume-nume	nume	redup	する	M
755	ぬらぬら	nura-nura	nura	redup	する	M
756	ぬらりくらし	nurari-kurari	nura, kura	redup, ri		M
757	ぬるっ	nuruQ	nuru	Q	する	M
758	ぬるぬる	nuru-nuru	nuru	redup	する	M
759	ぬるり	nururi	nuru	ri		M
760	ねちゃねちゃ	netya-netya	netya	redup	する	M(F)
761	ねっとり	neQtori	neto	infix(Q), ri	する	M
762	ねとねと	neto-neto	neto	redup	する	M
763	ねばねば	neba-neba	neba	redup	する, つく	M
764	のーのー	noR-noR	no	redup, R	する	M
765	のこのこ	noko-noko	noko	redup	する	M
766	のしのし	nosi-nosi	nosi	redup		M
767	のそっ	nosoQ	noso	Q		M
768	のそのそ	noso-noso	noso	redup	する	M
769	のそり	nosori	noso	ri		M
770	のそりのそり	nosori-nosori	noso	redup, ri		M
771	のたのた	nota-nota	nota	redup		M
772	のたりのたり	notari-notari	nota	redup, ri		M
773	のっしのっし	noQsi-noQsi	nosi	redup, infix(Q)		M
774	のっそのっそ	noQso-noQso	noso	redup, infix(Q)		M
775	のっそり	noQsori	noso	infix(Q), ri		M
776	のっべり	noQperi	nope	infix(Q), ri	する	M
777	のらくら	nora-kura	nora, kura	redup	する	M
778	のろのろ	noronoro	noronoro	redup	する	M
779	のんびり	noNbiri	nobi	infix(N), ri	する	M
780	ばーばー	paR-paR	pa	redup, R		M
781	ばーっ	baRQ	ba	R, Q		M
782	ばかつ	bakaQ	baka	Q		M
783	ばかつ	pakaQ	paka	Q		M
784	はきはき	haki-haki	haki	redup	する	M
785	ばきばき	paki-paki	paki	redup	する	M
786	ばたりばたり	batari-batari	bata	redup, ri		M
787	ばちくり	patikuri				M
788	ばっ	baQ	ba	Q		M

789	はっきり	haQkiri	haki	infix(Q), ri	する	M
790	ばっくり	baQkuri	baku	infix(Q), ri		M
791	ばっさばっさ	baQsa-baQsa	basa	redup, infix(Q)		M
792	ばっさり	baQsari	basa	infix(Q), ri		M(F)
793	はっし	haQsi	hasi	infix(Q)		M
794	はった	haQta	hata	infix(Q)		M
795	ばったばった	baQta-baQta	bata	redup, infix(Q)		M
796	ばっちり	paQtiri	pati	infix(Q), ri	する	M
797	はらっ	haraQ	hara	Q		M
798	はらり	harari	hara	ri		M
799	ぴかーっ	pikaRQ	pika	R, Q		M
800	ぴかっ	pikaQ	pika	Q		M(F)
801	ぴかり	pikari	pika	ri		M(F)
802	ぴかりぴかり	pikari-pikari	pika	redup, ri		M
803	ひくひく	hiku-hiku	hiku	redup	する	M
804	ぴくぴく	piku-piku	piku	redup	する	M
805	ぴくっ	pikuQ	piku	Q	する	M
806	ぴくり	pikuri	piku	ri		M
807	ぴくん	pikuN	piku	N	する	M
808	ぴくんぴくん	pikuN-pikuN	piku	redup, N		M
809	ひたっ	hitaQ	hita	Q		M
810	びっしり	biQsiri	bisi	infix(Q), ri		M
811	びっしより	biQsyori	bisyo	infix(Q), ri		M
812	ひっそりかん	hiQsorikan				M
813	びっちり	biQtiri	biti	infix(Q), ri		M
814	びっちり	piQtiri	piti	infix(Q), ri	する	M
815	ぴよい	pyoi	pyo	i		M
816	ひよいつ	hyoiQ	hyo	i, Q		M
817	ぴよいぴよい	pyoi-pyoi	pyo	redup, i		M
818	ひよこっ	hyokoQ	hyoko	Q		M
819	ひよこひよこっ	hyoko-hyoko	hyoko	redup		M
820	ひよこぴよこ	pyoko-pyoko	pyoko	redup		M
821	ぴよこり	pyokori	pyoko	ri		M
822	ひよっくり	hyoQkuri	hyoku	infix(Q), ri		M
823	ひよっこり	hyoQkori	hyoko	infix(Q), ri		M

824	ぴよん	pyoN	pyo	N		M
825	ぴよんぴよん	pyoN-pyoN	pyo	redup, N		M
826	ひらっ	hiraQ	hira	Q		M
827	ひらひら	hira-hira	hira	redup	する, めく	M
828	びらびら	bira-bira	bira	redup	する	M
829	ひらり	hirari	hira	ri		M
830	ひらりひらり	hirari-hirari	hira	redup, ri		M
831	ひんやり	hiNyari	hiya	infix(N), ri	している	M
832	ふい	hui	hu	i		M
833	ふい	pui	pu	i		M
834	ふかつ	pukaQ	puka	Q		M
835	ふかふか	huka-huka	huka	redup	している	M
836	ふくふく	huku-huku	huku	redup	している	M
837	ぷくん	pukuN	puku	N	している	M
838	ふさふさ	husa-husa	husa	redup	している	M
839	ぷすぷす	pusu-pusu	pusu	redup		M
840	ぷすりぷすり	pusuri-pusuri	pusu	redup, ri		M
841	ふっ	huQ	hu	Q		M
842	ふっくら	huQkura	huku	infix(Q)	している	M
843	ふっくり	huQkuri	huku	infix(Q), ri	している	M
844	ぷっくり	puQkuri	puku	infix(Q), ri		M
845	ふにやつ	hunyaQ	hunya	Q	した	M
846	ふにやり	hunyari	hunya	ri	した	M
847	ふにゃん	hunyaN	hunya	N	した	M
848	ぶよぶよ	buyo-buyo	buyo	redup	する	M
849	ふらっ	huraQ	hura	Q	する	M
850	ぷらぷら	pura-pura	pura	redup	している	M
851	ふらり	hurari	hura	ri		M
852	ふらりふらり	hurari-hurari	hura	redup, ri		M
853	ぶらん	buraN	bura	N		M
854	ぶらんぶらん	buraN-buraN	bura	redup, N		M
855	ぷりんぷりん	puriN-puriN	puri	redup, ri	している	M
856	ぶるっ	buruQ	buru	Q	する	M
857	ぶるっ	puruQ	puru	Q		M
858	ぶるぶる	puru-puru	puru	redup		M

859	ぶるるっ	bururuQ	buru	Q		M
860	ぷるん	puruN	puru	N		M
861	ぷるんぷるん	puruN-puruN	puru	redup, N		M(F)
862	ぶわぶわ	buwa-buwa	buwa	redup	する	M
863	ふわりふわり	huwari-huwari	huwa	redup, ri		M
864	ぺかぺか	peka-peka	peka	redup	する	M
865	へたへた	heta-heta	heta	redup		M
866	べたっ	betaQ	beta	Q		M(F)
867	べたり	betari	beta	ri		M(F)
868	べたん	betaN	beta	N		M
869	べちやっ	betyaQ	betya	Q	する	M
870	べちよべちよ	betyo-betyo	betyo	redup		M
871	べったり	beQtari	beta	infix(Q), ri		M(F)
872	ぺったり	peQtari	peta	infix(Q), ri		M
873	べっとり	beQtori	beto	infix(Q), ri	する	M
874	べとっ	betoQ	beto	Q	する	M
875	へとへと	heto-heto	heto	redup		M
876	べとべと	beto-beto	beto	redup	する	M
877	へどもど	hedo-modo	hedo, modo	redup	する	M
878	ぺろぺろ	pero-pero	pero	redup	する	M
879	べろり	berori	bero	ri		M
880	べろん	beroN	bero	N		M
881	ぼい	poi	po	i		M(F)
882	ぼいぼい	poi-poi	po	redup, i		M
883	ぼいん	boiN	bo	i, N		M
884	ほかほか	hoka-hoka	hoka	redup	する	M
885	ぼけーっ	bokeRQ	boke	R, Q	する	M
886	ぼけっ	bokeQ	boke	Q	する	M
887	ぼそり	bosori	boso	ri		M
888	ぼそりぼそり	bosori-bosori	boso	redup, ri		M
889	ぽっ	poQ	po	Q		M
890	ぽっくり	poQkuri	poku	infix(Q), ri		M
891	ぼっさぼっさ	boQsa-boQsa	bosa	redup, infix(Q)		M
892	ぽっちり	poQtiri	poti	infix(Q), ri		M

893	ぼっちゃり	poQtyari	potya	infix(Q), ri	している	M
894	ぼつり	poQturi	potu	infix(Q), ri		M
895	ぼってり	poQteri	pote	infix(Q), ri	している	M
896	ぼてっ	poteQ	pote	Q	している	M
897	ぼてぼて	bote-bote	bote	redup	する	M
898	ぼてぼて	pote-pote	pote	redup		M
899	ぼやーっ	boyaRQ	boya	R, Q	する	M
900	ぼやぼや	boya-boya	boya	redup	する	M
901	ぼろっ	boroQ	boro	Q		M
902	ぼろっ	poroQ	poro	Q		M
903	ぼろりぼろり	porori-porori	poro	redup, ri		M
904	ほんのり	hoNnori	hono	infix(N), ri		M
905	ほんわか	honwaka			した	M(F)
906	まじまじ	mazi-mazi	mazi	redup		M
907	まちまち	mati-mati	mati	redup		M
908	まったり	maQtari	mata	infix(Q), ri	する	M
909	まんじり	maNziri	mazi	infix(N), ri		M
910	まんま	maNma				M
911	みっしり	miQsiri	missi	infix(Q), ri		M
912	みっちり	miQtiri	miti	infix(Q), ri		M
913	むすっ	musuQ	musu	Q	する	M
914	むずっ	muzuQ	muzu	Q		M
915	むちむち	muti-muti	muti	redup	する	M
916	むっくり	muQkuri	muku	infix(Q), ri		M(F)
917	むっちり	muQtiri	muti	infix(Q), ri	している	M
918	むつり	muQturi	mutu	infix(Q), ri	する	M
919	むにやむにや	munya-munya	munya	redup		M
920	むんず	muNzu	muzu	infix(N)		M
921	むんむん	muN-muN	mu	redup, N	する	M
922	めきめき	meki-meki	meki	redup		M
923	めためた	meta-meta	meta	redup		M
924	めちやくちや	mutya-kutya	mutya, kutya	redup		M
925	めちやめちや	metya-metya	metya	redup		M
926	めつきり	meQkiri	meki	infix(Q), ri		M

927	めらめら	mera-mera	mera	redup		M(F)
928	めろめろ	mero-mero	mero	redup		M
929	もくもく	moku-moku	moku	redup		M
930	もぐもぐ	mogu-mogu	mogu	redup		M
931	もさもさ	mosa-mosa	mosa	redup	している	M
932	もさっ	mosaQ	mosa	Q	する	M
933	もじもじ	mozi-mozi	mozi	redup	する	M
934	もしゃもしゃ	mosya-mosya	mosya	redup	している	M
935	もじゃもじゃ	mozya-mozya	mozya	redup	している	M
936	もっさり	moQsari	mosa	infix(Q), ri	している	M
937	もわーっ	mowaRQ	mowa	R, Q	する	M
938	もわっ	mowaQ	mowa	Q	する	M
939	ゆさゆさ	yusa-yusa	yusa	redup		M
940	ゆさっゆさっ	yusaQ-yusaQ	yusa	redup, Q		M
941	ゆっさゆっさ	yuQsa-yuQsa	yusa	redup, infix(Q)		M
942	ゆったり	yuQtari	yuta	infix(Q), ri	する	M
943	ゆらっ	yuraQ	yura	Q		M
944	ゆらゆら	yura-yura	yura	redup	する, めく	M
945	ゆらり	yurari	yura	ri		M
946	ゆらりゆらり	yurari-yurari	yura	redup, ri		M
947	ゆるゆる	yuru-yuru	yuru	redup		M
948	ゆるり	yururi	yuru	ri		M
949	よたよた	yota-yota	yota	redup	する	M
950	よちよち	yoti-yoti	yoti	redup	する	M
951	よぼよぼ	yobo-yobo	yobo	redup	した	M
952	よれよれ	yore-yore	yore	redup		M(F)
953	よろよろ	yoro-yoro	yoro	redup	する, めく	M
954	わさわさ	wasa-wasa	wasa	redup	する	M
955	わなわな	wana-wana	wana	redup		M
956	わんさ	waNsa	wasa	infix(N)		M
擬情語						
957	うきうき	uki-uki	uki	redup	する	P
958	うずうず	uzu-uzu	uzu	redup	する	P
959	うはうは	uha-uha	uha	redup		P

960	うんざり	uNzari	uza	infix(N), ri	する	P
961	おずおず	ozu-ozu	ozu	redup	する	P
962	おちおち	oti-oti	oti	redup	する	P
963	おどおど	odo-odo	odo	redup	する	P
964	おろおろ	oro-oro	oro	redup	する	P
965	きっ	kiQ	ki	Q	する	P
966	きゅん	kyuN	kyu	N	する	P
967	くさくさ	kusa-kusa	kusa	redup	する	P
968	くよくよ	kuyo-kuyo	kuyo	redup	する	P
969	じん	ziN	zi	N	する, くる	P
970	じんじん	ziN-ziN	zi	redup, N	する	P
971	しんみり	siNmiri	simi	infix(N), ri	する	P
972	ずきずき	zuki-zuki	zuki	redup	する	P(F)
973	ずきっ	zukiQ	zuki	Q	する	P
974	すっきり	suQkiri	suki	infix(Q), ri	する	P
975	ずきん	zukiN	zuki	N	する	P
976	ずきんずきん	zukiN-zukiN	zuki	redup, N	する	P
977	ぞーっ	zoRQ	zo	R, Q	する	P
978	ぞっ	zoQ	zo	Q	する	P
979	そわそわ	sowa-sowa	sowa	redup	する	P
980	どっきり	doQkiri	doki	infix(Q), ri		P
981	ひしひし	hisi-hisi	hisi	redup		P
982	びっくり	biQkuri	biku	infix(Q), ri	する	P
983	ひりっ	hiriQ	hiri	Q		P
984	ひりひり	hiri-hiri	hiri	redup	する	P(F)
985	ひりり	hiriri	hiri	ri		P
986	むらむら	mura-mura	mura	redup		P
987	やきもき	yaki-moki	yaki, moki	redup	する	P
988	るんるん	ruN-ruN	ru	redup, N	する	P
989	わくわく	waku-waku	waku	redup	する	P

【単一多義語】

擬声語						
No.	オノマトペ	派生形	語基	構成要素	統語	VSMP
1	うんうん	uN·uN	u	redup, N		VV
2	げろげろ	gero·gero	gero	redup		VV
3	ちゅーちゅー	tyuR·tyuR	tyu	redup, R		VV
4	はっはっ	haQ·haQ	ha	redup, Q		VV
擬音語						
5	がしやがしや	gasya·gasya	gasya	redup		SS
6	がしやつ	gasyaQ	gasya	Q		SS
7	ぐー	guR	gu	R		SS
8	ぐーぐー	guR·guR	gu	redup, R		SS
9	ぐーっ	guRQ	gu	R, Q		SS
10	ごとごと	goto·goto	goto	redup		SS
11	ざーざー	zaR·zaR	za	redup, R		SS
12	ざんぶり	zaNburi	zabu	infix(N), ri		SS
13	じー	ziR	zi	R		SS
14	じーじー	ziR·ziR	zi	redup, R		SS
15	じゃー	zyaR	zya	R		SSS
16	しやつ	syaRQ	sya	R, Q		SS
17	じゃーっ	zyaRQ	zya	R, Q		SS
18	じゃーじゃー	zyaR·zyaR	zya	redup, R		SSS
19	しやつ	syaQ	sya	Q		SS
20	じゃつ	zyaQ	zya	Q		SS
21	しゅーしゅー	syuR·syuR	syu	redup, R		SS
22	しゅっ	syuQ	syu	Q		SS
23	しゅっしゅっ	syuQ·syuQ	syu	redup, Q		SS
24	ずどーん	zudoRN	zudo	R, N		SS
25	ずどん	zudoN	zudo	N		SS
26	ばちーん	batiRN	bati	R, N		SS
27	ばちばち	bati·bati	bati	redup		SS

28	ひゅー	hyuR	hyu	R		SS
29	ひゅーっ	hyuRQ	hyu	R, Q		SS
30	ぴゅーっ	pyuRQ	pyu	R, Q		SS
31	ひゅーひゅー	hyuR-hyuR	hyu	redup, R		SS
32	ひゅーん	hyuRN	hyu	R, N		SS
33	ぴゅーん	pyuRN	pyu	R, N		SS
34	ぺちゅぺちゅ	petya-petya	petya	redup		SS
35	ぼーんぼーん	boRN-boRN	bo	redup, R, N		S(F) S
36	ぼしゅっ	posyaQ	posya	Q		S(F)S
37	りんりん	riN-riN	ri	redup, N		SS
擬態語						
38	あっさり	aQsari	asa	infix(Q), ri	M1 している, M2 する, M3 している	MMMM
39	あっぷあっぷ	aQpu-aQpu	apu	redup, infix(Q)	M1 する, M2 している	MM
40	あんどり	aNguri	agu	infix(N), ri	M2 する	MM
41	うろうろ	uro-uro	uro	redup	する	MM
42	えちらおちら	etira-otira		redup		MM
43	がくがく	gaku-gaku	gaku	redup	M1 している, M2 する, M3 する	MMM
44	がくっ	gakuQ	gaku	Q	M1 なる	MMM
45	がくり	gakuri	gaku	ri		MM
46	かくん	kakuN	kaku	N		MM
47	がくん	gakuN	gaku	N		MM
48	がしっ	gasiQ	gasi	Q	M2 している	MM
49	かすかす	kasu-kasu	kasu	redup	M1	MM
50	がっくり	gaQkuri	gaku	infix(Q), ri	M2 する, くる	MM
51	がちり	gaQtiri	gati	infix(Q), ri	している	M (F)M
52	がぼっ	gabaQ	gaba	Q		MM
53	ぎくぎく	giku-giku	giku	redup	する	MM
54	ぎすぎす	gisu-gisu	gisu	redup	M1 した, M2 している	MMM
55	きちっ	kitiQ	kiti	Q	する	MMM

56	きっちり	kiQtiri	kiti	infix(Q), ri	M1 している	MM
57	ぎゅっ	gyuQ	gyu	Q		MM
58	ぎらぎら	gira-gira	gira	redup	する, つく	MM
59	ぐにゃぐにゃ	gunya-gunya	gunya	redup	M1 した, M2 する, M3 する	MM (F)M
60	ぐらぐら	gura-gura	gura	redup	する	M(F)M
61	ぐらっ	guraQ	gura	Q	する	MM
62	ぐらり	gurari	gura	ri	する	MM
63	ぐりぐり	guri-guri	guri	redup	M2 する	MM
64	ぐるぐる	guru-guru	guru	redup		MMM
65	ぐるっ	guruQ	guru	Q		MM
66	ぐるり	gururi	guru	ri		MM
67	ぐるん	guruN	guru	N		MM
68	ぐるんぐるん	guruN-guruN	guru	redup, N		MM
69	ぐん	guN	gu	N		MM
70	げっそり	geQsori	gesso	infix(Q), ri	M1 した, M2 する	MM(F)
71	ごたごた	gota-gota	gota	redup	M1 する, M2, M3 する, つく	MMM
72	ごちゃごちゃ	gotya-gotya	gotya	redup	する	MMM
73	こちょこちょ	kotyo-kotyo	kotyo	redup		MMM
74	こっくり	koQkuri	koku	infix(Q), ri	M1 する, M2 した	MM
75	こってり	koQteri	kote	infix(Q), ri	M2 している	M(F)M(F)
76	ごてごて	gote-gote	gote	redup	M1 している	MM
77	ころっ	koroQ	koro	Q	M3 した	MMM
78	ころり	korori	koro	ri		MM
79	ごろり	gorori	goro	ri	M2 する	MM
80	ごろん	goroN	goro	N	M2 する	MM
81	さらっ	saraQ	sara	Q	M1 する	MM(F)M
82	さらり	sarari	sara	ri	M1 する, M3 した	MMM
83	じたばた	zita-bata	zita, bata	redup	する	MM(F)
84	しっかり	syaQkari	syaka	infix(Q), ri	M2 している	MM (F)M
85	しっとり	siQtori	sito	infix(Q), ri	M1 する, M2 している	MM
86	しっぽり	siQpori	sipo	infix(Q), ri		MM(F)

87	しとしと	sito-sito	sito	redup	M2 する	MM
88	しなしな	sina-sina	sina	redup	M2 している	MM
89	しなっ	sinaQ	sina		する	MM
90	じめじめ	zime-zime	zime	redup	M1 する, M2 している	MM
91	しゃきしゃき	syaki-syaki	syaki	redup	M1 する, M2 した	MM(F)
92	しょぼん	syoboN	syobo	N	する	MM
93	しょぼしょぼ	syobo-syobo	syobo	redup	M2 する, M3 した	MMM
94	ずーっ	zuRQ	zu	R, Q		MM
95	すいすい	sui-sui	su	redup, i		MM
96	すかすか	suka-suka	suka	redup		MM
97	ずっ	zuQ	zu	Q		MM
98	すっぱり	suQpari	supa	infix(Q), ri		MM(F)
99	すっぽり	suQpori	supo	infix(Q), ri		MMM
100	すとん	sutoN	suto	N		MM
101	すばすば	supa-supa	supa	redup		MMM
102	すばっ	supaQ	supa			MM
103	ずばっ	zubaQ	zuba	Q		M(F)M
104	すばり	supari	supa	ri		MM
105	ずばり	zubari	zuba	ri		M(F)M
106	ずぶずぶ	zubu-zubu	zubu	redup		MM
107	すぼっ	supoQ	supo	Q		MMM
108	すぼり	supori	supo	ri		MMM
109	すぼん	supoN	supo	N		MMM
110	すらっ	suraQ	sura	Q	M1 している	MM
111	すらり	surari	sura	ri	M1 している	MM
112	すんなり	suNnari	sunna	infix(N), ri	M1 している	MM
113	そーっ	soRQ	so	R, Q		MMM
114	そっ	soQ	so	Q		MMM
115	そっくり	soQkuri	soku	infix(Q), ri	M1	MM
116	そろそろ	soro-soro	soro	redup		MM
117	ぞろぞろ	zoro-zoro	zoro	redup	M2 した	MM
118	ぞろっ	zoroQ	zoro	Q	M2 した	MM
119	ぞろり	zorori	zoro	ri	M2 した	MM
120	だーっ	daRQ	da	R, Q		MM

121	だくだく	daku-daku	daku	redup		MM
122	だら一っ	daraRQ	dara	R, Q	M1 した, M2 する	MM
123	だら一ん	daraRN	dara	R, N	M1 した, M2 する	MM
124	たらたら	tara-tara	tara	redup		MM
125	だらだら	dara-dara	dara	redup	M2 した, M3 した, M4 する	MMMM
126	だらっ	daraQ	dara	Q	M3 している	MMM
127	だらり	darari	dara	ri	M1 した, M2 する	MM
128	だらん	daraN	dara	N	M1 した, M2 する	MM
129	たんまり	taNmari	tama	infix(N), ri		MM
130	ちゃ一ん	tyaRN	tya	R, N	する	MM
131	ちゃん	tyaN	tya	N	する	MM
132	ちよいちよい	tyoi-tyoi	tyo	redup, i		MMM
133	ちよこちよこ	tyoko-tyoko	tyoko	redup	M1 する	MMM
134	ちよこっ	tyokoQ	tyoko	Q	M2 した	MMM
135	ちよこん	tyokoN	tyoko	N		MM
136	ちよぼちよぼ	tyobo-tyobo	tyobo	redup		MMM
137	ちよぼっ	tyoboQ	tyobo	Q		MM
138	ちらちら	tira-tira	tira	redup	する, つく	MMMM
139	ちらっ	tiraQ	tira	Q		MMMM
140	ちらり	tirari	tira	ri		MMMM
141	ちらりちらり	tirari-tirari	tira	redup, ri		MMMM
142	でれでれ	dere-dere	dere	redup	M1 している, M2 する, つく	MM
143	どかっ	dokaQ	doka	Q		MM
144	とことこ	toko-toko	toko	redup		MM
145	どっしり	doQsiri	dosi	infix(Q), ri	している	MM
146	とっぷり	toQpuri	topu	infix(Q), ri		MM(F)
147	どてっ	dodeQ	dode	Q		MM
148	とろっ	toroQ	toro	Q	する	MM
149	とろとろ	toro-toro	toro	redup	M1 する, M4 する	MMMM
150	とろり	torori	toro	ri	する	MM(F)
151	とろん	toroN	toro	N	する, F している	MM(F)
152	どろん	doroN	doro	N	M1 している, M2 する, M3 する	MMM

153	ぬくぬく	nuku-nuku	nuku	redup	M2 した	MM
154	ねちねち	neti-neti	neti	redup	M1 する, M2 した	MM(F)
155	のらりくらり	norari-kurari	nora, kura	redup, ri	M1 している, M2 する	MM
156	ぱー	paR	pa	R	M1 する	MM
157	ぱーっ	paRQ	pa	R, Q	M2 した	MM
158	ばかばか	baka-baka	baka	redup	M2 する	MM
159	ぱくっ	pakuQ	paku	Q		MM
160	ぱくぱく	paku-paku	paku	redup	M1 させる, つく, M2 する	MMM
161	ぱくり	pakuri	paku	ri		MM
162	ぱくん	pakuN	paku	N		MM
163	ぱっくり	paQkuri	paku	infix(Q), ri		MM
164	ぱったり	paQtari	pata	infix(Q), ri		MM
165	ぱっちり	baQtiri	bati	infix(Q), ri	M1 した	MM
166	ぱっ	paQ	pa	Q	M3 する	MMM
167	ぱっぱっ	paQ-paQ	pa	redup, Q		MMM
168	ぴかぴか	pika-pika	pika	redup	M2 する	MM
169	ひっそり	hiQsori	hiso	infix(Q), ri	M1 する, M2 している	MM
170	ぴったり	piQtari	pita	infix(Q), ri	M2 した	MMM
171	ひよい	hyoi	hyo	i	M2 する	MM
172	ひよいひよい	hyoi-hyoi	hyo	redup, i	M2 する	MM
173	ぴよこっ	pyokoQ	pyoko	Q		MMM
174	ひよこひよこ	hyoko-hyoko	hyoko	redup		MM
175	ぴよこん	pyokoN	pyoko	N		MMM
176	ひよっ	hyoQ	hyo	Q	M2 する	MM
177	ひよろっ	hyoroQ	hyoro	Q	M1 する, M2 している	MM
178	ひよろひよろ	hyoro-hyoro	hyoro	redup	M1 する, M2 している	M(F)M
179	ひよろり	hyorori	hyoro	ri	M1 した	MM
180	ひよろん	hyoroN	hyoro	N		MM
181	ぴらぴら	pira-pira	pira	redup	M2 している	MM
182	ぷか	puka	paka		M1 する	MM

183	ぷかり	pukari	puka	ri		MM
184	ぷかりぷかり	pukari-pukari	puka	redup, ri		MM
185	ふつつり	huQturi	hutu	infix(Q), ri		MM(F)
186	ぶつつり	buQturi	butu	infix(Q), ri		MM
187	ふにやふにや	hunya-hunya	hunya	redup	M1 している	MM(F)
188	ぶらっ	buraQ	bura	Q	M3 としている	MMM
189	ふらふら	hura-hura	hura	redup	M1 する, M2 する, つく, M3 する, つく	M(F)M(F) M
190	ぶらぶら	bura-bura	bura	redup	M1 する, M2 している	MMM
191	ぶらり	burari	bura	ri		MM
192	ぶらりぶらり	burari-burari	bura	redup, ri		MM
193	ふわり	huwari	huwa	ri		MM
194	ふんわり	huNwari	huwa	infix(N), ri	M2 した	MM(F)
195	べこべこ	beko-beko	beko	redup	M1	MM
196	ぺたっ	petaQ	peta	Q	する	MM
197	べたべた	beta-beta	beta	redup	M1 する, M3 する	MMM(F)
198	ぺたり	petari	peta	ri		MM
199	ぺたん	petaN	peta	N	する	MM
200	へなへな	hena-hena	hena	redup	した	MM
201	へらへら	hera-hera	hera	redup	M1 する	MM
202	べらべら	bera-bera	bera	redup	M2 している	MM
203	べろっ	beroQ	bero	Q		MM
204	べろっ	peroQ	pero	Q		MMM
205	べろべろ	bero-bero	bero	redup	M2	MM
206	べろり	perori	pero	ri		MMM
207	べろん	beroN	bero	N	M4 する	MMMM
208	べろん	peroN	pero	N		MM
209	ほいほい	hoi-hoi	ho	redup, i		MM
210	ぼさっ	bosaQ	bosa	Q	する	MM
211	ぼさぼさ	bosa-bosa	bosa	redup	M1 している, M2 する	MM
212	ぼそっ	bosoQ	boso	Q	M1 した, M2 している, M3 する	MMM

213	ぼちぼち	boti-boti	boti	redup		MM
214	ぽっかり	poQkari	poka	infix(Q), ri		M(F)M
215	ぼってり	boQteri	bote	infix(Q), ri	M1 する, M2 している	MM
216	ぼつぼつ	botu-botu	botu	redup		MM
217	ぼてっ	boteQ	bote	Q	している	MM
218	ぼてり	boteri	bote	ri	M1 している	MM
219	ぼやっ	boyaQ	boya	Q	M2 する	MM
220	ほやほや	hoya-hoya	hoya	redup		MM(F)
221	ぼろぼろ	boro-boro	boro	redup	M2	MM(F)
222	ぼろぼろ	poro-poro	poro	redup	M2 する	MM
223	ぼろり	porori	poro	ri		MM
224	ぼんやり	boNyari	boya	infix(N), ri	M1 する, M2 している	MM
225	まごまご	mago-mago	mago	redup	M1 する, M2 している	MM
226	まざまざ	maza-maza	maza	redup		MM
227	まるまる	maru-maru	maru	redup		MM
228	めそめそ	meso-meso	meso	redup	する	MM
229	もごもご	mogo-mogo	mogo	redup		MM
230	もそもそ	moso-moso	moso	redup	M2 する	MM(F)
231	もたもた	mota-mota	mota	redup	する, つく	MM(F)
232	もりもり	mori-mori	mori	redup		MM
233	やんわり	yaNwari	yawa	infix(N), ri	M1 した	MM
234	ゆっくり	yuQkuri	yuku	infix(Q), ri	する	MM
235	れろれろ	rero-rero	rero	redup		MM
擬情語						
236	いらいら	ira-ira	ira	redup	する	PP
237	かーっ	kaRQ	ka	R, Q	する	PP
238	かっか	kaQka	ka	redup, Q	する, くる	PP
239	ひやひや	hiya-hiya	hiya	redup	する	PP
240	ひやり	hiyari	hiya	ri	する	PP
241	むかむか	muka-muka	muka	redup	する, つく	PP
242	むずむず	muzu-muzu	muzu	redup	する	PP

【多義混成語】

擬声＋擬音 [VS]						
No.	オノマトペ	派生形	語基	構成要素	統語	VSMP
1	がーがー	gaR-gaR	ga	redup, R	S する	VS
2	きーきー	kiR-kiR	ki	redup, R		VS
3	くーくー	kuR-kuR	ku	redup, R		VS
4	ことこと	koto-koto	koto	redup		VSS
5	どーどー	doR-doR	do	redup, R		VS
6	びんびん	biN-biN	bi	redup, N		VS
7	わーん	waRN	wa	R, N		VS
8	わん	waN	wa	N		VS
擬態＋擬情 [MP]						
9	ぎくっ	gikuQ	giku	Q	M1 する, P2 する	MP
10	ぎくり	gikuri	giku	ri	P2 する	MP
11	ぎくん	gikuN	gikuN	N	P2 する	MP
12	ぎっくり	giQkuri	giku	infix(Q), ri	P2 する	MP
13	ぎっくん	giQkuN	giku	infix(Q), N	P2 する	MP
14	きゅーっ	kyuRQ	kyu	R, Q		MMP
15	きゅっ	kyuQ	kyu	Q		MMP
16	ぐさぐさ	gusa-gusa	gusa	redup		MMP(F)
17	くしゃくしゃ	kusya-kusya	kusya	redup	M1 する, P3 する	MMP
18	ぐっ	guQ	gu	Q	P くる	MMMMP
19	さばさば	saba-saba	saba	redup	M している	MP
20	さっぱり	saQpari	sapa	infix(Q), ri	M1 する, M2 した, P3 した	MMMMP
21	しくしく	siku-siku	siku	redup	P する	MP
22	しゃきっ	syakiQ	syaki	Q	する	MP(F)
23	しゃっきり	syaQkiri	syaki	infix(Q), ri	する	MP(F)
24	ずたずた	zuta-zuta	zuta	redup		MP(F)
25	すっ	suQ	su	Q	P する	MP
26	ぞくぞく	zoku-zoku	zoku	redup	する	MP

27	ぞくっ	zokuQ	zoku	Q	する	MP
28	ぞくり	zokuri	zoku	ri	する	MP
29	ちかちか	tika-tika	tika	redup	する	MP
30	ちかっ	tikaQ	tika	Q		MP
31	ちかり	tikari	tika	ri		MP
32	ちくちく	tiku-tiku	tiku	redup	Pする	M(F)P(F)
33	ちくっ	tikuQ	tiku	Q	Pする	M(F)P
34	ちくり	tikuri	tiku	ri		M(F)P(F)
35	ちくりちくり	tikuri-tikuri	tikuri	redup		MP
36	つん	tuN	tu	N	M2している, Pする, くる	MMP
37	つんつん	tuN-tuN	tu	redup, N	M2 する, M3 する, P4 する	MMMP
38	はらはら	hara-hara	hara	redup	Pする	MP
39	びくっ	bikuQ	biku	Q	する	MP
40	びくびく	biku-biku	biku	redup	する	MP
41	びくり	bikuri	biku	ri	する	MP
42	びくん	bikuN	biku	N	する	MP
43	ひやっ	hiyaQ	hiya	Q	する	MP
44	ふわふわ	huwa-huwa	huwa	redup	M1している, M2する, P3している	MMP(F)
45	ぷりぷり	puri-puri	puri	redup	Mしている, Pする	MP
46	ぷーん	puRN	pu	R, N	する	MP
47	ぶん	puN	pu	N	する	M(F)P
48	ぶんぶん	puN-puN	pu	redup, N	M1Fする, M2する, P3する	M(F)MP
49	ほくほく	hoku-hoku	hoku	redup	する	MP
50	ほろっ	horoQ	horo	Q	Pする	MP
51	ほろり	horori	horo	ri	Pする	MP
52	むかっ	mukaQ	muka	Q	する	MP
53	むくっ	mukuQ	muku	Q	M2する	MMP
54	むくむく	muku-muku	muku	redup	M2する	MMP(F)
55	むしゃくしゃ	musya-kusya	musya, kusya	redup	Mした, P2する	MP

56	むーっ	muRQ	mu	R, Q	する	MP
57	むっ	muQ	mu	Q	する	MP
58	もぞもぞ	mozo-mozo	mozo	redup	M2 する, P する	MMP(F)
59	もやーっ	moyaRQ	moya	R, Q	M2 している, P する	MMP(F)
60	もやっ	moyaQ	moya	Q	M2 している, P する	MMP(F)
61	もやもや	moya-moya	moya	redup	M2 する, P する	MMP(F)
擬声＋擬音＋擬態＋擬情 [VSMP]						
62	あーん	aRQ	a	R, Q	する	VM
63	あっ	aQ	a	Q		VM
64	うん	uN	u	N		VVM
65	がーん	gaRN	ga	R, N	P する	SP(F)
66	かさかさ	kasa-kasa	kasa	redup	M2 する, M3 した	SM(F)M
67	がさがさ	gasa-gasa	gasa	redup	M2 する, M3 する	SMM
68	がさっ	gasaQ	gasa	Q		SM
69	がたがた	gata-gata	gata	redup	M2 する, M3 する, P, M4 する	SMMMM P
70	がたっ	gataQ	gata	Q		SM
71	がたびし	gata-bisi	gata, bisi		M2 する	SM
72	がたびし	gata-pisi	gata, pisi		S1 する, M2 する, M3 する	SMM
73	かちかち	kati-kati	kati	redup	M2	SM(F)
74	がちがち	gati-gati	gati	redup		SM(F)M
75	かちっ	katiQ	kati	Q	M2 している	S(F)M
76	がちっ	gatiQ	gati	Q	M2 した	SM
77	かちん	katiN	kati	N		SM
78	かちんかちん	katiN-katiN	kati	redup, N		SM(F)
79	かつ	kaQ	ka	Q	P2 する, P3 する	SPPM
80	がっ	gaQ	ga	Q		SM
81	かつかつ	kaQ-kaQ	ka	redup, Q	P する	SP
82	かつかつ	katu-katu	katu	redup		SM
83	かつちんかつちん	kaQtiN-kaQtiN	kati	redup, infix(Q),N		SM
84	がばがば	gaba-gaba	gaba	redup	M1 する	SSMMM

						M
85	がぼがぼ	gabo-gabo	gabo	redup	S1 する, M2 する	SMMM
86	がぼっ	gaboQ	gabo	Q		SMMM
87	からから	kara-kara	kara	redup		VS(F)MM
88	がらがら	gara-gara	gara	redup	S する, M3 している	S(F)MMM
89	からっ	karaQ	kara	Q	M2 する, M3 している	SMM(F)
90	がらっ	garaQ	gara	Q		SM
91	からり	karari	kara	ri	M2 する, M3 している	SMM(F)
92	がらり	garari	gara	ri		SM
93	がらん	garaN	gara	N	M する	SM
94	かりかり	kari-kari	kari	redup	M2 している, P3 する, くる	SMP
95	がりがり	gari-gari	gari	redup	M2 する	S(F)MM
96	かりっ	kariQ	kari	Q	M した	SM
97	かんかん	kaN-kaN	ka	redup, N		SMMP
98	がんがん	gaN-gaN	ga	redup, N	P する	SMMP
99	きーん	kiRN	ki	R, N		SM(F)
100	ぎしぎし	gisi-gisi	gisi	redup		SMM
101	きちきち	kiti-kiti	kiti	redup	M1 する, M2 する	SMM
102	きゃーきゃー	kyaR-kyaR	kya	redup, R		VM
103	ぎゃーぎゃー	gyaR-gyaR	gya	redup, R		VM
104	きゅーきゅー	kyuR-kyuR	kyu	redup, R	M する	SM(F)
105	ぎゅーぎゅー	gyuR-gyuR	gyu	redup, R		SMM
106	きゅーん	kyuRN	kyu	R, N	P する	SP
107	きりきり	kiri-kiri	kiri	redup	P する	SMMP(F)
108	ぎりぎり	giri-giri	giri	redup	S する, M2 する	SMM(F)
109	きりっ	kiriQ	kiri	Q	M2 している, P する	SMP
110	きりり	kiriri	kiri	ri	M2 している	SM
111	きんきん	kiN-kiN	ki	redup, N	S1 した, P2 する	SP
112	ぐいぐい	gui-gui	gu	redup, i		SMM
113	ぐいっ	guiQ	gu	i, Q		SM

114	ぐしゃぐしゃ	gusya-gusya	gusya	redup	S1 する, M2 した	SM
115	ぐしゃっ	gusyaQ	gusya	Q		SM
116	ぐしゃり	gusyari	gusya	ri		SM
117	ぐずぐず	guzu-guzu	guzu	redup	S1 する, M2 する	SMMM
118	くたくた	kuta-kuta	kuta	redup		SMM
119	ぐちゃぐちゃ	gutya-gutya	gutya	redup	S する	SMM
120	くつつ	kutu-kutu	kutu	redup		SM
121	けろけろ	kero-kero	kero	redup	M3 する	VSM
122	こくん	kokuN	koku	N		SM
123	こくんこくん	kokuN-kokuN	koku	redup, N		SM
124	ごそっ	gosoQ	goso	Q		SM
125	ごそごそ	goso-goso	goso	redup	S1 する, M2 する	SM
126	こちこち	koti-koti	koti	redup		SMM(F)
127	こちんこちん	kotiN-kotiN	koti	redup, N		SM(F)
128	こつこつ	kotu-kotu	kotu	redup		SM
129	ごつごつ	gotu-gotu	gotu	redup	M している	SM
130	ごぼっ	goboQ	gobo	Q		SMM
131	こりこり	kori-kori	kori	redup	M する	SM
132	ごりごり	gori-gori	gori	redup	M2 した	SM
133	ころころ	koro-koro	koro	redup	M3 している	SMMM
134	ごろごろ	goro-goro	goro	redup	M4 する, M5 している, M6 している	SSMMM M
135	ごろっ	goroQ	goro	Q		SM
136	ころんころん	koroN-koroN	koro	redup, N		SM
137	こんこん	koN-koN	ko	redup, N		VSSM
138	さーっ	saRQ	sa	R, Q		SM
139	ざーっ	zaRQ	za	R, Q		SM
140	さくさく	saku-saku	saku	redup	M する	SM
141	ざくざく	zaku-zaku	zaku	redup	する	SMM
142	さくっ	sakuQ	saku	Q	M する	SM
143	さくり	sakuri	saku	ri	M する	SM
144	さっ	saQ	sa	Q		SM
145	ざっ	zaQ	za	Q		SM
146	ざっくざっく	zaQku-zaQku	zaku	redup, infix(Q)		SMM

147	さらさら	sara-sara	sara	redup	M2した	SMM
148	ざらざら	zara-zara	zara	redup	Mしている	SM(F)
149	ざらっ	zaraQ	zara	Q	Mしている	SM
150	ざらり	zarari	zara	ri	Mしている	SM
151	ざわざわ	zawa-zawa	zawa	redup	Mする, Pする	SMP
152	じーっ	ziRQ	zi	R, Q	Mする	SSM
153	じーん	ziRN	zi	R, N	Pする, くる	SP
154	しゃーしゃー	syaR-syaR	sya	redup, R	Mしている	SSM
155	じゃかじゃか	zyaka-zyaka	zyaka	redup		SM
156	じゃらじゃら	zyara-zyara	zyara	redup	する	SM
157	しゃりしゃり	syari-syari	syari	redup	Mした	SM
158	じゃりじゃり	zyari-zyari	zyari	redup	Sする, Mした	SM
159	しゃりっ	syariQ	syari	Q	Mした	SM
160	じゃりっ	zyariQ	zyari	Q	している	SM
161	しゃんしゃん	syaN-syaN	sya	redup, N	Mしている	SSM
162	じゃんじゃん	zyaN-zyaN	zya	redup, N		SM
163	しゅん	syuN	syu	N	する, なる	SM
164	じりじり	ziri-ziri	ziri	redup	Mする, P4する	SSMPP
165	じりっ	ziriQ	ziri	Q		SSM
166	すーすー	suR-suR	su	redup, R	M3する	SMM
167	すーっ	suRQ	su	R, Q	Pする	SMMP
168	ずしっ	zusiQ	zusi	Q	Mした	SM(F)
169	ずしり	zusiri	zusi	ri	Mした	SM
170	するする	suru-suru	suru	redup		SM
171	ずるずる	zuru-zuru	zuru	redup	Mした	SM
172	だぶだぶ	dabu-dabu	dabu	redup	S1する, M2する M3している, M4 している	SMMM
173	たぶたぶ	tapu-tapu	tapu	redup	Mした	SM
174	ちゃかちゃか	tyaka-tyaka	tyaka	redup	Mする	SMM
175	ちゃきちゃき	tyaki-tyaki	tyaki	redup		SM
176	ちゃらちゃら	tyara-tyara	tyara	redup	する	SM
177	ちょろちょろ	tyoro-tyoro	tyoro	redup	M2する, M3する	SMM
178	ちょん	tyoN	tyo	N		SMMM(F)
179	ちょんちょん	tyoN-tyoN	tyo	redup, N		SMM

180	ちりちり	tiri-tiri	tiri	redup	M3 する, P4 する	SSMP(F)
181	ちろちろ	tiro-tiro	tiro	redup		SM
182	ちんちん	tiN-tiN	ti	redup, N	M する	SSM
183	つー	tuR	tu	R		SM
184	つーつー	tuR-tuR	tu	redup, R		SM
185	つーん	tuRN	tu	R, N	P する	SP
186	つるっ	turuQ	turu	Q	M2 する	SMM
187	つるつる	turu-turu	turu	redup	M2 した	SMM
188	つるり	tururi	turu	ri	M2 する	SMM
189	つるん	turuN	turu	N	M2 する	SMM
190	どーっ	doRQ	do	R, Q		VM
191	どーん	doRN	do	R, N		S(F)MMM
192	どかどか	doka-doka	doka	redup		SM(F)
193	どかん	dokaN	doka	N		SMM(F)
194	どきどき	doki-doki	doki	redup	する	SP
195	どきり	dokiri	doki	ri	P する	SP
196	どきん	dokiN	doki	N		SP
197	どさっ	dosaQ	dosa	Q		SM(F)
198	どさどさ	dosa-dosa	dosa	redup	S する	SM
199	どさり	dosari	dosa	ri		SM
200	どさん	dosaN	dosa	N		SM
201	どしっ	dosiQ	dosi	Q	M2 している, M3 した	SMM
202	どしどし	dosi-dosi	dosi	redup	S する	SM
203	どしり	dosiri	dosi	ri	M2 している, M3 した	SMM
204	どっきん	doQkiN	doki	infix(Q), N		SP
205	どろどろ	doro-doro	doro	redup	M2 している	SM(F)M
206	どっ	doQ	do	Q		VMM
207	とん	toN	to			SM
208	どん	doN	do	N		S(F)MMM
209	とんとん	toN-toN	to	redup, N		SMMM
210	どんどん	doN-doN	do	redup, N	S する	SM
211	ばかばか	paka-paka	paka	redup	M する	SM
212	ばさばさ	basa-basa	basa	redup	M2 する	SMM

213	ばさばさ	pasa-pasa	pasa	redup	M する	SM
214	ばさっ	basaQ	basa	Q		SM
215	ばさり	basari	basa	ri		SM
216	ばしっ	basiQ	basi	Q		SM
217	ばしばし	basi-basi	basi	redup		SM
218	はた	hata	hata			S(F)M
219	ばたっ	bataQ	bata	Q		SM
220	ぱたっ	pataQ	pata	Q		SM
221	ばたばた	bata-bata	bata	redup	S1 する, M3 する	SSMMM
222	ぱたぱた	pata-pata	pata	redup		SM
223	ばたり	batari	bata	ri		SM
224	ぱたり	patari	pata	ri		SM
225	ばちっ	batiQ	bati	Q		SSM(F)
226	ぱちっ	patiQ	pati	Q		SSM
227	ぱちぱち	pati-pati	pati	redup	M する	SSM
228	ぱちり	patiri	pati	ri		SSM
229	ぱちん	patiN	pati	N		SSM
230	はっ	haQ	ha	Q	する	SM
231	ばっさりばっさり	baQsari-baQsari	basa	redup, infix(Q), ri		SSM(F)
232	ばったり	baQtari	bata	infix(Q), ri		SMM(F)
233	ばらばら	bara-bara	bara	redup	M3 する,	SMMMM
234	ばらばら	para-para	para	redup	M3 している	SMM
235	ばらっ	paraQ	para	Q		SM
236	ばりっ	bariQ	bari	Q	M2 した	SM
237	ぱりっ	pariQ	pari	Q	M する	SM
238	ぱりぱり	pari-pari	pari	redup	M2 している	SMM
239	ばりばり	bari-bari	bari	redup	M2 する	SMMM
240	ばん	baN	ba	N	M3 した	SMM
241	ばんばん	baN-baN	ba	redup, N		SSM
242	ぱんぱん	paN-paN	pa	redup, N	M	SSM
243	びーびー	piR-piR	pi	redup, R	M している	VSM
244	びーん	piRN	pi	R, N	P くる	SMMMP
245	ひくっ	hikuQ	hiku	Q		VM
246	びしっ	bisiQ	bisi	Q	M2 する, M3 している	SMM

247	びしびし	pisi-pisi	pisi	redup		SM
248	びしり	pisiri	pisi	ri		SM
249	びしゃ	pisya	pisya			SMM
250	びしゃっ	pisyaQ	pisya	Q		SMM
251	びしゃびしゃ	bisya-bisya	bisya	redup	M2 した	SM
252	びしゃり	pisyari	pisya	ri		SMM
253	びしゃん	pisyaN	pisya	N		SMM
254	びしょびしょ	bisyo-bisyo	bisyo	redup	M2 している	SM
255	びたっ	pitaQ	pita	Q	M3 した	SMMM
256	ひたひた	hita-hita	hita	redup		SM(F)M
257	びたびた	bita-bita	bita	redup		SM
258	びたびた	pita-pita	pita	redup		SM
259	びたり	pitari	pita	ri	M3 した	SMMM
260	びたりびたり	pitari-pitari	pita	redup, ri		SM
261	びたん	pitaN	pita	N	M3 した	SMMM
262	びちびち	piti-piti	piti	redup	M している	SM
263	びゅっ	byuQ	byu	Q		SM
264	ひゆるひゆる	hyuru-hyuru	hyuru	redup		SM
265	びりっ	biriQ	biri	Q	P する, くる	SP
266	びりっ	piriQ	piri	Q	P している	SSP(F)
267	びりびり	biri-biri	biri	redup	M3 している, P4 する, P5 する	SS(F)MPP
268	びりびり	piri-piri	piri	redup	P4 する, P5 する	SSS(F)PP
269	びりり	piriri	piri	ri		SP
270	びん	piN	pi	N	P1 くる	SMM(F)P PP
271	びんびん	piN-piN	pi	redup, N	M4 している	SM(F)MM MP
272	ふーふー	huR-huR	hu	redup, R	M3 する	VMM(F)
273	ぶーぶー	buR-buR	bu	redup, R		VSM
274	ふーっ	huRQ	hu	R, N		VM(F)
275	ぶーっ	buRQ	pu	R, Q		SMM
276	ぷーっ	puRQ	pu	R, Q	M3 する	SMM
277	ふーん	huRN	hu	R, N		VM
278	ぶかぶか	buka-buka	buka	redup	M3 している, M4	SMMM

					する	
279	ぷかぷか	puka-puka	puka	redup		SMM
280	ぶくっ	bukuQ	buku	Q		SM
281	ぷくっ	pukuQ	puku	Q	M した	SM
282	ぶくぶく	buku-buku	buku	redup	M2 している	SMM
283	ぷくぷく	puku-puku	puku	redup	M した	SM
284	ぶすっ	busuQ	busu	Q	M する	SM
285	ぷすっ	pusuQ	pusu	Q		SM
286	ぶすぶす	busu-busu	busu	redup		SSM
287	ぷすり	pusuri	pusu	ri		SM
288	ふっ	huQ	hu	Q		SMMM
289	ぷっ	puQ	pu	Q		SMM
290	ぶつつ	butuQ	butu	Q		SM
291	ぷつつ	putuQ	putu	Q	M4 した	SS(F)MM(F)
292	ぷつつり	puQturi	putu	infix(Q), ri		SM(F)
293	ふっふっ	huQ-huQ	hu	redup, Q		VM
294	ぶつぶつ	butu-butu	butu	redup	M4 している	SSSMM
295	ぷつぷつ	putu-putu	putu	redup		SSM
296	ぷつり	puturi	putu	ri		SM(F)M
297	ぶつん	putuN	putu	N		SMM
298	ぶりぶり	huri-buri	buri	redup	P する	SP
299	ぶるぶる	buru-buru	buru	redup	M する	SM
300	ぶるん	buruN	buru	N	M する	SM
301	ふん	huN	hu	N		VMM
302	ふんふん	huN-huN	hu	redup, N		VM
303	ぺこっ	pekoQ	peko	Q	M2 した, M3 する	SMM
304	ぺこぺこ	peko-peko	peko	redup	M2 した, M3 する	SMMM
305	ぺこり	pekori	peko	ri	M2 した, M3 する	SMM
306	ぺこん	pekoN	peko	N	M2 した, M3 する	SMM
307	ぺしゃっ	pesyaQ	pesya	Q		SM
308	ぺしゃり	pesyari	pesya	ri		SM
309	ぺしゃん	pesyaN	pesya	N		SM
310	ぺたぺた	peta-peta	peta	redup	M2 する	SMM
311	べちゃべちゃ	betya-betya	betya	redup	M2 する	SM

312	ぺらぺら	pera-pera	pera	redup		SMMM
313	ぼー	boR	bo	R		SMM
314	ぼーっ	boRQ	bo	R, Q	M4 する	SMM(F)M
315	ぼーぼー	boR-boR	bo	redup, R		SM
316	ぼかっ	bokaQ	boka	Q		SM
317	ぼかっ	pokaQ	poka	Q		SM(F)M
318	ぼかぼか	poka-poka	poka	redup	P している	SMM(F)P
319	ぼかり	pokari	poka	ri		SM(F)M
320	ぼかん	pokaN	poka	N	M4 している	SM(F)MM
321	ぼこっ	bokoQ	boko	Q		SM
322	ぼこっ	pokoQ	poko	Q		SMM
323	ぼこぼこ	boko-boko	boko	redup	M している	SM
324	ぼこぼこ	poko-poko	poko	redup	S1 する, M3 した	SSMM
325	ぼこり	bokori	boko	ri	M している	SM
326	ぼこり	pokori	poko	ri		SMM
327	ぼこん	bokoN	boko	N	M している	SM
328	ぼこん	pokoN	poko	N		SMM
329	ぼそっ	posoQ	poso	Q		SM
330	ぼそぼそ	boso-boso	boso	redup	V1 している, M3 する	VMM
331	ぼたぼた	bota-bota	bota	redup	M した	SM
332	ぼちぼち	poti-poti	poti	redup		SMM
333	ぼちやっ	potyaQ	potya	Q		SM
334	ぼちやぼちや	potya-potya	potya	redup	する	SM
335	ほっ	hoQ	ho	Q	M する	SM
336	ほっきり	poQkari	poka	infix(Q), ri		SM
337	ほっつ	potuQ	potu	Q		SMM
338	ほっぽ	poQpo	po	Q	P する	VSP
339	ほっぽっ	potu-potu	potu	redup		SMMM
340	ほっつり	poturi	potu	ri		SMM
341	ほっつりほっつり	poturi-poturi	potu	redup, ri		SMMM
342	ほっん	potuN	potu	N		SMM
343	ほっんほっん	potuN-potuN	potu	redup, N		SMMM
344	ぼとぼと	boto-boto	boto	redup	M のにだ	S(F)M
345	ほろほろ	horo-horo	horo	redup		VM

346	ぼろん	poroN	poro	N		SM
347	ぼん	poN	po	N		SM
348	ぼんぼん	boN-boN	bo	redup, N		SM
349	ぼんぼん	poN-poN	po	redup, N		SMM
350	むしゃむしゃ	mosya-mosya	mosya	redup	Pする	SP
351	もーもー	moR-moR	mo	redup, R		VM
352	わー	waR	wa	R		VM
353	わーっ	waRQ	wa	R, Q		VM
354	わいわい	wai-wai	wa	redup, i		VM
355	わっ	waQ	wa	Q		VMM
356	わんわん	waN-waN	wa	redup, N		VVSM

[資料Ⅱ]

カザフ語オノマトペのデータベース

【単義語】

擬声語						
No.	オノマトペ	派生形	語基	構成要素	統語	VSMP
1	Арс	ars	ars		ety	V
2	Арс-арс	ars-ars	ars	redup	ety	V
3	Арс-үрс	ars-urs	ars, urs	redup	ety	V
4	Баж	bazh	bazh		ety	V
5	Баж-бүж	bazh-buzh	bazh, buzh	redup	ety	V
6	Бақ	baq	baq		ety	V
7	Бақ-бақ	baq-baq	baq	redup	ety	V
8	Бар	bar	bar		ety	V
9	Бар-бар	bar-bar	bar	redup	ety	V
10	Бар-бүр	bar-bur	bar, bur	redup	ety	V
11	Барқ	barq	barq		ety	V
12	Барқ-барқ	barq-barq	barq	redup	ety	V
13	Барқ-бүрқ	barq-burq	barq, burq	redup	ety	V
14	Барп-барп	barp-barp	barp	redup	ety	V
15	Дабыр	dabır	dab	suffix(ir)	ety	V
16	Зірк	zirk	zirk		ety	V
17	Зірк-зірк	zirk-zirk	zirk	redup	ety	V
18	Кеңк	kengk	kengk		ety	V
19	Кеңк-кеңк	kengk-kengk	kengk	redu	ety	V
20	Күж	küzh	küzh		ety	V
21	Күңк	küngk	küngk		ety	V
22	Күңк-күңк	küngk-küngk	küngk	redup	ety	V
23	Күрк	kürk	kürk		ety	V
24	Қаңқ-қаңқ	qangq-qangq	qangq	redup	ety	V
25	Қаңқ-қүңқ	qangq-qungq	qangq, qungq	redup	ety	V
26	Қоқ-қоқ	qoq-qoq	qoq	redup	ety	V
27	Қоқ-қуқ	qoq-quq	qoq, quq	redup	ety	V
28	Қорс-қорс	qors-qors	qors	redup	ety	V

29	Күрк-күрк	kürk-kürk	kürk	redup	ety	V
30	Қыңқ	qingq	qingq		ety	V
31	Қыңқ-қыңқ	qingq-qingq	qingq	redup	ety	V
32	Қырқ	qırq	qırq		ety	V
33	Қырқ-қырқ	qırq-qırq	qırq	redup	ety	V
34	Қыт-қыт	qıt-qıt	qıt	redup	ety	V
35	Маңқ	mangq	mangq		ety	V
36	Маңқ-маңқ	mangq-mangq	mangq	redup	ety	V
37	Мырс	mırs	mırs		ety	V
38	Мырс-мырс	mırs-mırs	mırs	redup	ety	V
39	Самбыр	sambır	samb	suffix(ir)	ety	V
40	Самбыр-күмбір	sambır-kümbır	samb, kümb	redup, suffix(ir)		V
41	Самбыр-сүмбыр	sambır-sumbır	samb, sumb	redup, suffix(ir)		V
42	Самп	samp	samp		ety	V
43	Самп-самп	samp-samp	samp	redup	ety	V
44	Сұңқ	sungq	sungq		ety	V
45	Сық-сық	sıq-sıq	sıq	redup	ety	V
46	Сықылық-сықылық	sıqııq-sıqııq	sıq	redup, suffix(ııq)	ety	V
47	Сыңқ	sıngq	sıngq		ety	V
48	Сыңқ-сыңқ	sıngq-sıngq	sıngq	redup	ety	V
49	Тарқ-тарқ	tarq-tarq	tarq	redup	ety	V
50	Тарқ-түрқ	tarq-turq	tarq, turq	redup	ety	V
51	Тырқ-тырқ	tırq-tırq	tırq	redup	ety	V
52	Шар	shar	shar		ety	V
53	Шар-шар	shar-shar	shar	redup	ety	V
54	Шар-шүр	shar-shur	shar, shur	redup	ety	V
55	Шар-шыр	shar-shır	shar, shır		ety	V
56	Шаң-шаң	shang-shang	shang	redup	ety	V
57	Шаң-шүң	shang-shung	shang	redup	ety	V
58	Шаңқ-шүңқ	shangq-shungq	shangq	redup	ety	V
59	Шәң	shäng	shäng		ety	V
60	Шәң-шәң	shäng-shäng	shäng	redup	ety	V
61	Шәңк	shängk	shängk		ety	V
62	Шәңк-шәңк	shängk-shängk	shängk	redup	ety	V

63	Шәңгір	shānggir	shāngg	suffix(ir)	ety	V
64	Шәңгір-шәңгір	shānggir-shānggir	shāngg	redup, suffix(ir)	ety	V
65	Шәу	shāu	shāu		ety	V
66	Шәу-шәу	shāu-shāu	shāu	redup	ety	V
67	Шеп-шеп	shep-shep	shep	redup	ety	V
68	Шу-шу	shu-shu	shu	redup	ety	V
69	Шүлдір	shūldir	shūld	suffix(ir)	ety	V
70	Шиңк	shingk	shingk		ety	V
71	Шыңк	shingq	shingq		ety	V
72	Шыңк-шыңк	shingq-shingq	shingq	redup	ety	V
73	Ха-ха-ха	ha-ha-ha	ha	redup	ety	V
74	Ыңк	ingq	ingq		ety	V(F)
75	Ыңк-ыңк	ingq-ingq	ingq	redup	ety	V
76	Ыр	ır	ır		ety	V
77	Ыр-ыр	ır-ır	ır	redup	ety	V
78	Ыбыр-сыбыр	ıbir-sibir	ıb, sib	redup, suffix(ır)	ety	V
79	Ырк-ырк	ırq-ırq	ırq	redup	ety	V
80	Ырс-ырс	ırs-ırs	ırs	redup	ety	V

擬音語

81	Балп	balp	balp		ety	S
82	Балп-балп	balp-balp	balp	redup	ety	S
83	Балп-бүлп	balp-bulp	balp, bulp	redup	ety	S
84	Барт	bart	bart		ety	S
85	Барт-барт	bart-bart	bart	redup	ety	S
86	Батыр-батыр	batır-batır	bat	redup, suffix(ır)	ety	S
87	Батыр-бүтыр	batır-butır	bat, but	redup, suffix(ır)	ety	S
88	Болп	bolp	bolp		ety	S
89	Болп-болп	bolp-bolp	bolp	redup	ety	S
90	Борт	bort	bort		ety	S
91	Борт-борт	bort-bort	bort	redup	ety	S
92	Борп	borp	borp		ety	S
93	Быз	bızh	bızh		ety	S
94	Былш	bılsh	bılsh		ety	S
95	Быр	bır	bır		ety	S

96	Быр-быр	bır-bır	bır	redup	ety	S
97	Бырк	bırq	bırq		ety	S
98	Бырк-бырк	bırq-bırq	bırq	redup	ety	S
99	Бырс	bırs	bırs		ety	S
100	Бырс-бырс	bırs-bırs	bırs	redup	ety	S
101	Бырт	bırt	bırt		ety	S
102	Бырт-бырт	bırt-bırt	bırt	redup	ety	S
103	Бырш	bırsh	bırsh		ety	S
104	Бырш-бырш	bırsh-bırsh	bırsh	redup	ety	S
105	Бытыр	bıtır	bıt	suffix(ir)	ety	S
106	Бытыр-бытыр	bıtır-bıtır	bıt	redup, suffix(ir)	ety	S
107	Гүмп	gümp	gümp		ety	S
108	Гүмп-гүмп	gümp-gümp	gümp	redup	ety	S
109	Гүмбір	gümbir	gümb	suffix(ir)	ety	S
110	Гүмбір-гүмбір	gümbir-gümbir	gümb	redup, suffix(ir)	ety	S
111	Гүр-гүр	gür-gür	gür	redup	ety	S
112	Гүрс	gürs	gürs		ety	S
113	Гүрс-гүрс	gürs-gürs	gürs	redup	ety	S
114	Гүлдір-гүлдір	güldir-güldir	güld	redup, suffix(ir)	ety	S
115	Гу-гу	gu-gu	gu	redup	ety	S
116	Дар	dar	dar		ety	S
117	Дар-дар	dar-dar	dar	redup	ety	S
118	Дабыр-дабыр	dabır-dabır	dab	redup, suffix(ir)	ety	S
119	Даңғыр-даңғыр	dangghır-dangghır	danggh	redup, suffix(ir)	ety	S
120	Дүмп	dümp	dümp		ety	S
121	Дүмп-дүмп	dümp-dümp	dümp	redup	ety	S
122	Дүмбір-дүмбір	dümbir-dümbir	dümb	redup, suffix(ir)	ety	S
123	Дүңк	düngk	düngk		ety	S
124	Дүңк-дүңк	düngk-düngk	düngk	redup	ety	S
125	Дүңгір-дүңгір	dünggir-dünggir	düngg	redup, suffix(ir)	ety	S
126	Дүр	dür	dür		ety	S
127	Дүр-дүр	dür-dür	dür	redup	ety	S
128	Дүрс	dürs	dürs		ety	S
129	Дүрс-дүрс	dürs-dürs	dürs	redup	ety	S
130	Дың	dıng	dıng		ety	S

131	Дың-дың	ding-ding	ding	redup	ety	S
132	Дыңқ	dingq	dingq		ety	S
133	Дыңқ-дыңқ	dingq-dingq	dingq	redup	ety	S
134	Дыңғыр	dingghir	dinggh	suffix(ir)	ety	S
135	Дыңғыр-дыңғыр	dingghir-dingghir	dinggh	redup, suffix(ir)	ety	S
136	Жалп-жалп	zhalp-zhalp	zhalp	redup	ety	S
137	Зың	zing	zing		ety	S
138	Зың-зың	zing-zing	zing	redup	ety	S
139	Зыңқ	zingq	zingq		ety	S
140	Зыңқ-зыңқ	zingq-zingq	zingq	redup	ety	S
141	Күбір-күбір	kübir-kübir	küb	redup, suffix(ir)	ety	S
142	Күмбір-күмбір	kümbir-kümbir	kümb	redup, suffix(ir)	ety	S
143	Күмп-күмп	kümp-kümp	kümp	redup	ety	S
144	Күңгір	künggir	küngg	suffix(ir)	ety	S
145	Күңгір-күңгір	künggir-künggir	küngg	redup, suffix(ir)	ety	S
146	Күр	kür	kür		ety	S
147	Күр-күр	kür-kür	kür	redup	ety	S
148	Күрк	kürk	kürk		ety	S
149	Күрк-күрк	kürk-kürk	kürk	redup	ety	S
150	Күрп	kürp	kürp		ety	S
151	Күрп-күрп	kürp-kürp	kürp	redup	ety	S
152	Күрс	kürs	kürs		ety	S
153	Күрс-күрс	kürs-kürs	kürs	redup	ety	S
154	Күтір	kütir	küt	suffix(ir)	ety	S
155	Күтір-күтір	kütir-kütir	küt	redup, suffix(ir)	ety	S
156	Күрт-күрт	kürt-kürt	kürt	redup	ety	S
157	Кілт	kilt	kilt		ety	S
158	Кілт-кілт	kilt-kilt	kilt	redup	ety	S
159	Кірш	kirsh	kirsh		ety	S
160	Кірш-кірш	kirsh-kirsh	kirsh	redup	ety	S
161	Қаңғыр	qangghir	qanggh	suffix(ir)	ety	S
162	Қаңғыр-қаңғыр	qangghir-qangghir	qanggh	redup, suffix(ir)	ety	S
163	Қаңғыр-күңгір	qangghir-künggir	qanggh, küngg	redup, suffix(ir, ir)	ety	S
164	Қарш-қарш	qarsh-qarsh	qarsh	redup	ety	S

165	Қарш-құрш	qarsh-qursh	qarsh, qursh	redup	ety	S
166	Қатыр-қатыр	qatır-qatır	qat	redup, suffix(ır)	ety	S
167	Қатыр-құтыр	qatır-qutır	qat, qut	redup, suffix(ır)	ety	S
168	Қатыр-қытыр	qatır-qıtır	qat, qıt	redup, suffix(ır)	ety	S
169	Қиқ	qi:q	qi:q		ety	S
170	Қиқ-қиқ	qi:q-qi:q	qi:q	redup	ety	S
171	Қиқ-шиқ	qi:q-shi:q	qi:q, shi:q	redup	ety	S
172	Қолп	qolp	qolp		ety	S
173	Қор	qor	qor		ety	S
174	Қор-қор	qor-qor	qor	redup	ety	S
175	Қорқ	qorq	qorq		ety	S
176	Қорқ-қорқ	qorq-qorq	qorq	redup	ety	S
177	Қорқ-құрқ	qorq-qurq	qorq, qurq	redup	ety	S
178	Қорп	qorp	qorp		ety	S
179	Қорп-қорп	qorp-qorp	qorp	redup	ety	S
180	Қылқ	qılq	qılq		ety	S
181	Қылқ-қылқ	qılq-qılq	qılq	redup	ety	S
182	Қылш	qılsh	qılsh		ety	S
183	Қылш-қылш	qılsh-qılsh	qılsh	redup	ety	S
184	Қыр	qır	qır		ety	S
185	Қыр-қыр	qır-qır	qır	redup	ety	S
186	Қырш	qırsh	qırsh		ety	S
187	Қырш-қырш	qırsh-qırsh	qırsh	redup	ety	S
188	Қытыр	qıtır	qıt	suffix(ır)	ety	S
189	Қытыр-қытыр	qıtır-qıtır	qıt	redup, suffix(ır)	ety	S
190	Қыңқ-сыңқ	qingq-singq	qingq, singq	redup	ety	S
191	Міңгір	minggir	mingg	suffix(ır)	ety	S
192	Міңгір-мінгір	minggir-minggir	mingg	redup, suffix(ır)	ety	S
193	Мыңқ-мыңқ	mingq-mingq	mingq	redup	ety	S
194	Патыр-пұтыр	patır-putır	pat	redup, suffix(ır)	ety	S
195	Патыр-патыр	patır-patır	pat	redup, suffix(ır)	ety	S
196	Пыр	pır	pır		ety	S
197	Пырт	pırt	pırt		ety	S

198	Пырт-пырт	pirt-pirt	pirt	redup	ety	S
199	Пырс	pırs	pırs		ety	S
200	Пырс-пырс	pırs-pırs	pırs	redup	ety	S
201	Пыс	pis	pis		ety	S
202	Пыс-пыс	pis-pis	pis	redup	ety	S
203	Пис	pis	pis		ety	S
204	Пис-пис	pis-pis	pis	redup	ety	S
205	Пиш	pish	pish		ety	S
206	Пыш	pısh	pısh		ety	S
207	Салдыр	saldır	sald	suffix(ır)	ety	S
208	Салдыр-салдыр	saldır-saldır	sald	redup, suffix(ır)	ety	S
209	Салдыр-сұлдыр	saldır-suldir	sald, suld	redup, suffix(ır)	ety	S
210	Салдыр-гүлдір	saldır-güldir	sald, güld	redup, suffix(ır, ir)	ety	S
211	Салдыр-күлдір	saldır-küldir	sald, küld	redup, suffix(ır, ir)	ety	S
212	Салп	salp	salp		ety	S
213	Салп-салп	salp-salp	salp	redup	ety	S
214	Салп-сүлп	salp-sulp	salp, sulp	redup	ety	S
215	Саңғыр	sangghır	sanggh	suffix(ır)	ety	S
216	Саңғыр-саңғыр	sangghır-sangghır	sanggh	redup, suffix(ır)	ety	S
217	Саңғыр-сүңғыр	sangghır-sungghır	sanggh, sunggh	redup, suffix(ır)	ety	S
218	Сар	sar	sar		ety	S
219	Сар-сар	sar-sar	sar	redup	ety	S
220	Сар-сүр	sar-sur	sar, sur	redup	ety	S
221	Сарқ	sarq	sarq		ety	S
222	Сарқ-сарқ	sarq-sarq	sarq	redup	ety	S
223	Сарқ-сүрқ	sarq-surq	sarq, surq	redup	ety	S
224	Сарқ-бүрқ	sarq-burq	sarq, burq		ety	S
225	Сарт	sart	sart		ety	S
226	Сарт-сарт	sart-sart	sart	redup	ety	S
227	Сарт-сүрт	sart-surt	sart, surt	redup	ety	S
228	Сақыр-сықыр	saqır-saqır	saq	redup, suffix(ır)	ety	S
229	Сақыр-сұқыр	saqır-suqır	saq, suq	redup, suffix(ır)	ety	S
230	Сатыр	satır	sat	suffix(ır)	ety	S
231	Сатыр-сатыр	satır-satır	sat	redup, suffix(ır)	ety	S

232	Сатыр-күтір	satır-kütir	sat, küt	redup, suffix(ır, ir)	ety	S
233	Сатыр-сұтыр	satır-sutır	sat, sut	redup, suffix(ır)	ety	S
234	Саудыр	saudır	saud	suffix(ır)	ety	S
235	Сыбыр	sıbir	sıb	suffix(ır)	ety	S
236	Сыбыр-сыбыр	sıbir-sıbir	sıb	redup, suffix(ır)	ety	S
237	Сыбыр-күбір	sıbir-kübir	sıb, küb	redup, suffix(ır, ir)	ety	S
238	Сыбдыр	sıbdır	sıbd	suffix(ır)	қағу	S
239	Сыбдыр-сыбдыр	sıbdır-sıbdır	sıbd	redup, suffix(ır)	ety	S
240	Сықыр	sıqır	sıq	suffix(ır)	ety	S
241	Сықыр-сықыр	sıqır-sıqır	sıq	redup, suffix(ır)	ety	S
242	Сылп	sılp	sılp		ety	S
243	Сылп-сылп	sılp-sılp	sılp	redup	ety	S
244	Сылдыр-күлдір	sıldır-küldir	sıld, küld	suffix(ır, ir)	ety	S
245	Сыр	sır	sır		ety	S
246	Сыр-сыр	sır-sır	sır	redup	ety	S
247	Сырт	sırt	sırt		ety	S
248	Сырт-сырт	sırt-sırt	sırt	redup	ety	S
249	Сырп	sırp	sırp		ety	S
250	Сырп-сырп	sırp-sırp	sırp	redup	ety	S
251	Сытыр	sıtır	sıt	suffix(ır)	ety	S
252	Сытыр-сытыр	sıtır-sıtır	sıt	redup, suffix(ır)	ety	S
253	Тақ	taq	taq		ety	S
254	Тақыр	taqır	taq	suffix(ır)	ety	S
255	Тақыр-тақыр	taqır-taqır	taq	redup, suffix(ır)	ety	S
256	Тақыр-тұқыр	taqır-tuqır	taq, tuq	redup, suffix(ır)	ety	S
257	Таңқ	tangq	tangq		ety	S
258	Таңқ-таңқ	tangq-tangq	tangq	redup	ety	S
259	Таңқ-түңк	tangq-tungq	tangq, tungq	redup	ety	S
260	Тап	tap	tap		ety	S
261	Тап-тап	tap-tap	tap	redup	ety	S
262	Тап-түп	tap-tup	tap, tup	redup	ety	S
263	Тапыр	tapır	tap	suffix(ır)	ety	S
264	Тапыр-тапыр	tapır-tapır	tap	redup, suffix(ır)	ety	S
265	Тапыр-түпыр	tapır-tupır	tap	redup, suffix(ır)	ety	S

266	Тапыр-тұпыр	tapır-tupır	tap, tup	redup, suffix(ır)	ety	S
267	Тарп	tarp	tarp		ety	S
268	Тарп-тарп	tarp-tarp	tarp	redup	ety	S
269	Тарп-тұрп	tarp-turp	tarp, turp	redup	ety	S
270	Тарп-тырп	tarp-tırp	tarp, tırp	redup	ety	S
271	Тарс-тарс	tars-tars	tars	redup	ety	S
272	Тарс-тұрс	tars-turs	tars, turs	redup	ety	S
273	Тарс-күрс	tars-kürs	tars, kürs	redup	ety	S
274	Тарс-торс	tars-tors	tars, tors	redup	ety	S
275	Тарсыл-гүрсіл	tarsıl-gürsil	tars, gürs	redup, suffix(ıl, il)	ety	S
276	Тарсыл-күрсіл	tarsıl-kürsil	tars, kürs	redup, suffix(ıl, il)	ety	S
277	Тарсыл-тұрсыл	tarsıl-tursıl	tars, turs	redup, suffix(ıl)	ety	S
278	Тасыр-тасыр	tasır-tasır	tas	redup, suffix(ır)	ety	S
279	Тасыр-тұсыр	tasır-tusır	tas, tus	redup, suffix(ır)	ety	S
280	Тасыр-түсір	tasır-tüsir	tas, tüs	redup, suffix(ır, ir)	ety	S
281	Тоқ	toq	toq		ety	S
282	Тоқ-тоқ	toq-toq	toq	redup	ety	S
283	Тоқ-тұқ	toq-tuq	toq, tuq	redup	ety	S
284	Томп	tomp	tomp		ety	S
285	Томп-томп	tomp-tomp	tomp	redup	ety	S
286	Тоңқ	tongq	tongq		ety	S
287	Тоңқ-тоңқ	tongq-tongq	tongq	redup	ety	S
288	Топ	top	top		ety	S
289	Топ-топ	top-top	top	redup	ety	S
290	Тұқ	tuq	tuq		ety	S
291	Тұқ-тұқ	tuq-tuq	tuq	redup	ety	S
292	Тік	tik	tik		ety	S
293	Тік-тік	tik-tik	tik	redup	ety	S
294	Тық	tıq	tıq		ety	S
295	Тып	tıp	tıp		ety	S
296	Тыпыр	tıpır-tıpır	tıp	redup, suffix(ır)	ety	S
297	Тыпыр-тыпыр	tıpır-tıpır	tıp	redup, suffix(ır)	ety	S
298	Тыр	tır	tır		ety	S
299	Тыр-тыр	tır-tır	tır	redup	ety	S
300	Тырп	tırp	tırp		(ерпей)	S

301	Тырп-тырп	tırp-tırp	tırp	redup	(басы)	S
302	Тырқ	tırq	tırq		ety	S
303	Тырс-тырс	tırs-tırs	tırs	redup	ety	S
304	Тыс	tıs	tıs		ety	S
305	Тыс-тыс	tıs-tıs	tıs	redup	ety	S
306	Тысыр	tısır	tıs	suffix(ır)	ety	S
307	Тысыр-тысыр	tısır-tısır	tıs	redup, suffix(ır)	ety	S
308	Шақ	shaq	shaq		ety	S
309	Шақ-шүқ	shaq-shuq	shaq, shuq	redup	ety	S
310	Шақыр	shaqır	shaq	suffix(ır)	ety	S
311	Шақыр-шақыр	shaqır-shaqır	shaq	redup, suffix(ır)	ety	S
312	Шақыр-шүқыр	shaqır-shuqır	shaq, shuq	redup, suffix(ır)	ety	S
313	Шалдыр	shaldır	shald	suffix(ır)	ety	S
314	Шалдыр-шалдыр	shaldır-shaldır	shald	redup, suffix(ır)	ety	S
315	Шалдыр-шүлдыр	shaldır-shuldır	shald, shuld	redup, suffix(ır)	ety	S
316	Шалп	shalp	shalp		ety	S
317	Шалп-шалп	shalp-shalp	shalp	redup	ety	S
318	Шалп-шүлп	shalp-shulp	shalp, shulp	redup	ety	S
319	Шалп-шылп	shalp-shılp	shalp, shılp	redup	ety	S
320	Шаңғыр	shangghır	shanggh	suffix(ır)	ety	S
321	Шаңғыр-шаңғыр	shangghır-shangghır	shangh	redup, suffix(ır)	ety	S
322	Шарт	shart	shart		ety	S
323	Шарт-шарт	shart-shart	shart	redup	ety	S
324	Шарт-шүрт	shart-shurt	shart, shurt	redup	ety	S
325	Шарт-сүрт	shart-surt	shart, surt	redup	ety	S
326	Шатыр	shatır	shat	suffix(ır)	ety	S
327	Шатыр-шатыр	shatır-shatır	shat	redup, suffix(ır)	ety	S
328	Шатыр-шүтыр	shatır-shutır	shat, shut	redup, suffix(ır)	ety	S
329	Шап-шүп	shap-shup	shap, shup	redup	ety	S
330	Шолп	sholp	sholp		ety	S
331	Шолп-шолп	sholp-sholp	sholp	redup	ety	S
332	Шор	shor	shor		ety	S
333	Шор-шор	shor-shor	shor	redup	ety	S

334	Шор-шүр	shor-shur	shor, shur	redup	ety	S
335	Шорт	short	short		ety	S
336	Шорт-шорт	short-short	short	redup	(үзілу)	S
337	Шоп	shop	shop		ety	S
338	Шоп-шоп	shop-shop	shop	redup	ety	S
339	Шөлп	shölp	sholp		ety	S
340	Шүр	shur	shur		ety	S
341	Шүр-шүр	shur-shur	shur	redup	ety	S
342	Шүрқ	shurq	shurq		ety	S
343	Шілдір	shildir	shild	suffix(ir)	ety	S
344	Шілдір-шілдір	shildir-shildir	shild	redup, suffix(ir)	ety	S
345	Шыж-шыж	shızh-shızh	shızh	redup	ety	S
346	Шық	shıq	shıq		ety	S
347	Шық-шық	shıq-shıq	shıq	redup	ety	S
348	Шықыр	shıqır	shıq	suffix(ir)	ety	S
349	Шықыр-шықыр	shıqır-shıqır	shıq	redup, suffix(ir)	ety	S
350	Шылдыр	shildir	shild	suffix(ir)	ety	S
351	Шылдыр-шылдыр	shildir-shildir	shild	redup, suffix(ir)	ety	S
352	Шылқ	shılq	shılq		ety	S
353	Шылқ-шылқ	shılq-shılq	shılq	redup	ety	S
354	Шылп	shılp	shılp		ety	S
355	Шылп-шылп	shılp-shılp	shılp	redup	ety	S
356	Шымыр-шымыр	shımır-shımır	shım	redup, suffix(ir)	ety	S
357	Шың-шың	shıng-shıng	shıng	redup	ety	S
358	Шып	shıp	shıp		ety	S
359	Шырт	shırt	shırt		ety	S
360	У-ду	u-du	u, du	redup	ety	S
361	У-шу	u-shu	u, shu	redup	ety	S
362	Ыбыр-дыбыр	ıbır-dıbır	ıb, dıb	redup	ety	S
363	Ыз	ız	ız		ety	S
364	Ыз-ыз	ız-ız	ız	redup	ety	S
365	Ық	ıq	ıq		ety	S
366	Ың	ıng	ıng		ety	S
367	Ың-жың	ıng-zhıng	ıng, zhıng	redup	ety	S
368	Ың-дың	ıng-dıng	ıng, dıng	redup	ety	S

369	Ыс-ыс	is-is	is	redup	ety	S
擬態語						
370	Ағараң-ағараң	agharang-agharang	aghar	redup, suffix(ang)		M
371	Адыраң	adirang	adir	suffix(ang)	қағу	M
372	Адыраң-адыраң	adirang-adirang	adir	redup, suffix(ang)		M
373	Ажыраң	azhirang	azhir	suffix(ang)	қағу	M
374	Ажыраң-ажыраң	azhirang-azhirang	azhir	redup, suffix(ang)		M
375	Ақшаң	aqshang	aqsh	suffix(ang)	қағу	M
376	Ақшаң-ақшаң	aqshang-aqshang	aqsh	redup, suffix(ang)		M
377	Алақ-жалақ	alaq-zhalaq	al, zhal	redup, suffix(aq)		M
378	Алақ-жұлақ	alaq-zhulac	al, zhul	redup, suffix(aq)	ety	M
379	Алаң-жұлаң	alang-zhulang	al, zhul	redup, suffix(ang)	ety	M
380	Алау-жалау	alau-zhalau	al, zhal	redup		M
381	Алау-далау	alau-dalau	al, dal	redup		M
382	Алба-жұлба	alba-zhulba	alb, zhulb	redup	бoly	M
383	Алба-жалба	alba-zhalba	alb, zhalb	redup	бoly	M
384	Албаң-далбаң	albang-dalbang	alb, dalb	redup, suffix(ang)		M
385	Албыр-салбыр	albir-salbir	alb, salb	redup, suffix(ır)		M
386	Апалаң-топалаң	apalang-topalang	ap, top	redup, suffix(ang)		M
387	Апалақ-сапалақ	apalaq-sapalaq	ap, sap	redup, suffix(aq)		M
388	Апалақ-апалақ	apalaq-apalaq	ap	redup, suffix(aq)		M
389	Апыл-тапыл	apıl-tapıl	ap, tap	redup, suffix(ıl)		M
390	Апыл-құпыл	apıl-qupıl	ap, qup	redup, suffix(ıl)		M
391	Апыраң-тапыраң	apırang-tapırang	ap, tap	redup, suffix(ang)		M
392	Апырақ-тапырақ	apıraq-tapıraq	ap, tap	redup, suffix(aq)		M
393	Апыр-топыр	apır-topır	ap, top	redup, suffix(ır)		M
394	Апыр-тапыр	apır-tapır	ap, tap	redup, suffix(ır)		M
395	Апыр-тұпыр	apır-tupır	ap, tup	redup, suffix(ır)		M
396	Арбаң	arbang	arb	suffix(ang)	қағу	M
397	Арбаң-арбаң	arbang-arbang	arb	redup, suffix(ang)	ety	M
398	Арс-күрс	ars-kürs	ars, kürs	redup	ety	M
399	Арсаң	arsang	ars	suffix(ang)	қағу	M
400	Әкрең	äkreng	äkr	suffix(eng)	қағу	M
401	Әкрең-әкрең	äkreng-äkreng	äkr	redup, suffix(eng)	ety	M

402	Әлтек-тәлтек	ältek-tältek	ält, tält	redup, suffix(ek)	ety	M
403	Бағжаң	baghzhang	baghzh	suffix(ang)	ety	M
404	Бағжаң-бағжаң	baghzhang-baghzhang	baghzh	redup, suffix(ang)	ety	M
405	Бадраң-бадраң	badrang-badrang	badr	redup, suffix(ang)	ety	M
406	Бажаң	bazhang	bazh	suffix(ang)	қағу	M
407	Бажаң-бажаң	bazhang-bazhang	bazh	redup, suffix(ang)	ety	M
408	Бажраң	bazhrang	bazhr	suffix(ang)	ety	M
409	Бажраң-бажраң	bazhrang-bazhrang	bazhr	redup, suffix(ang)	ety	M
410	Бақпаң	baqshang	baqsh	suffix(ang)		M
411	Бақпаң-бақпаң	baqshang-baqshang	baqsh	redup, suffix(ang)	ety	M
412	Балпаң	balpang	balp	suffix(ang)	ety	M
413	Балпаң-балпаң	balpang-balpang	balp	redup, suffix(ang)	(басу)	M
414	Бал-бұл	bal-bul	bal, bul	redup		M
415	Балдыр-бұлдыр	baldır-buldir	bald, buld	redup, suffix(ır)		M
416	Без-без	bez-bez	bez	redup	ety	M
417	Безек	bezek	bez	suffix(ek)	қағу	M
418	Безек-безек	bezek-bezek	bez	redup, suffix(ek)	ety	M
419	Бипың	bi:pıng	bi:p	suffix(ıng)	қағу	M
420	Бипың-бипың	bi:pıng-bi:pıng	bi:p	redup, suffix(ıng)	ety	M
421	Бортаң-бортаң	bortang-bortang	bort	redup, suffix(ang)	ety	M
422	Бұдақ-бұдақ	budaq-budaq	bud	redup, suffix(aq)		M
423	Бұлдыр-бұлдыр	buldır-buldir	buld	redup, suffix(ır)		M
424	Бұлғаң	bulghang	bulgh	suffix(ang)	қағу	M
425	Бұлғаң-бұлғаң	bulghang-bulghang	bulgh	redup, suffix(ang)	ety	M
426	Бұлтың	bultıng	bult	suffix(ıng)	ety	M
427	Бұлтың-бұлтың	bultıng-bultıng	bult	redup, suffix(ıng)	ety	M
428	Бұлаң-бұлаң	bulang-bulang	bul	redup, suffix(ang)	ety	M
429	Бұртаң	burtang	burt	suffix(ang)	қағу	M
430	Бұртың	burtıng	burt	suffix(ıng)	қағу	M
431	Бұртаң-бұртаң	burtang-burtang	burt	redup, suffix(ang)	ety	M
432	Бұртың-бұртың	burtıng-burtıng	burt	redup, suffix(ıng)	ety	M
433	Бұртақ-бұртақ	burtaq-burtaq	burt	redup, suffix(aq)	ety	M
434	Бұлың-бұлың	bulıng-bulıng	bul	redup, suffix(ıng)		M
435	Бүгжең	bügzheng	bügzh	suffix(eng)	қағу	M
436	Бүгжең-бүгжең	bügzheng-bügzheng	bügzh	redup, suffix(eng)	ety	M

437	Бүкең	bükeng	bük	suffix(eng)	қағу	M
438	Бүкең-бүкең	bükeng-bükeng	bük	redup, suffix(eng)	ету	M
439	Бүкшең	büksheng	büksh	suffix(eng)	қағу	M
440	Бүкшең-бүкшең	büksheng-büksheng	büksh	redup, suffix(eng)	ету	M
441	Бүлк	bülk	bülk		ету	M
442	Бүлкек	bülkek	bülk	suffix(ek)	қағу	M
443	Бүлкек-бүлкек	bülkek-bülkek	bülk	redup, suffix(ek)	ету	M
444	Бүрсең	bürseng	bürs	suffix(eng)	қағу	M
445	Бүрсең-бүрсең	bürseng-bürseng	bürs	redup, suffix(eng)	ету	M
446	Былаң	bilang	bil	suffix(ang)	қағу	M
447	Былаң-былаң	bilang-bilang	bil	redup, suffix(ang)		M
448	Былғаң	bilghang	bilgh	suffix(ang)	қағу	M
449	Былғаң-былғаң	bilghang-bilghang	bilgh	redup, suffix(ang)	ету	M
450	Былғалаң	bilghalang	bilgh	suffix(alang)	қағу	M
451	Былғалаң-былғалаң	bilghalang-bilghalang	bilgh	redup, suffix(alang)	ету	M
452	Былғақ-былғақ	bilghaq-bilghaq	bilgh	redup, suffix(aq)	ету	M
453	Былп	bilp	bilp		ету	M
454	Былп-былп	bilp-bilp	bilp	redup	ету	M
455	Былқ-былқ	bilq-bilq	bilq	redup	ету	M
456	Быт-быт	bit-bit	bit	redup		M
457	Быт-шыт	bit-shit	bit, shit	redup	бoly	M
458	Гүл-гүл	gül-gül	gül	redup		M
459	Дал-дал	dal-dal	dal	redup	бoly	M
460	Дал-дүл	dal-dul	dal, dul	redup	бoly	M
461	Далаң	dalang	dal	suffix(ang)	қағу	M
462	Далаң-далаң	dalang-dalang	dal	redup, suffix(ang)		M
463	Далаң-дүлаң	dalang, dulang	dal, dul	redup, suffix(ang)		M
464	Далақ-далақ	dalaq-dalaq	dal	redup, suffix(aq)		M
465	Далақ-дүлақ	dalaq-dulaq	dal, dul	redup, suffix(aq)		M
466	Дала-дала	dala-dala	dal	redup		M
467	Далба-далба	dalba-dalba	dalb	redup	бoly	M
468	Далдаң-далдаң	daldang-daldang	dald	redup, suffix(ang)	ету	M
469	Далдың-дүлдың	daldıng-duldıng	dald, duld	redup, suffix(ıng)	ету	M
470	Дардаң	dardang	dard	suffix(ang)	қағу	M
471	Дардаң-дардаң	dardang-dardang	dard	redup, suffix(ang)		M

472	Дардан-дұрдаң	dardang-durdang	dard, durd	redup, suffix(ang)	ету	M
473	Делең-делең	deleng-deleng	del	redup, suffix(eng)	ету	M
474	Делбең	derbeng	derb	suffix(eng)	қағу	M
475	Делбең-делбең	delbeng-delbeng	delb	redup, suffix(eng)		M
476	Делдең	deldeng	deld	suffix(eng)	қағу	M
477	Делдең-делдең	deldeng-deldeng	deld	redup, suffix(eng)	ету	M
478	Дода-дода	doda-doda	dod	redup	бoly	M
479	Дікің	diking	dik	suffix(ing)	қағу	M
480	Дікің-дікің	diking-diking	dik	redup, suffix(ing)	ету	M
481	Діңк-діңк	dingk-dingk	dingk	redup	ету	M
482	Дір-дір	dir-dir	dir	redup	ету	M
483	Дірдек	dirdek	dird	suffix(ek)	қағу	M
484	Дірдек-дірдек	dirdek-dirdek	dird	redup, suffix(ek)	ету	M
485	Дірдең	dirdeng	dird	suffix(eng)	қағу	M
486	Дірдең-дірдең	dirdeng-dirdeng	dird	redup, suffix(eng)	ету	M
487	Ежірең	ezhireng	ezhir	suffix(eng)	қағу	M
488	Ежірең-ежірең	ezhireng-ezhireng	ezhr	redup, suffix(eng)	ету	M
489	Елбелек	elbelek	elb	suffix(elek)	қағу	M
490	Елбелек-елбелек	elbelek-elbelek	elb	redup, suffix(elek)	ету	M
491	Елбелең	elbeleng	elb	suffix(eleng)	қағу	M
492	Елбелең-елбелең	elbeleng-elbeleng	elb	redup, suffix(eleng)	ету	M
493	Елбең-елбең	elbeng-elbeng	elb	redup, suffix(eng)	ету	M
494	Елең	eleng	el	suffix(eng)	ету	M
495	Елең-селең	eleng-seleng	el, sel	redup, suffix(eng)	ету	M
496	Елп	elp	elp		ету	M
497	Елп-елп	elp-elp	elp	redup	ету	M
498	Елпең	elpeng	elp	suffix(eng)	қағу	M
499	Елпең-елпең	elpeng-elpeng	elp	redup, suffix(eng)	ету	M
500	Еңк-еңк	engk-engk	engk	redup	ету	M
501	Ербең	erbeng	erb	suffix(eng)	ету	M
502	Ербең-ербең	erbeng-erbeng	erb	redup, suffix(eng)	ету	M
503	Ербең-сербең	erbeng-serbeng	erb, serb	redup, suffix(eng)	ету	M
504	Жайраң	zhajrang	zhajr	suffix(ang)	қағу	M
505	Жайраң-жайраң	zhajrang-zhajrang	zhajr	redup, suffix(ang)	ету	M
506	Жайқаң	zhajqang	zhajq	suffix(ang)	қағу	M

507	Жайқаң-жайқаң	zhajqang-zhajqang	zhajq	redup, suffix(ang)	еуу	M
508	Жалақ	zhalaq	zhal	suffix(aq)	қағу	M
509	Жалақ-жалақ	zhalaq-zhalaq	zhal	redup, suffix(aq)	бoly	M
510	Жалақ-жұлақ	zhalaq-zhulaq	zhal, zhul	redup, suffix(aq)	еуу	M
511	Жалаң	zhalang	zhal	suffix(ang)	қағу	M
512	Жалаң-жұлаң	zhalang-zhalang	zhal	redup, suffix(ang)		M
513	Жалба-жалба	zhalba-zhalba	zhalba	redup	бoly	M
514	Жалба-жұлба	zhalba-zhulba	zhalba, zhulba	redup		M
515	Жалбақ	zhalbaq	zhalb	suffix(aq)	қағу	M
516	Жалбаң	zhalbang	zhalb	suffix(ang)	қағу	M
517	Жалбаң-жалбаң	zhalbang-zhalbang	zhalb	redup, suffix(ang)	еуу	M
518	Жалбаң-жұлбаң	zhalbang-zhulbang	zhalb, zhulb	redup, suffix(ang)	еуу	M
519	Жалт-жұлт	zhalt-zhult	zhalt, zhult	redup	еуу	M
520	Жалтақ	zhaltaq	zhalt	suffix(aq)	қағу	M
521	Жалтақ-жұлтақ	zhaltaq-zhultaq	zhalt	redup, suffix(aq)	еуу	M
522	Жалтақ-жалтақ	zhaltaq-zhaltaq	zhalt	redup, suffix(aq)	еуу	M
523	Жалтаң	zhaltang	zhalt	suffix(ang)	қағу	M
524	Жалтаң-жалтаң	zhaltang-zhaltang	zhalt	redup, suffix(ang)	еуу	M
525	Жалтаң-жұлтаң	zhaltang-zhultang	zhalt, zhult	redup, suffix(ang)	еуу	M
526	Жалмаң	zhalmang	zhalm	suffix(ang)	қағу	M
527	Жалмаң-жалмаң	zhalmang-zhalmang	zhalm	redup, suffix(ang)	еуу	M
528	Жампаң	zhampang	zhamp	suffix(ang)	қағу	M
529	Жампаң-жүмпаң	zhampang-zhumpang	zhamp, zhump	redup, suffix(ang)	еуу	M
530	Жарбаң-жарбаң	zharbang-zharbang	zharb	redup, suffix(ang)	еуу	M
531	Жарқ	zharq	zharq		еуу	M
532	Жарқ-жарқ	zharq-zharq	zharq	redup	еуу	M
533	Жарқ-жүрқ	zharq-zhurq	zharq, zhurq	redup	еуу	M
534	Жаутаң	zhautang	zhaut	suffix(ang)	қағу	M
535	Жаутаң-жаутаң	zhautang-zhautang	zhaut	redup, suffix(ang)	еуу	M
536	Желең-желең	zheleng-zheleng	zhel	redup, suffix(eng)	еуу	M
537	Желбең	zhelbeng	zhelb	suffix(eng)	қағу	M

538	Желбең-желбең	zhelbeng-zhelbeng	zhelb	redup, suffix(eng)	ety	M
539	Желп	zhelp	zhelp		ety	M
540	Желк-желк	zhelk-zhelk	zhelk	redup	ety	M
541	Жұлма-жұлма	zhulma-zhulma	zhulm	redup		M
542	Жұлым-жұлым	zhulim-zhulim	zhul	redup, suffix(im)		M
543	Жыбыр-жыбыр	zhıbir-zhıbir	zhıb	redup, suffix(ir)	ety	M
544	Жылп	zhılp	zhılp		ety	M
545	Жылп-жылп	zhılp-zhılp	zhılp	redup	ety	M
546	Жылпың	zhılpıng	zhılp	suffix(ıng)	қағу	M
547	Жылпың-жылпың	zhılpıng-zhılpıng	zhılp	redup, suffix(ıng)	ety	M
548	Жылмаң	zhılmang	zhılm	suffix(ang)	қағу	M
549	Жылмаң-жылмаң	zhılmang-zhılmang	zhılm	redup, suffix(ang)	ety	M
550	Жылмың-жылмың	zhılmıng-zhılmıng	zhılm	redup, suffix(ıng)	ety	M
551	Жылт	zhılt	zhılt		ety	M
552	Жылт-жылт	zhılt-zhılt	zhılt	redup	ety	M
553	Жылтың-жылтың	zhıltıng-zhıltıng	zhılt	redup, suffix(ıng)	ety	M
554	Жымың	zhıming	zhım	suffix(ıng)	қағу	M
555	Жымың-жымың	zhıming-zhıming	zhım	redup, suffix(ıng)	ety	M
556	Жым-жырт	zhım-zhırt	zhım, zhırt	redup		M
557	Жып	zhıp	zhıp		беру	M
558	Жып-жып	zhıp-zhıp	zhıp	redup	ety	M
559	Жыпың	zhıpıng	zhıp	suffix(ıng)	ety	M
560	Жыпық-жыпық	zhıpıq-zhıpıq	zhıp	redup, suffix(ıq)	ety	M
561	Жыпың-жыпың	zhıpıng-zhıpıng	zhıp	redup, suffix(ıng)	ety	M
562	Жыпылық	zhıpılıq	zhıp	suffix(ılıq)	қағу	M
563	Жыпылық-жыпылы қ	zhıpılıq-zhıpılıq	zhıp	redup, suffix(ılıq)	ety	M
564	Жырқ	zhırq	zhırq		ety	M
565	Жырқ-жырқ	zhırq-zhırq	zhırq	redup	ety	M
566	Жыртаң	zhırtang	zhırt	suffix(ang)	қағу	M
567	Жыртаң-жыртаң	zhırtang-zhırtang	zhırt	redup, suffix(ang)	ety	M
568	Жыртақ-жыртақ	zhırtaq-zhırtaq	zhırt	redup, suffix(aq)	ety	M
569	Жыртың	zhırting	zhırt	suffix(ıng)	қағу	M
570	Жыртың-жыртың	zhırting-zhırting	zhırt	redup, suffix(ıng)	ety	M
571	Жырым-жырым	zhırım-zhırım	zhır	redup, suffix(im)	ety	M

572	Зымп	zımp	zımp		беру	M
573	Зып	zıp	zıp		беру	M
574	Ирең	iːreng	iːr	suffix(eng)	қағу	M
575	Ирең-ирең	iːreng-iːreng	iːr	redup, suffix(eng)		M
576	Ирелең	iːreleng	iːr	suffix(eleng)	қағу	M
577	Ирелең-ирелең	iːreleng-iːreleng	iːr	redup, suffix(eleng)		M
578	Ирек-ирек	iːrek-iːrek	iːr	redup, suffix(ek)		M
579	Иір-иір	iːir-iːir	iːir	redup		M
580	Кекең	kekeng	kek	suffix(eng)	қағу	M
581	Кекең-сикең	kekeng-siːkeng	kek, siːk	redup, suffix(eng)	ету	M
582	Кекжең	kekzheng	kekzh	suffix(eng)	қағу	M
583	Кекжең-кекжең	kekzheng-kekzheng	kekzh	redup, suffix(eng)	ету	M
584	Кемсең	kemseng	kems	suffix(eng)	қағу	M
585	Кемсең-кемсең	kemseng-kemseng	kems	redup, suffix(eng)	ету	M
586	Кердең	kerdeng	kerd	suffix(eng)	қағу	M
587	Кердең-кердең	kerdeng-kerdeng	kerd	redup, suffix(eng)	ету	M
588	Китің	kiːting	kiːt	suffix(ing)	қағу	M
589	Күйбең	küjbeng	küjb	suffix(eng)	қағу	M
590	Күйбең-күйбең	küjbeng-küjbeng	küjb	redup, suffix(eng)	ету	M
591	Күйгелек-күйгелек	küjgelek-küjgelek	küjg	redup, suffix(elek)	ету	M
592	Күйгелең-күйгелең	küjgeleng-küjgeleng	küjg	redup, suffix(eleng)	ету	M
593	Күлмең	külmeng	külm	suffix(eng)	қағу	M
594	Күлмең-күлмең	külmeng-külmeng	külm	redup, suffix(eng)		M
595	Күлім	külim	kül	suffix(im)	қағу	M
596	Күлім-күлім	külim-külim	kül	redup, suffix(im)	ету	M
597	Күлің-күлің	küling-küling	kül	redup, suffix(ing)	ету	M
598	Кіжің	kizhing	kizh	suffix(ing)	қағу	M
599	Кіжің-кіжің	kizhing-kizhing	kizh	redup, suffix(ing)	ету	M
600	Кілк	kilk	kilk		ету	M
601	Кілк-кілк	kilk-kilk	kilk	redup	ету	M
602	Кірбің	kirbing	kirb	suffix(ing)	қағу	M
603	Кірбең-кірбең	kirbeng-kirbeng	kirb	redup, suffix(eng)	ету	M
604	Кіржің	kirzhing	kirzh	suffix(ing)	қағу	M
605	Кіржің-кіржің	kirzhing-kirzhing	kirzh	redup, suffix(ing)	ету	M
606	Қаздаң	qazdang	qazd	suffix(ang)	(басу)	M

607	Қаздан-қаздан	qazdang-qazdang	qazd	redup, suffix(ang)	егу	M
608	Қайқаң	qajqang	qajq	suffix(ang)	қағу	M
609	Қайпаң	qajpang	qajp	suffix(ang)	қағу	M
610	Қайпаң-қайпаң	qajpang-qajpang	qajp	redup, suffix(ang)	егу	M
611	Қайпаң-құйпаң	qajpang-qujpang	qajp, qujp	redup, suffix(ang)	егу	M
612	Қайнаң	qainang	qajn	suffix(ang)	қағу	M
613	Қайнаң-қайнаң	qainang-qainang	qajn	redup, suffix(ang)		M
614	Қайнаң-құйнаң	qainang-qujnang	qajn, qujn	redup, suffix(ang)		M
615	Қақаң	qaqang	qaq	suffix(ang)	қағу	M
616	Қақаң-қақаң	qaqang-qaqang	qaq	redup, suffix(ang)		M
617	Қақшаң	qaqshang	qaqsh	suffix(ang)	қағу	M
618	Қалт	qalt	qalt		егу	M
619	Қалт-қалт	qalt-qalt	qalt	redup		M
620	Қалтаң-қалтаң	qaltang-qaltang	qalt	redup, suffix(ang)		M
621	Қалтаң-құлтаң	qaltang-qultang	qalt, qult	redup, suffix(ang)		M
622	Қалш-қалш	qalsh-qalsh	qalsh	redup	егу	M
623	Қалш-құлш	qalsh-qulsh	qalsh, qulsh	redup	егу	M
624	Қанғалақ-қанғалақ	qangghalaq-qangghalaq	qanggh	redup, suffix(alaq)	егу	M
625	Қараң-қараң	qarang-qarang	qar	redup, suffix(ang)	егу	M
626	Қараң-құраң	qarang-qurang	qar, qur	redup, suffix(ang)	егу	M
627	Қарбаң-қарбаң	qarbang-qarbang	qarb	redup, suffix(ang)	егу	M
628	Қаузаң-қаузаң	qauzhang-qauzhang	qauzh	redup, suffix(ang)	егу	M
629	Қиқаң	qi:qang	qi:q	suffix(ang)	қағу	M
630	Қиқаң-қиқаң	qi:qang-qi:qang	qi:q	redup, suffix(ang)	егу	M
631	Қиқаң-сиқаң	qi:qang-si:qang	qi:q, si:q	redup, suffix(ang)	егу	M
632	Қиқа-жиқа	qi:qa-zhi:qa	qi:q, zhi:q	redup		M
633	Қиқа-сиқа	qi:qa-si:qa	qi:q, si:q	redup		M
634	Қиқы-жиқы	qi:q1-zhi:q1	qi:q, zhi:q	redup		M
635	Қипақ	qi:paq	qi:p	suffix(aq)	қағу	M
636	Қипақ-қипақ	qi:paq-qi:paq	qi:p	redup, suffix(aq)	егу	M
637	Қипақ-сипақ	qi:paq-si:paq	qi:p, si:p	redup, suffix(aq)	егу	M
638	Қипаң	qi:pang	qi:p	suffix(ang)	қағу	M
639	Қипаң-қипаң	qi:pang-qi:pang	qi:p	redup, suffix(ang)		M
640	Қипың	qi:ping	qi:p	suffix(ing)	қағу	M

641	Қипың-қипың	qi·ping-qi·ping	qi·p	redup, suffix(ing)		M
642	Қираң	qi·rang	qi·r	suffix(ang)	қағу	M
643	Қираң-қираң	qi·rang-qi·rang	qi·r	redup, suffix(ang)		M
644	Қиралаң	qi·ralang	qi·r	suffix(alang)	қағу	M
645	Қиралаң-қиралаң	qi·ralang-qi·ralang	qi·r	redup, suffix(alang)	ету	M
646	Қисаң	qi·sang	qi·s	suffix(ang)	ету	M
647	Қисалаң	qi·salang	qi·s	suffix(alang)	ету	M
648	Қитiң-қитiң	qi·ting-qi·ting	qi·t	redup, suffix(ing)	ету	M
649	Қодаң	qodang	qod	suffix(ang)	қағу	M
650	Қодаң-қодаң	qodang-qodang	qod	redup, suffix(ang)	ету	M
651	Қодыраң	qodirang	qod	suffix(ang)	қағу	M
652	Қодыраң-қодыраң	qodirang-qodirang	qod	redup, suffix(ang)	ету	M
653	Қожаң	qozhang	qozh	suffix(ang)	қағу	M
654	Қожаң-қожаң	qozhang-qozhang	qozh	redup, suffix(ang)	ету	M
655	Қожақ-қожақ	qozhaq-qozhaq	qozh	redup, suffix(aq)	ету	M
656	Қожалақ-қожалақ	qozhalaq-qozhalaq	qozh	redup, suffix(alaq)	ету	M
657	Қожыраң-қожыраң	qozhirang-qozhirang	qozh	redup, suffix(ang)	ету	M
658	Қойқаң	qojqang	qojq	suffix(ang)	қағу	M
659	Қойқаң-қойқаң	qojqang-qojqang	qojq	redup, suffix(ang)	ету	M
660	Қоқаң	qoqang	qoq	suffix(ang)	қағу	M
661	Қоқыраң	qoqirang	qoq	suffix(ang)	қағу	M
662	Қолбаң	qolbang	qolb	suffix(ang)	қағу	M
663	Қолбаң-қолбаң	qolbang-qolbang	qolb	redup, suffix(ang)	қағу	M
664	Қомп-қомп	qomp-qomp	qomp	redup	ету	M
665	Қомпаң	qompang	qomp	suffix(ang)	ету	M
666	Қомпаң-қомпаң	qompang-qompang	qomp	redup, suffix(ang)	ету	M
667	Қомпаң-құмпың	qompang-qumping	qomp, qump	redup, suffix(ang, ing)	ету	M
668	Қопақ	qopaq	qop	suffix(aq)	ету	M
669	Қопақ-қопақ	qopaq-qopaq	qop	redup, suffix(aq)	ету	M
670	Қопаң	qopang	qop	suffix(ang)	ету	M
671	Қопаң-қопаң	qopang-qopang	qop	redup, suffix(ang)	ету	M
672	Қорбаң	qorbang	qorb	suffix(ang)	қағу	M
673	Қорбаң-қорбаң	qorbang-qorbang	qorb	redup, suffix(ang)	ету	M
674	Қорбалаң	qorbalang	qorb	suffix(alang)	қағу	M

675	Қорбалаң-қорбалаң	qorbalang-qorbalan	qorb	redup, suffix(alang)	ety	M
676	Қоржаң	qorzhang	qorz	suffix(ang)	қағу	M
677	Қоржаң-қоржаң	qorzhang-qorzhang	qorz	redup, suffix(ang)	ety	M
678	Қорсаң	qorsang	qors	suffix(ang)	ety	M
679	Қорсаң-қорсаң	qorsang-qorsang	qors	redup, suffix(ang)	ety	M
680	Қолқ-қолқ	qolq-qolq	qolq	redup	ety	M
681	Қолп-қолп	qolp-qolp	qolp	redup	ety	M
682	Қолпаң-қолпаң	qolpang-qolpang	qolp	redup, suffix(ang)	ety	M
683	Құйтың	qujting	qujt	suffix(ing)	қағу	M
684	Құж-құж	quzh-quzh	quzh	redup		M
685	Құтың	qutting	qut	suffix(ing)	қағу	M
686	Құтың-құтың	qutting-qutting	qut	redup, suffix(ing)	ety	M
687	Құржаң	qurzhang	qurzh	suffix(ang)	қағу	M
688	Құржаң-құржаң	qurzhang-qurzhang	qurzh	redup, suffix(ang)	ety	M
689	Құржың	qurzhing	qurzh	suffix(ing)	қағу	M
690	Құржың-құржың	qurzhing-qurzhing	qurzh	redup, suffix(ing)	ety	M
691	Құнжың	qunzhing	qunzh	suffix(ing)	қағу	M
692	Құнжың-құнжың	qunzhing-qunzhing	qunzh	redup, suffix(ing)	ety	M
693	Қыбыжық	qibizhiq	qibizh	suffix(iq)	қағу	M
694	Қыбыжың-қыбыжың	qibizhing-qibizhing	qibizh	redup, suffix(ing)		M
695	Қыржың	qurzhing	qurzh	suffix(ing)	ety	M
696	Қыбыр-қыбыр	qibir-qibir	qib	redup, suffix(ir)	ety	M
697	Қыбыр-жыбыр	qibir-zhıbir	qib, zhıb	redup, suffix(ir)	ety	M
698	Қыбыр-сыбыр	qibir-sıbir	qib, sıb	redup, suffix(ir)	ety	M
699	Қыдың	qıding	qıd	suffix(ing)	ety	M
700	Қыдың-қыдың	qıding-qıding	qıd	redup, suffix(ing)	ety	M
701	Қылжаң	qılzhang	qılzh	suffix(ang)	ety	M
702	Қылжаң-қылжаң	qılzhang-qılzhang	qılzh	redup, suffix(ang)		M
703	Қылжаң-қылжың	qılzhang-qılzhing	qılzh	redup, suffix(ang, ing)	ety	M
704	Қылжақ-қылжақ	qılzhaq-qılzhaq	qılzh	redup, suffix(aq)	ety	M
705	Қылқың	qılqing	qılq	suffix(ing)	ety	M
706	Қылқың-қылқың	qılqing-qılqing	qılq	redup, suffix(ing)	ety	M
707	Қылп-қылп	qılp-qılp	qılp	redup	ety	M
708	Қылпың-қылпың	qılping-qılping	qılp	redup, suffix(ing)		M

744	Мылжа-мылжа	milzha-milzh	milzh	redup	бoly	M
745	Мылжың-мылжың	milzhing-milzhing	milzh	redup, suffix(ing)	ety	M
746	Мыңғыр	mingghir	minggh	suffix(ir)		M
747	Мыңғыр-мыңғыр	mingghir-mingghir	minggh	redup, suffix(ir)	бoly	M
748	Мыртың-мыртың	mirting-mirting	mirt	redup, suffix(ing)	ety	M
749	Ожыраң	ozhirang	ozhir	suffix(ang)	ety	M
750	Ожыраң-ожыраң	ozhirang-ozhirang	ozhir	redup, suffix(ang)	ety	M
751	Одыраң	odirang	odir	suffix(ang)	қағу	M
752	Ойпаң-тойпаң	ojpang-tojpang	ojp, tojp	redup, suffix(ang)	бoly	M
753	Оқыраң	oqirang	oqir	suffix(ang)	қағу	M
754	Оқыраң-оқыраң	oqirang-oqirang	oqir	redup, suffix(ang)	ety	M
755	Олбыр-солбыр	olbir-solbir	olb, solb	redup, suffix(ir)	бoly	M
756	Опай-топай	opaj-topaj	op, top	redup		M
757	Опалаң-топалаң	opalang-topalang	op, top	redup, suffix(alang)		M
758	Опыр-топыр	opir-topir	op, top	redup, suffix(ir)		M
759	Ордаң-ордаң	ordang-ordang	ord	redup, suffix(ang)	ety	M
760	Өкрең-өкрең	ökrenng-ökrenng	ökr	redup, suffix(eng)	ety	M
761	Өңк-өңк	öngk-öngk	öngk	redup	ety	M
762	Өрім-өрім	örim-örim	ör	redup, suffix(im)	бoly	M
763	Салбаң-салбаң	salbang-salbang	salb	redup, suffix(ang)	ety	M
764	Салбаң-сұлбаң	salbang-sulbang	salb, sulb	redup, suffix(ang)	ety	M
765	Сабалақ	sabalaq	sab	suffix(aq)		M
766	Сабалақ-сабалақ	sabalaq-sabalaq	sab	redup, suffix(alaq)		M
767	Сабалаң-сабалаң	sabalang-sabalang	sab	redup, suffix(alang)		M
768	Сал-сал	sal-sal	sal	redup	бoly	M
769	Салпаң	salpang	salp	suffix(ang)		M
770	Салпаң-сұлпаң	salpang-sulpang	salp, sulp	redup, suffix(ang)	ety	M
771	Салпақ	salpaq	salp	suffix(aq)		M
772	Салтаң	saltang	salt	suffix(ang)		M
773	Салтаң-салтаң	saltang-saltang	salt	redup, suffix(ang)	ety	M
774	Салқам-салқам	salqam-salqam	salq	redup, suffix(am)	бoly	M
775	Сатпақ	satpaq	satp	suffix(aq)		M
776	Сатпақ-сатпақ	satpaq-satpaq	satp	redup, suffix(aq)		M
777	Сауыс	sauis	sauis			M
778	Сауыс-сауыс	sauis-sauis	sauis	redup		M

779	Секең	sekeng	sek	suffix(eng)	қағу	M
780	Секең-секең	sekeng-sekeng	sek	redup, suffix(eng)	ету	M
781	Секек	sekek	sek	suffix(ek)	қағу	M
782	Секек-секек	sekek-sekek	sek	redup, suffix(ek)	ету	M
783	Селк	selk	selk		ету	M
784	Селк-селк	selk-selk	selk	redup	ету	M
785	Селтең	selteng	selt	suffix(eng)	қағу	M
786	Селтең-селтең	selteng-selteng	selt	redup, suffix(eng)	ету	M
787	Селтек	seltek	selt	suffix(ek)	қағу	M
788	Селтек-селтек	seltek-seltek	selt	redup, suffix(ek)	ету	M
789	Серең	sereng	ser	suffix(eng)	ету	M
790	Сербең-сербең	serbeng-serbeng	serb	redup, suffix(eng)	ету	M
791	Сипақ	si:paq	si:p	suffix(aq)	қағу	M
792	Сипақ-сипақ	si:paq-si:paq	si:p	redup, suffix(aq)	ету	M
793	Сипаң	si:pang	si:p	suffix(ang)	қағу	M
794	Сипалаң-сипалаң	si:palaq-si:palaq	si:p	redup, suffix(alaq)	ету	M
795	Сидаң-сидаң	si:dang-si:dang	si:d	redup, suffix(ang)	ету	M
796	Сойдаң-сойдаң	sojdang-sojdang	sojd	redup, suffix(ang)	ету	M
797	Солаң	solang	sol	suffix(ang)	ету	M
798	Солаң-солаң	solang-solang	sol	redup, suffix(ang)	ету	M
799	Солқ	solq	solq		ету	M
800	Солп-солп	solp-solp	solp	redup	ету	M
801	Солп-сүлп	solp-sulp	solp, sulp	redup	ету	M
802	Солпаң	solpang	solp	suffix(ang)	ету	M
803	Солпаң-солпаң	solpang-solpang	solp	redup, suffix(ang)	ету	M
804	Сопаң	sopang	sop	suffix(ang)	ету	M
805	Сопаң-сопаң	sopang-sopang	sop	redup, suffix(ang)	ету	M
806	Сөлең	söleңg	söl	suffix(eng)	ету	M
807	Сөлең-сөлең	söleңg-söleңg	söl	redup, suffix(eng)	ету	M
808	Сөлпең-сөлпең	sölpeng-sölpeng	sölp	redup, suffix(eng)	ету	M
809	Сөлпек-сөлпек	sölpek-sölpek	sölp	redup, suffix(ek)	ету	M
810	Сөмпең-сөмпең	sömpeng-sömpeng	sömp	redup, suffix(eng)	ету	M
811	Сумаң	sumang	sum	suffix(ang)	қағу	M
812	Сумаң-сумаң	sumang-sumang	sum	redup, suffix(ang)	ету	M
813	Сұстаң	sustang	sust	suffix(ang)		M

814	Сұстаң-сұстаң	sustang-sustang	sust	redup, suffix(ang)	ету	M
815	Сүйрең	sujreng	sujr	suffix(eng)	ету	M
816	Сүме-сүме	süme-süme	süm	redup	болу	M
817	Сүмең	sümeng	süm	suffix(eng)	қағу	M
818	Сүмең-сүмең	sümeng-sümeng	süm	redup, suffix(eng)	ету	M
819	Сүмелең	sümeleng	süm	suffix(eleng)	қағу	M
820	Сүмелең-сүмелең	sümleng-sümleng	süm	redup, suffix(eng)	ету	M
821	Сылаң	sılang	sıl	suffix(ang)	қағу	M
822	Сылт	sılt	sılt		ету	M
823	Сылт-сылт	sılt-sılt	sılt	redup	ету	M
824	Сылтың	sılting	sılt	suffix(ing)		M
825	Сылтың-сылтың	sılting-sılting	sılt	redup, suffix(ing)	ету	M
826	Сылпың-сылпың	sılping-sılping	sılp	redup, suffix(ing)	ету	M
827	Сымп	sımp	sımp		ету	M
828	Сымпың	sımping	sımp	suffix(ing)	қағу	M
829	Сымпың-сымпың	sımping-sımping	sımp	redup, suffix(ing)	ету	M
830	Сып	sıp	sıp		беру	M
831	Сыпсың	sıpsing	sıp	suffix(ing)		M
832	Сыпсың-сыпсың	sıpsing-sıpsing	sıps	redup, suffix(ing)	ету	M
833	Сырғаң-сырғаң	sırghang-sırghang	sırgh	redup, suffix(ang)	ету	M
834	Сырғалаң-сырғалаң	sırghalang-sırghalang	sırgh	redup, suffix(alang)	ету	M
835	Сырдақ	sırdaq	sırd	suffix(aq)	қағу	M
836	Сырдақ-сырдақ	sırdaq-sırdaq	sırd	redup, suffix(aq)	ету	M
837	Сырдаң	sırdang	sırd	suffix(ang)		M
838	Сырдаң-сырдаң	sırdang-sırdang	sırd	redup, suffix(ang)	ету	M
839	Пара-пара	para-para	para	redup	болу	M
840	Пәре-пәре	päre-päre	päre	redup	болу	M
841	Тайтаң	tajtang	tajt	suffix(ang)	қағу	M
842	Тайтаң-тайтаң	tajtang-tajtang	tajt	redup, suffix(ang)	ету	M
843	Тайтаң-тұйтаң	tajtang-tujtang	tajt, tujt	redup, suffix(ang)	ету	M
844	Тайқақ	tajqaq	tajq	suffix(aq)		M
845	Тайқақ-тайқақ	tajqaq-tajqaq	tajq	redup, suffix(aq)	ету	M
846	Тайқаң	tajqang	tajq	suffix(ang)	қағу	M
847	Тайқаң-тайқаң	tajqang-tajqang	tajq	redup, suffix(ang)		M
848	Тайсаң	tajsang	tajs	suffix(ang)	қағу	M

849	Тайсаң-тайсаң	tajsang-tajsang	tajs	redup, suffix(ang)	ety	M
850	Тайпаң	tajpang	tajp	suffix(ang)		M
851	Тайпаң-тайпаң	tajpang-tajpang	tajp	redup, suffix(ang)	ety	M
852	Тайпақ	tajpaq	tajp	suffix(aq)		M
853	Тайпақ-тайпақ	tajpaq-tajpaq	tajp	redup, suffix(aq)	ety	M
854	Тақак	taqaq	taq	suffix(aq)	қағу	M
855	Талтаң	taltang	talt	suffix(ang)	(басу)	M
856	Талтақ	taltaq	talt	suffix(aq)	(басу)	M
857	Тарбаң	tarbang	tarb	suffix(ang)	қағу	M
858	Тарбаң-тарбаң	tarbang-tarbang	tarb	redup, suffix(ang)	ety	M
859	Тарбаң-тырбаң	tarbang-tırbang	tarb	redup, suffix(ang)	ety	M
860	Тарбақ	tarbaq	tarb	suffix(aq)		M
861	Тарбақ-тарбақ	tartaq-tartaq	tart	redup, suffix(aq)	ety	M
862	Тасыраң	tasırang	tasır	suffix(ang)		M
863	Тәй-тәй	täj-täj	täj	redup	(басу)	M
864	Тәлкек	tältek	tält	suffix(ek)		M
865	Тәлкек-тәлкек	tältek-tältek	tält	redup, suffix(ek)	ety	M
866	Тәлтірек	tältirek	tält	suffix(irek)	ety	M
867	Тәлтірек-тәлтірек	tältirek-tältirek	tält	redup, suffix(irek)	ety	M
868	Тепең	tepeng	tep	suffix(eng)	қағу	M
869	Тепек	tepek	tep	suffix(ek)	қағу	M
870	Тепек-тепек	tepek-tepek	tep	redup, suffix(ek)	ety	M
871	Тойпаң	tojpang	tojp	suffix(ang)	қағу	M
872	Тойпаң-тойпаң	tojpang-tojpang	tojp	redup, suffix(ang)	ety	M
873	Тойтаң	tojtang	tojt	suffix(ang)	қағу	M
874	Тойтаң-тойтаң	tojtang-tojtang	tojt	redup, suffix(ang)	ety	M
875	Тоз-тоз	toz-toz	toz	redup	бoly	M
876	Томпаң	tompang	tomp	suffix(ang)	ety	M
877	Торсаң	torsang	tors	suffix(ang)	қағу	M
878	Торсаң-торсаң	torsang-torsang	tors	redup, suffix(ang)	ety	M
879	Тосыраң	tosırang	tosır	suffix(ang)	қағу	M
880	Тосыраң-тосыраң	tosırang-tosırang	tosır	redup, suffix(ang)	ety	M
881	Тұйқы-тұйқы	tujqı-tujqı	tujq	redup		M
882	Тұштаң	tushtang	tusht	suffix(ang)	қағу	M
883	Тұштаң-тұштаң	tushtang-tushtang	tusht	redup, suffix(ang)	ety	M

884	Тұштақ	tushtaq	tusht	suffix(aq)	қағу	M
885	Тұшталаң	tushtalang	tusht	suffix(alang)	қағу	M
886	Тұшталаң-тұшталаң	tushtalang-tushtalang	tusht	redup, suffix(alang)	ету	M
887	Тызылаң-тызалың	tızalang-tızalang	tız	redup, suffix(alang)	ету	M
888	Тызылық-тызалақ	tızalaq-tızalaq	tız	redup, suffix(alaq)	ету	M
889	Тықаң	tıqang	tıq	suffix(ang)		M
890	Тықаң-тықаң	tıqang-tıqang	tıq	redup, suffix(aq)		M
891	Тым-тырақай	tim-tıraqaj			бoly	M
892	Тымпың	tımpıng	tımp	suffix(ıng)	қағу	M
893	Тымпың-тымпың	tımpıng-tımpıng	tımp	redup, suffix(ıng)		M
894	Тыпың	tıpıng	tıp	suffix(ıng)	қағу	M
895	Тыпың-тыпың	tıpıng-tıpıng	tıp	redup, suffix(ıng)	(бacy)	M
896	Тып-типыл	tıp-ti:pıl			бoly	M
897	Тыраң	tırang	tır	suffix(ang)	ету	M
898	Тыраң-тыраң	tırang-tırang	tır	redup, suffix(ang)	ету	M
899	Тыржың	tırzhıng	tırzh	suffix(ıng)	ету	M
900	Тыржың-тыржың	tırzhıng-tırzhıng	tırzh	redup, suffix(ıng)	ету	M
901	Тыржаң	tırzhang	tırzh	suffix(ang)	ету	M
902	Тыржаң-тыржаң	tırzhang-tırzhang	tırzh	redup, suffix(ang)	ету	M
903	Тырбың	tırbing	tırb	suffix(ıng)	ету	M
904	Тырбың-тырбың	tırbing-tırbing	tırb	redup, suffix(ıng)	ету	M
905	Тырбаң	tırbang	tırb	suffix(ang)	қағу	M
906	Тырбалаң	tırbalang	tırb	suffix(alang)	қағу	M
907	Тырбалаң-тырбалаң	tırbalang-tırbalang	tırb	redup, suffix(alang)	ету	M
908	Тыртың	tırtıng	tırt	suffix(ıng)	ету	M
909	Тыртың-тыртың	tırtıng-tırtıng	tırt	redup, suffix(ıng)	ету	M
910	Тыртақ	tırtaq	tırt	suffix(aq)	қағу	M
911	Тыртаң	tırtang	tırt	suffix(ang)		M
912	Тыштаң-тыштаң	tıshang-tıshang	tısh	redup, suffix(ang)	ету	M
913	Тілім-тілім	tilim-tilim	til	redup, suffix(im)		M
914	Ұйпа-тұйпа	ujpa-tujpa	üjp, tūjp	redup	бoly	M
915	Ұйпа-жұйпа	ujpa-zhujpa	üjp, zhūjp	redup	бoly	M
916	Ұйпалақ	ujpalaq	üjp	suffix(alaq)	бoly	M
917	Ұйпалақ-ұйпалақ	ujpalaq-ujpalaq	üjp	redup, suffix(alaq)	бoly	M
918	Ұйқы-тұйқы	ujqı-tujqı	ülq, tūjq	redup	бoly	M

919	Ұбақ-шұбақ	ubaq-shubaq	ub, shub	redup, suffix(aq)		M
920	Ұмар-жұмар	umar-zhumar	um, zhum	redup		M
921	Үйдек-түйдек	üjdek-tüjdek	üjd, tüjd	redup, suffix(ek)		M
922	Үйме-жүйме	üjme-zhüme	üjm, zhüjm	redup		M
923	Үлп	ülp	ülp		ety	M
924	Үлп-үлп	ülp-ülp	ülp	redup	ety	M
925	Үңірең-үңірең	üngireng-üngireng	üngir	redup, suffix(eng)	ety	M
926	Шайқақ	shajqaq	shajq	suffix(aq)		M
927	Шайқақ-шайқақ	shajqaq-shajqaq	shajq	redup, suffix(aq)	ety	M
928	Шайқаң-шайқаң	shajqang-shajqang	shajq	redup, suffix(ang)	ety	M
929	Шайқалаң-шайқала ң	shajqalang-shajqalang	shajq	redup, suffix(alang)	ety	M
930	Шайқалақ-шайқала қ	shajqalaq-shajqalaq	shajq	redup, suffix(alaq)	ety	M
931	Шалқақ	shalqaq	shalq	suffix(aq)		M
932	Шалқақ-шалқақ	shalqaq-shalqaq	shalq	redup, suffix(aq)	ety	M
933	Шалқалақ-шалқала қ	shalqalaq-shalqalaq	shalq	redup, suffix(alaq)	ety	M
934	Шалжақ-шалжақ	shalzhaq-shalzhaq	shalzh	redup, suffix(aq)	ety	M
935	Шалжаң-шалжаң	shalzhang-shalzhang	shalzh	redup, suffix(ang)	ety	M
936	Шап	shap	shap		беру	M
937	Шап-шап	shap-shap	shap	redup		M
938	Шелтең-шелтең	shelteng-shelteng	shelt	redup, suffix(eng)	ety	M
939	Шермең-шермең	shermeng-shermeng	sherm	redup, suffix(eng)		M
940	Шипаң	shi:pang	shi:p	suffix(ang)		M
941	Шипаң-шипаң	shi:pang-shi:pang	shi:p	redup, suffix(ang)		M
942	Шипың	shi:ping	shi:p	suffix(ing)		M
943	Шипың-шипың	shi:ping-shi:ping	shi:p	redup, suffix(ing)	ety	M
944	Шойқаң	shojqang	shojq	suffix(ang)	ety	M
945	Шойқаң-шойқаң	shojqang-shojqang	shojq	redup, suffix(ang)	(басу)	M
946	Шойқалаң	shojqalang	shojq	suffix(alag)		M
947	Шойқалаң-шойқалаң	shojqalang-shojqalang	shojq	redup, suffix(alang)	ety	M
948	Шойқалақ	shojqalaq	shojq	suffix(alaq)		M
949	Шойқалақ-шойқалақ	shojqalaq-shojqalaq	shojq	redup, suffix(alaq)	ety	M
950	Шойнаң	shojnang	shojn	suffix(ang)		M

951	Шойнаң-шойнаң	shojnang-shojnang	shojn	redup, suffix(ang)	ety	M
952	Шойнақ	shojnaq	shojn	suffix(aq)		M
953	Шойнақ-шойнақ	shojnaq-shojnaq	shojn	redup, suffix(aq)	ety	M
954	Шолжаң	sholzhang	sholzh	suffix(ang)		M
955	Шолжаң-шолжаң	sholzhang-sholzhang	sholzh	redup, suffix(ang)	ety	M
956	Шолжақ-шолжақ	sholzhaq-sholzhaq	sholzh	redup, suffix(aq)	ety	M
957	Шолжалаң-шолжал аң	sholzhalang-sholzhalan g	sholzh	redup, suffix(alang)	ety	M
958	Шолжың-шолжың	sholzhing-sholzhing	sholzh	redup, suffix(ing)		M
959	Шолтаң	sholtang	sholt	suffix(ang)	ety	M
960	Шолтаң-шолтаң	sholtang-sholtang	sholt	redup, suffix(ang)	ety	M
961	Шолтың-шолтың	sholtng-sholtng	sholt	redup, suffix(ing)	ety	M
962	Шоқыт-шоқыт	shoqpit-shoqpit		redup	болу	M
963	Шошаң	shoshang	shosh	suffix(ang)	ety	M
964	Шоштақ-шоштақ	shoshtaq-shoshtaq	shosht	redup, suffix(aq)	ety	M
965	Шоштаң-шоштаң	shoshtang-shoshtang	shosht	redup, suffix(ang)	ety	M
966	Шөпшең-шөпшең	shöpsheng-shöpsheng	shopsh	redup, suffix(eng)	ety	M
967	Шөпшің-шөпшің	shöpshing-shöpshing	shopsh	redup, suffix(ing)	ety	M
968	Шұбалаң-шұбалаң	shubalang-shubalang	shub	redup, suffix(alang)	ety	M
969	Шұнаң-шұнаң	shunang-shunang	shun	redup, suffix(ang)	ety	M
970	Шүмең-шүмең	shümeng-shümeng	shüm	redup, suffix(eng)	ety	M
971	Шыбжаң	shibzhang	shibzh	suffix(ang)	қағу	M
972	Шыбжаң-шыбжаң	shibzhang-shibzhang	shibzh	redup, suffix(ang)		M
973	Ыбыр-жыбыр	ıbir-zhibir	ıb, zhib	redup, suffix(ır)		M
974	Ығы-жығы	ıghı-zhıghı	ıgh, zhıgh	redup	болу	M
975	Ылпың	ılpıng	ılp	suffix(ing)	қағу	M
976	Ылпың-ылпың	ılpıng-ılpıng	ılp	redup, suffix(ing)	ety	M
977	Ырбаң	ırbang	ırb	suffix(ang)		M
978	Ырбаң-ырбаң	ırbang-ırbang	ırb	redup, suffix(ang)	ety	M
979	Ырбың	ırbıng	ırb	suffix(ing)		M
980	Ырбың-ырбың	ırbıng-ırbıng	ırb	redup, suffix(ing)	ety	M
981	Ырбың-жырбың	ırbıng-zhirbıng	ırb, zhirb	redup, suffix(ing)	ety	M
982	Ырғаң	ırghang	ırggh	suffix(ang)		M
983	Ырғаң-ырғаң	ırgahng-ırghang	ırggh	redup, suffix(ang)	ety	M
984	Ырғақ-жырғақ	ırghaq-zhirghaq	ırggh, zhirgh	redup, suffix(aq)	ety	M

985	Ыржаң	ırzhang	ırzh	suffix(ang)	қағу	M
986	Ыржаң-ыржаң	ırzhang-ırzhang	ırzh	redup, suffix(ang)	ету	M
987	Ыржаң-тыржаң	ırzhang-tırzhang	ırzh, tırzh	redup, suffix(ang)	ету	M
988	Ыржың	ırzhing	ırzh	suffix(ing)	қағу	M
989	Ыржың-ыржың	ırzhing-ırzhing	ırzh	redup, suffix(ing)	ету	M
990	Ыржақ-ыржақ	ırzhaq-ırzhaq	ırzh	redup, suffix(aq)	ету	M
擬情語						
991	Зырк-зырк	zırq-zırq	zırq	redup	ету	P
992	Селт	selt	selt		ету	P
993	Селт-селт	selt-selt	selt	redup	ету	P
994	Тыз	tız	tız		ету	P
995	Тыз-тыз	tız-tız	tız	redup	ету	P
996	Шым	shım	shım		ету	P
997	Шым-шым	shım-shım	shım	redup	ету	P

【單一多義語】

擬声語						
No.	オノマトペ	派生形	語基	構成要素	統語	VSMP
1	Баж-баж	bazh-bazh	bazh	redup	ety	VV
2	Қарқ-қарқ	qarq-qarq	qarq	redup	ety	VV
3	Саңқ-саңқ	sangq-sangq	sangq	redup	ety	VV
4	Саңқ-сүңқ	sanq-sungq	sangq, sungq	redup	ety	VV
5	Шәңк	shāngk	shangk		ety	VV
6	Шәңк-шәңк	shāngk-shāngk	shangk	redup	ety	VV
7	Шүлдір-шүлдір	shūldir-shūldir	shūld	redup, suffix(ir)	ety	VV
擬音語						
8	Гүр	gür	gür		ety	SS
9	Даң-дүң	dang-dung	dang, dung	redup	ety	SS
10	Пыр-пыр	pır-pır	pır	redup	ety	SS
11	Сылдыр	sıldır	sıld	suffix(ir)	ety	SS
12	Сылдыр-сылдыр	sıldır-sıldır	sıld	redup, suffix(ir)	ety	SS
13	Тық-тық	tıq-tıq	tıq	redup	ety	SS
14	Шолп-шолп	sholp-sholp	sholp	redup	ety	SS
擬態語						
15	Алай-түлей	alaj-tülej	al, tül	redup		MMM
16	Алқам-салқам	alqam-salqam	alq, salq	redup, suffix(am)	бoly	MM
17	Алшаң	alshang	alsh	suffix(ang)	(бacy)	MM
18	Алшаң-алшаң	alshang-alshang	alsh	redup, suffix(ang)	(бacy)	MM
19	Арса-арса	arsa-arsa	ars	redup	бoly	MM
20	Арсаң-арсаң	arsang-arsang	ars	redup, suffix(ang)	ety	MM
21	Арсалаң	arsalang	ars	suffix(alang)	қағу	MM
22	Арсалаң-арсалаң	arsalang-arsalang	ars	redup, suffix(alang)	ety	MM
23	Әлем-жәлем	älem-zhälem	äl, zhäl	redup, suffix(em)	бoly	MMM
24	Байпаң	bajpang	bajp	suffix(ang)	(бacy)	MM

25	Байпаң-байпаң	bajpang-bajpang	bajp	redup, suffix(ang)	ety	MM
26	Бәйек	bäjek	bäj	suffix(ek)		MM
27	Бәйек-бәйек	bäjek-bäjek	bäj	redup, suffix(ek)		MM
28	Бәйпек	bäjpek	bäjp	suffix(ek)	қағу	MM
29	Бәйпек-бәйпек	bäjpek-bäjpek	bäjp	redup, suffix(ek)		MM
30	Бұлт	bult	bult		ety	MM
31	Бұлт-бұлт	bult-bult	bult	redup	ety	MM
32	Бұлтақ-бұлтақ	bultaq-bultaq	bult	redup, suffix(aq)	ety	MM
33	Бұталақ	bultalaq	bult	suffix(alaq)	қағу	MM
34	Бұталақ-бұталақ	bultalaq-bultalaq	bult	redup, suffix(alaq)	ety	MM
35	Бұлтаң-бұлтаң	bultang-bultang	bult	redup, suffix(ang)	ety	MM
36	Бұталаң	bultalang	bult	suffix(alang)	қағу	MM
37	Бұталаң-бұталаң	bultalang-bultalang	bult	redup, suffix(alang)		MM
38	Бұлаң	bulang	bul	suffix(ang)	қағу	MMMM
39	Бұлғалаң	bulghalang	bulgh	suffix(alang)	қағу	MMM
40	Бұлғалаң-бұлғалаң	bulghalang-bulghalang	bulgh	redup, suffix(alang)	ety	MMM
41	Бұлғақ-бұлғақ	bulghaq-bulghaq	bulgh	redup, suffix(aq)	ety	MMM
42	Бұлғалақ	bulghalaq	bulgh	suffix(alaq)	қағу	MMM
43	Бұлғалақ-бұлғалақ	bulghalaq-bulghalaq	bulgh	redup, suffix(alaq)	ety	MMM
44	Бұраң	burang	bur	suffix(ang)	қағу	MM
45	Бұраң-бұраң	burang-burang	bur	redup, suffix(ang)	ety	MM
46	Бұралаң	buralang	bur	suffix(alang)	қағу	MM
47	Бұралаң-бұралаң	buralang-buralang	bur	redup, suffix(alang)		MM
48	Бүгежек	bügezhek	bügezh	suffix(ek)	қағу	MM
49	Бүгежек-бүгежек	bügezhek-bügezhek	bügezh	redup, suffix(ek)		MM
50	Бұжыр-бұжыр	buzhır-buzhır	buzh	redup, suffix(ır)		MM
51	Былдыр-былдыр	bıldır-bıldır	bıld	redup, suffix(ır)	ety	MM
52	Быз-тыж	bızh-tızh	bızh, tızh	redup	ety	MMM
53	Былқ	bılq	bılq		ety	MMM
54	Былқ-сылқ	bılq-sılq	bılq, sılq	redup	ety	MM
55	Далбаң	dalbang	dalb	suffix(ang)	қағу	MM
56	Далбаң-далбаң	dalbang-dalbang	dalb	redup, suffix(ang)	ety	MM
57	Далбаң-дұлбаң	dalbang-dulbang	dalb, dulb	redup, suffix(ang)	ety	MM
58	Далбақ-далбақ	dalbaq-dalbaq	dalb	redup, suffix(aq)	ety	MM
59	Далбақ-дұлбақ	dalbaq-dulbaq	dalb, dulb	redup, suffix(aq)	ety	MM

60	Далбалаң	dalbalang	dalb	suffix(alang)	қағу	MM
61	Далбалаң-далбалаң	dalbalang-dalbalang	dalb	redup, suffix(alang)	ету	MM
62	Далбалақ	dalbalaq	dalb	suffix(alaq)	қағу	MM
63	Далбалақ-далбалақ	dalbalaq-dalbalaq	dalb	redup, suffix(alaq)	ету	MM
64	Дедек	dedek	ded	suffix(ek)	қағу	MM
65	Дедек-дедек	dedek-dedek	ded	redup, suffix(ek)	ету	MM
66	Ебелең	ebeleng	eb	suffix(eleng)	қағу	MM
67	Ебелең-ебелең	ebeleng-ebeleng	eb	redup, suffix(eleng)	ету	MM
68	Ебелек	ebelek	eb	suffix(elek)	қағу	MM
69	Ебелек-ебелек	ebelek-ebelek	eb	redup, suffix(elek)	ету	MM
70	Елбең	elbeng	elb	suffix(eng)	қағуv	MM
71	Елбек	eldek	elb	suffix(ek)	қағу	MM
72	Едірең	edireng	edir	suffix(eng)	қағу	MM
73	Едірең-едірең	edireng-edireng	edir	redup, suffix(eng)		MM
74	Жайнаң	zhajnang	zhajn	suffix(ang)	қағу	MM
75	Жайнаң-жайнаң	zhajnang-zhajnang	zhajn	redup, suffix(ang)	ету	MM
76	Жалаң-жалаң	zhalang-zhalang	zhal	redup, suffix(ang)	ету	MM
77	Жалп-жүлп	zhalp-zhulp	zhalp, zhulp	redup		MM
78	Жалт	zhalt	zhalt		ету	MMM
79	Жалт-жалт	zhalt-zhalt	zhalt	redup	ету	MM
80	Жарбаң	zharbang	zharb	suffix(ang)	қағу	MM
81	Желп-желп	zhelp-zhelp	zhelp	redup	ету	MM
82	Желпең	zhelpeng	zhelp	suffix(eng)	қағу	MM
83	Желпең-желпең	zhelpeng-zhelpeng	zhelp	redup, suffix(eng)	ету	MM
84	Жылтың	zhiltıng	zhilt	suffix(ing)	қағу	MM
85	Кекең-кекең	kekeng-kekeng	kek	redup, suffix(eng)	ету	MM
86	Кідің-кідің	kiding-kiding	kid	redup, suffix(ing)	ету	MM
87	Кірбің-кірбің	kirbing-kirbing	kirb	redup, suffix(ing)	ету	MMM
88	Қайқаң-қайқаң	qajqang-qajqang	qajq	redup, suffix(ang)	ету	MM
89	Қалбақ	qalbaq	qalb	suffix(aq)	қағу	MMM
90	Қалбақ-қалбақ	qalbaq-qalbaq	qalb	redup, suffix(aq)	ету	MMM
91	Қалбалақ-қалбалақ	qalbalaq-qalbalaq	qalb	redup, suffix(alaq)	ету	MMM
92	Қалбаң	qalbang	qalb	suffix(ang)	қағу	MMM
93	Қалбаң-қалбаң	qalbang-qalbang	qalb	redup, suffix(ang)	ету	MM

94	Қалбаң-құлбаң	qalbang-qulbang	qalb, qulb	redup, suffix(ang)	ety	MM
95	Қалбалаң-құлбалаң	qalbalang-qulbalang	qalb, qulb	redup, suffix(alang)	ety	MM
96	Қалтаң	qaltang	qalt	suffix(ang)	қағу	MM
97	Қақшаң-қақшаң	qaqshang-qaqshang	qaqsh	redup, suffix(ang)	ety	MM
98	Қисаң-қисаң	qi:sang-qi:sang	qi:s	redup, suffix(ang)	ety	MM
99	Қисалаң-қисалаң	qi:salang-qi:salang	qi:s	redup, suffix(alang)	ety	MM
100	Қоқаң-қоқаң	qoqang-qoqang	qoq	redup, suffix(ang)	ety	MM
101	Қоқыраң-қоқыраң	qoqirang-qoqirang	qoqır	redup, suffix(ang)	ety	MM
102	Құйтың-құйтың	qujting-qujting	qujt	redup, suffix(ing)	ety	MM
103	Қылмың	qılmıng	qılm	suffix(ing)	қағу	MM
104	Қылмың-қылмың	qılmıng-qılmıng	qılm	redup, suffix(ing)		MM
105	Қылып	qılp	qılp		ety	MM(F)M
106	Қылт	qılt	qılt		ety	MM
107	Қылтың	qıltıng	qılt	suffix(ing)	ety	MM
108	Қыпың-қыпың	qılpıng-qılpıng	qılp	redup, suffix(ing)	ety	MM
109	Қыпық-қыпық	qıpq-qıpq	qıp	redup, suffix(ıq)	ety	MM
110	Қыржың-қыржың	qırzhıng-qırzhıng	qırzh	redup, suffix(ing)	ety	MM
111	Лақ	laq	laq		ety	MM
112	Лап	lap	lap		M2 беру	MMM
113	Лау-лау	lau-lau	lau	redup		MM(F)
114	Лүп	löp	löp		ety	MM
115	Маймаң	majmang	majm	suffix(ang)	қағу	MM
116	Маймаң-маймаң	majmang-majmang	majm	redup, suffix(ang)	ety	MM
117	Майпаң-майпаң	majpang-majpang	majp	redup, suffix(ang)	(басы)	MM
118	Монтаң	montang	mont	suffix(ang)	қағу	MM
119	Монтаң-монтаң	montang-montang	mont	redup, suffix(ang)	қағу	MM
120	Мыж-мыж	mızh-mızh	mızh	redup	бoly	MM
121	Одыраң	odırang	odr	suffix(ang)	қағу	MM
122	Одыраң-одыраң	odırang-odırang	odr	redup, suffix(ang)	ety	MM
123	Ойдым-ойдым	ojdıм-ojdıм	ojd	redup, suffix(ım)		MM
124	Олпы-солпы	olpı-solpı	olp, solp	redup	бoly	MM
125	Салаң	salang	sal	suffix(ang)	ety	MM
126	Салаң-салаң	salang-salang	sal	redup, suffix(ang)		MM
127	Салақ-салақ	salaq-salaq	sal	redup, suffix(aq)	ety	MM
128	Салпаң-салпаң	salpang-salpang	salp	redup, suffix(ang)	ety	MM

129	Салпақ-салпақ	salpaq-salpaq	salp	redup, suffix(aq)	ety	MM
130	Серен-серен	sereng-sereng	ser	redup, suffix(eng)	ety	MM
131	Сипаң-сипаң	si:pang-si:pang	si:p	redup, suffix(ang)	ety	MM
132	Сүйрен-сүйрен	süjreng-süjreng	süjr	redup, suffix(eng)	ety	MM
133	Сылаң-сылаң	sılang-sılang	sıl	redup, suffix(ang)	ety	MM
134	Сылпың	sılping	sılп	suffix(ıng)		MM
135	Сылқ	sılq	sılq		ety	MM
136	Сып-сып	sıp-sıp	sıp	redup	ety	MM
137	Пыш-пыш	pısh-pısh	pısh	redup		MM
138	Тайраң	tajrang	tajr	suffix(ang)	қағу	MM
139	Тайраң-тайраң	tajrang-tajrang	tajr	redup, suffix(ang)	ety	MM
140	Тайрақ	tajraq	tajr	suffix(aq)	қағу	MM
141	Тайрақ-тайрақ	tajraq-tajraq	tajr	redup, suffix(aq)	ety	MM
142	Тайралаң	tajralang	tajr	suffix(alang)	қағу	MM
143	Тайралаң-тайралаң	tajralang-tajralang	tajr	redup, suffix(alang)		MM
144	Тайталаң	tajtalang	tajt	suffix(alang)	қағу	MM
145	Тайталаң-тайталаң	tajtalang-tajtalang	tajt	redup, suffix(alang)		MM
146	Тайталақ	tajtalaq	tajt	suffix(alaq)	қағу	MM
147	Тайталақ-тайталақ	tajtalaq-tajtalaq	tajt	redup, suffix(alaq)		MM
148	Талтаң-талтаң	taltang-taltang	talt	redup, suffix(ang)	ety	MM
149	Талтақ-талтақ	taltaq-taltaq	talt	redup, suffix(aq)	ety	MM
150	Талтаң-түлтаң	taltang-tultang	talt, tult	redup, suffix(ang)	ety	MM
151	Тарпаң	tarpang	tarp	suffix(ang)		MM
152	Тарпаң-тарпаң	tarpang-tarpang	tarp	redup, suffix(ang)	ety	MM
153	Тас-талқан	tas-talqan				MM
154	Тасыраң-тасыраң	tasırang-tasırang	tasır	redup, suffix(ang)	ety	MM
155	Тепен-тепен	tepeng-tepeng	tep	redup, suffix(eng)		MM
156	Тоз	toz	toz			MMMM
157	Томпаң-томпаң	tompang-tompang	tomp	redup, suffix(ang)	ety	MM
158	Томпалаң-томпалаң	tompalang-tompalang	tomp	redup, suffix(alang)	ety	MM
159	Ту-талақай	tu-talaqaj			бoly	MM
160	Түте-түте	tüte-tüte	tüt	redup	бoly	MM
161	Тықақ-тықақ	tıqaq-tıqaq	tıq	redup, suffix(aq)		MM
162	Тырбаң-тырбаң	tırbang-tırbang	tırb	redup, suffix(ang)	ety	MM
163	Тыртаң-тыртаң	tırtang-tırtang	tırt	redup, suffix(ang)	ety	MM

164	Тырым-тырықай	tırm-tıraqaj			бoly	MM
165	Шошаң-шошаң	shoshang-shoshang	shosh	redup, suffix(ang)	ety	MM
166	Шыбжың	shıbzıng	shıbzıh	suffix(ıng)	ety	MM
167	Шыбжың-шыбжың	shıbzıng-shıbzıng	shıbzıh	redup, suffix(ıng)	ety	MM

【多義混成語】

擬声＋擬音 [VS]						
No.	オノマトペ	派生形	語基	構成要素	統語	VSMP
1	Бебеу	bebeu	beb		(кагу)	VS
2	Бебеу-бебеу	bebeu-bebeu	beb	redup	ety	VS
3	Гүж	güzh	güzh		ety	VS
4	Гүж-гүж	güzh-güzh	güzh	redup	ety	VS
5	Күлдір-күлдір	küldir-küldir	küld	redup, suffix(ir)	ety	VS
6	Сақ	saq	saq		ety	VS
7	Сақ-сақ	saq-saq	saq	redup	ety	VS
8	Саңк	sangq	sangq		ety	VS
9	Саудыр-саудыр	saudır-saudır	saud	redup, suffix(ir)	ety	VS
10	Сыңғыр	singghır	singgh	suffix(ir)	ety	VS
11	Сыңғыр-сыңғыр	singghır-singghır	singgh	redup, suffix(ir)	ety	VS
12	Шик	shi:q	shi:q		ety	VS
13	Шик-шик	shi:q-shi:q	shi:q	redup	ety	VS
14	Шингір	shinggir	shingg	suffix(ir)	ety	VS
15	Шингір-шингір	shinggir-shinggir	shingg	redup, suffix(ir)	ety	VS
16	Шинк-шинк	shingk-shingk	shingk	redup	ety	VS
擬態＋擬情 [MP]						
17	Дыз-дыз	dız-dız	dız	redup	ety	MP
18	Солқ-солқ	solq-solq	solq	redup	ety	MP
擬声＋擬音＋擬態＋擬情 [VSMP]						
19	Бұрк	burq	burq		ety	SM
20	Бұрк-бұрк	burq-burq	burq	redup	ety	SMM
21	Бұрк-сарқ	burq-sarq	burq, sarq	redup	ety	SMM
22	Борп-борп	borp-borp	borp	redup	ety	SM
23	Бүлк-бүлк	bülk-bülk	bülk	redup	ety	SMM
24	Быз-быз	bızh-bızh	bızh	redup	ety	SMM
25	Былш-былш	bılsh-bısh	bılsh	redup	ety	SM

26	Гу	gu	gu		ety	SMM
27	Далп	dalp	dalp		ety	SMM
28	Далп-далп	dalp-dalp	dalp	redup	ety	SMM
29	Ду	du	du		ety	SM
30	Ду-ду	du-du	du	redup	ety	SSM
31	Дүбір	dübir	düb	suffix(ir)	ety	SM
32	Дүбір-дүбір	dübir-dübir	düb	redup, suffix(ir)	ety	SM
33	Дік	dik	dik		ety	SM
34	Дыз	dız	dız		ety	SMP
35	Жалп	zhalp	zhalp		S ety, M беру	SM
36	Зу-зу	zu-zu	zu	redup	ety	SM
37	Зып-зып	zıp-zıp	zıp	redup	ety	SM
38	Зыр	zır	zır		ety	SM
39	Зыр-зыр	zır-zır	zır	redup	ety	SM
40	Күж-күж	küzh-küzh	küzh	redup	ety	SSMM
41	Күмп	kümp	kümp		ety	SM
42	Қолқ	qolq	qolq		ety	SM(F)
43	Қорс	qors	qors		ety	SM
44	Қорс-қорс	qors-qors	qors	redup	ety	VM(F)
45	Қыбыр	qıbr	qıb	suffix(ir)	ety	SM
46	Мыңқ	mingq	mingq		ety	SMM
47	Сұдыр-сұдыр	sudır-sudır	sud	redup, suffix(ir)	ety	SM
48	Сүңк-сүңк	sungq-sungq	sungq	redup	ety	SM
49	Сылқ-сылқ	sılq-sılq	sılq	redup	ety	VM
50	Тақ-тақ	taq-taq	taq	redup	ety	SM
51	Тақ-түк	taq-tuq	taq, tuq	redup	ety	SM
52	Тарс	tars	tars		ety	SMM
53	Тасыр	tasır	tas	suffix(ir)	ety	SM
54	Топыр	topır	top	suffix(ir)	S1 қағу, ety	SMM
55	Топыр-топыр	topır-topır	top	redup, suffix(ir)	ety	SM
56	Топыр-тұпыр	topır-tupır	top	redup, suffix(ir)	ety	SM
57	Тырс	tırs	tırs		ety	SMM
58	Шақ-шақ	shaq-shaq	shaq	redup	ety	SSM

59	Шүрк-шүрк	shurq-shurq	shurq	redup	ety	SM
60	Шыж	shızh	shızh		ety	SM
61	Шыж-быж	shızh-bızh	shızh, bızh	redup	S ety, M boly	SM
62	Шыж-мыж	shızh-mızh	shızh, mızh	redup	S ety, M boly	SM
63	Шың	shıng	shıng		et	SM
64	Шыр	shır	shır		ety	SMM(F)
65	Шыр-шыр	shır-shır	shır	redup	ety	VSM
66	Шытыр	shıtır	shıt	suffix(ır)	ety	SM
67	Шытыр-шытыр	shıtır-shıtır	shıt	redup, suffix(ır)	ety	SM
68	Шырт-шырт	shırt-shırt	shırt	redup	ety	SMM
69	Ызың	ızıng	ız	suffix(ıng)	ety	SM
70	Ызың-ызың	ızıng-ızıng	ız	redup, suffix(ıng)	ety	SM